

いつものバスの行き先  
は...？

風月 雪桜

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

現代日本の受験生が司令官になって、艦娘等と協力し共に戦うお話です

初めて書くので、下手だったりしますが、ご了承ください

また、轟沈シーンやキャラ崩壊、茶番等あるかもしれません  
後、更新は完全不定期です

それらが、おkという人は良ければお読みになってください

# 目次

プロローグ

司令官と提督と艦娘

1

司令官が鎮守府に……

5

提督が鎮守府に……

11

第一章 始まり…… 鎮守府正面海域

初めての建造は……？

17

この世界について

24

初めての出撃1

29

初めての出撃2

36

初めての出撃3

43

初めての出撃4

47

司令官の要請

57

提督の戦い

67

気分高揚と開発

73

南西諸島の民間人を救助せよ！1

78

南西諸島の民間人を救助せよ！2

84

南西諸島の民間人を救助せよ！3

91

南西諸島の民間人を救助せよ！4

97

南西諸島の民間人を救助せよ！5

104

南西諸島の民間人を救助せよ！6

6

110	南西諸島の民間人を救助せよ！ 7				
115	響の想い	122			
	新たな作戦	130			
	初めての演習	139			
	不思議なこと	148			
	紅葉の下で	158			
	希望を失った少女の話	169			
	製油所地帯を防衛せよ！ 1	175			
	製油所地帯を防衛せよ！ 2	181			
	製油所地帯を防衛せよ！ 3	186			
	製油所地帯を防衛せよ！ 4	191			
	製油所地帯を防衛せよ！ 5				198
	製油所地帯を防衛せよ！ 6				204
	製油所地帯を防衛せよ！ 7				214
	転属してきた艦娘が着任しました				
	222				
	生き残りの潜水艦				235
	電が秘書艦なのです！ 一日目				247
	電が秘書艦なのです！ 二日目				259
	雷の願い				274
	鎮守府秋刀魚祭り 1				282
	鎮守府秋刀魚祭り 2				295
	鎮守府秋刀魚祭り 3				303
	鎮守府秋刀魚祭り 4				312

鎮守府秋刀魚祭り 5	321	落日の日 前編	454
鎮守府秋刀魚祭り 6	327	落日の日 後編	470
鎮守府秋刀魚祭り 7	332	呉の空は艦娘と共にあり 前編	
鎮守府秋刀魚祭り 8	337	480	
鎮守府秋刀魚祭り 9	344	呉の空は艦娘と共にあり 後編	
鎮守府秋刀魚祭り 10	350	490	
鎮守府秋刀魚祭り 11	363	決戦！南西諸島防衛線！1	498
鎮守府秋刀魚祭り 12	379	決戦！南西諸島防衛線！2	508
箱入り娘の転属先	393	決戦！南西諸島防衛線！3	518
鎮守府秋刀魚祭り 13	404	決戦！南西諸島防衛線！4	528
鎮守府秋刀魚祭り 14	417	決戦！南西諸島防衛線！5	536
呉の町と艦娘 前編	432	決戦！南西諸島防衛線！6	542
呉の町と艦娘 後編	444	決戦！南西諸島防衛線！7	552

決戦！南西諸島防衛線！ 8	557
決戦！南西諸島防衛線！ 9	564
登場人物 1	576
第二章 敵の敵は敵：：南西諸島海域	
宴	585
艦娘は兵器か、人間か？	595
すれ違い	605
号外	612
視察	623
クリスマススイブ	630
二人の博愛主義者	641
クリスマス	661
話し合い	670

訓練、そして休憩	679
仲良しな二人	686
横須賀第一鎮守府	694
交流	704
第六駆護衛任務	718
横須賀との演習 1	731
横須賀との演習 2	742
横須賀との演習 3	750
電さんの気持ち	762
別れ	773
カムラン半島攻略作戦、敵空母を撃沈	777
せよ！	777
カムラン半島攻略作戦、敵空母を撃沈	777

せよ！ “作戦開始”

794

カムラン半島攻略作戦、敵空母を撃沈

初めてのお正月2  
反省会、そして：

878 869

せよ！ “佐世保の矛”

803

カムラン半島攻略作戦、敵空母を撃沈

せよ！ “呉の盾”

813

カムラン半島攻略作戦、敵空母を撃沈

せよ！ “我、夜戦へ突入す”

822

カムラン半島攻略作戦、敵空母を撃沈

せよ！ “突入”

832

カムラン半島攻略作戦、敵空母を撃沈

せよ！ “決着、そして…”

840

初めての大晦日

850

初めてのお正月1

861





## プロローグ

## 司令官と提督と艦娘

「いつてきまーす」

そうやって、俺は家から飛び出てバス停へ行く

いつもの道、いつものバス停で待つて

いつも通りバスに乗る

そのままいつも通り予備校に行く…はずだった

受験生なので、勉強漬けだがバスの中だけでは、本を読んでいた

艦これのラノベを開いて読もうとするが、昨日夜遅くまで起きていたので、眠くなっ

てしまった…

眠気と必死に戦い、本を読もうとするが

眠気には、勝てなかった

コクコク… z z z

洋上に浮かぶいくつもの艦艇……その向こうには輸送船団らしきものも見える  
数は30隻以上、特に巨大な二隻の航空母艦は、その中でも圧倒的な存在感を放つて  
いた

二隻の航空母艦は、搭載されたジェット機を格納して横須賀を出港したばかりだった  
「やっと、出番が来たな待ちくたびれたよ

奴等もさつさと侵攻してくればいいのになあ」

と好戦的な若い兵が言った

「おい！」

奴等のせいで数多の艦艇が沈められているんだぞ

犠牲者も桁違いだ、軍人だけじゃない、民間人だって……

この前だって、民間の輸送船団が襲われて一隻しか帰って来なかったんだ、その事を  
知らないわけじゃないだろう？」

と真面目そうな同じく若そうな兵が言った

「知ってるさ」

だが、輸送船団を襲うのと機動部隊を襲うのは勝手が違うだろ？

しかも、この艦隊は新鋭艦ばかりで、練度も士気も高い

負ける要素がないね」

「そうだが、慢心は…」

「何を話しているんだ？」

二人の兵と同年代に見えるが、格好が違う青年が言った

「お、奥田艦長！」

と二人とも敬礼する

「お疲れ、異常はないな？」

「はい、こちら異常はありません！」

「こちらと同じく異常はありません」

「そうか、ならしい」

そういい、艦長は海を見た

二人の兵は気が付かなかったが、その顔はとても憂いていて

「出来れば、奴等には会いたくないな…」

そう呟いた

こうして、数週間後に数隻の駆逐艦を残して轟沈する運命にある機動部隊は一人以外は意気揚々と戦地に向かった

あるレンガで出来た建物のある施設の門の前では、少女がずっと待っていた  
いつ来るか分からないが、絶対来るはずの人物を…

彼女達を率いるあの人を

雨が降っても、風が強くても…

ずっと、ずっと

彼女が『司令官』と呼ぶ人物を

彼女は、プカプカと浮いていた

後悔はあったが、憎しみや恨みはなかった

為せなかった…先輩達の意思を継げなかった…

妹を…最後まで守れなかった

多くの乗組員も巻きぞいにしてしまった

でも、仕方がなかったとも思う

当時の戦況はもはや絶望的

沈んで当然だったかもしれない

そう思いつつ、もう一度やり直したいと強く願った

## 司令官が鎮守府に…

コクコク… スヨスヨ

『つ… は… てん… え』

何か声が？

そうだ、バスに乗ってて…

『次は終点、海軍…』

「降りないと!？」

と、バスの降車口に駆け寄る

ちようどドアが開いたので、飛び降りる

予備校に行こうと前を見ると目の前には、どこまでも広がる海原が…

(… 綺麗だなあ)

って住んでる近くに海ないんだけど!?)

辺りを見回すと近くにレンガの建物が

そして、高い壁と門、女の子が… 女の子も俺に気がついたようだ

タッタッタとかけてきて… すっ転んだ

「え、ちよ、大丈夫?」

と手を差し出す

「あ、大丈夫です

すみません」

と女の子は頬を赤らめながら手を取り、見事な敬礼をした

「特型駆逐艦一番艦!吹雪です

よろしくお願いします、司令官!」

(...え?)

トクガタクチクカン?フブキ?)

確かに目の前の女の子は吹雪に似ていた

勿論軍艦の方ではない

艦娘の方だ

だが、艦娘はゲーム艦隊コレクションのキャラであつて現実にはいない...はず...

(もしかして、○ニタリングなのか?)

もしも、ゲームのキャラクターが現実に現れたら、どうする?みたいなの?)

と思い

改めて辺りを見回すがカメラらしきものは見えない

「どうしましたか？ 司令官？」

「あ、いや、なんでもないんだ」

そして、自身も海軍の着ている白い制服に身を包んでいる

「では、司令官行きましょう」

あ、妖精さんも挨拶してくださいね」

と吹雪の足元に居た三頭身の女の子に言った

妖精さんは、ピシッと敬礼をして話をしている

「しれーかんだ」

「ちゃんとしたしれーかんだ」

「お菓子くれるのかなー」

そして、ちょこまかと吹雪についていく

（あー

これモニ〇リングじゃないな…）

と考え、思考停止し

吹雪に引つ張られ、レンガの建物のある施設へ入って行った

施設は、閑散としていた

吹雪によるとまだ、艦娘は白雪と大淀と明石しかいないらしい（ちなみに大淀と明石の艦装はないようだ）

事務棟に数人の人間がいる以外門番すらいらないらしい

資源の管理や艦装の整備、修理、鎮守府の警備はすべて艦娘と妖精さんがしているとのこと

とりあえず、執務室の隣にある司令官専用の自室に荷物（何故か持っていた）を置く  
と

「では、これから旅行をしましょうか」

と言われた承した

ちなみに旅行とは、鎮守府を紹介して回ることである

まずは、工場に入った

工場では、妖精さんがあっちへ行ったり、こっちへ来たりしている

「ここが、工場です」

開発と建造が行えます

そう言えば、開発と建造を行う任務がありましたから行います？」

「そうだな」



開発は、資源最小かな」

と言いつつ工廠についての紙を見つつ、目の前のタッチパネルの操作するそれを後ろから覗いていた吹雪が言った

「し、司令官！」

鋼材500弾薬300燃料400ボーキサイト700つて使いすぎですよ

資源がなくなっちゃいます！」

「大丈夫だって…」

って、押さないで

分かったやめるから… あ」

押されてうっかり押ししてしまった

「……………」

「……………」

画面には、建造準備中とある

取り消すのは、紙に無理と書いてあった

「もう、司令官どうするのですか… って先行かないでください」

行き先反対ですよ！

司令官、逃げてませんか？」

「だって、吹雪怒ったら怖そうだしボソッ」

「ど、どういう意味ですか!?!」

そんな会話をする二人を工廠妖精さんは呆れた顔で見ている

画面には、6:00:00という表示から一秒ずつ数が減っていった

## 提督が鎮守府に…

「…そろそろか…」

汽笛の音が船内に響く

それが、この前の戦いの記憶を呼び起こす

『リーダーには、異常なし』

『哨戒機が大編隊を発見』

『直掩機発艦間に合わず』

『敵機直上、急降下』

瞬く間に、状況が進み、各艦が自衛するのが精一杯だった

自身が救われたのも奇跡に近かった

私が退艦した時周囲は地獄だった

沈み逝く艦…蔓延する硝煙と錆びた鉄のような臭い…

重油で黒光る海…

あれ以来ずっとうなされる

この光景と声が聞こえる

「たすけてくれ」

「死にたくない」

「何故お前だけ助かった」

「憎い憎い憎い」

気が付くと、鎮守府に着いていた

輸送船から、タラップを使って降りる

降りた先には、セーラー服を着た女性がいた

「提督代理の奥田大佐

お待ちしていました

大淀です」

と敬礼をする

「奥田 吉成 階級 大佐

現在、マルロククサンヒトより呉第三鎮守府に着任しました」

と返礼する

「提督が着任するまで、指揮を執らせて頂きます」

「よろしくお願いたします」

大淀と名乗った女性はどこか提督代理に冷たかった

吹雪が追い付けるか追い付けないくらいの速さで逃げ回りドックに近くで、立ち止まる

ちよつと遠くから汽笛が聞こえた

どうやら、艦娘は陸では普通の人と同じくらいみたいだ

「し、司令官やつと捕まえましたよ…。」

吹雪は息を切らしながら、腕を掴んできた

「もう逃げないよ

お？これがドック？」

「はい！」

これがないと大変です」

「ドックは、たった一つか…。」

ドックの増設は急務だなど思った

「大淀さんが頼んではいるのですが中々…」

予算が降りないみたいで

次は、酒保です！明石さーん！」

「あ、吹雪ちゃん！」

「あら？隣にいるのは？」

「ついに、司令官が着任したんですよ！」

「ついに！」

「良かったね！吹雪ちゃん

いつも、門の前で待っていたもんね」

「はい、ちよつと意地悪ですけど、嬉しいですよ！」

「意地悪で、悪かったな」

「冗談ですよ！」

と、満天の笑顔・・・

（守りたいこの笑顔・・・

おっと、そうじゃない

それにしても、酒保って言っても必要最低限の物ばかり・・・（娯楽はないのか？）

「さ、司令官次行きますよ？」

「ん、分かった

ところで、そろそろ腕放してくれないかな？」

「嫌です

また、逃げるかもしれませんから♪」

声が弾んでいるように聞こえるのは気のせいかな？

(それに… 吹雪がいつも待つていた… つまり、それくらい期待されてるってことだよな…)

そう考えると胃が少し痛む気がした

「ここが艦娘寮です

百人分くらいの部屋がありますよ！

調理場、浴場も完備です

あ、白雪ちゃんがいいます

おいー！」

「あ、白雪ちゃん

お隣は、お菓子をくれると妖精さんの間で話題になっている司令官さんですか？」

「そうですよ！

お菓子をくれるかは分かりませんが」

「なんで、そんな噂が流れるんだ...」

これは、上層部に甘味の補給を要請するかと思つた

その後、倉庫や今は使っていない食堂、大淀さんが使っている通信室、吹雪が時々使う資料室を見た後、執務室に戻っていた

一時過ぎなので、書類を執務室に置いてから、吹雪の作る昼飯を食べることにした  
尚、俺は目玉焼きを作るくらいしか料理はできないので、論外である  
執務室の前には銀髪の女性が途方にくれていた...



## 第一章 始まり… 鎮守府正面海域

初めての建造は…？

翔鶴は、気が付くとベッドにいた

艦娘としての記憶がここは工場で周りにいる小さな女の子が妖精さんだと言うことを教えてくれた

(とりあえず、提督に着任報告をしなければなりませんね)

そう思い立ち、工廠を出ていった

時々、妖精さんに道を尋ねながら、ついに執務室にたどり着く

一呼吸してからドアをノックする

コンコン

だが、中からの応答はない

コンコン

再びノックするも応答はない

仕方がないので、ドアを開ける

「失礼します」

執務室には、だれもいなかった

その代わり、机と床を埋め尽くす量の書類と居心地悪そうに隅っこにぼつんと置かれた荷物しかなかった

翔鶴は余りの書類の量に一抹の不安を抱いた

執務室を出て、他の艦娘を探そうと来た道に向いたら、仲良く話ながらこちらに来る

艦娘と青年に気が付いた

艦娘の記憶から、艦娘は特型駆逐艦一番艦の吹雪と分かり

青年も提督になる人物と分かった

向こうもこちらに気が付いたので、自己紹介をした

「翔鶴型航空母艦一番艦の翔鶴です」

一航戦や二航戦の先輩方に少しでも近づけるように瑞鶴と共に頑張ります」

すると二人は小声で話始めました... 何か不味いことをしたでしょうか... ?

『ど、どうする、本当に正規空母出来ちゃったよ』

『空母が欲しかったのではないのですか!?!』

『いや、あれは吹雪を驚かそうとしてね』

普通に最小にしようと思つてたんだよ?』

『ご、ごめんなさい…。(涙目)』

『い、いや吹雪は悪くないから(汗)』

『あ、あの…』

『あ、いえ、すみません』

俺… いや、私は今日の朝着任しました

まだ、艦娘は隣にいる秘書艦の吹雪と…』

『わ、私秘書艦だったのですかあ!』

『吹雪驚きすぎだよ?』

後は、吹雪型二番艦の白雪と大淀、明石しかいませんから

私も新米ですし苦勞かけるかもしれないがよろしくお願いします』

『あれ?』

司令官が礼儀正しいですよ?

私の時と対応違い過ぎませんか?』

と司令官と名乗つた青年を上目遣いで覗きこむ吹雪

とても仲良さそうです… とても今日着任したようには見えません

「し、正直、翔鶴が可愛くて緊張してるんだよ」

「司令官は、私が可愛いと思ってないんですね」

「いや、別にそんなわけは… 吹雪は可愛いけど話しやすいんだって拗ねないですよ」

「す、拗ねてなんかいません！」

書類を執務室に置いて早く昼食べましょう」

「はい」

と言つて二人とも執務室に入つていった

火照る顔を隠しながら、俺は吹雪と執務室に入った

冷静を装い、積み重なる書類と混ざらないように手に持っていた書類を床に置く

ちよつとからかい過ぎたかなと反省し、執務室を出ると翔鶴がセーラー服の女性と若いのに威厳のある男性と話をしていた

翔鶴が俺の紹介をしてくれた

「彼が今日の朝着任した司令官です」

セーラー服の女性は敬礼をし

「大淀です」

任務の管理や通信室で通信を受け取っています」

「提督代理として来ました」

奥田 吉成です」

「よろしくお願ひします」

とりあえず、お昼食べませんか？

昼過ぎですから」

さつきから、俺のお腹は鳴りっぱなしだし、恥ずかしいし

吹雪と白雪と翔鶴が一緒に作った昼飯を食べた後、大淀が吹雪に尋ねた  
「吹雪ちゃん」

司令官にちゃんと尋ねました？」

「あ、えつと…その…」

「聞いてないのですね」

…司令官、貴方は本当に司令官になりますか？」

「え？…どういう意味？」

「今まで、貴方のいた世界からこの世界迷いこんだ事例は数件あります

司令官にならずに普通に暮らすことも可能なんですよ？」

残念ながら、世界を移動させる装置は完成していないので、貴方のいた世界には戻れませんか

どうします？」

「……」

選択肢があるとは思っていなかったもので、思わず迷ってしまっ

一瞬、普通の日常に戻れるなら… と思った

「うん」  
「ただ、吹雪のすがるような目や白雪、翔鶴、明石の不安そうな表情を見て決断した

司令官をやるよ、覚悟は出来てるよ… 多分」

「し、司令官…」

吹雪達が感動したように呟く、明石も嬉しそうだ

正直、代理の奥田さんもいるし大丈夫なんじゃ？と思わなくもない

「そうですか

なら、代理の方は明日の朝の輸送船で帰って貰いましょう」

「ちなみにさ」

執務室の書類って俺が片付けないといけなのかな？

正直出来る気がしないのだけれど」

「基本的提督が行うことになっていきます

例外として、提督代理が行うことになっていきますね」

「んー」

だったら、代理の奥田さんには、居て貰った方がいいと思うんだ

それに、18歳の提督って世間的に大丈夫？

奥田さんが嫌なら頑張るけど」

「私は別に構わないよ

元々、提督が着任した後も補佐をするよう命令されていたからな」

「それじゃあ、今度から奥田さんを提督と呼ぶように

俺は司令官と呼んで区別するこれでいいかな？」

「「「了解（です）！！」」」」

## この世界について

一休憩した後、第二執務室に吹雪と翔鶴と一緒に入った

一足先に戻っていた大淀が必要最低限書くべき書類と読むべき書類を持って来てくれたように机にいくつかの書類が置いてある

「吹雪、早速だけど」

秘書艦として、資源最低で建造4回と開発4回お願いできるかな？」

「はい！司令官」

私頑張ります！」

顔を高揚させつつ敬礼をする吹雪：：初めての秘書艦みたいな仕事で嬉しいのかな？

「頑張ってね」

後、建造出来た子と翔鶴の旅行もしてここに戻ってきて

多分、丁度夕食だから

そしたら、みんなで夕食食べよう」

「はい！」



敬礼して仲良く話ながら出ていく二人を見送り、机に置いてある書類を読むことにした

深海棲艦を人類が認知したのは、二年前のバミューダ海域で船団護衛中の米駆逐艦だった

写真を撮り世界を驚愕させた

写真を撮った直後、深海棲艦は船団を襲ったため

米海軍が攻撃を行うも大打撃を受け、その後の他国連合艦隊が攻撃を行うも同じ結果に終わる

そんなことをしているうちに、深海棲艦は大西洋、太平洋、シチュー海、カレー洋に進出……制海権、制空権を徐々に喪失し、シーレーンは崩壊した

俺の住んでいた世界と国名はあまり変わっていないが日本は大日本共和国に変わっていた

艦娘の記憶には、太平洋戦争の記憶があるみたいだがこちらの世界では第一次世界大戦以降大きな戦争は起こっていないとのことだった

大日本共和国と深海棲艦が初めて戦ったのは半年前で結果は惨敗……丁度その頃艦娘と妖精さんが現れ、提督を求めたとのこと

(でも、だったら何故提督代理がここに派遣されたんだろ?)

奥田さんでも十分提督務まりそうなのに)

ちなみに、現代兵器は効くが深海棲艦が船に対して小さいので当たりにくいらしい  
机にある書類をマニュアル通りに四苦八苦しながら半分くらい片付けた時ノックす  
る音が聞こえた

コンコン

「入っていいよー」

「司令官失礼します」

と言って入ってきた吹雪と翔鶴の後ろには四人の艦娘が

「これが開発と建造の報告書です」

『開発結果 計5回 10/10/10/10/10

ドラム缶

失敗

失敗

12.7cm連装砲

失敗』

『建造結果 計5回

400/200/500/700 1回

翔鶴

30 / 30 / 30 / 30 4回

響

初雪

陽炎

電』

「なるほど、ありがとう吹雪

響、初雪、陽炎、電、俺が司令官だ

隣の部屋には、提督がいるが、基本俺が艦隊の指揮を執ることになっているのでよろ

しくね?」

「初雪……です…… よろしく」

「響だよ…… その活躍ぶりから不死鳥の通り名もあるよ……」

「電です

どうか、よろしくお願いいたします」

「やつと会えた!陽炎よ

よろしくねっ!」

「んじゃ、隣の部屋の提督に挨拶して夕食の準備するか!」

「「「「はい!!」」」」

その後、艦娘のカレー作りを手伝い

作ったカレーが今まで食べたことがないくらい美味しかった

「カレー美味しいなあ!モグモグ」

「Спасибо (スパスイーバ)」

「いや、響はカレーじゃなくてボルシチでしょ、作ったのは

ボルシチもおいしいけど」

「ばれたか…」

「あはは…でも、司令官に喜んで貰えて嬉しいですよ♪」

と嬉しそうな吹雪… その後もお話しして消灯時間間際に慌てて自室に戻った

いつも、初めての場所ではすぐ眠れないのだが、すぐ睡魔が襲ってきた

(思っていた以上に疲れてた… のかな…)

と思いつつ眠りについた

# 初めての出撃1

目が覚めると、いつも部屋、いつも時間……マルゴーゴーマル

司令官が着任するのを朝早くから待ちたくて、早起きしていたら習慣になってしまっ  
た

伸びをして、制服を着ると白雪ちゃんが起きてきた

「おはよ、白雪ちゃん！」

「おはよう、吹雪ちゃん」

「私、司令官に朝起こしてって頼まれたから、みんなを起こして朝御飯作っておいてくれ  
る？」

「いいよ

朝御飯作って待ってるね」

「ありがとう！」

では、行ってきます！」

そう言って吹雪は、走って部屋の外に出ていった

司令官の自室に入るとやはりまだ寝ていた

「しれーかん!!」

朝ですよ、起きてください!」

と言いつつカーテンを開ける

「うーん…後、もう一時間だけ…」

と朝陽が眩しいのか、布団に潜り込む司令官

「駄目です、今日は出撃の予定もあるんですよ?」

と司令官に微笑んだ

「…かん!!」

朝ですよ、起きてください!」

の声と共に眩しい光が顔に当たる

「うーん…後、もう一時間だけ…」

無意識にそう応答し、布団に潜る

潜ってから、吹雪を見ると微笑みながら

「駄目です、今日は出撃の予定もあるんですよ？」

と言われてしまった

「そうだった。： おはよ、吹雪

服着替えるから、執務室で待っていてくれ」

「おはようございませす、司令官！」

脱いだ服は畳んでおきますから、そのまま持ってきてください」

服を着替えて、執務室に行くと吹雪に脱いだ服を渡した

吹雪は、脱いだ服を簡単に畳んで

執務室のドアを開けた

「白雪ちゃん達が昼食作って待っていますから

早く行きましょう♪」

「そうだな」

そして、吹雪と駄弁りながら艦娘寮に向かった

艦娘寮のリビング？みたいな所に着くと、艦娘達が和気あいあいと和朝食を作ってい

た

いつも、朝食はパンにジャムだからちよつと楽しみ

テーブルには、新聞を読んでいる奥田さんもいた

「おはよ、みんな」

「おはよう…」

「はわわ！おはよう、なのです」

「おはよう、司令官！」

「おはようございます」

後、もう少しで朝食出来ますから、椅子に座って待っていてください」

「ありがとう、翔鶴

奥田さんもおはようございます」

「おはよう

昨日の書類は、全部片付けたかな？」

「いえ、まだ残ってますね

あ、後、今日は鎮守府正面海域に出撃するので、

旗艦吹雪、翔鶴、白雪、響、電、陽炎

は、埠頭に集まってくれ」



「「「了解（です）！」」」」

「あれ？」

白雪と初雪は？ここにいないけど…」

「それは、初雪ちゃんがなかなか起きないから、さつき白雪ちゃんが起こしに行ったのです」

「全く…世話が焼けるね…」

「そういう、響ちゃんもなかなか起きなかつたのです」

「な…それは、たまたまだって…」

「そもそも、言わないと約束したじゃないか…!？」

「はわわ、ごめんなさい、なのです」

響以外の全員が笑った、代わりに響が膨れてしまったが

そんな会話を聞きながら、朝食を待っていた

埠頭に集まった6人の艦娘に簡単な指示をした後

「最後に…戦果をあげることが大切だが、もっと大切なことがある

一人も欠けず生きてここに帰って来ることだ

「この事を絶対に忘れないでくれ」

「はい！」

「……分かりました」

「はい」

「了解……ただ、今回の相手は駆逐艦ばかりだよ……」

大袈裟じゃないかい……？」

「なのです」

「わかったわ!!絶対に帰って来ると約束……ね！」

「響、今回の戦いだけじゃない

今後の戦いもだよ

……そろそろ時間だ

第一艦隊出撃だ！」

と不恰な敬礼をする

俺の敬礼に対して綺麗な返礼をする艦娘達に

(やっぱり……みんな格好いいな……)

と思った

みんなを見送った後、隣にいた初雪に言った

「初雪に頼みたいことがあるんだが」

「あ、ヤな予感……」

「よく分かったな」

秘書艦を……って逃げるな！」

初雪の逃げ足は想像以上に早かった……



「こちら翔鶴、旗艦吹雪に意見具申します」

『こちら吹雪、なんででしょうか？』

「偵察機の発艦の許可を求めます」

『了解しました』

敵がいると思われる方位に二段索敵をお願いします』

「了解です」

偵察機、発艦始め！」

勿論、二式艦上偵察機はないので

九七式艦上攻撃機12機で代用する

(これで、艦戦21機、艦爆21機、艦攻9機…)

今回は駆逐艦メインの戦いだから、問題ないのだけど…

強い敵と戦う場合には、心許ないですね)

弓を引き絞り、弓矢を放っていく

魚雷や爆弾を積まない九七艦攻は軽快に空を翔っていく

それは、かつての記憶を呼び覚ますには十分で

翔鶴は、密かに弓を強く握っていた

暫くすると偵察機から報告があつた

「……敵艦隊見ゆ！」

駆逐艦1です」

艦隊に緊張が走る

『了解です、みんな準備はいい？』

『問題ありません』

『Y p a (ウラー) !!』

『なのです』

『陽炎の出番なのね！』

「みんな、頑張ってください」

(司令官の指示とはいえ、攻撃隊を発艦出来ないのはもどかしいですね……)

駆逐艦に戦いを経験させたいという司令官の考えから、敵主力艦隊や軽巡以上の艦種と会釈しない限り航空機は偵察と哨戒を行うよう指示していた

勿論、現場の判断によっては攻撃隊を放つことを許可していた

次第に敵艦が見えてきた

心臓がドキンドキンと鳴るのがはつきり聞こえる

次第にその姿がはつきりしてくる

駆逐艦イ級……資料室で何度も見てきた

駆逐艦娘と似ても似つかない化け物のような姿

ぎやおおおーん

威嚇するような、これから戦うことに歓喜するような咆哮をあげる

足がガクガクする

今までの演習では、感じることもない明確な殺意

(怖い……怖いよ……)

『吹雪ちゃん大丈夫？』

緊張しているのは、分かるけど旗艦としての義務は果たさないと駄目よ？』

優しくも厳しい言葉に恐怖が少し薄れる

「す、すいません、翔鶴さん

これより、敵艦隊に対して反航戦を仕掛けます！

砲雷撃戦よーい!!」

己を鼓舞するように大声で指示をした

2つの艦隊は接近し、駆逐艦の射程に入る

「撃ち方始め！いっつけー」

ドーン!!

駆逐艦の砲は豆鉄砲と揶揄されることもあるが、五隻一斉射すれば、迫力は十分だ

ほぼ同じタイミングで敵艦も発砲する

『命中弾ナシ、至近弾多数』

翔鶴の放った偵察機から報告が来る

カコンと音と共に再装填完了の表示が出る

『主砲で弾幕張りますっ』

ドーン!!再び一斉射を放つが敵艦に閃光は見えない

敵艦も応酬だと言わんばかりに発砲してくる



それが響の近くに着弾する

『痛っ…』

「大丈夫、響ちゃん!？」

『大丈夫… 至近弾だから…』

不死鳥の名は伊達じゃない… 撃つ… !!』

何回目かの一斉射… 敵艦に閃光が起きた

『命中一、敵艦中破』

「このまま畳み掛けます

続いてください!」

ふう… と俺は息を吐いた

頭の中では、大丈夫と分かっているにもかかわらず、特に響の近くに着弾した時は艦娘優勢に動き出した画面を見て、書類を読む暫くすると戦闘終了の合図が聞こえた

『こちら吹雪』

敵艦を撃沈しました!』

「良くやった！」

「損害はどうだ？」

『響ちゃん小破』

陽炎ちゃんが損害軽微

それ以外は、無傷です』

「響、陽炎大丈夫か？」

所々服が破けているが

『大丈夫だ… 問題ない…』

と言いきりッとした顔をする響

『陽炎、問題ないわ！』

まだまだ、戦える!!』

元気一杯の陽炎

俺は大丈夫そうだと思ひ指示を出す

「了解だ」

引き続き、進軍して敵を撃滅してくれ」

『はい！分かりました、司令官♪』

そう答え敬礼する吹雪はなんだか凛々しく見えた

## 初めての出撃3

空を翔ていく一機の艦攻：… 翔鶴の放った九七艦攻が何かを発見したように緩降下する

その先には黒い物が4つ：… 軽巡一、駆逐艦三

艦攻隊 17番機は敵艦隊の対空砲火を受けながらも打電した

「我敵艦隊見ユ」

哨戒中の直掩機が偶然敵艦隊を発見し打電する

洋上には、駆逐艦が二隻いる

「我敵艦隊見ユ」

吹雪は、頭を抱えていた

現在、艦娘の艦隊は北と南から来る敵艦隊に挟まれていた

片方は、軽巡一駆逐艦三もう片方は駆逐艦二だ

(どちらかと戦うにしても位置が近すぎて、片方と戦っているうちにもう片方の艦隊に攻撃されるかもしれない)

かといって、艦隊を二分するのは、危険なような…なら)

「翔鶴さん

翔鶴さんの攻撃隊だけで、駆逐艦二隻仕留められますか？」

『多分出来るとは思いますが…』

「分かりました

では、翔鶴さんが駆逐艦二を航空攻撃し、敵主力艦隊を私達五人で仕留めましょう！」

『「了解！」「了解！」「了解！」』

『では、私は攻撃隊を発艦しますね』

「お願いします、翔鶴さん」

『攻撃隊、発艦始め！』

翔鶴が次々と矢を放つ… 矢が燐光は放ち艦戦… 零式艦上戦闘機二二型、艦爆…

九九式艦上爆撃機、艦攻… 九七式艦上攻撃機の順に変化して空中集合し、編隊を組む

そして、南の空へ消えた

整備不良の機体を除いた艦戦9機、艦爆18機、艦攻7機の編隊が駆逐艦艦イ級二隻を捉えた

『トツレ トツレ 突撃準備隊形作レ』

艦爆は上昇し、艦攻は緩降下する

イ級も編隊に気が付き艦攻に攻撃を始め

『7番機被弾』『4番機被弾』

立て続けに二機被弾し艦攻隊は超低空飛行を試みるも練度が低く二機が海面に叩きつけられる

三機にまで減つたため脅威と考えなくなつたのか、イ級は艦爆に攻撃を開始する

2つに別れた艦爆隊は駆逐艦に突撃する

『2番機被弾』『16番機被弾』『8番機被弾』

翼が吹き飛ばされた艦爆はクルクルと回転しながら墜落し、燃料タンクに引火した艦爆は瞬く間に火だるまになる

しかし、艦爆隊は損害を恐れず弾幕を突破する

駆逐艦を捉えた10機が爆弾を投下する

一発当たったイ級は中破し、二発当たったイ級は大破する  
そして、中破したイ級に3機の艦攻が肉薄し雷撃する

『駆逐艦二隻大破確実!』

「了解です、翔鶴さん!」

ちようどその時、敵主力艦隊が見えた

ぎやおおおーん

また、あの咆哮が聞こえるが、怯んだりしない!

膝は笑っているけれど

「みんな行くよ!

砲雷撃戦よーい!」

後は、駆逐艦の間合いになるまで、軽巡の攻撃に耐えられるかが鍵かなと吹雪は思った

## 初めての出撃4

『敵艦の発砲を確認!!』

吹雪は、之字運動をするか一瞬迷ったが、之字運動をせず突撃することに決めた。代わりに敵艦隊との距離は瞬間に近くなるが、ホ級の砲弾は近く近くに着弾するようになってきた。

そして、駆逐艦の間合いに入った時、ついに恐れていたことが起こった。ホ級の砲弾が電を捉えたのだ。

私は自分自身が嫌いだった。

あの戦争の時、暁や雷が轟沈したと乗組員が話していたのを聞いて、私は自分はその場にいなかったのだから助けられなくても仕方がないと自分自身を誤魔化していた。でも

あの夜、電と輸送船団の護衛をした時……私は敵潜水艦の雷撃を受け沈んで逝く電の

乗組員を救助するのが精一杯だった…。何も…。何も出来なかったんだ

それから、ロシアに引き渡されて、“信頼できる”を意味する名を付けられたけど…。もう、自分自身を信頼出来なかった

自分は姉妹艦すら守れない…。妹すら守れない駄目なお姉ちゃんだつてずっとずっと後悔してきた

けど、この世界に生まれ変わつてまたやり直せる…。今度こそ電を…。まだ見ぬ暁や雷を助けられる…。!!

そう、思つたのに…

実際は自分だけ小破して電に心配される始末…

これじゃ、守るんじゃなくて守られるだけじゃないか…。!!

今度こそ守るつて決めたじゃないか…。!?

もし、電に危険が迫れば、この身に代えても守るのに…

その時は、思つたよりも早く来た

当の本人は、私にぶつからないように気にしていたり、敵艦に照準を合わせようとあたふたしており、自分に向かって砲弾が飛んできていることに気が付かない

(危ない…。!!)

と思つた時には、電と砲弾の間に入り砲弾に対して装甲を展開した



その瞬間、全身に大きな衝撃を感じ、痛みを感じることなく私は、意識を持ってかれ  
た

俺はその瞬間を画面で見ている

電の近くに響が来たと思つたら、響が砲撃をくらい爆発した

そして、響が何度も海面に叩きつけられながら吹っ飛んでいく

吹雪は、叫び

電は、何が起こつたのか分からないのか呆然としている

吹っ飛んだ響はぶくぶくと音をたて、海に沈んでいく

「っ!？」

電、翔鶴は、響の護衛を！

吹雪、白雪、陽炎は、敵主力艦隊を撃滅！

響を生きて連れて帰るためにも敵主力艦隊に打撃を与えなければならぬ

戦力的に厳しいが頑張ってくれ!!」

『了解です、司令官!』

そう言つて白雪と陽炎を連れて突撃する

俺は、まだ出来ることはないかと考え、翔鶴に指示を出した

吹雪は、後悔していた

あの時、之字運動をしていればこんなことにならなかったのでは？

しかし、今は戦闘中…。反省は終わってからしようと思いを振る

「之字運動で敵の攻撃を回避する！」

敵は軽巡を含んでいるから練度の低い私達が砲撃だと負けちゃうと思うんだ

だから、肉薄して雷撃する

魚雷以外の全兵装使用許可!!

各艦は、個別で攻撃を開始せよ！」

『了解!』

どうして、こうなっちゃったのかな…

電は、響ちゃんと共に戦って笑顔で母港に戻りたかったただけなのに…

電が… 電が注意不足だったから…

代わりに響ちゃんが… 電のせいで

目の前には、浸水は止まったが未だ目を覚まさない響がいた

頭から血を流し、防弾板はひん曲がり、砲塔は根本からもぎ取れ、帽子も何処かに飛んでいってしまった

もし、これが原因で響ちゃんが轟沈したら…

そう思うと目の前がぼやけてくる…

全身がズキズキする…

初めて出撃して… そうだ、電を庇ったんだ

痛みを堪えながら目を開けると、私を膝枕した電が泣いていた

「沈まないでえ… 響ちゃん… !!」

… 私馬鹿だ

電は、こんなことしても心配するだけなのに…

でも、私にはこれしか思い付かないんだ、電を… 仲間を守る方法は…

そして、また私は意識を深い海に沈むように失った

砲弾と機銃弾が飛び交う

全員小破して、服がどんどん破れていく

「今だ！」

統制雷撃よーい！

てえー!!」

十数本の魚雷が敵艦隊に突撃する

ドン

砲撃で一体仕留め、小中破した駆逐艦も魚雷で轟沈したが、ホ級は未だ健在だった  
「みんな、魚雷を再装填して！

ホ級をしとめ…

白雪ちゃん！

敵の魚雷が!!」

『え!?!』

と白雪が確認した時にはもう遅く

白雪は、水柱に飲み込まれ崩れ落ちる

「白雪ちゃん!?!」

明らかに大破で機関部に甚大な損傷を受けている

「… 陽炎ちゃん

白雪ちゃんを電ちゃん達の所まで曳航して」

『そしたら、吹雪はどうするの?』

「勿論、ホ級と戦って引き付けます」

『無茶よ!』

一人で戦うなんて』

「私の方が若干練度は高いし大丈夫だよ

それに、司令官に情けない所見せられないし… ね?」

『はあ…』

分かったわ、でも一つ約束して

私が戻るまで沈まないって』

「勿論!」

白雪ちゃんをお願いね」

そして、陽炎は白雪を曳航し離脱していく  
吹雪は、一人でホ級に砲雷撃戦を始めた

何回目かになる砲撃を行うが、何発も命中しているはずのホ級の火力は落ちているようには見えない

一方吹雪は、一門が破片を受け破損しもう一門で砲撃しているので火力は半減している

(このままじゃ不味い…)

被弾する可能性が高まるけど、接近して雷撃を放つしかない)

幸いまだ、機関部は損傷を受けていないため34ノットの快速は出せる

吹雪は、雷撃をすると決め、ホ級に接近し魚雷を発射した

「お願い！当たってくださいっ!!」

ホ級に爆発が起こる

その瞬間ホ級の砲撃を食らう

「っ!？」

でも、これで…」

大破しながらも立ち上がる吹雪の手にはもう主砲がなかった砲撃を食らった時、飛んで

いってしまった

吹雪の歓喜した顔が絶望に変わる

爆発の中から中破しながら、ホ級が出てきたからだ

「嘘……そんな……」

ホ級が勝利を確信したかのように、吹雪に砲を向ける

「……めんなさい司令官」

約束、守れそうにないです……」

その時、空から軽快なエンジン音が聞こえた

艦攻5機、艦戦3機という小規模な編隊が突撃を開始する

『12番機被弾』

航空機が来ると思っておらず奇襲効果を生んだのか、中破していたからなのかは分からないが、ホ級の弾幕は薄く落とされたのは一機だけだった

そして、肉薄した艦攻に魚雷を複数受けたホ級は大破炎上し撃沈した

『大丈夫ですか、吹雪?』

「だ、大丈夫……です」

『間もなく陽炎が曳航しに来ると思うので、待っていてください』

遠くから、手を振りながら来る陽炎が見える

戦いが終わったと安心したら、倒れそうになり陽炎に支えて貰った



## 司令官の要請

目を開けると、白い天井があった

隣には誰も寝ていないベッド

反対には、椅子に座って書類とにらめっこしている司令官

「し、司令官：：」

「あ、吹雪起きたのか」

と言い私の隣に来る

少し怒っているようにも感じる

「ご、ごめんなさい司令官：：」

私無茶して：：約束したのに：：」

私は怒られるのではないかと目を瞑り身構える

「はい」

「はうー」

おでこに軽い衝撃が

デコピンされたみたいでちよつと痛かった

「どれだけ、心配したと思っっているんだ

見てるこっちは、心臓止まるかと思っただよ!

でも、ちゃんと帰ってきてくれてありがとう…。」

「で、でも私…。」

「いいんだ

俺が、訓練もせずに実戦を行ったのが、間違いだっただ」

と言って私の頭を撫でてくる

恥ずかしいけど、気持ち良いかも

「と言っても、次から無茶しないようになんかしら罰を決めとこう」

「ふえ!？」

「よし、じゃあ今度から無茶をした子は俺と一緒に寝て貰おう

俺を心配させたんだから、癒して貰わんと」

そう言ってニヤツと笑う司令官

「そ、そんな、駄目です!!」

吹雪は、そう叫びながら顔が熱くなるのを感じた

俺は、吹雪に白雪達が艦娘寮で昼食を作っていることと新しく暁という子が仲間に加わったこと（帰投する途中で、出会ったこと）を伝え

奥田さんのいる部屋に向かった

コンコン

「どうぞで」

「失礼します」

「どうかしました？」

戦闘の報告は、書類ですと言っていたはずですが

「そのことでなく質問がありました」

「なんですか？」

「例えば、ドックを増設したいや大量の甘味を要請したい場合はどのように上に伝えればいいのかと思ひまして」

「なるほど」

そのことなら、明日全指揮官の集まる会議がある

その時に伝えておくよ

で、具体的にどのようなことを要請したいんだ？」

「4つあります」

1つ目は食事を作ってくれる要員が必要です

2つ目は、酒保の取り扱う品物を多くしてください  
特に娯楽品を

3つ目は、甘味の要請です

妖精さんが欲しがっているので

最後にドツクの増設です

全部とは、言いませんが最初の2つは必ずお願いします」

「分かった、頼んでおこう」

「よろしくお願いします」

後、吹雪達が昼飯を作って待っているはずなので早く行きましょう」

「そうしよう」

そう言えば、会議では秘書艦がいるんだ

大淀を借りていいか？」

「大淀がいいというなら、構いませんよ」

「分かりました」

大淀、提督と一緒に会議に出ます」

提督の隣で黙々と書類を書いていた大淀が返答する

「そう?」

「じゃあ、よろしくね」

「あ、司令官」

「遅いですよ!モグモグ」

「悪いちよつと話が…ってなんで勝手に食い始めてるんだよ!」

「それは、響ちゃんか…モグモグ」

「お腹が空いてて、目の前にご飯があったら、食べるよ普通…モグモグ」

「なのですモグモグ」

「はあ…まあ、いいや」

「頂きますモグモグ」

「あ、司令官!」

「午後みんなだ訓練してもいいですか?」

「みんなが疲れてなかったら、いいよ」

「今回の実戦で、反省する所もあるだろうし」

「じゃあ、食べ終わって休憩したら、訓練しよう!」

『おー!!』

「じゃあ、その間に俺は、建造と開発しておこうかな」

「では、秘書艦の私は訓練抜けましようか?」

「いや、吹雪の代わりに翔鶴を秘書艦にして建造と開発するから抜けなくていいよ」  
「え..」

吹雪は、悲しそうに見てくる

「いや、また吹雪にも頼むよ?」

毎日吹雪に頼んだら、吹雪が出撃も何にも出来ないし」

「本当ですか..?」

「本当、本当」

「司令官、私も秘書艦やりたいな..」

「なのです!」

「一人前のレディに頼んでもいいのよ?」

「何、何?」

面白そうだから、私もやりたい!」

「あんな書類をひたすら読み書きする作業の何が好きなんだか

しかも、日によつては一日中俺と一緒になんだよ?」

そんな会話をしつつ昼飯を食べ休憩した

「所で翔鶴、秘書艦いきなりで嫌じゃなかった？」

「いえ、大丈夫ですよ」

「そう？ならいいんだけどさ」

あ、開発レシピは、30/70/30/110で

建造レシピは30/30/30/30でよろしく」

「は、はい」

と慣れない手つきで画面を操作する

結果は

：開発

失敗

失敗

97艦攻

失敗

：建造

菊月

睦月

響（の艤装のみ）

大潮

新しく来た子達を旅行した後、埠頭に来ていた吹雪達の訓練を見るためだ  
埠頭に着くと何故か電や初雪が倒れていて暁や白雪も座り込んでいる

「……吹雪

俺、無茶をするなって言ったよな？」

「は、はひー！」

「明らかに無茶したよな？」

電に至っては、ふにゃーと目を回している無茶してないと言い張るのは無理があるだ  
ろう

「えつと……これは……その……」

「消灯時間の前に執務室に来なさい、いいね？」

「はい」

しゅんとする吹雪



「ちよつと待つて…」

私が吹雪に無理言つてハードな訓練をしたんだ…

私も罰を受けるべきだと思う…」

と響が言う

「分かった、吹雪と一緒に来てくれ」

その夜、二人はきちんと執務室に来た

「んじゃ、寝よつか」

と自室へと案内する

そこには、布団が三枚敷いてある

「俺は、端の使うから他の2つで寝てね」

「はいー」

「了解…」

「はあ、久しぶりだなあ」

誰かと同じ部屋で寝るのは…

子供の時を思い出すなあ」

「私、司令官の昔話聞きたいです！」

「私も少し興味あるかな…。」

「少しだけだぞ？」

消灯も近いしな」

と少しだけ恥ずかしかったが昔話をした

いつの間にか、二人は寝てしまったので、二人に布団をきちんとかけて寝た

近くで、誰かと一緒に寝ているというだけでなんだか温かくて、失敗した自責も少し軽くなった気がした

## 提督の戦い

声が聞こえ、目が覚める

そう言えば、吹雪と響と一緒に寝たんだっけと思い目を開ける

2人は座っていた、正座して

二人が向いている方を向くと、ただならぬ雰囲気の大淀が…

あ、これヤバいと思い狸寝入りするが時遅し

「司令官」

「はひ」

「これは、一体どういうことでしょうか？」

「え、えっと、これは無茶をしたら、一緒に寝るといふ罰を作ってます…」

冷や汗が止まらない

大淀さん怖すぎ

「このような罰は、もっと信頼されてから行ってはどうでしょうか？」

変な噂が流れれば、艦隊指揮に影響がでます」

「はい、ごめんなさい」

と頭を下げるしかない

「では、私は提督と一緒に会議にいきますので」

「わかった、気を付けてね」

俺は、買い物をするため町に出ていた

艦娘は、機密保持のため町には基本的に行けない

そもそも、民間には艦娘のことを開示してないらしい

町は暗い雰囲気と置いていたが、呉の町は活気があった

だが、道中の公園や空き地に対空陣地が組まれており、辛うじて戦時中であることが分かった

妖精さんや艦娘のためのお菓子を買ったたり、本や漫画を買ったりする

今度はテレビ買おうかなとか思いながらお昼を食べて艦娘と書類が待つてる鎮守府に帰ることにした

コツコツ

長い廊下を大淀と歩く

ここは、海軍本部

私より階級の高い軍人に敬礼しながら、目的の部屋に行く  
チラチラと周りの軍人が見てきて話をしている  
どうせ、私の悪口を言っているんだろう

目的の部屋のちよつと前で一番会いたくない奴に会つた

呉第二鎮守府の横岡 龍

私の同期で優秀だが、性格が悪いとよく言われていた

私を勝手にライバル視している

ヘラヘラした様子で

「奴等に負けておめおめと生きて帰ってきた秀才さんは、今度は18歳のガキのお守りをしてるって聞いたんだが本当かな？」

「……」

「その様子だと本当みたいだなあ

おい、なんか言つてやれよ、瑞鶴」

ニヤニヤしながら隣の少女に言う

「私は、そういういびりは大嫌いなもの

ごめんね、こんな提督で

同じ呉の仲間としてお互い頑張ろ！」

「チッ

連れねえ奴だ」

そういい、奴は会議室に入る

私と大淀もそれに続く

中では、各地域担当の提督が秘書艦を連れて座っている

艦隊司令部代表と海軍本部の代表が来ると各鎮守府が報告と今後の方針を発表する

そして、艦隊司令部が各鎮守府に作戦を下す

最後に、各鎮守府から要望を出していく

私も彼から出された要望を伝える

∴ を要請します」

一部の提督が、嘲笑している

司令部の人間も嘲笑うかのように笑いながら、返答する

「なんだ、あれはそんなことを要請したのか？」

ドックの増設や調理師の要請はまだしも、酒保に娯楽品を増やす？甘味を寄越せ？艦娘は、兵器だ、そんなものは必要ない」

隣にいる大淀が悔しそうに俯く

「しかし、彼女らは笑ったり悲しんだり怒ったりします

艦娘は、ただの物言わぬ兵器ではありません！」

正直、私も鎮守府に着任する前は艦娘など深海棲艦を倒すためのただの兵器……いや消耗品だと思っていた

考えが変わったのは、きっと彼のお陰だろう

「それについては、とうの昔に結論が出ただろう

お前はまた議論を繰り返そうというのか？」

「まあ、いいじゃないか

確か君はあの青年が着任した鎮守府に着任した奥田くんだね」

隣にいた海軍本部から来ている威厳のある男性が言った

「はい、大佐の奥田 吉成です」

「あそこは、期待しているから特別に許可しよう

彼に戦果を期待していると伝えといてくれ」

「… 分かりました」

そして、会議は終了した

「提督」

「何ですか、大淀」

「ありがとうございます、少しだけ見直しました」

「当然のことをしたただけだよ、お礼を言われるほどではないですよ」



## 気分高揚と開発

呉から鎮守府に帰ってくると妖精さん達が集まってきた

「お菓子だー」

「やったー」

「司令官早く頂戴」

探知能力高すぎだろ！と思いつつ

「仲良く分けてよ」

「ゴミも、ちゃんと片付けるように」

と言ってお菓子を渡す

かなり多めに買ってきたつもりだったが、思ったよりも妖精さんが多く足りるか心配になった

「はーい」

「了解ですー！」

「司令官大好きー！」

まあ、喜んでくれて良かったよ

「ただいまー」

「あ、お帰りなさい、司令官！」

と笑顔で手を振っている吹雪、その後ろには響と陽炎が  
埠頭には、疲労困憊で座り込んでいる駆逐艦達がいるが、目は回していないから大丈夫  
だろう… 多分

「みんな疲れているけど、大丈夫？」

「大丈夫です！限界は越えてませんから！」

鬼教官か！と思っただけど、黙っとく

「司令官？」

「い、いや、何でもないよ

訓練も程々にな？」

「はい！大丈夫です

さ、みんな休憩終了だよ！

通しで砲雷撃戦やるよー」

駆逐艦のみんな頑張って生き残れと内心で思いつつ、秘書艦の翔鶴を探した

翔鶴と工廠に向かい

開発と建造を行う

開発：最低限

25mm連装機銃

12・7mm単装機銃

艦載機レシビ

零式艦上戦闘機62型（爆戦）

彗星

建造：最低限

神通

雷

不知火

北上

なんか、開発も建造も運が良かった？

いや、良すぎな気がする…

工廠妖精さんは、なんだか機嫌がいい

もしかして、お菓子が気分高揚に繋がって？

もつと開発して検証したかったが、ボーキがなくなってきたので、諦め4人を連れて旅行をした

そして、提督と大淀は帰りが遅くなるこのことで、先に食べることにした

「頂きまーす」

『頂きます！』

「あ、飯の後に買ってきた菓子食べるから、食べ過ぎないようにな」

「わあ！」

お菓子食べたことがないので、楽しみです♪」

「アイスでしょうか？」

「アイスにしようと思ったんだが、溶けたら嫌だったからクッキーやチョコにしたよ」

「あまり、お菓子については詳しくなくて…すみません」

「いやいや、艦娘も女の子だからね」

鎮守府にいるときくらい、楽しみの一つや二つあってもいいでしょ」

「私お茶淹れてきますね」

「あ、白雪ちゃん

私も手伝うよ」

「飲み物も一応、オレンジジュース買ったんだが飲むか？」

「ジュースか：： С п а с и б о (スパスイーバ)」

「雷も手伝うわ！

もっと、私に頼っていいのよ？」

「はわわ、電も手伝うのです」

「私でよろしければ、お手伝い致します」

「私も手伝います！司令官！」

「ありがとう」

じゃあ、雷と電はこれ運んで」

「分かったわ！」

「なのです！」

ああ、こんな楽しい時間がずっと続けばいいのに：：

# 南西諸島の民間人を救助せよ! 1

数日後の朝

「吹雪、今日みんなに食堂に集まるよう伝えてくれ

上から要請が来ているから、作戦を実施する」

と秘書艦の吹雪に伝える

「分かりました、司令官！」

時間はいつですか？」

「ヒトフタマルマルだ」

「了解です！」

と言いつつ執務室を出ていく

スピーカーを使っても良かったのだが、もう訓練を始めている艦娘もいるため聞き逃したら大変なので吹雪に伝えて貰った

吹雪もやることなかったし、暇させたくなかったからな

時間になり、吹雪と食堂に行く

ちやんと、食堂には二十人くらいの艦娘全員が集まっていた

「明日、ついに作戦を開始することとなった

攻略するのは、ここだ」

と吹雪の出した地図を指す

そこには、南西諸島と書かれていた

「ここは、他の鎮守府が攻略して解放したが、先日侵攻艦隊の攻撃を受けたとの報告を受け、上層部は民間人の避難を決定した

本作戦は、主力艦隊を撃滅し客船五隻を護衛し民間人を救助するのが目的である

尚、他の鎮守府は敵の大規模侵攻に対して迎撃しているため支援は一切見込めない」

「つまり、私達だけで敵を撃滅しつつ護衛しろと、…」

「そうなる

だが、それを一艦隊で行うのは、不測の事態に備えられない

なので、攻略艦隊と護衛艦隊の二つを編成する

攻略艦隊

旗艦吹雪

白雪

響

暁

睦月

翔鶴

護衛艦隊

旗艦神通

北上

陽炎

不知火

電

雷

でいく

出港は、マルナナマルマルだ

『了解（なのです）！』

「翔鶴の艦載機は

零式艦上戦闘機を21型から62型に



艦上爆撃機は九九艦爆から彗星に変えてくれ」

「分かりました：。既に発着艦訓練も爆雷連合攻撃の訓練も完了しています」

「分かった」

そして、神通にも索敵のため、零式水上偵察機を積んで貰う」

「了解です」

「駆逐艦達もまだ装備出来る艦は、吹雪の配る紙に書いてある装備を受け取ってくれ  
慣熟訓練も忘れずやるように

んじゃ、みんな間宮に昼飯頼んで飯にするぞ」

「しょうが焼き定食：。これも美味しそうだ：。」

「はわわ、多くて迷っちゃうのです」

「んー、じゃあ

俺は、ラーメンにするかな

今日は、醤油で」

「私も司令官のと同じのをお願いします！」

「じゃあ、私も同じのにしよう：。」

「なんで、同じなんだよ：。」

ん？翔鶴どうかしたか？」

「… あ、いえ

何でもないです

私も醤油ラーメンにします」

「翔鶴も?」

「はい、みんな司令官のことを信頼しているから、ラーメンにしたんじゃないのですか?」

「そーかな?」

考える俺を見て、駆逐艦娘達はクスクス笑ってる

「いやいや、ないでしょ

クスクス笑ってるし」

丁度その時、妖精さんがラーメンを運んできた

「ありがとう

おお、うまいな、流石だね」

運んできた妖精さんが誇らしげに、胸を張った

「準備はいいか？」

「はい！私がきつとやっつけちゃうんだから

抜錨です！」

「みなさん、ご一緒に頑張りましょう！」

「了解……響、出撃する……」

「暁の出番ね、見てなさい！」

「みんな？」

出撃準備はいいかにや〜ん？」

「五航戦、翔鶴、出撃します！」

「……約束忘れぬなよ？」

「「「「はい！」「」」」」

## 南西諸島の民間人を救助せよ! 2

攻略艦隊は、一回戦闘していたが損害は皆無だった

敵艦隊編成は、軽巡洋艦ホ級、軽巡洋艦ヘ級、駆逐艦イ級×2、駆逐艦ロ級×2の6隻

想像以上に多い

他の鎮守府が偵察した時は、重巡洋艦以上はいなかったらしいが…

(…電…雷…大丈夫かな…)

チラリと後ろにいる暁を見る

初陣を損害もなく勝って舞い上がっている

『暁ちゃん?』

油断しちゃダメよ?』

あ、翔鶴さんに怒られた

シヨボンとしてる

「全く、まあ、暁は私が守るから大丈夫だよ……」

「もう、私がお姉さんなんだから、私が響のことを守るわよ!」

「さっきの戦闘でも、あたふたしてたから、心配だね……」

「そ、そんなことないし!」

「でも、暁ちゃんは砲撃も雷撃も上手だよね」

「そ、そうよ」

一人前のレディは、砲撃も雷撃もそつなくこなせちゃうんだから!」

「楽しいお話している時に悪いのだけど、敵艦隊を発見しました」

「編成は?」

「駆逐艦三隻……重雷装巡洋艦一隻、重巡洋艦二隻です!」

「え!?!」

「ここら辺には、重巡洋艦はいなかったはずなのに!」

「翔鶴!」

開幕航空戦だけで、重巡洋艦二隻を仕留められるか?」

「司令官、それは難しいと思います」

偵察に出している艦攻があれば可能性がありますが、呼び戻して、整備する時間を

考えると不可能です』

『そうか、分かった』

『吹雪、直ちに攻撃隊の発艦を意見具申します』

『分かりました、翔鶴さん』

攻撃隊の発艦を許可します!』

『行くわよ? 攻撃隊発艦!』

弓を引き矢を放つていく

矢は、光を放ち艦載機へ変化していく

(… 私も翔鶴さんのように強ければみんなを守るのに…)

「行くわよ? 攻撃隊発艦!」

発艦作業を行いながら、自責の念に駆られていた

きつと、一航戦の先輩方なら重巡洋艦二隻を簡単に沈められただろうに

あるいは瑞鶴なら…

いない人のことを思っても仕方がないけど、自分じゃない誰かならもつと上手く出来るのではないかと思ってしまう

発艦を終え、もう攻撃隊の戦果を祈ることしか出来ないが、翔鶴はずっと悩んでいた

空を翔る編隊：…爆装状態の零式艦上戦闘機62型5機と爆装していない5機、計1

0機と彗星艦上爆撃機18機が五十番(500kg)爆弾を積み上昇する

九七艦上16機は、魚雷を積み緩降下する

『トツレ トツレ』

爆戦5機が急降下爆撃を開始した

逆落として、敵艦：…駆逐艦に突撃する

『五番機、七番機被弾』

『九番機被弾』

弾幕が激しく：…重巡洋艦からの砲火が特に激しい

残った機体も機銃に進路を遮られ攻撃を諦め爆弾を投棄する

続いて彗星が突撃する

『十九番機被弾』

『三番機被弾』

主翼が吹き飛び回転しながら墜落する機体やコックピットを撃ち抜かれそのまま墜落する機体もある

5機が落とされ、4機が被弾し爆弾を投棄し退避する

4機が機銃に進路を阻まれ5機が攻撃に成功

駆逐艦一隻撃沈、駆逐艦一隻を中破させる

その間、艦攻は敵の弾幕を受けず悠々と接近していたが、8機ずつの編隊に別れた時思わぬ奇襲があつた

旗艦の重巡洋艦の攻撃を行う隊から護衛を行う戦闘機に救援要請があつた

『我敵水偵から攻撃を受ける

至急救援を求む』

見ると、6機の九七艦攻が敵の水偵に追い回されている

後部機銃から必死に反撃しているが、後部機銃は敵の攻撃を牽制するためのもので、敵機を落とすためのものではない

慌てて戦闘機が水偵を撃墜するが既に艦攻は5機にまで減っていた



そこに激しい対空砲火が襲いかかる

『これより我隊は帰投する

敵、重巡洋艦一隻を大破炎上、駆逐艦一隻を撃沈、駆逐艦一隻を中破させるも我隊の損害は甚大なり』

南西諸島の避難民が集まる島の海岸では、ボーイッシュでセーラー服を着た少女と長のような老人が歩いていた

「あんたのお陰で、俺らは誰も犠牲にならんかった」

「そりゃあ、深雪さまだからな！」

「あんたは、俺らが客船で避難したらどうするのだ？」

「んー、仲間を探そっかなあ

きつと、吹雪や白雪、初雪がどこかにいるだろうし

そういう、じいさん達は行く宛あるのかよ」

「国が用意するらしいな

大丈夫だろ」

「そっか良かったな」

そんなことを話ながら、二人は客船を待っていた

## 南西諸島の民間人を救助せよ！・3

護衛艦隊は、戦闘は一切なく無事目的の島まで客船を護衛した

電は、客船に歓喜しながら乗る人達を見て笑みがこぼれた

『電嬉しそうね？』

どうかしたの？』

「電、もっと助けたいのです

戦地で、怯えながら暮らしている人達も深海棲艦と勝てる見込みが薄い戦いをしてい  
る軍人さんも激戦地で戦う他の艦娘さん達も

みんな、みんな、助けたいのです

だから、この作戦に参加出来て嬉しいのです

：： 出来れば、深海棲艦も：： ボソ

『最後の方向か言った？』

「はわわ、何でもないのですー！」

『そう… ってあれ?』

あそこにいるの艦娘じゃない?

埠頭で、お爺さんと話しているセーラー服着た娘!』

「本当なのです!」

吹雪型ほいセーラー服着てるのです

でも、他の鎮守府から援軍はないはずです

神通さん、様子見てきていいのです?」

『提督に聞いてみないと分かりません

ちよつと待ってください』

『ん? どうした?』

「あ、司令官さん

雷ちゃんが艦娘を見つけたのです!」

『そうよ!』

埠頭でお爺さんと話しているのよ

会ってみていいかしら?』

『ん、分かった

上から、民間人の口止めは出来ているとのことだから、いいよ

雷と電で行ってきてくれ』

『分かったわ!』

「なのです」

「これで、お別れだな

元気でな、じいさん」

「そうだな

．．．泣いてるのか?」

「な、な訳ないだろ!

私は深雪さまだぜ」

「良かったら、うちに来ないか?」

孫みたいで、可愛らしいからな」

「なな何言ってるんだ!

ってあれ?」

あいつら、雷と電!?!」

「おや、お仲間さんかい?」

「あ、深雪ちゃんなのですか!？」

「あら、久しぶりね！」

「お前らもこんなになっちゃってたのか

気が付いたら女の子になっちゃっててさ」

「私達は、艦娘になったのです！」

「艦娘?!？」

私とじいさんは首をかしげる

「艦の記憶を持ち、深海棲艦と戦う者達のことよ！

って深雪は知ってるでしょ」

「いや、今一ピンとこなくなってるさ

じゃあ、鎮守府もあるのか？」

「あるのです！」

深雪ちゃんも是非うちの鎮守府に来るのです！」ズイズイ

「お、おう」

「鬼きよ：：じゃなくて、吹雪も白雪も初雪もいるのよ！」

「本当か!？」

「良かったな

仲間が見つかつて

そろそろ本当にお別れだな」

「おう

手紙：：書くからな」

「分かった、楽しみにしとるよ」

南を索敵していた水偵は、黒い群れを発見した

それは、客船に向かって航行していた

「我敵艦隊見ゆ

軽巡洋艦二隻、駆逐艦三隻」

「：：水偵が、敵艦隊を発見しました

軽巡洋艦二隻、駆逐艦三隻です

客船を丸裸にするわけにはいきませんので、艦隊を二分します

船団護衛は深雪さんと北上さんに任せます」

『ちえー』

戦えないのかよ』

『了解』

「では、陽炎さん、不知火さん、電さん、雷さん行きますよ」

『『『了解（なのです）!!』』』』

（…さつき、攻略艦隊の無線を聞く限り攻略艦隊は敵主力艦隊と戦闘を開始したから

ここら辺には、強力な敵艦隊はもういないはず…

だけど、何故か胸騒ぎが…）



## 南西諸島の民間人を救助せよ！ 4

『敵艦発砲!!』

『之字運動開始！』

訓練通り行えば大丈夫です』

『『了解!!』』

「な、なのです！」

辺りに敵艦の砲弾が落ちる

前戦つたときより、旗艦から放たれる砲弾の精度がいい気がする

『きゃー』

『大丈夫ですか、陽炎』

『大丈夫よ！』

ありがとう、不知火』

撒き散らされる断片が装甲を破り、服を切り裂き、痛みを与える

「ツ…!?!」

大きな破片が砲塔を直撃し、凹ませる

『大丈夫？』

電』

「大丈夫なのです

砲塔がちよつと動きにくくなっただけ……なのです」

『そろそろ、駆逐艦の射程に入ります！』

砲撃用意！』

砲撃しながら、神通さんが指示をする

「はわわ」

『攻撃よ、攻撃！』

ドーン!!

5艦から一斉射され

敵艦隊周辺に着弾する

『至近弾多数、命中弾一』

敵艦から煌めきと赤いチロチロとした焰が見える

すでに敵艦隊は、軽巡洋艦一隻小破、駆逐艦一隻中破していた

『沈め』

ドーン!!

その時敵艦隊に動きがある

旗艦の軽巡洋艦以外が一斉にバラバラに動き始めた

まるで、鎖から解き放たれたかのように

『…全艦輪形陣に変更します』

『『了解（なのです！）』』』

神通の右前に電その後ろに雷

左前に陽炎その後ろに不知火が続く

軽巡洋艦旗艦を神通一人が対応し、他の艦娘は互いに援護しながら神通を攻撃しよう

とする旗艦以外の艦を攻撃する

電と雷は、二隻の駆逐艦と交戦していた

「命中させちゃいますー！」

中破した駆逐艦イ級に対し攻撃するも、回避に専念する駆逐艦になかなか当たらない

その時、電の近くから隠れていた三隻目の駆逐艦八級が食らい付こうと飛びかかって

くる

「あ…。」

「助けるわ！」

錨を持った雷が八級に錨で殴り主機の回転数を上げ押し返そうとするが

今度は、雷と交戦していた口級が雷に噛みつき、防弾板を噛み砕き腕にまで歯が食い込む

『い…』

く、雷は…大丈夫…なんだから…!!』

「い、雷ちゃん!」

『電は、砲撃に…ぐ…う…』

「何あれ!!軽巡洋艦なの!」

幾ばくかの砲撃をし、命中弾を得るが一向に火力が減らない軽巡洋艦に陽炎は、驚きを隠せない

『きつと、eliteでしょう』

資料室で吹雪さんに教えてもらいました

火力、雷撃力、装甲が強化されているようです』

「相変わらず、冷静ねえ

## 流石相棒

：： 魚雷何発も喰らえば撃沈出来るわよね？」

『さあ、どうでしょう』

不知火は、試したことがないので、分かりかねます』

「勿論付き合ってくれるわよね？」

『当たり前です』

陽炎が無茶しないように見張るのが、不知火の役目ですから

司令にも、そう言われました』

「全く、司令官は心配性よね」

寧ろ、私より不知火の方が無鉄砲な気がするけど」

『何か?』

「なんでもないよ♪」

さ、行こっか」

主機を吹かす

体がグツと引かれる、相棒もすぐ後ろにいる

雷撃位置に達した時、自分に砲弾が飛んできて慌てて舵をとる

今度こそ！と敵艦を見ると副砲が私に向けられていた

誘い込まれた!?と思った瞬間全身に強い衝撃が

陽炎型自慢の装甲など至近距離で放たれた砲弾の前では紙同然

衝撃で服は破れ、直撃した魚雷発射管は誘爆しなかったのが奇跡といえるほどボロボ

ロだった

「し、不知火!!」

「沈め!!」

不知火が発射した魚雷がホ級に一直線に向かっていく

そして、爆発、水柱でホ級が見えなくなる

「やったあ!」

『…いえ、まだです』

水柱が消えると無傷のホ級が出てくる

「なんで!?!」

『きつと、砲弾を水面に撃って自爆させたのでしよう』

もう一度撃ちますから、時間稼ぎしてください!』

「任せといて!」

何て言ったって、私は陽炎型ネームシップの陽炎なんだから!」

… ちよつと、不味いかもしれませんね

苦戦する艦娘達をチラ見しながら、目の前の敵旗艦と砲を交える助けにいきたいのは、やまやまなのですが  
と敵旗艦を見る

普通の本級と違い黒と金色のオーラのようなものを纏っている  
警備のときに遭遇したようなnormalと違い火力も装甲も錬度も高い  
資料室で読んだflagshipがこんな所にいるなんて  
簡単には助けに行かせて貰えないようですね  
だったら、貴女を倒すまでです！

## 南西諸島の民間人を救助せよ！5

攻略艦隊も苦戦していた

陣形を組んで戦っていたのだが、中破した駆逐艦を撃沈した時、護衛艦隊のように乱れて戦い始めた

吹雪は、陣形を維持しようとするのは危険と判断し、

重巡洋艦を吹雪と私

重雷装巡洋艦を白雪

駆逐艦を暁が対応することとなった

紙一重で、砲弾を回避する

吹雪の猛特訓に比べれば、リ級eliteの砲撃もぬるいように感じる  
『響ちゃん！』

やっぱり、砲撃は効かないから魚雷を撃つため肉薄する

付いてきて！』



「了解。」

幾つもの砲撃の水柱の間に縫うように接近する

辺りが水柱ばかりで、水柱の森に迷いこんだように感じる

そろそろ、雷撃位置に達するとき、急に吹雪が転舵する

そして、吹雪の予定進路だった場所に水柱が上がった

その時、吹雪からは見えないり級が副砲を吹雪に向ける

「吹雪：：!?!」

『その手は、通用しないんだから!』

吹雪は、また転舵しり級が放った砲弾が作った水柱を突つ切りり級に接近する

り級が副砲を放つ

それは、吹雪に当たらず：：吹雪と私のちようど中間に着弾する

『え：：!?!あ：：!!』

「あ：：しまった：：!?!」

り級の砲撃で海面が複雑に渦巻く

それで、吹雪と私は激突し、二人一緒に倒れ込む

そこにり級が砲撃を放つ

「…っ!？」

響! 吹雪!

あの二人がやられるなんて!？」

駆逐艦に止めを差し

二人の共へ急ぐ

『む、睦月もそちらに向かいます!』

吹雪が響を援護しながら、後退してくる

『響ちゃんが庇ってくれたので、私の損害は軽微だったのですが…』

吹雪は艀装からちよつと煙が吹き出しているものの砲などは、無事みたい

対して、響は真つ黒な煙がもくもくと出ている、砲も魚雷発射管も破損している

「全く、無茶するんじゃないわよ!

プンスカ」

『ごめん…』

ちよつと、ドジ踏んじやった…』

「睦月、響の曳航を頼める?」

『は、はい!』

『なっ!』

まだ… 戦える!

盾になつて、みんなを守る…!!』

「何言つてるの!？」

それで、響が轟沈死しちゃつたら、どうするの!」

『別にそれでも構わない… みんなを守るなら…!』

「ふざけないで!!」

パンッ!

私は、思わず響を頬を叩く

「そんなことをして、残された私達第六駆が… みんなが喜ぶと思つてんの!？」

とにかく、睦月連れてって」

『わ、分かりました』

『でも… 私の想いはどうなるの…!』

私は、みんなを守りたいんだ…!!

もう、二度と同じ後悔をしたくはないんだ…!!』

「……………」

『何言つてよ…』

お姉ちゃん!!』

「とにかく、駄目なものは駄目よ!」

響をキツと睨み吹雪に付いていった

慢心でした…

敵が水偵を使って艦攻隊を攻撃してくるなんて

水偵の数も少なく、旗艦だけだったこともあり重巡洋艦一隻は撃沈出来たもの  
の…

もし、二隻残っていたら、艦隊は壊滅してたかもしれない

現在使える艦載機は、

爆戦10機

艦爆8機

艦攻は、偵察から帰ってきた機体6機と帰って来て整備の間に合う7機合わせて13

機

全力攻撃しないですね

中途半端な攻撃は、被害だけ大きくする可能性がありますから  
暫く発艦準備をし、翔鶴は弓矢を放ち始めた

## 南西諸島の民間人を救助せよ! 6

巨大な牙と防弾板の破片が右腕に食い込み、脳が掻き回されるように痛い  
(このまま、じゃ…ハ級に噛み殺される…)

その前に…!!)

「ぐう…!」

「つてー!!」

ハ級を無理やり押し返し、魚雷を全発発射する

爆発の衝撃と口級に噛まれていた右腕が悲鳴を上げ、自身もあまりの痛さに絶叫する

う…があ…はあ…はあ…げほ…」

『雷ちゃん!!大丈夫なのです!?!』

「…だ、大丈夫よ…」

何の…問題も…」

『雷ちゃん…後ろ!!』

『雷!後ろ!!』

電の悲鳴と司令官の叫びを重ねる

その瞬間、後ろからバキツ… ボキ… バキツ… バキバキと鉄を噛み砕くような音と共に背中に鋭い物が突き刺さる

「が… げほ… 嘘でしょ…」

後ろには、口級が砲塔と機関部ごと艤装を噛み砕かれていた

電は、大破したイ級を放ってこつちに来るが、距離があり砲撃しようにも私が射線上にいたため行えない

そして、口級はほとんど動けなくなつた私を弄ぶかのように敢えて砲撃をせず喰うつもりでこちらに再度接近してくる

… ここで、死ぬのかな…

走馬灯のようにここ数日の記憶が蘇る

厳しい訓練をこなしながらも笑う暁<sup>姉</sup>、響<sup>妹</sup>、電<sup>達</sup>…

鬼のように厳しい訓練をする吹雪や神通に、分からないことを教えてくれる陽炎や白雪

私達のことを第一考えてくれる優しい司令官に、そんな司令官を見守る提督

短い間だったけど、とても楽しかったあの鎮守府に帰れないなんて嫌!

絶対、生きて帰るわ!

幸い、武器<sup>箱</sup>はある

接近する口級を睨みつけ、力の入らない左手で錨を持つ

そして、ドーン!!と音がし

口級の周辺に多数の水柱が

「え…何が」

そのまま、口級は攻撃され撃沈した

『ん…大丈夫、雷?』

『仲間を助けるためなら…この朝潮いつでも出撃する覚悟です』

『そんな覚悟いらないわよ』

もう、私、なんでこんな部隊に配属されたのかしら』

『そんなこと言わず、アゲアゲで行きましょう♪』

『大丈夫か?』

『あたしは、陽炎ちゃん達の援護に行くね』

それ、ワン、ツー♪』



司令官が緊急で援護艦隊を出撃させていて護衛艦隊を援護しにきたのだ  
「……大丈夫よ！」

でも、ちよつと辛いかも」

雷は安心して、初雪に肩を貸してもらい、戦いの行く末を見守った

『舞風行ってきましたーす！』

『菊月……参った……お供する……』

「舞風！菊月！」

よっし、じゃあ統制雷撃行くわよ！」

『『『了解！』』』

ホ級eliteに爆発が生じるまでそう時間が掛からなかった

『神通さん、手伝うのです！』

『軽巡洋艦の flagship ですか』

相手としては、不足なしです』

『手応えのなさそうな子ね!』

『いつきまつすよお〜』

「分かりました

私が砲撃で引き付けますから、その間に雷撃を!」

へ級 flagship は、電達に砲撃をしようとするが、私の砲撃を受け私に再び狙いを定める

私をさつさと撃破して電達を攻撃する魂胆だろう

乱立する水柱の中、私は笑っていたかもしれない  
また、身を削りながら駆逐艦と一緒に戦えることに

## 南西諸島の民間人を救助せよ！・7

睦月が白雪の所へ向かい、響と私だけが残された

「ずいぶん、無茶をしたみたいですね」

『… そんなことないさ…』

吹雪を重巡洋艦の主砲から守っただけだよ…』

「そのわりに、暁ちゃんがずいぶん響ちゃんのこと叱咤していましたけど？」

『私は、守りたいんだ、みんなを…』

でも、私は戦艦のように一撃で敵艦を撃沈したり

翔鶴さんのように多数の敵艦を攻撃することも出来ない

みんなを守るためには、この身で盾になるしかないんだ…』

「……………」

『間違っているかな…？』

「私は… 駆逐艦ではないので適切な助言は出来ませんが

私は、響ちゃんの考えは間違えてないと思います

私もそう考えることはありませんから…」



猛烈な弾幕を喰らい

艦爆は、1機1機と数を減らしていく

最後の1機が高角砲の弾をまともに喰らって爆発四散すると、艦攻に狙いを定める艦爆と同じく、数を減らすが錬度が高いのか、猛烈な弾幕をもろともせず

3機が魚雷を投下する

1機が魚雷を投下してフワツと浮かび上がる

実は、この瞬間が一番危険でその艦攻も機銃の餌食になり尾翼が吹き飛びバランスを失い墜落する

だが、その艦攻の魚雷は一直線にリ級に突撃する

ポーン！

リ級に魚雷が命中する

しかし、一発の航空魚雷ではリ級は撃沈出来ない

シーー

リ級が喜ぶように吼える

そして、忌々しい駆逐艦娘の方を向くと

自身リ級に多数の白い航跡が迫っていた

「各艦隊結果を報告してくれ」

『こちら、攻略艦隊旗艦、吹雪報告します！』

敵艦は、全艦を撃沈もしくは大破させました

こちらの損害は、私が小破、暁が小破、白雪が中破、響が大破です』

『こちら、護衛艦隊旗艦、神通報告します

敵艦は、全艦を撃沈

こちらの損害は、電損害軽微、不知火小破、私中破、陽炎中破、雷大破です』

『支援艦隊旗艦初雪：：です

菊月損害軽微、舞風小破』

「了解、護衛艦隊は船団と合流、支援艦隊は攻略艦隊と合流し、帰投してくれ

細かい指示は旗艦に任せる」

『『了解！』』』

ふうー

重巡洋艦二隻と軽巡洋艦flagshipが出てきた時は本当に焦った

あまり、艦隊司令部の情報も宛にならんなあ

雷と響の怪我也心配だし、的確な判断をした吹雪と翔鶴を労りたいし、色々準備し  
ますか

司令官は、第二執務室のドアを閉めた

第一執務室では、提督が二枚の紙を机に並べていた

一枚は、艦隊司令部から送られてきた偵察した結果が書かれた書類

もう一枚は、大淀が実際に偵察を行った横須賀第二鎮守府に確認した偵察した結果が  
書かれた書類

片方の書類には、当海域には軽巡洋艦旗艦の水雷戦隊が数隊いるだけであり、貴殿の  
鎮守府の戦力でも十分撃滅出来るであろうと書いてある

もう片方は、当海域には強力な重巡洋艦eliteを旗艦とする水上打撃部隊と軽巡  
洋艦flagshipを旗艦とする強力な水雷戦隊がいるから注意せよと書かれてい

る

「大淀、これをどう思います」

「艦隊司令部は、この鎮守府いや司令官を潰すために敢えて偽情報を流したとしか」

「……」

「司令官に教えましょう」

取り返しのつかないことになってからでは、遅いです」

「いや、教えない」

艦隊司令部がうっかり間違えたという可能性がないわけもない」

「な!?!」

「他にも理由はありません」

彼はまだ来て間もない、しかも戦争なんてない日常から戦争のある世界にいきなり来て、艦隊を指揮して

正直、これ以上彼に重荷をさせたくないんだ

あまり、情報を鵜呑みするのはよくないと警告はしておく」

「では、海軍本部に報告を……」

「それも、艦隊司令部に目をつけられる原因になる……もっと、証拠を集めてからでないと」



コンコン

「どうぞ」

サツと机に出していた書類をしまう

「作戦無事完遂しました」

「うん」

私も見ていた

援護艦隊を出撃させる判断もとても良かった

きつと、この結果には上も満足してくれると思うよ」

「ありがとうございます」

「後、今回の作戦で分かっただろうが情報を過信しては駄目ですよ」

「はい！心得てます！」

あの、提督も艦隊を埠頭で待ちます？」

「そうしようかな」

「じゃあ、一緒に行きましょう」

意外に一人で準備するの大変で……」

そして、三人は執務室を後にした

## 響の想い

「やっと着いたね…。」

『そうだね、響ちゃん』

今回の戦いも大変だったもんね』

と吹雪が言う、その隣ではまだ怒っているのか暁がそつぽを向いているいつもなら、レディっぽくはないとからかうが、そんな気にはならない

『あ、司令官やみんながいますよ！』

おーい！』

吹雪は、そんな私達を気遣ってかよく話しかけてくる

そして、埠頭に着いた

「みんなお疲れ様だよ

響怪我の具合は？大丈夫？」

「大丈夫だよ…。」

「そっか、今不知火と神通が入っているから、出てきたら入ってくれ」

「X o p o 三 o」  
ハ ラ ショー

「それと雷と電心配してたぞ」

「響大丈夫!？」

「なのです!？」

と言つて、司令官の隣から飛び出て響に抱きつく二人

「大丈夫…でも、ちよつと抱き付かれるのは痛いかな…。」

「はわわ!ごめんなさい、なのです」

「暁も大丈夫みたいね

良かったわ!」

「…全然、大丈夫じゃないわよ」

「え?」

「響が大破した時、響なんて言つたと思う」

俯いていて、暁の表情は分からない

だが、声色で怒り心頭な様子は分かる

そんな暁を見たことない雷と電は、狼狽する

「さ、さあ?」

「なんて言つたのです?」

「え!ちよつと、あかつ…。」

思わず声を上げた私に暁は、怒鳴る

「響は、うるさい!!」

その叫びに周りの艦娘も異変に気がつく

「自分が盾になつても、みんなを守りたいって言ったのよ  
もし、沈むことになつてもいい……って……」

最後には、泣きながら話す

それを聞き、雷と電は青ざめ

吹雪と翔鶴、睦月以外の艦娘と司令官は驚く

「い、一体どういうことよ!」

そう言い、雷は私の胸座を取る

「響ちゃん何でそんな事言うのですポロポロ」

電：： がしっかりしてないからなのです?ポロポロ」

電は、その場で泣き崩れる

暁は電を慰めながら、涙目で睨みつけてくる

吹雪と睦月は、心配そうに見守り

翔鶴は、目で覚悟を決めなさいと訴えかける

「わ、私は、守りたいんだ」

電、雷、暁を…他のみんなを…

「助けられなくても仕方がないと自分自身を誤魔化して逃げたくないんだ…!!」  
神通と陽炎がこちらに来ているのが、見えたので

雷の手を振りほどき、船渠ドックに駆け込む

夕陽が辺りを赤く染める

私は、ドックの前でそろそろ出てくる人を待っていた

「響ちゃん、お風呂入渠気持ち良かった？」

響はビクツとした後、私の方を向く

「吹雪か…」

「なんだい…？」

「ちよつと、お話したくて

いいですか？」

「XoρoⅢoハラシヨ

で、何の話をする？」

「じゃあ、響ちゃんの想っていることにしよう」

「…分かった」

響の声が堅くなる

「私にも、響ちゃんの想っていること共感出来るよ

多分、他の艦娘も第六駆のみんなも

私達は、きつと守るために生まれてきたから」

「……」

「私だって、白雪ちゃんを守るために一人で軽巡洋艦に立ち向かったの、知っているでしょ?」

こくりと首を縦に振る響

「あの後、私も響みたいに悩んだよ

でも、訓練を頑張ってるみんなを見て思ったんだ

信じればいいって」

「…信じる?」

「そう、お互いに助け合うって方が正しいかも?」

そうすれば、誰も沈まずに済むんじゃないかなって思うんだ

それに、第六駆のみんなが怒っているのはきつと響ちゃんが悩んでいることを相談し

てくれなかったからというのもあると思うな」

「そう…かな…」

「きつと、そうだよ」

もう、すっかり辺りは暗くなっていた

食堂に着くと、響は三人が座っている席に駆けていった

「大丈夫だろうか」

「心配ですか？」

司令官

「まあ、それは…な

みんなには、仲良くしてほしいし

でも、俺に出来ることなんて…」

「そんなことはないですよ

そろそろ、食堂で晩御飯を食べましょうか」

「そうしよう」

食堂では、みんながワイワイ話している

「あ、司令官！」

隣どうですか？」

「司令官、これからご飯ですか？」

「ん…司令官忙しいの…？」

「自己紹介まだ、だったな

深雪だよ

よろしくな！」

「じゃあ、隣座ろっかな

忙しい訳じゃないよ

島の住人を守っていたらしいね

また、会いたいわって言ってたよ」

と言いつつ俺は吹雪の隣に座る

吹雪の反対に翔鶴が座る



「別に秘書艦だからって、隣に座らなくていいんだよ？」

「隣……駄目でしょうか……？」

「いや、駄目じゃないよ（汗）」

「そうだ、司令官！」

私頑張りました♪」

「私も頑張らせていただきました」

「ん、支援頑張った……」

「ちゃんと見てたよ」ナデナデ

「あー！」

雷も頑張ったのに！」

「鼻肩は良くないね……」

「なのです！」

「一人前のレディとして扱ってよね！」

「分かった、分かった」ナデナデ

いつものように仲良しな第六駆を見て安堵する  
消灯間際まで、食堂の灯りは消えることがなく  
鎮守府は、騒がしかった

## 新たな作戦

...

状況は、絶望的だった

だが、なんとか勝利した

こちらの損害は甚大だったが

そこで、俺の意識は途切れた

く十時間前く

第二執務室に十数名の艦娘召集された

「これから、我鎮守府発案の作戦が実施される

そこで、君たちの力を借りたい」

その間、俺のことは見ている真面目な艦娘もいたが半数以上が俺の後ろを見る

無理もない

膨大な量の書類が机を埋め尽くし、床にまで侵食していた

「あのー」

司令官、質問があるのですが…」

吹雪が手を上げる

「なんだ、吹雪」

「後ろにある大量の書類は一体…」

「昨日までは、なかったと思うのですが」

「昨日の秘書艦は私だったけど、書類は全部片付けたわ！」

「そう言い、胸を張る雷」

「実は、作戦に関係しているんだ」

みんなには…」

書類仕事を手伝って欲しいんだ」

「えっと…いいですけど…」

吹雪が戸惑いながらに返事をする

「なにそれ!?意味わかんない」

と声を張り上げる満潮

「これは… 艦娘の外出許可書…」

艦娘は外に出れないんじゃないかい…？」

「いや、私や提督、監視員同伴のもとなら大丈夫なんだ

ただ、基本許可がおりにくいんだが

そこはなんとかするよ」

「なるほど…」

艦娘一人につき何枚も…

それに、妖精さんの分や食材の要請…

一体何を司令官はするつもりなんだい…？」

「まあ、そこは内緒だよ

やりたくない娘は帰っていいから」

「私は、やります！」

「頑張りますね」

「Xoporo」

「一人前のレディは書類仕事も出来るんだから！」

「もーっと、私を頼っていいのよ？」

「司令官の命令であれば、いつでも書類仕事を手伝います」  
「やれます！」

「私の出番なのね！」

「私は、瑞鳳と共に頑張りますね」

「新生一航戦で、一緒だった翔鶴さんと頑張ります！」

「書類仕事はあまりしたことないけど、頑張るわ！」

皆、様々な返事をするが満潮も文句言いながらも残ってくれた

「瑞鳳と伊勢は、慣れない作業で大変かもしれないが、頑張ってくれ」

瑞鳳と伊勢は、空母レシピと戦艦レシピで建造したら、来てくれた

金剛もいるのだが…

「あれ？」

金剛さんは？」

「金剛なら、朝から

『テートクの書類仕事を手伝いマース!!』

とか言って張り切ってたから、多分もう提督の執務室で轟沈眠っているしてる」

「……………」

「みんな、晩御飯はもう食べたよな？」

では、フタマルマルマルから作戦開始だ！」

全員分の机は運んで置いたので早速、みんなは作業を開始する

吹雪は、白雪に助言しながら書類を片付けていく

暁と響は黙々と作業をし、雷は作業しながら電に時折教えている

朝潮は、姉妹艦に教えつつ書類を書き

神通は、駆逐艦娘に教え回っている

翔鶴は、慣れない瑞鳳と伊勢に教えている

俺は、そんな様子を見つつ、気合いを入れて書類の山に取り掛かった

く四時間後く

まだ、皆、眠そうではないけど、疲れているみたいだった

「あまり、無茶したら駄目だからな

お菓子と飲み物を用意したから、少し休憩してくれ」

といい、お菓子と飲み物を出す

書類は、半分近く片付いていて、これなら終わりそうだ

「司令官は、休憩しないのですか？」

「ん？」

「ああ、もう少ししたったら…な」

「嘘ですね、休憩しないつもりです」

「そんなことないって」

「いえ、絶対そうです」

「口開けてください」

「え？」

「え？じゃないです！」

「えっと、翔鶴助けて…」

「いいですけど…代わりに私のお菓子を食べて貰いますよ？」

「なんで!？」

「いいから、早く口開けてください!!」

「いや、だったら自分で食べ…カプ」

そう言っている時、口にお菓子を入れられる

「美味しいですか？」

「モグモグ…お、美味しいよ、吹雪」

恥ずかしさで、顔が真っ赤になっているだろうけど

なんとか、返事が出来た

「良かったです♪」

何故か、羨ましそうに俺の方を見る艦娘達

「司令官…これを…」

「私に頼っていいのよ？」

「お菓子を食べさせてあげるわ！」

「なのです」

「休憩も大切な任務です」

と瞬く間に囲まれる

神通や翔鶴達は、微笑んでいるだけで全然助けしてくれない

「笑ってないで、助けてくれえ」

俺が悲鳴をあげるのは、そう時間が掛からなかった

く五時間後く

カキカキ…ペラリ

カキカキ…ペラリ



カキカキ……パタンコロコロ

隣で書類を書く音が止まった

見ると翔鶴がうつらうつらしている

部屋を目渡す

第八駆は、仲良く執務室の空いた場所に敷かれた布団で寝ている

第六駆は、机で寝た姉妹艦達を響がなんとかソファーに誘導したが一緒に響も寝てしまった

陽炎達や睦月達も仲良くもう2つある布団で寝ている

吹雪や翔鶴達も漏れなく机で寝てしまったので、全員に毛布を掛け

俺は残り十数枚になった書類に取り掛かった

く一時間後く

俺は最後の書類を書き上げた

俺以外の全員が轟沈ぼうれいしてしまっただが……

これを事務棟に運んで……

そこで、俺は意識を失った

暫く経ち

コンコン

コンコン

二回ノックされたが、誰も返事をしない

ガチャ

「失礼します

全員寝てしまっていましたか

司令官も何も掛けずに寝て：。」

そういい、余っていた毛布を司令官に掛ける

「そう少し、寝かせておきましょう」

司令官に毛布を掛けた女性は、ドアをそつと閉めた

## 初めての演習

「駆逐艦吹雪、抜錨します！」

旗艦吹雪の掛け声で、六人の駆逐艦娘が抜錨する

司令官に手を振りながら、航行する

目標は、空母一駆逐艦五

単縦陣で、目標に接近する

『ここ、暗礁が沢山あるわよ？』

いいの？』

『はい、ここは暗礁が多いから監視が薄いと思いますから！』

最大戦速!!』

『え？』

暗礁に乗り上げちゃったら、どうするのよ！』

『普段訓練してるから大丈夫だよ！』

『はあ、これだから鬼教官は…』

『なんか言った、暁ちゃん？』ニコリ

『な、なんでもないです』

暗礁を回避しながら、海原を駆け抜ける

『… 敵機発見…』

単機なので、偵察機だと推測する…』

『目標敵偵察機！』

対空戦闘用意!!』

「命中させちゃいます♪」

改造して、手に入れた10cm連装高角砲が火を噴く

二斉射目で電が命中させる

退避する偵察機を見て響は言った

『電… また、対空戦闘上手くなった…？』

「そんなことないのです♪」

『暗礁がある海域から抜け次第輪形陣に変更します！』

『『『了解（なのです）！』『』』』』

『10時から11時の方向、敵編隊接近中よ!』

『了解です!』

対空戦闘用意!』

虫の羽ばたくような嫌な音…ではなく

軽快なエンジン音がする

『つてー!』

総数70機以上が編隊を組んで突撃隊形を作る

艦爆は上昇し、艦攻は緩降下する

そして、小隊ごとに分かれ四方八方から突破を図る

『撃って!撃って!』

『暁、危ない…!!』

『そういう、響も左舷から艦攻!』

全部… 全部… オトス

雷を狙っていた艦爆を急降下爆撃入る直前に弾幕を張り隊を乱れさせる

右舷から、私を狙ってきた艦攻に高角砲の砲弾と機銃弾を叩きつけ、2機撃墜判定されて艦攻は攻撃を断念する

次はどれにしよう?

旗艦の吹雪を狙ってる爆雷連合？

それとも、私を隙あらば攻撃しようとしている艦爆？

『…ずま？』

電!』

「はわわ!」

雷ちゃん、どうしたのです?」

『いや、電がいつもはしないような表情だったから…』

大丈夫?』

「大丈夫なのです」

『そう?』

ならいいんだけど!』

そう言いながら、艦爆に対空砲火を食らわせる

えつと…何を考えていたのです?

思い出せない…ボートしてたのかも

うう、すっかりしないとまた響ちちゃんに心配されちゃうのです… ショボーン

気がつくと対空戦闘は、終わっていた

雷と白雪に中破判定

響と暁に小破判定の旗があがる

吹雪と私は、損害軽微カスダメだったみたい

白雪ちゃんは、魚雷を受けてしまったみたいだけど、戦闘に支障はないらしいので、良かったのです

『敵の第二波を食らう前に、敵艦隊に突撃します！』

暫くすると、敵艦隊が見える

『…翔鶴型航空母艦一、陽炎型駆逐艦三、朝潮型駆逐艦二だね…』

おかしいな…

てつきり、駆逐艦で足止めして艦載機で止めを差してくると思っていたけど…』

そして、砲雷撃戦が始まる

敵艦隊の先頭を行く空母は、8基16門ある高角砲と12基ある25mm三連装機銃を乱射する

『なにょ！』

空母が先頭に立って砲撃するなんて、聞いたことがないわ！』

暁が叫ぶ

一体、翔鶴さんは何をする気なのです!?

確かに砲の数はあるが、もともと対艦を想定していないため砲撃は全然当たらない

もしかして…

「吹雪ちゃん、もしかして雷撃を仕掛けてくるつもりかも…」  
と言いつけかけた時

『敵艦隊の方向から、雷撃多数!!』

酸素魚雷もあります!』

白雪の悲鳴が上がり

白雪、雷に撃沈を示す旗があがる

他にも暁は大破、吹雪にも中破を示す旗があがる

運悪く、魚雷の群れに真正面から突っ込んでしまったのだ

そこから、四隻で奮闘するも

空母一隻を小破

駆逐艦一隻撃沈

駆逐艦一隻中破

駆逐艦二隻小破するのが限界で

こちらは、暁、白雪、雷、響撃沈判定

吹雪、私が大破判定で

大敗だった



『うーん、負けちゃったね』

「演習だけど、悔しいのです」

『それにしても、翔鶴さんが困になって遠距離雷撃って無茶すぎよ！もう』

『翔鶴さんの作戦勝ちだね… 流石翔鶴さん…』

『今回の演習で活躍して、もーっと司令官に頼って貰おうと思っていたのに！』

『また、明日から訓練が厳しくなりそうですね』

『そうだね！』

強くなるには、訓練だよ！』キラキラ

そんな会話をしながら、吹雪達は帰投した

演習についての書類をまとめて、晩御飯を食べようと執務室を出ると、提督にばったり会ったから、一緒に食堂に行った

食堂で席に座り、メニューを選ぶ

近くでは、響が一人で食事を取っていたのだが、違和感を感じ、話し掛けようとしたらその前に提督に話し掛けられた

「そういえば、艦娘についてや深海棲艦について何も見ていなかったが、こちらの世界に来る前に知っていたのか？」

「ええ、まあ

俺がいた世界では、知っている人はいますよ」

流石にゲームがあつたので、なんていえない

「なるほど」

「… 深海棲艦についても、色々知っているってことなのか？」

「分からないことも多いですが」

資料では載ってませんが、姫級はいるのですか？」

「… そこまで、知っているのか」

「そうですね」

戦艦棲姫に泊地棲姫、装甲空母鬼、飛行場姫、離島棲鬼

護衛要塞、レ級、駆逐棲姫…」

「ちよつと、待ってくれ」

飛行場姫以外、人類はそんな奴ら確認してない

それは、本当か!？」

「俺の世界（のゲーム）と同じならいるはずですよ」

近くにいた響も驚愕している

盗み聞きは良くないなあ

後で、お仕置きだね

提督は、それ以降黙ってしまった

## 不思議なこと

いつの間にか、近くにいた響が居なくなっていたので、明日の秘書艦にして書類仕事をたくさんやらせてお仕置きをするという俺の計画は頓挫した

とりあえず、吹雪に明日の秘書艦を頼んで

自室にある風呂に入っ、出てきてから部屋で提督の言っていたことを思い出す  
：： つまり、この世界では俺が知っている姫級がいるか分からないのか

まあ、飛行場姫いるならいそうだが：：

それにしても、あの噂は本当なのかな？と独り言を言いながら布団に入り眠った  
そんな様子を、窓から覗いている人影がいることも知らずに

「司令官！

おはようございます！」

「：： おはよー

いつも、元気だよね、吹雪」

「それは、毎日楽しいからです！」

あ、簡単な朝食なら用意出来ますけど、食べますか？」

「頂こうかな」

吹雪の料理美味しいし」

そういい、吹雪の作る料理を暫く待っていた

「そういえば、司令官

酒保の品揃えが良くなったって明石さんが言っていました！」

「じゃあ、見に行こっか」

「はい！」

駄弁りながら、酒保に行き

どんなものがあるか見てみる

日用品や雑誌各種、本……小説、漫画、図鑑……等々

他にも、お菓子、食器、衣服、トランプやUNOなんかもある

お、この世界にもTRPGが！

こつちには、人狼：： 久しぶりにやりたいなあ

「：：で、響一体何をやっているんだ？」

「買い物だよ：： 司令官」

「手に持っている瓶の中身はなんだね？」

「：：：： ラムネだよ」

「俺の目にはウオツカって書いてあるように見えるんだが？」

「気のせいじゃないかな：：」

「気のせいじゃねえよ!!」

明石、法律的には大丈夫なの？」

「大丈夫ですね」

「だ、そうだよ：：」

司令官?」ドヤア

「どや顔止めろ

全く、飲みすぎんなよ?」

「大丈夫：：」

私は、あまり飲まない」

その時、第六駆のみんなが来る

そして、響はウオツカをスツと隠し俺にウインクする

「はあ、程々にしろよ」

「X o p o m o」

第六駆のみんなは響に何を買ったのと質問攻めしている

「司令官、響ちゃん何をするつもり何ですか？」

不思議そうに吹雪が尋ねる

「さあな」

ちゃんと答えなかったからか、吹雪はちよつと不機嫌そうだった

俺も諸々を買って、執務室に戻った

いつも、通り執務して

晩御飯の時、間宮に準備が予定通り進んでいるか、確認し

執務室に戻る

そして、今日新たに着任した川内と黒潮の艦娘外出許可書を書く

… もう、マルヒトマルマルか

コンコン

こんな時間に？誰だろ？

「どうぞで」

「失礼するよ…」

響がドアを開けて入ってくる

何故か、一瞬ソクツとする

「響か」

もう、消灯の時間はとっくに過ぎてるぞ

暁達が心配するよ」

「大丈夫、大丈夫…」

いや、大丈夫じゃないだろ

「んで、なんの用なんだ？」

「ちよつと、話がしたいんだ…」

外に出ないかい…？」

「お、もしかして愛の告白か？」

「寝言は寝てから言うものだよ…？」



うわあ、辛辣だな

「うう、この季節だとちよつと冷えるな」

「そうだね…」

「じゃ、これ」

マフラーを響の首に巻く

「暖かいだろ？」

「え、でも…」

「いいよ、明日、響秘書艦だろ？」

その時に返してくれればいいし」

響は、俯いてぶつぶつなんか言ってる

可愛くて笑っていると

「わ、笑うな…！」

「だって、可愛いんだもん」

「調子狂うな…」

本題に入るよ……!!」

ちよつと、不機嫌そうに言う

「はいはい」

「昨日……食堂で言っていたこと……本当なのかい……?」

「ああ、本当だ……」

「……」

司令官、司令官は私達艦娘が轟沈したら、どうなると思う?」

「なんだ、唐突に

うーん

考えたことなかったなあ

噂なら聞いたことがあるけど」

「噂……?」

「でも、あんまりいい噂じゃないよ?」

「気になるね」

「いいか?」

警告したからな?

俺のいた世界では、深海棲艦になるんじゃないかって言われてた

どうだ？

いい気分しないだろ？」

「……そう……だね」

「だけど、まあ、俺の鎮守府所属の艦娘は誰一人轟沈させるつもりはないから、安心してくれ！」

そう、暗い雰囲気吹き飛ばすように笑いかける

彼女は、冷たい色を放つ目を見開き俺を見つめる

俺も見つめ返す

そして、

「ありがとう……」

とだけ言った

「どういたしまして」

「じゃあ、私帰るから……」

「ああ、気をつけて」

「……この所属だったら、幸せだったろうに……」ボソツ

残念ながら、彼女の最後の言葉は踵を返して執務室に戻る俺には届かなかった

「… かん

司令官…！」

ゆさゆさと揺すられ、目を覚ます

隣には、響が

俺は、執務室の机で眠ってしまったようだ

「おはよ

そうだ、響、マフラーは？」

「マフラー？何の話かな？」

「いや、昨日夜遅くにさ… 大体、マルヒトマルマルくらいかな

響が執務室に訪ねてきて」

「確かに、私は夜遅くまで起きられるけど…

昨日は、第六巻みんなと寝てたよ…」

「んー

おかしいな

確かに来たんだけどな」

「全く、しつかりしてよ、司令官……」

そう呆れたように話す響の目は暖かく優しい目だった

## 紅葉の下で

響に起こされ、食堂に向かう

艦娘全員が揃っているのを確認すると、本日の作戦について発表した

「今日、みんなで紅葉を見に行きたいと思う！」

艦娘達はざわめく

「まず、みんなで持ち物を持ちバスで目的地まで行く

今回、バスは貸し切ったから何回かに別れて全員で行くから

響の配る紙を見て、何を持つか、何回目のバスに乗るか覚えといてくれ」

吹雪が手を挙げたので、質問を促す

「目的地では、一体何をするのでですか？」

「まずは、紅葉を楽しんでから、食事の準備かな

各担当を決めておいたから発表する

食事担当 間宮

設営担当 翔鶴

監視担当 吹雪

この三人は後で、別途指示を出すから会議室に来て  
ちなみに、監視担当って勝手に誰かが居なくなったりしないようにだからね」

「了解！」

「あ、後、今日の出撃、演習は勿論ないから

出発まで、のんびりしててね」

みんな、バスを降りると荷物を置いて、山道を通る

いつも、海にいる艦娘達は赤や黄色に染まった葉を見て感動したり、興奮している  
「あ、子日山道から外れては駄目ですよ」

神通が葉を取ろうと山道を外れた子日に注意する

「司令官、紅葉って綺麗ですね！」

感嘆といった感じで、吹雪が言う

「そうだね

桜の時期も素敵だけど、紅葉の時期もいいよな」

うんうん、と頷く

後ろで、五月雨が落ちてきている赤く染まった葉を取ろうとし… 足元の石に足を引っかけて、転ぶ

「お、おい!?

大丈夫?」

「うう、またドジしちゃった… (涙目)」

「泣かないで、ほら人はたまに失敗するじゃないか」

あたふたしている司令官の後ろでは、瑞鳳と伊勢が話していた

「この葉っぱ、卵焼きと添えたらいいと思うんだけど

どうかなあ?」

「ふーん?

いいんじゃない?

葉っぱの色が映えそうだし」

「卵焼きも紅葉もいいけど、やっぱり夜戦が一番だよね」

夜戦したいな」

「もう、姉さん

この前、司令官が川内のため特別に夜戦演習を行おうって言っていたの、忘れたんですか?」



呆れたように、神通が突っ込む

「そうなんだけどね」

「楽しみだなく夜戦演習！」

「テートク！」

「今度の夜戦演習、私から目を離しちゃNoーなんだからネ！」

「分かりました、楽しみにしています」

「Teatimeのためのスコーンも用意しまシタ！」

「後で、他の艦娘とたくさんお話しまショウ!!」

「そんな話をしながら艦娘達は、紅葉を楽しんだ後

翔鶴の的確な指示の下設営を行い

間宮達の食事の準備も瞬く間に終わらせた

「じゃあ、みんなのこれからの活躍と無事を祈って

いただきます！」

『いただきます!!』

「近くにあつた煮付け物を食べる

正直、煮付け物はあまり好きではないけど、凄く美味しい

美味し過ぎて、もう好き嫌いしませんと思つた程だ

隣の唐揚げを食べる

うわ！サクサクでジューシーでしつこすぎない

ご飯が何杯もいける！

そうして、いつも以上に食べ過ぎてしまった

食べ終わった駆逐艦娘が集まって何かしている

「ん？」

何してるんだ？」

「あ、司令官！

実はですね

とらんぷというのを買ったのですが、遊び方が分からなくて…」

「了解」

じゃあ、俺が教えるよ

まずは、ババ抜きかな？」

「ババ抜き…？」

司令官、ここにお婆さんはいないよ…？」

「ババ抜きって言うのは、ジョーカーと書いてあるカードを抜いてね（以下略）」

「分かりました♪」

司令官も一緒にやりましょう」

「分かったから、みんなで引つ張るなよ」

その後、ババ抜き、ジジ抜き、七並べ、大富豪、スピードをやった

それ以外にも、俺が買ったUNOや人狼をやった

ただ、電がいる時は人狼をやるのを止めようと俺と他の駆逐艦娘は肝に銘じた

暫く遊んでいると

俺は、ふと気がついた

あれ？第六駆がない

席を立つとちよつと離れた所に、第六駆の面々がいたのだが……様子がおかしい

そして、俺のことは見ると暁がフラリと立ち上がる

「お、おい

大丈夫か？」

俺の所に来ると暁は倒れ込む

俺は慌てて抱き上げる

「し、司令官……暁……」

一人前のレディになれた……よね……」

暁の顔は真っ赤で、焦点の定まらない目を俺に向ける

何のことか全く分からない俺は

「なれたんじゃないか？」

と答える

「やった：：これで一人前のレディに：：スヨスヨ」

「え？」

ちよつと暁!?

寝ちゃダメだよ!

第六駆のみんなも：：つてうわあ!?!」

いつの間にか、第六駆の三人が俺の前に座っていた

真正面の響の手にはウオツカが：：

この瞬間すべてを察した

そして、このままだと俺も餌食になると

助けを求めるため、提督の方を向く

が、すでに別動隊が提督を酔いつぶれさせていた

重巡洋艦の那智だ

戦艦レシピで建造したら、来てくれた艦娘だ

もう、提督は酔いつぶれているのにまだ、絡んでいる

その近くには、金剛と神通が轟沈酔いつぶれていたしていた

きつと、那智を止めようとして、餌食になってしまったのだろう

そして、那智を止めようとして今度は古鷹が犠牲になる

古鷹も同じく戦艦レシピで、来てくれた艦娘だ

「司令官…」

この美味しいウオツカを呑んで欲しいんだ…」

響の声で現実に引き戻される

「あ、あのな

お酒には、年齢制限が…」

「大日本共和国は、18からよ！

問題ないわ！」

雷が赤らめた顔で（俺にとって）絶望的な事実を教える

誰だよ！18に決めたやつ!!心の中で罵る

「いや、でも、俺お酒呑んだことないからな

ちよつと、遠慮したいんだよ」

「誰にでも、初めてはあるのです

電も初めて呑んだばかりなのです

だから大丈夫なのです」

電は、微笑み俺の腕を掴みながら有無を言わせない雰囲気と言う  
だ、誰か…… 助けて（涙）

「な、何しているんですか!？」

そこに吹雪がやってくる

「た、助かった

吹雪、響達を止めてくれ！」

「分かりました、司令官！」

特型駆逐艦吹雪型一番か…… カブ!？」

響がウオツカの瓶を吹雪の口に入れてダイレクトに飲ませる

ムグ…… ゴボ…… ゴク…… ゴク

吹雪の顔が瞬く間に赤くなる

「吹雪、美味しいかい……?」

「う…… うう……」

吹雪は、そのまま倒れてしまった

「吹雪！」

吹雪、大丈夫か!？」

俺は吹雪を介抱する

「吹雪！」

しっかりしろ!!

おい！」

「し、司令官……」

私は……大丈夫です……」

弱々しく、吹雪は返事をする

「……第六駆の響、雷、電……明日マルハチマルマルに執務室に來い」

「え、えつと……司令官……?」

「し、司令官、怒っているの?」

「な、なのです（涙）」

今まで、聞いたことのない俺の声音に驚く響達

「聞こえなかったか?」

「わ、わかった……」

「うう……司令官、ごめんなさい」

「ごめんなさいなのです」

反省するようにシユンとする

その様子に思わず笑ってしまう

「あー！」

騙したのね！」

「ごめん、ごめん

でも、無理やり飲ませるのはよくないよ？」

「「はーい」」

「いい返事だ

さて、そろそろ帰る準備をしようか」

吹雪を抱き上げて運び、椅子に座らせる

妖精さん達にも手伝って貰い片付けて、鎮守府へ帰った

色々あったけど、みんな楽しんでくれたみたいで苦労した甲斐があったかな



## 希望を失った少女の話

僕は、気がつくとも横須賀の海に立っていた

周りには、初めてみるが何故か懐かしい少女達がいた

お互いに抱き合っていたりもする

陸を見ると、軍人らしき人が威風堂々とした海面に立つ女性と話している……

そこで、目が覚める

今日は、出撃予定があつたなと思いつつ、夢の内容を思い出す

初めて、人類と艦娘が出会った瞬間……僕はそれに立ち会っていた

食堂に入り質素な食事を取る

「やあ、時雨……」

今日もよろしく……」

食堂全体が重々しい雰囲気の中、目の前のクールそうな少女は努めて明るい声を出す

「おはよう、ヴェル

今日もカムラン半島だよね？」

目の前の少女の名は ヴェールヌイ Бернштейн

暁型二番艦の響がロシアに引き渡された時に新たに与えられた名だ

「私は、ヴェルって呼ぶなら、響って呼んでくれた方が嬉しいんだけど…」

カムランは、今瀬戸際だからね…」

「そうだね

今日も頑張ろう」

「ヴェル！ヴェル!!」

しっかりして！ヴェル!!」

目の前でぐったりとしているヴェル

僕を敵艦爆の爆弾から庇って大破してしまったのだ

『提督！

撤退を進言します

В<sup>ヴェ</sup>р<sup>エル</sup>н<sup>ス</sup>ы<sup>イ</sup>が大破した以外にも全艦が小中破しています

このまま、敵主力艦隊に遭遇すれば大打撃を受けるのはこっちです！』

『何言ってるんだ？』

駆逐艦を盾にして戦えばいいだろ

幸い、空母や戦艦は中破してないんだ

進軍しろ』

『ツ!?!』

その後提督との無線を終えた後、連合艦隊旗艦の艦娘は指示をする

『ヴェルちゃんは、後ろへ下げます

時雨ちゃんは、ヴェルちゃんの援護を

では、敵主力艦隊を強襲します』

暫くすると放っていた偵察機からの報告があつた

『我敵艦隊見ゆ

駆逐艦多数、軽巡洋艦15、重巡洋艦10、戦艦5、空母8、正体不明1』

艦隊は、驚愕した

敵主力艦隊はこんなにまだ戦力を残していたのだ

『!?!』

直ちに撤退する

『まだ、見つかっていないなら、損害なく撤退が…』

『て、敵編隊発見！』

数、300以上！』

『空母は直ちに直掩機を発艦せよ！』

『対空戦闘用意!!』

僕は、ヴェルを抱えながら上空を睨み付けるしかなかった

「はあ… はあ… げほお…」

服は原形を留めない程破れ、主砲はひん曲がり、魚雷発射管は根こそぎ抜け落ちていた

抱えるヴェル以外に艦娘は見当たらない

無線で、流れていた悲鳴や怒号も今は聞こえない

無線が壊れたのか… それとも…

嫌な予感、今まで何回も目の当たりにした光景がフラッシュバックする  
し、ぐれ

泣いているのかい…？」

「な、泣いてなんかないよ」

「…もう、私駄目…みたいだ…」

「ドックに入れば大丈夫だよ!!」

何を言ってるの!?!」

「時雨、本当は分かっているでしょ…？」

私の艀装は完全に浮力を失なってる

しかも、ここは敵勢力の海域…

このままじゃ、時雨も沈んじゃう

だから… さようなら」

時雨を突き放したヴェールヌイは海面に吸い込まれるように沈んでく

「待って!!」

嫌だ、雪風も響もなんで僕を置いてくの!!

待って、待ってよ!!」

小さな体は、暗闇に溶けるように見えなくなつた

取り残された時雨は、泣きながらただただ真つ直ぐ航海した

偶然、遠征中の艦娘に助けられ元の鎮守府に戻ったが、提督に  
「何故、お前だけ帰ってきた」

「お前に補給する資源はない」  
と罵られ

時雨は、自室に籠った

出撃や遠征、演習は勿論

食事すら、取らなくなっていた

そんな時雨を提督は、いらないと判断したのか

時雨には、転属命令が下り

護衛の艦娘とともに転属先の鎮守府へ向かった

## 製油所地帯を防衛せよ！ 1

夜戦演習が行われた数日後

吹雪は、秘書艦として執務室にいた

司令官は、黙々と書類を書く

私は、その中で鎮守府内で保存する物をファイリングする  
「ふう…」

やっと終わった〜」

と司令官が伸びをしながら言う

現在は、ヒトヒトサンマル

「そろそろお昼ですね♪」

食堂に行きましよう」

そう言つて、司令官の腕を掴む

「分かったから、引っ張るなつて」

プルプルプル

執務室に置いてある、電話が鳴る

「珍しいな…」

「はい、なんでしょうか？」

「…！」

「……？」

「え!？」

「はい、分かりました」

「至急準備します」

「…」

「…」

「はい、期待答えられるよう最善を尽くします」

「ガチャと司令官は受話器を置く」

「あの、何があったのですか？」

「近くの製油所地帯が敵の強襲を受けた」

「幸い被害は軽微だったようだが、至急救援を求めてる」

「放送で、至急みんなを食堂に集める」



「放送を聞いたから、事情は分かると思うが

近くの製油所地帯が襲撃を受けた

これから、直ちに救援に向かう

敵がどのような編成か分からないため、機動部隊と水上打撃部隊二つの艦隊を編成する

機動部隊

旗艦翔鶴

瑞鳳

暁

響

雷

電

水上打撃部隊

旗艦吹雪

金剛

伊勢

那智

古鷹

白雪

以上だ

それに今回も船団護衛を行って貰う

旗艦神通

陽炎

不知火

舞風

深雪

初雪

旗艦川内

阿武隈

朝潮

荒潮

満潮

大潮

船団が二つあるため

護衛艦隊も二つだ」

翔鶴が手を上げ発言する

「攻略艦隊は、連合艦隊ということですか？」

「いや、違う別々の艦隊だ

敵が機動部隊なら、機動部隊が戦い弱った所を水上打撃部隊で殲滅

逆に水上打撃部隊なら、水上打撃部隊と殴り合っている間に機動部隊が空襲する等の  
連携をしてほしい

細かい所は、話し合って詰めてくれ」

次は神通が手を上げる

「護衛する船団には、何を積んでいるのですか？」

「医療器具関係や食料らしい

どうやら、負傷者がいるらしいんだが、倉庫や食料庫が吹き飛ばされたようだね」

吹雪も手を上げる

「あの昼御飯は、どうすれば？」

「それは、間宮に頼んであるのだけど…」

「戦闘糧食を作りましたから、これを持って行ってください」

「だ、そうだ

出撃は、ヒトサンマルマルを予定している  
そうだ

装備も一部の艦娘は変えておいてくれ  
護衛艦隊の神通と川内は水偵を積んで

随伴艦は、対潜装備や対空装備を積んでくれ  
後…

翔鶴の97艦攻を天山に一部替えてくれ」

「あの… その天山を瑞鳳ちゃんに渡したいのですが」

「うーん…

きつと考えがあつてのことなんだよね？」

「はい、そうです」

翔鶴が、真剣な眼差しで見てる

「そ、そうか、ならいいよ」

ちよつと、恥ずかしくなつて俺は目を逸らしながら、そう返事をする  
その仕草に翔鶴が落ち込むのを俺は気が付けなかった

## 製油所地帯を防衛せよ！ 2

機動部隊と水上打撃部隊は、別々の敵前衛艦隊と遭遇し戦闘をしていた

旗艦であるへ級 flagship は僚艦が撃沈するなか、敵空母を侮っていた

新鋭機である、彗星や天山が旧式の97艦攻より先に攻撃して来たからだ

随伴艦は、駆逐艦二隻撃沈、駆逐艦一隻中破、軽巡洋艦一隻中破していたが20機程の旧式機の攻撃などしのぎきれると判断した

三、四機程の小隊が二隊一組となつて四方から突撃してくる

三組いずれも、片方の隊が超低空飛行して、もう片方の隊が低空飛行を行っている

へ級は、低空飛行している隊に弾幕を張る

だが、低空飛行している隊はなかなか墜落しない

低空飛行している隊は、機体を振り、速度を遅くしたり速くしたりして深海棲艦を幻惑していた

そして、十数機が魚雷を投下する

へ級は、迫ってくる魚雷に畏怖しながらもニヤリとした表情は崩さなかった

『我敵機動部隊二遭遇ス』

その後、敵機動部隊の編成を伝えると前衛艦隊からの無線は途切れた

敵機動部隊の編成は

翔鶴型航空母艦一

祥鳳型航空母艦一

暁型駆逐艦四

空母という大物が二隻もいて、仕留めがいがあると言わんばかりのル級は艦隊に指示をする

『各艦隊状況を報告せよ』

「こちら、機動部隊旗艦翔鶴

艦載機を失ったこと以外特に損害はありません」

『こちら、水上打撃部隊旗艦吹雪』

『私が小破、那智が損害軽微です』

『了解した』

『進軍してくれ』

『了解！』

いつもの二段索敵で翔鶴隊第二艦攻隊は索敵をしていた

索敵範囲の一番端を担当する第二艦攻隊十二番機が、厚い雲の隙間から見える蒼い海に黒い塊を発見する

十二番機は、雲の下まで降下する

黒い塊が細部しつかり見えてくる

打電しようとしていた97艦攻は急に機体を振りどんどん降下し、時間を稼ごうとする

後ろからは、二機の異形の艦載機が97艦攻を追い回す

97艦攻が戦闘機に気が付くのが遅かったこともあり、打電する前に、97艦攻は海

の藻屑となった

(∴ おかしいですね

十二番機が定時連絡をしてきません

機体不良?あるいは∴)

「第六駆の皆さん、そろそろ敵主力艦隊に遭遇してもおかしくありません

警戒を厳としてください」

「分かっているわ!」

「了解∴」

「了解よ?」

「気を付けるのです」

そう返事をしつつも、第六駆の四人は本人も気が付かないうちに大なり小なり油断していた

初戦で、完全勝利出来たことや頼れる翔鶴と一緒にいたからだ



マフラーを巻いた少女は、滑るように洋上を進んでいた  
懐かしの鎮守府へ親友を迎えに行くのだ

きつと、泣いて喜ぶんだろ？

泣いてないよって言って

なんて最初は言おう

うーん

やっぱり、置いていってごめんね…？

かな

## 製油所地帯を防衛せよ! 3

ぼおー

汽笛が一齐に鳴る

艦娘が複縦陣で船団を挟んで護衛する

首に掛けている懐中時計の時間を確認する

五分後に、取り舵ですわね……

現在船団は、之字運動を行っていた

之字運動は、吹雪達が砲弾を回避するために使っていたが護衛の時にも行う

なぜなら、船団を襲う狼……潜水艦を警戒してだ

潜水艦は、船団を待ち伏せて船団の速度から未来位置に魚雷を打ち込む

だから、未来位置を読ませないように之字運動を行う

船団と駆逐艦娘に信号灯で信号を送った

暫くすると

『了解』

を意味する信号が返ってきた

「ごぼあ…」

九三式水中聴音機パツシブ・ソッナーから器に水が満たされるような音が聞こえる

初雪は、座学で習ったことを思い出す

これは、潜水艦が雷撃する時に聞こえる音！

「五時の方向に感あり、魚雷発射管への注水音だと思ふ…」

「了解、初雪は敵潜水艦の位置を確認！

深雪は、五時の方向に爆雷投下」

『『了解！』』

「陽炎と不知火は、十一時の方向を警戒して」

そして、私は三式水中探信儀アックテイブ・ソナーを起動する

『深雪スペシャル！いっけー!!』

暫くたって、ズウウウウンという音が聞こえる

まだ、三式水中探信儀は何も映し出さない

調子が悪いのかもしれない

『んー』

逃がしちやたか？

あ、重油が浮いて来たぜ』

「なら、撃破確実ですね

元の位置に戻ってください」

『!!』

八時の方向に魚雷！』

舞風が悲鳴をあげる

挟み撃ち……ですか!?

急いで、船団に信号を送る

『魚雷が接近中

防護態勢二入レ!』

そして、ボーンという音と共に火の手があがる

命中したのは、二隻のうち一隻が引火し炎上

もう一隻は、機関部に命中し、機関が停止した

炎上した輸送船は、消火出来ないと判断し船員は脱出し始める

「舞風と初雪は、船員を救助して！」

不知火と深雪は、舞風と初雪の近くを重点的に警戒して」

『『『了解！』』』』

「第二船団へ」

こちら、第一船団

我潜水艦の待ち伏せを受ける

進路を変更せよ」

『了解』

第二船団の護衛艦娘は、第一船団の艦娘に比べて対潜装備が整っていない

対潜装備が不足しているからだ

「機関が停止したりらんか丸は、艦娘の曳航が可能か初雪と深雪に報告してください

初雪、深雪はリランカ丸周辺の警戒、曳航が可能なら深雪が曳航してください

舞風は、魚雷撃った潜水艦に攻撃を」

船団に信号を送る

『損傷ヲ受ケタ リランカ丸ハ分離スル』

ソノ他ノ輸送船ハ、高知丸ノ船員ヲ救助次第ソノママ航行セヨ』

非情に思ふかもしれないが、輸送船一隻のために船団全体を危険に晒す訳にはいかな

い

『先ニ行ク、向コウデー杯飲モウ』

『後カラ行ク、先ニ飲ムベカラズ』

船団から取り残される輸送船の運命は風前の灯火だ

潜水艦からのたつた一本の魚雷を受けただけで海の藻屑と化す

一隻の輸送船が生き残れるかは、運任せだった

## 製油所地帯を防衛せよ！ 4

「やっぱり、戦艦は強いですね！」

私は、さっきの戦いを見て感動したように後ろにいる二人に話しかける  
『そうでしょ？』

6基12門あるからね

鎮守府に戻ったら、たっぷり見せてあげる！」

『デシヨー』

ブツキー！

この火力でテートクのハートを射ぬくのデース！」

「こ、金剛さん

ブツキーって呼ぶの止めてください!!

司令官に聞かれたら、絶対にからかつてくるじゃないですか！」

『ん？』

呼んだ？』

「呼んでません!!」

『あ、はい』シヨボーン

「あ、い、いえ」

呼んでないわけでもないかなって…」

『あ、そうなの？』

で、用事は何？ブツキー』

「あ！」

ブツキー言わないでください!!」

『あはは

吹雪は、可愛いなあ』

「もう、からかわないでください!」

『ごめん、ごめん

拗ねないでよ、ブツキー!』

「ふん」

『帰ってきたら、間宮奢るから…ね?』

「もう、仕方がないですね」

『本当、司令官とブツキーは、仲がいいネー』

『「そんなことないです(よ)!!」』



その時、機動部隊から無線が来る

『こちら、機動部隊、代理旗艦の暁よ！』

旗艦の翔鶴は敵の奇襲を受けて大破してしまつて…

水上打撃部隊に至急救援を求めろわ！』

幼くも緊迫した声が無線から聞こえる

「な!？」

し、司令官!」

『直ちに、救援に向かつてくれ』

俺は、機動部隊の状況を確認する』

『『『『『了解!』』』』』』

く十数分前く

異形の形をした艦載機は、奇襲を行うため雲の隙間を縫うように飛行し、艦娘達の機動部隊に接近していた

練度が低いためか、きちんと警戒していれば第六駆の誰かが気が付くはずだったのだが、残念ながら第六駆の誰も気が付くことはなかった

うーん…

異常はないのですー

電は水平線を見るも何にもいない

『敵はいない?』

暁が私達に尋ねる

「いないのですー」

『いないね…』

『いないわ!』

『引き続き警戒してね?』

翔鶴が指示を出す

『敵編隊発見』

哨戒機から、報告があがる

え!?

電は、慌てて見渡す

ーいた!

もう、あんなに接近してるのです!?

もう、艦爆は翔鶴に攻撃を開始している… もう万事休す

わたわたしながらも電は、単艦で対空戦闘を行う

8機の敵艦爆の2機を落とすが、他の艦爆は爆弾を投下する

翔鶴の周りに水柱と翔鶴に赤い煌めきが生じる

『翔鶴さん!!』

暁が叫ぶ

『十時に敵艦攻…!』

数、4…』

どうやら、警戒していた戦闘機が独断で攻撃隊を攻撃したようで、艦攻の数は少なく編隊もバラバラになっている

墜ちろ、おちろ、オチロ!

怒り、憎しみ… 何故かそんな感情が沸き上がる

本当は、敵艦も助けたいのに…

何故か敵機を墜とし、敵艦を沈めたい衝動が抑えられない

そんな感情に疑問を抱きつつも、電は衝動のままに砲弾を放ち敵機を墜とす  
その頃には、みんなも態勢を立て直し四人で対空戦闘を、行う

艦攻は、全滅し攻撃は終了した

瑞鳳は、翔鶴に必死に呼び掛ける

だが、翔鶴は目を覚まさない

水平線でチカチカと閃光が煌めく

『…戦艦だ…』

この射程は、戦艦以外あり得ない…』

『戦艦…厄介ね』

翔鶴さんが指揮を取れないから

この暁が代理旗艦を務めるわ』

『ん…分かった…』

『分かったわ』

「なのです」

『私は、あまり実戦経験がないからね』

『暁ちゃんに任せるわね』

『第六駆は、戦艦の足止め

瑞鳳さんは、翔鶴さんを護衛して』

『『『了解（なのです）！』』』』

電は、自身に渦巻く感情を出さないように努めていたが、これから戦うことを悦んでいた

## 製油所地帯を防衛せよ! 5

私は、靡くマフラーを押さええながら、埠頭から陸に上がる

多くの艦娘が、戦友の帰還を祈り、戦友のために帰還を誓う、思い出深い場所  
同時にここで待つ艦娘に戦友の轟沈が知らされる悲しみを生む場所でもあった

だが、今の私には悲しみ暮れることも感慨深くなることもない

多くの艦娘が遠征か出撃に出ているのか鎮守府は閑散としていて、艦娘は見当たらない  
かった

時たま、ちよこまかと歩いている妖精にじつと見られながらも私は、一直線に執務室  
へ向かう

一呼吸し、ちゃんと駆逐艦響の格好をしているか確認すると

感情を押し殺しながら、執務室のドアをノックする

コンコン

「入れ」

中から男性の声が聞こえ、少女は執務室のドアを開ける

「失礼するよ...」

「誰だ、お前は

うちの鎮守府に駆逐艦響はいないんだが」

「気が付くと海に立っただけで、なんとかここまで辿りついて…」

「そうか、海域出か」

「私は、どういう扱いになるんだい…？」

「この鎮守府着任でいいだろう

これからよろしくな、響」

そう言つて、目の前の男性は手を差し出す

私はその手を取らず、質問をする

「所でこの鎮守府には、時雨はいるのかい…？」

目の前の男性は、私が握手を交わさなかつたことが気に障つたのか、不機嫌そうに返

答する

「ああ、あいつか

あいつは、転属した

使い物にならないしな」

男性のいいように、殺気がみなぎつたが平静を装い質問を重ねる

「何処に転属したの…？」

男性は、素っ気なく返答する

「お前が知る必要はない」

秘書艦にお前の部屋を案内させる」

「その必要はないよ…?」

そう言い、艀装を展開する

その艀装は、明らかに駆逐艦響の物ではない

5 inch 連装砲を目の前の男性に向ける

「死ぬ、ニンゲン!!」

そう言う少女の目は怒り、憎しみ、狂気に満たされていた

秘書艦が艀装を展開し、庇おうとするが間に合わず

放たれた砲弾が男性… この鎮守府では提督と呼ばれている人の胸を貫く

特殊な弾薬なのか、そのまま壁にぶつかった砲弾は爆発せず壁にめり込む

提督を血を吐き膝をつく

「お前…は…げほ…」

深海棲艦…か…」

仇を見るような目で、倒れた提督は私を睨み付ける

「酷いね…」



忘れちゃったのかい…？

私のこと…」

憎しみと狂喜の混ざった瞳で、ニンゲンを見下ろす

「まさか… お前は… ヴェ…」

提督は、そこで意識を失った… 永遠に

秘書艦は、何が起こったのか分からず、呆然と立ち尽くし

提督を守れず、撃ち殺されたと理解できるまで暫くの間がかかった

そんな、艦娘に私は問いかける

「私達の仲間にならないかい…？」

と…

急げ！

吹雪は、焦っていた

司令官から敵主力艦隊の編成が伝わっていた

戦艦二空母一重巡洋艦一軽巡洋艦一駆逐艦一の六隻だ

今も第六駆だけで、この艦隊を足止めしていると考えたと居ても立つても居られない

『ブツキー？』

焦るのはいいけどサー

少し落ち着きなヨ！』

「私は、落ち着いてます！」

『それなら、速度計を見てみるネ』

速度計の針は、34ノットを指していた

慌てて、速度を落とす

「ご、ごめんなさい、金剛さん……」

『大丈夫ネー』

それに、逸る気持ちは私にもありマスカラ』

伊勢達が追い付いてから、再び進む

後もう少しの所で、金剛二番機から敵編隊発見の報告が上がる

敵支援艦隊と遭遇してしまったのだ

『Shit! 別の敵艦隊に捕捉されたネ！』

どうしますカー？ブツキー』

「：：なら、こうします」

吹雪は、考えられる中で最善の策を取った

## 製油所地帯を防衛せよ! 6

周りに死の水柱が乱立する

『電!』

列を離れない!!

私の後ろにちやんとついて来なさい!』

電の前にいる雷ちゃんが電に注意する

「はわわ! ごめんなさい、なのです」

気が付くと敵に突撃する進路になっていて、慌てて進路を変える

『やっぱり、駆逐艦の主砲じゃ中々貫通しないわね...!』

暁が、悔しそうに呟く

『そうかな...?』

不死鳥の名は、伊達じゃない... 撃つ!』

戦艦の主砲に爆発が生じる

弾薬庫に誘爆したのか、二基四門が沈黙する

『え!?!』

響何したのよ!』

『何回も同じ場所に撃ったんだ…』

戦艦のバイタルパートは難しいけど、場所によっては撃ち抜けるさ…』

難しいけどね…』

『流石、響ね』

『響は、砲撃精度が高すぎるのよ!』

「なのです!」

『そう言うけど、暁だって並以上だし電も私と同じくらい上手じゃないか』

現在の戦況は、

敵艦隊、ル級elite損害軽微

ル級中破

又級中破

リ級elite撃沈

チ級elite小破

イ級撃沈

暁小破

響小破

雷中破

電損害軽微

一見、艦娘優勢だが、やはり駆逐艦娘では戦艦に致命傷を与えるのは難しい

このまま戦えば、第六駆が大打撃を受けるのは確実だろう

敵戦艦が何度目かの一斉射を行う

電は、この瞬間嫌な予感がして回避運動を行う

『直ちに全艦回避運動！』

ぶつかるとんじやないわよ！』

暁も電と同じ勘のようなものが働いたのか電と同じ判断を下す

暁と電からワンテンポ遅れて雷と響も回避運動を行う

暁の咄嗟の判断から、砲弾は雷と響の近くに着弾するだけだった。いや着弾するはずだった

雷と響が爆発に巻き込まれ吹き飛ばされる

『さすがにこれは。恥ずかしいな。』

響が顔をしかめながらも立ち上がる

暁が意識が朦朧としている雷に肩を貸す

「暁ちゃん。』

電が時間を稼いでいる間に、退避してなのです」

『で、でも、電がー』

「電は…」

電は、大丈夫…なのです」

『……………』

気を付けてね？

後、鎮守府に戻ったら、お姉ちゃんにしっかりと事情を話さないよ？』

「はい…なのです」

そして、無線を切り受信のみ出来るようにする

きつと、さつき戦艦は対空砲弾を使ったのです

装甲が紙と言われる駆逐艦だと大損害なのです

それと同時に電は気がついていた

もう、自身の理性というストッパーが外れかけていることに

響と雷が大損害を負う前、執務室

コンコン

「どうぞ」

「失礼しますー」

「しれーかん、こんにちは」

「お菓子ちよーだい」

「妖精さん達かどうした？」

と喋りつつチョコを手渡す

「わーい」

「しれーかん、大好きー」

「お菓子だあー」

と喋りつつチョコを口の中に入れる

「用件はですねー」

自由に使える資源が欲しいのですー」

「何に使うんだ？」

「こう、思い付いたものを開発するんですー」

「艦娘用？」

「勿論ー」



「了解、どれくらい欲しい？」

「とりあえず、各種資源5000と開発資材80くらいですー」

「ちよつと、待ってくれ

現在の資源量は…」

燃料と鋼材が二万近く、弾薬とボーキが一万五千ちよつと

開発資材は、80個程だった

「各種資源は、5000で大丈夫だけど開発資材がないからとりあえず50でいいか？」

「了解ですー」

後、もう一つ質問が」

「質問？」

「先日、マルヒトマルマルに誰かと会ってましたよね？」

「先日… あ、あの時か

確か、響と」

「あの娘… ここにいる響じゃなくて

舞鶴第三鎮守府にいるベールヌイダヴェールヌイだと思っただけどー

あ、私はここに来る前は舞鶴第三鎮守府にいたから何度か会ってたんだー」

ん…

そうだったのか？

だとしても一体何を？

何か物が無くなったりは？」

「特にはー」

「そうか…」

舞鶴第三鎮守府に電話かけてみるか」

プルプルプル

『こちら、舞鶴第三鎮守府の秘書艦…響だよ…』

ん…？響？

ヴェールヌイは、響の改二のようなもの

同じ鎮守府にいるのか？

その艦娘がいると建造や海域出ドロップは艤装のみだと思っただが…

「私は、呉第三鎮守府の司令官をしている者です

提督と替わって貰ってもいいですか？」

『…ちよつと、提督は今不在で…』

「そうですか…」

「いつ頃帰ってきます？」

『明日には、帰ってくると言っていたよ…』

「では、明日かけ直します」

『了解…』

俺は受話器を置き

「提督いないみたいだから、明日掛け直すよ」

「分かったー」

「返事教えてねー」

「お菓子ー！」

と言っていたので、飴を上げて再び戦況を見守った

ただ、抱いた疑問は消えることがなかった

「了解…」

そう言い受話器を置く

そして、私は床を見る

そこに転がるニンゲンの表情は安らかだった

怒りと憎しみに塗り潰されたはずの記憶の一部が蘇る

『やあ、響』

今日は頑張ったそうじゃないか』

『そんなことないよ、司令官…』

司令官の采配が良かったからさ…』

『司令官…』

私…司令官の昔話が聞きたいな…』

『俺の昔話なんて、家族を奴等に殺された悲しい話しかない』

『きつと、楽しい記憶もあるはずだよ…』

それを聞きたいな…』

『ヴェル…お、俺』

『司令官は、最善を尽くしたじゃないか…!』

『でも…家族を…また…』

『あんな作戦を上層部が決行したからだからだ…』

司令官に責任はないよ…!』

だが、すぐにまた記憶は塗り潰される

かわりに、頬に液体が流れる感覚がある

血かと思つて拭つて見るが液体は透明で血ではない

「なんだろう…これ…」

私は、結局思い出せず、机の書類を漁り時雨の転属場所を調べる

そして、一枚の紙に時雨の転属場所が書かれた書類を見つける

場所は、呉第三鎮守府だった

## 製油所地帯を防衛せよ！7

電は、戦艦の放つ砲弾の着弾予定地点を瞬時に判断し悠々と砲弾を回避するル級は、痺れを切らしたのか副砲まで、放ってくるが電にはかすりもしない

電がル級に近づくのを阻むように、チ級が電に立ちはだかり馬鹿みたいに大量の魚雷を発射する

電は、ぶつぶつ何かを呟きながら主砲と機銃で、先に進むために必要最低限の魚雷を破壊する

その後、何の躊躇いもなくチ級に主砲を放ち大破させる

止めで、魚雷を一本放ち撃沈する

「邪魔……なのです

電は、頼れるお姉ちゃんを傷つけたあいつらを許さないのです」

残酷な笑みを浮かべる電はル級二隻に突貫する

「食らえ！沈め！」

そう言い10cm高角砲をル級に向け発砲する

口径は12.7連装砲より小さくなったものの、威力は対して下がっていないらしい

それに、100cm高角砲は初速1000m/秒と高速で至近距離で数撃たれば戦艦でも砲弾がバイタル部分を食い荒らし、大損害は免れない

電は、二基四門の主砲を15発/分という、発射速度限界のハイスピードで撃ちまくる

だが、電は気が付いていなかった……主砲残弾が零に近づいていることに

俺は、固唾を飲んで見守る

電が、ル級二隻に突貫した時は無線に怒鳴り電に戻るよう話しかけたのだが、電は聞こえないのか、返事もしない

それに、電の様子が明らかにおかしい

いつも、電は臆病で、はわわしてて、ほんわかしてて、敵も出来れば助けたいのです、なんて甘々だけど……

優しくとつてもいい娘

でも、今の電はそんな様子は欠片もない

まるで、バーサーカー狂戦士のよう

その時

『ヘーイ!』

司令官!

今どういう状況デース!』

遂に金剛達が到着した

「今、電が単艦でル級二隻と相手してる」

『了解ネ!』

ブツキー、どうするネー?』

『電ちゃん!』

もつと、離れないと!』

電は、返事もせず反応も示さない

しかも、主砲は沈黙している

今は、魚雷と機銃だけで応戦している

『仕方無いネ』

伊勢、発砲準備!』

『了解』

『こ、金剛さん!?!』



あの近さで撃てば、電ちゃんが巻き込まれる可能性が!!』

『私達の砲撃能力を信じてくだサイ!』

『発砲準備完了!』

『Burning Love!!』

ポーン!!

駆逐艦とは、比喩物にならないほどの轟音

航空機が海上戦闘を制するようになって、戦艦は圧倒的な火力と装甲で、決して空母に戦術的に劣るわけではない

一撃で敵を粉碎し、敵の攻撃を寄せ付けない凛々しい姿は味方に勇気を与え、敵を震い上がらせる

二隻の戦艦と電の周りに水柱が乱立する

遠くから、轟音が聞こえる

我に返った電は、咄嗟に回避運動をする

真横に水柱が上がる

『電ちゃん！』

大丈夫？』

「大丈夫……なのです」

電は、何をしたのか思い返す

「い、電……一体どうしちゃったのです……」

『電ちゃん！』

電は、無線を切っていたことを思い出し無線を付ける

「電は無事なのです……」

『なら、離脱してください』

後、司令官が呼んでます』

「し、司令官さん……電……」

『明日……起きたらすぐ執務室に來い』

理由は、分かっているよな？』

「は、はい……（涙目）」

暁達の所に戻ると雷が飛び付いてきた

『もう、心配かけないですよ！』

「ごめんなさい……なのです」

ル級二隻と金剛達の戦いは終息に向かっていた

「ふう

間に合って良かった。」

『ギリギリだったデスカラネー』

『じゃ、白雪達の所に行きましようか』

『こちら白雪敵艦隊全艦を撃沈破合流して帰投しますか？』

「そうしましよう！」

『美味しい飯用意してるから、気を付けて帰って来いよ！』

『『『『『了解！』』』』』』

ぼおー

輸送船が一齐に汽笛を鳴らす

無事目的地にたどり着いたことを安堵し、轟沈した高知丸を悼むように

ふう…

後は、ここに駆け付けた通常船舶が警備するため艦娘の仕事はここまでだ

暫くすれば、深雪達がりらんか丸を曳航してくる

『夜戦』

やっぱり、夜はいいよね〜』

「姉さん、まだ夕方ですよ」

先に着いていた、第二船団の川内姉さんに呆れたように言う

『いや〜』

道中スコールで暗くなった時、偶然敵艦隊に遭遇してさ、夜戦つぼかったよ

ま、もつと暗い方が夜戦つぼくて良かったけどね〜』

朝潮達が何も話さないことから、呆れたように川内をみているのだろうと容易に想像

出来る

『深雪さま到着だぜ！』

「お疲れ様です、よく頑張りましたね」

今回も、作戦は成功しましたが…

すべては守りきれませんでした

もつと、もつと強くならなければ…です

ね  
とりあえず、対潜訓練…もつと増やしましょうか

「ふう…」

なんとか、終わったあ

敵主力艦隊撃滅後、残存艦隊は撤退しはぐれ艦隊以外いなくなったらしい

外では、留守番組がワイワイガヤガヤと準備している

出迎えと料理はなんでもいいと言ったが、まさかバーベキューだったとは…この時

期だとちよつと寒くないか？

防寒具を持ち俺は、執務室を出た

## 転属してきた艦娘が着任しました

バーベキューの準備をしているグラウンドに着く

「バーベキューコンロ設置作戦完了のお知らせなのです！」

「木炭の準備が出来た…」

いつでも、火を付ける準備は出来ている」

「僕もう待ちきれないよー！」

「はいはい、準備完了だねー」

「あーもー、駆逐艦うざい」

「そう言いながらも、駆逐艦娘に囲まれて満更でもない北上と北上を囲む睦月達

「鮭も用意したから、万全クマー！」

球磨がじつと用意した鮭を見ながら言った

「いや、バーベキューで魚焼くのか？とは思いますがスルーする

「司令はん、護衛艦隊の帰投ほちほちやで！」

「お、そうか

「じゃあ、みんな火を付けて〜」

「そういい、俺も目の前のコンロに火をつける  
カチカチ…」

「なかなか、火が付かない」

「そういえば、新聞紙とか使うんだっけ？」

「余った新聞紙つてあつたっけ？」

「あ、僕が持つてるよ！」

「自室にあるから取つて来るね〜」

「ありがとう、臯月！」

「あ、あたしも取つてきます〜」

「文月もありがとう」

「文月は、逃げるように艦娘寮へ駆けていく」

「おい、転びそうで心配… ドサー… 言わんこつちやない」

「大丈夫か？文月」

「見ないで、見ないで〜」

「目にも止まらぬ早さで文月は走つていった」

「俺がそんなに嫌いなんかな…」

「はあ〜」

思わずため息が出る

「何か気になることでも〜?」

「うお!

いきなり、背後に回るの止めてよ、龍田

心臓が止まるかと思つた」

「あらく何か疚しいことでも、考えていたんですか?」

「疚しいことつて何だよ…」

いや、なんか避けられてるような気がしてな」

「気のせいだと思えますよ〜」

「そうかな〜?」

「司令官、新聞紙取つてきたよ〜」

「司令官、文月も… 持つて来ました」

何かに期待して目をキラキラさせる二人

「ありがとう、後で二人にお菓子をあげよう」

と言つて二人の頭を撫でた

「まっかせてよ、司令官!」

「えへへ… お役にたてて嬉しいです」



幸せそうな二人を見てると俺も幸せな気持ちになつてくる  
やっぱり、お菓子の方つてスゲー

周りの駆逐艦娘は、羨ましそうに二人を見ていた

そんなこんなしていると護衛艦隊が帰投した

「作戦お疲れ様

すまん、まだ飯の準備出来なくて、先入渠するか？」

「じゃあ、入渠させて貰おうかな」

「司令官に感謝します！」

中破している川内と朝潮が入渠する

他の娘も服を着替えて、飯の準備をし始める

護衛艦隊の入渠が一通り終わった頃、攻略艦隊も帰投した

「お疲れ様、暁達は足止め頑張ったな

飯は、もう食べ始めちゃっているが、入渠はどうする？」

「私は、入らせていただきます…。」

逃げるように翔鶴が、立ち去る

「雷も入ってきなさい

私達、外で待ってるから」

「雷は、大丈夫なんだから！」

「いや、無理は良くない…」

入渠しよう…」

「なのです」

第六駆のみんなに引きずられていく雷を見送り、電の様子をさりげなく伺う

その様子はいつもの電で、あの時の面影は全くない

「心配ですか？」

「！」

提督ですか

はい、とても…」

「でも、あまり思い悩むのも良くないですよ

今は、祝いの席なんですから」

「そうですね、ありがとうございます…」

「ティートークウー」

「え、ちよつと金剛さん勢いつきすぎ…」

「B u r n i n g   L o v e !!」

ゴフウ

思いつきり抱き着かれた提督は金剛に押し倒される

「テートク、私の活躍見てくれた？」

「ああ、大活躍でしたね！」

とりあえず、退いてく…。」

「Wow！これからも、目を離しちゃNO！なんだからネ！」

「あの退いてくださると…。」

「Oh！テートク、sorryネ！」

そう言つて金剛が退いて、提督が立つと金剛は提督の手を取り引つ張つていく

「司令官、食べないのですか？」

いつの間にか隣にいた吹雪が尋ねる

「ん…？」

勿論、食べるよ

吹雪も的確な指示ありがとうな

「いえ、そんなことないです…。」

恥ずかしそうに、顔を隠す吹雪

「これからも頑張つて…な」

頭を撫でながら、ワイワイしている艦娘の輪に入った

そろそろ、目的地の鎮守府に着く

夜になってしまったが、目的地の鎮守府…… 呉第三鎮守府は煌々と灯りがついていた

『あそこが、呉第三鎮守府…… 時雨ちゃんともお別れですか』

寂しいですね』

「……………」

『呉第三鎮守府でも元気で……』

「……………」

『たまには、私達の鎮守府に遊びに来るのね!』

「……………」

『…… 黙ってないで、なんか言いなさいよ!』

「……………」

『あつそ、私達なんかと話すことは何もないうてことね』

『こら、霞ちゃん』

そんなことを言つては駄目ですよ?』

『ふん』

そして、呉第三鎮守府に着き着任報告をするため近くの艦娘に話し掛ける

「あの、すいません」

「んー？」

陽炎に何か用？」

「提督に転属届けの出ていた艦娘が着任したと…」

「司令ね？」

司令なら、彼処で駆逐艦娘に囲まれて困ってる人よ」

「ありがとうございます」

「いいって大したことじゃないわ…」

って霞と霰じゃない

元気してる？」

「ええ、元気よ

って一応艦娘になってからは初めてよね？

会うのは」

「元気…です…」

「いいじゃん細かいこと！

不知火もいるから一緒に話そうよ」

「ここに、長居したら迷惑でしょ

すぐ、出ていくわよ」

「えー」

その頃、祥鳳は司令官に話し掛けていた

「あの、提督、転属届けの出ていた艦娘が着任しました」

「えっと…… 祥鳳はうちの鎮守府にはいませんよね

貴女は何処から来たのです？」

「舞鶴第三鎮守府から、転属する艦娘いるって聞いてませんでした？」

「…… いえ、全く

提督知ってました？」

「私も知らないです」

「ちよつと、大淀確認してきて貰ってもいい？」

「はい、分かりました」

「済まないね

祥鳳、お腹が空いてるなら、みんなに混ざって食べてもいいぞ  
瑞鳳もいるし、一緒に話とかしたらどうだ？」

「え、でも…」

「いいって気にするなよ」

吹雪？まだ、寮の部屋空いてるよな？」

「はい！」

祥鳳さん達に貸すのですか？」

「もちのろんだ」

後で、案内してくれ」

「分かりました！」

「そんなに、してくださいさなくても…」

申し訳なさそうに言う祥鳳

後ろでは、護衛していた艦娘が目を輝かせている

「だから、気にするなって」

助け合いは大切だろ？」

「… 本来にありがとうございます」

「所で、着任する艦娘は？」

「… あ、はい…」

この娘です」

祥鳳の前には、改二姿の時雨がいた

へえ、改二かあ… 相当な練度なんだろうな

「これから、よろしくな」

「……」

時雨は何も言わず、俺を見る

彼女の瞳は濁り焦点を結ばない

まるで、この世には絶望しかないと言っているかのように

「時雨… ちゃん!？」

お久しぶり! 横須賀以来だね」

「ん? 吹雪知り合いなのか?」

「そうなんです!」

私も時雨ちゃんも同じ横須賀出身なんです!

ちよつとしか、一緒に居られなかったけど、大事な、大事な仲間なんです」

「なるほど、じゃあ明日時雨の旅行をしてくれ

積もる話もあるだろうからな!」



「はい！」

でも、時雨ちゃんなんだか様子が変ですね

時雨ちゃんどうしたの？」

突然、時雨は吹雪に質問する

「……吹雪貴女は、司令官を信頼しているのかい？」

「え？それは、勿論！」

「そうか」

それ以外、時雨は何も話さなかった

時雨は、いくら艦娘に話し掛けられてもあまり話をしないし、食べ物もあまり食べなかった

「司令官、艦隊司令部と確認が取れました

明日届く書類に着任することが書かれていたそうで

これが、時雨のプロファイルです」

そこには、数々の海戦に参加し、武勲をあげていると書かれていた

「なるほど、艦隊司令部に優秀な艦娘を配属してくださいありがとうございます

これからも、身を粉にして努力しますと伝えてくれ」

「分かりました」

…  
確かに優秀な艦娘だが…  
過去に一体何が…

## 生き残りの潜水艦

起きると、見慣れぬ場所だった

「……」

周りでは、妖精さん達が寝ている

スヨスヨ

グーグー

スースー

そんな様子を見ていて思い出す……昨日の出来事を

オリョール海で資源を回収して帰ってきた私達は、休憩を取っていた

今日の出撃は、緊急以外なのでイムヤと工廠で妖精さん達と駄弁っていた

本当は、てーとくと一緒に居たかったけど……

その時、スピーカーから今日の秘書艦の声が聞こえた

『本日の出撃、演習、遠征は中止

準備している者は、直ちに作業を中止せよ

また、出撃、遠征している者が全員すぐ帰投する補給担当の妖精さんは直ちに準備せよ

それと二時間後に埠頭にて全艦海にでよ』

今思えば、おかしな命令だが、おしやべりに夢中の私は、気にも留めなかった

〈二時間後〉

「そろそろ時間であち」

「そうね．．．」

何かに悩むような顔をするイムヤ

「大丈夫であち？」

その時、妖精さんがイムヤに耳打ちする

「駄目みたい．．．」

「え？」

その時後頭部に衝撃が

うっ… ドサ

「妖精さん、あれ持ってきた？」

そう、ならゴージャイ<sup>5</sup>ス<sup>8</sup>に飲ませて」

私を拘束した妖精さんが何かを私に飲ませる

「な、なぜこんなことをするの？」

イムヤ、妖精さん…」

「仕方ないのよ

だって…」

「おはよー」

「グウスヤ」

「おはおは」

「おはようでち

昨日は、何故あんなことを？」

「イムヤが言っていた通りだよ」

「……信じられないでち」

「でも事実だよ」

「ちよつと鎮守府を回つてみるでち」

「行つてらー」

ただ、執務室は駄目だからね」

艦娘寮、食堂、ドック……何処にも艦娘も間宮さんや明石さんすらいない

「みんな……隠れてないで出てきてよ……」

「ゴージャ寂しいよ……」

頼りになるイムヤも温かく見守ってくれる鳳翔さんも第二駆の仲良し組も……

「そ、そうだ

てーとく、てーとくなら……」

執務室をノックする

コンコン

「てーとく、みんながいないで…ち…」

提督が床で寝ている

「もう、てーとくこんな所で寝ると風邪引いちゃうよ？」

…  
てーとく…？てーとく起きてよ？」

本当は、もう提督が起きないと分かっていた

だって胸に穴が開いていて、大量の血が流れているんだもん

「嘘…いや…」

提督を抱き締めるが提督はピクリともしない

だんだん視界がぼやけてくる

なんで、ゴーヤがこんな奴の秘書艦なんかしなきゃならないのだろう

そいつは、じつと戦況を見ている

駆逐艦を盾にしろなんて最低な命令を出して

そして、艦隊は……壊滅した

最後に残った古参駆逐艦娘時雨とベールヌイ

そして、ベールヌイが時雨を突飛ばし沈んでいく

「……なぜだ」

「は？」

「いや、なんでも」

「そう」

その日は、そのまま職務を終え私は、執務室を出ていった

時雨が帰投すると聞き提督と時雨を出迎えた

「ただいま」

「……時雨」

「なんだい」

「何故、お前だけ帰ってきた」

「……救いたかったさ！

でも、でも……」

「もぅいい



お前に補給する資源はない」

「ッ!？」

提督、君には失望したよ

人間なんて、大嫌いだ」

そう言つて駆けていく時雨

「てーとく、本当貴方は最低な提督でち」

「好きに言つてろ

俺は、家族の仇を取る

ただ、それだけだ」

そう言つて、提督は執務室に戻つた

私は、そんな提督と一緒に居るのが嫌で少し遅れて戻ることにした

執務室に戻り、ドアをノックしようとした時

中からドン！ドン!!

と音がする

なんだろう、と思い耳を澄ます

「なんでだよ

一番辛いのは時雨だつて分かつてるだろ！

なんで俺は時雨に八つ当たりしちまったんだよ」

バンバンと机を叩く音がし

くしやくしやくと紙が丸々音がする

「これも、俺が他の鎮守府の報告を鵜呑みにしたからだ

増援が来る可能性を考えなかったからだ

すべては！すべては俺の責任だ……」

何か軽いものが執務室のドアに叩きつけられ跳ね返る

堪えきれなかった私は、ドアを開ける

「てーとくー！」

提督は驚いた顔をし、すぐ顔を拭う

「なんだ、ゴージャ

緊急のことか」

何もなかったかのように話す提督は、満身創痍だった

身も心も見ただけでボロボロだと分かる

何故、さつきまで気が付かなかつたのが不思議なくらいだ

「てーとく、もう無理はしないでち」

「俺は、無理なんかしてねえよ

どうした？いきなり？」

媚びでも売り始めたのか？」

冷たい目で、私を睨む

「そんなことないでち

さつき、怒鳴っていたこと聞いたでち」

「あれは…」

「何故、てーとくは嫌われるようなことをするの？」

教えて欲しいでち」

私は、提督の投げた紙を拾い広げる

内容は

『カムラン半島の敵主力艦隊の編成について』だった

そこには、壊滅した連合艦隊から時雨とベ<sup>ヴェ</sup>ル<sup>ル</sup>ヌ<sup>ヌ</sup>イ<sup>イ</sup>が抜けていても余裕で勝てるよ

うな敵主力艦隊の編成が記されていた

「…辛いんだよ

家族を失うのが

艦娘と親しい仲にならなければ、少なくとも俺は悲しい思いはしないからな」

「てーとく、貴方が辛いとき誰も傍に居てくれなかったでち？」

「……」

「その人達もてーとくと同じくらい辛かったんじゃない？」

「…… ああ、そうだな

いつも、俺の傍には辛さを分かち合える誰かいたな

俺は、恵まれてたのか……

だけど、今度こそ俺は独りだ」

自虐するような笑みで提督は、独り言のように言った

「大丈夫でち

ゴーヤが代わりにてーとくの傍にいるから」

その日以降提督は少しつつ変わっていった

「だから、執務室は駄目って言ったのに」

「妖精さんは知っていたでち？」

私の声は怒気を含んでいた

「知っていたよ

でも、もう私達が執務室にたどり着いた時、提督は息を引き取っていた」

「妖精さんは悲しくないの？」

「悲しいに決まってる

彼が辛いことを乗り越えようとしてたことも知ってたからね」

うう…

嗚咽を止めようにも、提督と駄弁ったり、笑い合ったりした時を思い出すと止まらな  
い

プルプルプル

執務室に置かれた電話が鳴る

妖精さんは、取るのが大変なので仕方なく私が取る

「はい…」

『あ、こちら、呉第三鎮守府の司令官なのですが』

「なんですか」

涙声で、返事をする

『あの大丈夫ですか？』

泣いているようですが』

「大丈夫でち…。」

『そうですか？』

なら、いいのですが

提督に代わって貰えませんか？』

「てーとくは…。てーとくは…。」

その先がどうしても言えない

『え、あの本当に大丈夫？』

「てーとくは、死んじゃったでち…。」

『え？』

どういふことですか？』

提督が執務室で胸を撃ち抜かれていたことや艦娘が全員いないことを話す

『分かりました、舞鶴第一、第二鎮守府に救援艦隊を送るようによ請します』

「分かったでち…。」

その後、救援艦隊が到着し捜索が行われたが艦娘はゴージャ以外見つかることはなかった

# 電が秘書艦なのです！一日目

電が執務室に到着すると司令官さんは、電話で話したり書類を書いたりしていた  
電話を切ると

「おはよう、電

この前の罰は、二日間秘書艦をするに決まったから

明日も秘書艦だぞ」

と言った

「わ、分かりました

電、頑張るのです」

お姉ちゃん達に、はわはわしながら書類仕事を教えて貰い

ある程度、慣れた頃に訓練があるからとお姉ちゃん達は行ってしまった

黙々と書類仕事をする司令官さん

電も黙々と書類を書く

よし第六駆もいなくなつた

これで、話ができる

「電、話があるんだが…」

「は、はひ」

なんですか、司令官さん」

「昨日の戦いのことだ

何故、突貫なんてしたんだ？」

「そ、それは

足止めをするためなのです」

「第六駆のみんながいなくなつても、主砲の弾が切れて機銃を乱射してもか？」

「本当に足止めだけが、理由なのか？」

「な、なのです？」

電は、目を逸らす

「答えてくれ

それとも、俺が信頼できないのか？」

「そんなことは!ないの…です…」



後半は、消えそうな感じで答える

やはり、そう簡単には教えてくれないか…

「じゃあ、明日には教えて貰おうかな」

「はわわ！」

仕方ない強行策にしよう

まずは、第六駆…いや金剛や翔鶴、吹雪にも協力して貰おう

その後、順調に執務をこなし電と書類を事務棟に運ぶ

「——そこで、暁ちゃんがすっ転んじやつて、響ちゃんが『お手をどうぞ、レディ』って手を差し伸べたのです」

「なるほど、なるほど」

「したら、暁ちゃん顔真っ赤にして『ありがと、お礼はちゃんと言えるし！』って

とても、照れてたのです」

「なるほど…」

つまり、響はイケメンということか… ふむふむ

だから、暁は響にメロメロなんだな！」

「そうなのです！」

「貴方達…いい加減にしなさいよ…」

書類を事務棟に運び戻ってくる途中そんな話をしていると  
うっかり暁に聞かれてしまった

うん、うっかりなら仕方ない

見ると暁、響、雷に時雨もいる

時雨は、響や雷にぼつりぼつりながらではあるが、話をしている

少しは打ち解けたみたいだ、良かった良かった

「時雨、訓練はどうだった?」

俺が話しかけた瞬間時雨の目付きが変わる

冷たい目、敵対心どころか、殺気さえ感じる

「提督、命が惜しければ僕に話しかけるのは止めた方がいいよ?」

響と雷が驚き、暁は目を逸らす、電ははわわする

「…分かった、後一応言っておくが俺は司令官だ」

殺気が怖くて膝が笑いそうだが、必死に堪えていい放つ

「どうでもいい」

そう言つて、時雨は響と雷を引っ張っていく

暁は、心配そうに俺の方をちらつと見ると響達を追いかける

「司令官さん…あの…」

「大丈夫だ

俺は、まあ慣れてるからな」

そういうものの、平和な日本から来た元受験生にはトラウマレベルだったが

その後、昼飯を食べて（ちなみにラーメン）

執務終わったから、電は第六駆のみんなと司令官さんと吹雪でバトミントンをした

そして、夕食

ほぼ全艦娘が食堂に集合していた

「もう、攻略作戦かしら？」

「拙速過ぎるっばい？」

「私は、何かの連絡だと思っわ！」

電は、何か知らないの？」

「はわわ、司令官さんがたくさん電話していたことしか…」

吹雪と翔鶴が入ってくる

二人とも、表情は硬く、困惑した感情も読み取れる

そして、人間が入ってくる

「えっと、まず時雨と時雨を護衛した艦隊はシヨックを受けるかもしれないと先に言っておく」

人間は、僕や祥鳳、霞、霰、イク伊<sup>19</sup>を順に見ていく

覚悟を決めたように、切り出す

「舞鶴第三鎮守府が壊滅した

提督は、戦死

ゴージャ以外の全艦娘が行方不明

恐らく艦隊司令部は轟沈扱いするだろう」

一瞬、僕以外の4人が呆ける

そして、祥鳳は信じられないという顔をし、霰は口をパクパクするばかり、イクは「納得出来ないのね!」と叫ぶ

霞がつかつかと人間に歩み寄り目の前に立つ

いきなり、人間の胸倉を掴むと

「嘘つくんじゃないわよ、このクズ!!」

「嘘じゃない、事実……だ」

霞が人間を殴る

だが、人間は倒れない

また、殴る

殴って殴って殴る

でも、艦装を展開しない駆逐艦娘の力は小学生と大差ない

霞は、殴りながら泣いていた

「なんで……抵抗しないのよ……」

「霞がそれで落ち着くなら、別に構わない」

霞から嗚咽が漏れる

朝潮と陽炎が慰める

いつの間にか、大淀を連れた人間が一人増えていた

「実は、問題は提督の戦死した理由だ

深海棲艦に砲撃されたと推測されているのだが、そいつは……かつて、舞鶴第三鎮守府に所属していた艦娘のベ<sup>ヴェー</sup>ル<sup>ル</sup>ヌ<sup>ヌ</sup>イ<sup>イ</sup>であることが妖精さんの発言によって判明した」

『は……!?!』

艦娘全員から驚きの声があがる

は?こいつ、なんて言った?

「Be<sup>ヴ</sup>er<sup>エ</sup>n<sup>ル</sup>h<sup>ヌ</sup>y<sup>イ</sup>は、轟沈が確認されており

現地の妖精さん曰く、深海棲艦化しているとのこと」

艦娘がざわざわとしている

僕は艦装を展開し、人間に近づく

そして、吹雪と翔鶴が艦装を展開して立ち塞がる

「邪魔だから退いてくれないかな?

そいつが殺せないのだけど」

「司令官にその感情をぶつけるのは間違ってます」

「貴女が怒るのは分かりますが、司令官に非はありません」

後ろからも殺気を感じる

艦装をしまい、席に戻る

「何か質問はあるか?」

「はい!」

朝潮が手を挙げる

「なんだ、朝潮」

「つまり、私達艦娘は轟沈すると深海棲艦になる…： ということですか？」

「それは、分からない」

Верныйが特別かもしれないし、そうじゃないかもしれない

ただ、俺が約束出来るのは、この鎮守府に所属する艦娘は一人たりとも轟沈させる気はないということだけだ」

朝潮は俺の目を見る

俺も朝潮の目を見る

「分かりました」

この朝潮、司令官のためなら、炎の海でも付いていく覚悟です」

「司令官のためなら、炎の海も確かに悪くはないですね…：」

「私が付いていくのは、テートクと決めてマース

テートク！大淀の隣じゃなくてこっち来なヨー！」

口々に艦娘は、人間に返事をする

いつの間にか、みんな笑顔になっていた

「ちよつと、炎の海は遠慮したいなあ…：」

なんて、苦笑いする人間を見て僕はあいつを連想した

「さあ、みんな飯にしようっか

間宮準備出来てる?」

「出来ていますよ」

「じゃあ、俺焼き肉定食!」

「司令官…」

あまり、お肉だけは駄目ですよ」

吹雪が上目遣いで、訴えかける

「わ、分かった、秋刀魚定食にするよ」

「了解」

妖精さんがビシッと敬礼する

「じゃあ、私も」

「私も秋刀魚定食でお願いします」

「だから、なんで一緒にするんだよ」

「偶然ですよ!」



と目を逸らす吹雪とそれを見て微笑む翔鶴

「そっか、ん？」

「電どうした？」

「秘書艦だから、司令官さんと隣で食べるのです…」

俯きながら、電が言う

「いや、無理しないで第六駆のみんなで食べたらず？」

「大丈夫だよ、司令官…」

私達も司令官の近くで食べればいいだけだ…

「問題ない…」キリッ

「お、おう」

「司令官さん、暁ちゃんが響ちゃんにメロメロな話まだあるのです！」

「！」

是非聞かせてくれ」

「貴方達…私に実力行使させる気…？」

「まあまあ、事実なんだからいいじゃないか

隠すことないだろう？」

「事実じゃないから、言っているんじゃない!!」

そんな会話をしながら、  
食事を取った

## 電が秘書艦なのです！二日目

僕は提督に笑いかける

隣には、響、雪風……

かつての仲間が全員いる

笑顔が絶えなかったあの時のまま……

「……」

見慣れない天井

そうだ、もうあの楽しい時は返ってこないもう二度と

いつの間にか、同室の夕立が同じベッドで寝ている

<sup>夕立</sup>妹の頭を撫でながら、妹の寝顔を眺めた

うーん……

なんか……重い

眠くてボーとする頭を醒ましながら、重い原因を見る

……電なにやっつてんの？

電が俺の隣に座ってそのまま寝てしまったのか俺の方に被さっている

あ、あの…

際どい所まで見えてるですけど…

電から目を逸らし、布団から電を起こさないように抜け出す

「おい、起きろー!」

「なのですー?」

「なのです、じゃない!」

電にデコピンする

「ふにゃ!」

「起きたか？」

「じゃ、執務室で執務してから朝食食べよっか」

「ふにゃ…」

「はいはい、立ってくださいねー」

「ふにゃ…」

無理矢理、電を立たせる

「じゃ、行くぞー」

執務室へGO！

「ふにゃー」

電を押しながら、執務室に向かう

机で執務を行う

コックン… コックン…

「電ー？」

「起きてる… のです」

「おう」

カチカチ時計の音が部屋に響く

コックン… コックン…

「電ー？」

スースー

「… 何時に俺の自室に来たんだか」  
呆れながら、電をソファアに運び  
執務を再開する

マルハチマルマル

ふぁー

電が欠伸をする

やつと起きたよ

「やつと起きたな

朝食食いに行こうぜ」

「はい… なのです」

食堂は、ワイワイしていた

「おはよー」

「おはようございますー!」

「おはよう…」

司令官…」

「本日はお日柄もよく、なのです」

「おはようございます…。」

「司令官もおはようネー」

電も第六駆や他の娘達に挨拶する

「じゃあ、おまかせA定食にしよ」

「電は、おまかせB定食なのです」

暫くすると妖精さんが運んでくる

「ありがとう」

「なのです」

俺のは、鯖の味噌煮と味噌汁、ご飯、ミカン

電は、焼き魚と味噌汁、ご飯、リンゴ

だった

鯖の味噌煮おいしい…

デザートのみカンが残ったとき

ちらつと電のリンゴを見る

別にミカンが嫌いな訳ではないのだが、リンゴが好物だったからだ

電がそれに気が付いたのか

リンゴにフォークを差して俺の口元に持ってくる

「え、いや、電が食べなよ」

「リンゴは二切れあるから、一切れあげるのです」

「… 代わりに、ミカン半分あげるよ」

「ありがとうございます」

電のリンゴに噛み付く

カプ：： シャリ：： モグモグ

「おいしい… ありがとうございます、電」

残りも一口で口に入れる

ミカンの皮を剥き、半分にする

「はい、どうぞ」

「… ありがとうございます…」

何故か物足りなさそうに、見てくる

なんでだろ？

「俺の持つている方が良かった?」

「そんなことないのです」

首をふるふると振る電



「そっか

そろそろ、執務室に行つて執務しようか」

「はい、なのです」

その後、いつも通りに執務して事務棟に書類を置いてきて帰り道

「——それで、響ちゃんがふて腐れちゃつて」

「ふむふむ……」

「だから、必死に……ふにゃー!!」

ドサー

電がダイナミックに転ぶ

「おい、大丈夫か?」

「大丈夫なのです……（涙目）」

「!」

お手をどうぞ、レディ」

「!」

ありがと、お、お礼はちゃんとと言えるし…なのです」  
俺も電もクスリと笑った

「…全員集まったか？」

「レディは、ちゃんと集まりの参加出来るのだから」

「電には、バレてない…」

「何を手伝えばいいのかしら？」

「あれ？吹雪は？」

「何処にいるか分からないから諦めたよ…」

作戦を説明中…

「——って作戦だ」

「ですが司令官、それは…」

「でも、俺はこれくらいしか思い付かないんだよなあ

暴力や悪口なんで絶対したくないし言いたくないし」

「翔鶴は心配性ネー」

私達がちゃんとすれば、問題Nothing!」

「だといいいのですが…」

他にも数人の艦娘の協力を仰ぎ、作戦を実行した

「あ、電」

一緒に風呂入りましょ?」

「レディの暁が背中洗ってあげるわ!」

「Xoposo」  
ハラシヨ

「え、でも、まだ風呂入るには早いのです」

「お風呂独り占め出来るからいいじゃない!」

「さつさと、準備して行きましょ」

電はお姉ちゃん達に引つ張られるようにお風呂に入る準備をした

「あ、うっかりバスタオル忘れちゃったー」

「雷ちゃんが忘れるなんて珍しいのです」

電が取ってくるのです」

「いいわ、私一人で行けるわよ」

「いつも、雷ちゃんにはお世話になってるから、電が行くのです!」

そう言い、電は第六駆の自室にバスタオルを取りに向かった

あれ…?

お風呂場の前にいるのは… 司令官さん!?

周りをキョロキョロ見回し

お風呂場に入っていく

…司令官さんがお風呂場に!?

信じられないけど、事実なのです

電は、自覚ないまま殺気を放ち

司令官の跡を追う

「司令官さん…？」

自分自身でも驚く程声が冷たい

司令官は、ビクツと体を震わせてからこちらを向く

「なんだ、電」

普段と同じ声音で、悪がる様子もない

「ここが何処か分かっているのです？」

「ああ」

「司令官さんがそんな人だとは思わなかったのです」

艀装を展開し、砲を向ける

「… やっぱりな」

そう言い、司令官は扉を開ける

そこは、シャワーや浴槽などがあり、暁達が体を洗っているはず

だが、暁達はいない

「俺の推測だと電は暁達が危険に晒された時、守りたいという気持ちがとても強くなる

だから、一昨日の戦闘の時突貫したのも俺に躊躇いもなく砲を向けたのも説明が付

く」

「——も俺に躊躇いもなく砲を向けたのも説明が付く」

呆けている電に言い放つ

艦娘は、人間を守りたいという気持ちが強く

滅多なことがない限り砲を向けたりすることは無いという

その傾向は、特に俺のような第二次世界大戦が行われた世界から来た人間に対しては強くなるという

電は、考えるような仕草をし、覚悟を決めたのか

発言をする

「電、実は——」

すると浴槽の方から声が聞こえた

「し……司令……官……?」

見ると、浴槽の奥に一糸まとわぬ吹雪が驚いたようにこちらを見ている

……え

なんで、なんで、吹雪が!?

暁達が万が一艦娘がいると不味いからって中に誰もいないか確認するって言ってた

よね!?

不幸中の幸いか、吹雪の姿は立ち込める湯気で輪郭がはつきり見えなかった  
だが、俺にとっては気休めにもならない

俺のミスだ……

謝らないと……それだけで許してくれるかな

いや、許してくれないだろう

諺にも親しき仲にも礼儀ありというし

「ごめん、吹雪

謝ることで、許してくれるとは思わないが——」

膝が何かに思いつきりぶつかる

俺は、いつの間にか前に倒れていて、目の前に床が迫っていた

目を開ける

すると見慣れてきた天井が見える

「司令官さんお目覚めなのです?」

優しい笑みを見せる電

「あ、ああ

おはよう…。じゃなくて、こんばんはかな?」

「司令官、良かったです。」

隣で泣きそうな吹雪

「ご、ごめん…。吹雪

俺。」

「事情は、聞きました

司令官は、悪くないので、気にしていません!」

「でも。」

「じゃあ、その代わり第六駆のみんなと私と翔鶴さんで出掛けましょう!」

金剛さんはきつと提督と行きたがると思うので、提督に頼むということだ」

「…分かった、それでいいなら、そうしよう」

「食事は、持ってきますね」

「ありがとう」

頭を打ったみたいで、頭には包帯が巻かれている



「どういたしまして♪」

そう言い、吹雪は部屋から出ていく

「あ、あの、司令官さん、電——」

「済まなかった」

俺は、電の言葉を遮るように言った

「え？」

「無理矢理、電の悩んでいることを話させようとしたことだよ

余計なお世話だった」

「そんなこと……ないのです」

「電は、優しいな……って当たり前か

まあ、いつか、話してくればいいさ」

俺は、そう言つて電の頭を撫でた

## 雷の願い

雷は、その日電と新米駆逐艦娘二人を連れて、警備任務をしていた

警備任務は、遠征に分類される

ゲームなら、警備任務は20分だが、こちらでは1時間くらいかかる

その代わり、貰える資源は多く欲しい資源を選べる

ただし、高速修復剤<sup>バケツ</sup>、開発資材、高速建造剤<sup>パナール</sup>は遠征で艦娘が拾ってくるため手に入るかは不確定である

「ん？」

あ！おーい！

『どうしたのです？雷ちゃん』

「あそこに、漁船があるのよ！

ほらー！」

『あ、あの

民間人は私達のこと知らないって座学で習ったのですが…』

ガチガチに緊張している潮がおどおどしながら、雷に質問する

遠征とはいえ、敵に遭遇することもあるし、交戦すれば損傷を負い、最悪轟沈する  
まあ、初実戦だし緊張するわよね！

不安を押し隠しながら、雷はそう思った

「民間人には公開してないけど、海運業関係者や漁業関係者には、すぐバレちゃうから  
政府は、私達艦娘が登場してすぐ知らせたみたいよ？」

そのために、大量の特別災害手当て口止め料が支払われていることを艦娘達は知らない

「そうなのですか…」

そんなことは話していると漁船も私達に気がついた

「嬢ちゃん達、今日も頑張ってるねえ」

「そうよ！」

この海の平和は、雷と」

「い、電の」

「雷電姉妹が護るんだから（なのです）！」

「ははは！」

そうかい、そうかい

今日はクールな娘と背伸びしてる娘はいないだねえ」

「響と暁なら、鎮守府でお留守番よ！」

今日は代わりに曙と潮が一緒よ、初実戦なの」

「へえ」

二人を見る漁師さん達

「な！変な目で見ないですよ！」

潮の前に立つ曙

「ち、ちよつと失礼だよ、曙ちゃん」

おどおどする潮

「がははは

俺にも、これくらいの娘がいるからついな

ほれ、これやるよ」

漁師さん達は、お菓子を渡してくれた

「ありがとうございます」

「いつも、ありがとうね」

「ふん、お礼は言わないけど」

「ありがとうございます」

『雷、俺もいつも感謝していますって伝えてくれないかな？』

「司令官も漁師さん達に感謝してるって！」

「おう、そうか！」

「所で、漁師さん達は最近お魚獲れているのです？」

「あ、ああ、まあまあ……かな」

「ん？」

「元氣ないじゃない！」

「そんなんじゃ、駄目よ！」

「そうなんだがな、この前秋刀魚を獲りに行った船団が奴等の攻撃を受けたらしくてな

今年は、秋刀魚を獲りに行くのを止めようかなという話になったんだ」

「そういうことね」

何かを考えるように雷は、黙る

暫く話をした後、漁船とは別れた

コンコン

「どごどごー」

「失礼するわ!」

「失礼するよ...」

「暁と響か

どうかしたか?」

「電のことよ!」

「結局、事情を聞けなかったじゃないか...」

「まあ、そうなんだが...」

電には、頼れる三人のお姉ちゃんがいるじゃないか?」

「そ、そうね!」

暁に任せなさい」

「.....X<sub>ハ</sub>o<sub>ラ</sub>o<sub>シ</sub>o<sub>ョー</sub>」

胸を張る暁と恥ずかしそうに顔を背ける響

「用事はそれだけか?」

「あ、後、工廠妖精さんが明日来てくれって」

「了解だよ」

隣で黙々と仕事していた翔鶴がメモをしている

翔鶴気が利くな

とか、思いつつ

二人の艦娘のことを考える

電は、本人もあまり話したくなさそうだし、第六駆に任せるしかないか…  
もつと、問題なのは時雨…

うーん…

話しかけるのも嫌がられるし

人間に対して強い嫌悪感を抱いてる…のかな？

むしろ、訓練をちゃんと受けているのが、不思議なくらい

他の艦娘に誘われるから、なのかな？

そこまで、考えてまだ執務が終わってないことに気がつき執務を再開した

マルヒトマルマル

神通から対潜訓練をしたいとの要望があたり

俺は、どうするか考えていた

んー

吹雪もそこそこ潜水艦と戦ったことはあるらしいんだが…

時雨の過去の戦果が書かれた紙を見る

戦艦や空母などの強い艦種も多数撃破しているのだが、潜水艦に対しても優秀な戦果をあげている

時雨に出来れば教えて欲しいのだが…

本人に直接聞けないしなあ

コンコン

こんな時間に誰が…

ってあれ？前にもこんなことが

「どうぞで」

「失礼する…わ」

「雷か、どうした」

「これ読んで欲しいのよ…」

眠くてフラフラしている雷は紙を持っている

「どれどれ…」

雷から紙を受けとる

その瞬間雷が俺の方に倒れこむ



「おっと、全く無理しちゃ駄目じゃんか……」

雷をソファーに寝かせ、雷の持って来た紙を読む

ふむふむ、漁船を護衛して秋刀魚獲りたいと……

漁師さんにお礼したいのかな？

なら、頑張つて書類にまとめて、提出するか

そんなこと考えながら、作業をしたら、徹夜することとなった

## 鎮守府秋刀魚祭り 1

スースー

「……司令官！」

スヨスヨ

「もー、私がいないと本当に駄目ねー！」

むにやむにや

「ほーら、司令官！」

そろそろ起きないと秘書艦来ちやうわよ？」

コンコン

「入っていいわよ」

「失礼します

あれ？」

雷何をしていたのでしょうか？」

朝潮が6時きっかりに執務室に入る

「真夜中にちよつと用があつてね」

「え…ま、真夜中…!？」

「そう、司令官にお願いしたいことがあって」

「お、お願い!？」

露骨に動揺する朝潮、普段の真面目な態度からは想像出来ない

「そうよ」

「って朝潮勘違いしてない？」

「え？」

「い、いえ」

「そんなことは…ないです」

顔を真っ赤にする朝潮に思わず雷は嘖き出す

「んあ

「あ、おはよう、朝潮、雷…」

「何故か、朝潮は膨れている」

あ、俺が寝てて怒ってんのかな

「おはよう、司令官」

「司令官、おはようございます」

「ごめんごめん、ちよつと仕上げたい書類があつて

寝るのが遅くなつちやつて……」

「もう、私を頼つてくれればいいのに！」

しかも、机で突つ伏して寝てるなんて駄目よ！」

「司令官、任務は大切ですが、体は大丈夫にしなければ駄目です  
司令官の代わりにこの朝潮、月月火水木金で働く覚悟です」

ズイズイと来る二人に俺は、戸惑う

「い、いや、雷すぐ寝ちやつたじゃないか

かなり無理していたんじゃないか？

そういう、朝潮の方が心配だよ

第八駆を纏めたり、他の駆逐隊の指導したり忙しいのに

これ以上は、頑張りすぎたら駄目だよ

寧ろ、今日は休んで貰わないと」

「もー、雷は大丈夫なんだから！」

それより、司令官が無茶していないかの方が心配よ」  
「そうです！」

顔色もあまり良くないですし」

冷や汗をかきながら、雷と朝潮の頭を撫でて宥める

「俺は、大丈夫だって

さ、もう七時だ

朝食食べに行くぞ」

「むう」

「わ、分かりました」

俺は、食堂でみんなに挨拶しつつ、翔鶴や金剛のいる所に向かった

「おはよー」

「おはようございます」

「Good morning！」

「司令官、どうしたの？」

「今日は、話しときたいことがあつてな

あ、妖精さん、俺のは朝食おすすりC定食でいいよ

うん、ありがとう」

「話しておきたいこと…ですか？」

「ああ、明日から一週間、合計昼6回、夜3回出撃して欲しいんだ」

「どういう、編成ですか」

「今この所、

昼は、戦艦or空母一、駆逐艦五

夜は、重巡洋艦or軽巡洋艦一、軽巡洋艦一、駆逐艦四

にするつもりだ」

「戦艦は、私、日向、金剛、扶桑で四人

空母は、翔鶴、祥鳳、瑞鳳で三人

ローテーションかな？」

「重巡洋艦は、古鷹、青葉、那智、妙高、羽黒、高雄で、六人

軽巡洋艦は、川内型三姉妹、五十鈴、由良、名取、阿武隈、北上、球磨、多摩、天龍、

龍田の十二人です」

「結構、戦艦、空母がハードじゃないかな？」

「日々の訓練もあるしさ」

「そんなことないですよ、司令官」

「それなら、いいんだけど…」

その後、細かい所を詰めているうちに朝食を食べ終わり工場に行くことになった

「朝潮、なんか俺悪いことした？」

「いえ、そんなことありません」

「本当に？」

「なんか、不機嫌に見えるんだけど」

「気のせいです」

「そうなの？」

「なら、いいや」

「明らかに不機嫌なんだが…」

そんなことを思いながら、工場のドアを開ける

妖精さんがビシツと敬礼する

「司令官、おはよー」

「ふあー」

「お菓子ー！」

「はいはい」

そう言つて、板チョコを何枚か渡す

「わーい！」

「万歳！」

「チョコー」

「所で見せたい物つて？」

「これです！」

そこには、二つの装備品があつた

「ふむ、探照灯か…」

「これは？」

「戦闘機なのは、分かるのですがー」

「作つた妖精さんは、烈風つて言つてましたー」

「おお！」



「これが烈風……」

烈風妖精さんがピシツと敬礼

「司令官、知っていますのですー?」

「勿論、烈風は零戦の後継機で幻の機体って言われていたんだ」

「え?」

零戦に後継機?!」

「聞いたことないよー」

「まあ、試作を作って終戦になってしまったからな

朝潮、翔鶴に試験飛行頼めるか後で、聞きに行こう」

「分かりました」

「ちなみに、探照灯は使えるか試したのか?」

「第六駆の暁に試して貰いましたー」

「分かった、後、烈風量産出来ないよな?」

「無理ですーねー」

でも、妖精さんの中で作り方を共有するので、今後この二つは通常の開発で作れるようになりますよー」

「了解、よろしくね」

今度は、ジューズも一緒に持つてくるからさ」

嬉しそうに跳び跳ねた後、すぐ妖精さん達は仕事をし始めた

早速、翔鶴には烈風の試験飛行を頼み執務を行う

「朝潮は、書類のファイリングが終わったら、休んでくれ

後、これ」

朝潮の口に一口用のチョコを入れる

「あ、ありがとうございます」

ちよっと、機嫌を直してくれたようだ

「執務終わったら、ちゃんとお菓子用意するから頑張つてね」

朝潮は、ファイリングを終えると、秘書艦用の椅子にピシッと座ったまま、微動だにしない

「ソファーに座つて何か読んでいいよ？」

小説とかあるし」

「いえ、任務中ですので」

「そうか」

いつでも、読みたくなったら、読んでいいからな」

第六駆みたいに、執務室のソファで寝られるのは困るが、朝潮みたいにちゃんとしている緊張する

そんなことを思っていることを知ってか知らずか朝潮はジツと執務をしているのを見てくる

昼ちよつと前に執務が終わり

書類を一緒に出しに行つた

「そういえば、第七駆はどうだ？」

「そうですね．．

漣は、ちよつとふざけていることはありませんが

みんな真面目です

実戦でも、連携すれば巡洋艦相手でも引けを取りません

ただ、夜戦は厳しいかもしれませぬ」

「なるほど——」

「司令官．．」

「ん？」

翔鶴、その様子だと烈風は強かったのか？」

「はい！」

速力は、零式戦闘機を上回り、航続距離はそのまま

武装も強化されていて

防御力も上がっていて」

「お、おう」

こんな翔鶴は、見たことがない

目を輝かせ、高揚しており

かつ、とても饒舌で・・・

翔鶴が烈風の説明をする間、ドキドキしっぱなしだった

「祥鳳や瑞鳳もちゃんと運用出来るのか？」

「勿論です」

「了解した、今日はありがとうな」

「いえ、こんな素晴らしい機体を用意してくださりありがとうございます」

「お礼なら、工廠妖精さんに言ってくれ」

そう言い、翔鶴と別れた

朝潮と一緒に菓子を食べたり、そこに第十一駆と第六駆、第八駆が乱入してきたりしたが、ワイワイしながら楽しんだ

食堂で、人間が新たな作戦を開始すると言い、朝潮が紙を配る

多分、人間が朝食の時、翔鶴達と話していたことだろう

どうやら、秋刀魚を獲る漁船を護衛するようだ

「今回は、秋刀魚を獲る漁船を守る。…鎮守府秋刀魚祭りを行う

編成は紙に書いている通りだ」

紙には、明日出撃の艦娘の名前が書かれている

僕の名前は出撃欄に書かれていない

「この作戦は、漁船を守ることであつて敵を撃滅する必要はない

それを念頭に置いて、護衛して貰いたい」

新米の艦娘が安堵するのが分かる

「また、秋刀魚漁の手伝いとして、一部の艦娘は聴音機や探信儀を装備して、夜出撃の艦娘は探照灯を積んで貰う

決行は、明日だ

質問はあるか？」

艦娘は、誰も手をあげない

「ないようだな、じゃ、夕食にするか」

あいつは何を考えているのだろう

出撃させることもなく、ある程度訓練に参加していれば、何も言つてこない

艦娘のこと気遣い、大切に行っている

駄目だ、人間は信用してはいけない

また、また騙されるんだ、きつとそうに決まってる

そう、時雨は自分に言い聞かせた

## 鎮守府秋刀魚祭り2

ぼーん!!

遠くで爆発が起こる

「さっすが不知火!

指揮も、実戦もばっちりだね」

私は相棒に笑いかける

『いえ、陽炎の方が指揮も実戦も優れています

私は、そんな陽炎を援護するのが性に合ってます』

「もう、嬉しいこと言ってくれるじゃない!」

と相棒を抱きしめる

そんな二人を呆れたように眺める三人の駆逐艦娘

『私が、索敵機出してるからって油断しないで!」

漁船の周辺を警戒してね』

祥鳳が駆逐艦娘に指示を出す

私達が護衛する漁船は五隻

漁師さん達は、護衛してくれるなんて嬉しいと言ってくれた

漁船が魚を獲るのを見てみると、かつて私達が命をかけて守ろうとした遠い故郷を思い出す

この世界の人々も私達のいた世界の人々も違う所なんてない

本来、戦争に巻き込まれることなく平和に暮らすことが出来るはずだったんだ  
だから、私達はまた守らないと… この人々を

「無事漁船を守り、秋刀魚を獲ることが出来ました

漁船の方々からも感謝の言葉を貰いました」

「そうか、良かったな！

今日は、もう出撃はないから、のんびりしてくれ

ここで、紅茶を飲んでいてもいいが」

執務室のソファアールでお茶している金剛と出撃の終わった艦娘達が紅茶を飲みつつ、茶菓子を食べている

「ヘーイ、司令官！



一緒に tea time しましょウヨー!」

「次で昼の出撃終わるから、そしたらなー」

「つれない上司は嫌われるヨー?」

「職務をしない上司の方が嫌われると思うなあ」

そんな俺と金剛の会話を聞き、苦笑しながら祥鳳達は金剛から紅茶や茶菓子を貰う

「そう言えば、司令官」

翔鶴がまた新しい装備を貰ったと聞きマシター

私も新しい装備欲しいデース!」

「例えば?」

「そうですねー

41cm——」

「却下」

「Why!?!」

「当たり前だろ

そんなもん積んだら、重くて命中率下がるだろ」

「むー

でも、テートクのハートを射止めるには、火力が欲しいネ…」

「主砲の代わりになんか用意するから、我慢しろ」

「司令官…」

それなら、私にも新しい装備が欲しい…」

秘書艦の響が紅茶を啜りながら、言う

「響達は、10cm連装高角砲あげたじゃん」

「もつと活躍したいんだよ…」

「そう言われてもなあ…」

そう言いつつ、漁船を護衛する艦娘達の様子を見る

特別異常はないようだ

「活躍すれば、司令官に褒めてもらえるでしょ…？」

「そして、お菓子を貰うと」

「頑張ったんだから、それぐらいはくれないと…」

どや顔で胸を張る響

「はあ、さいですか」

「ちよつと、司令官は私に冷たいと思うな…」

「え…!？」

「そうかな?ごめん、響!」

慌てる俺を見て、響はクスリと笑う

「冗談だよ… 司令官」

「もう、からかうのは止めてくれよ」

「でも、司令官、ずっと艦娘の様子を見ないといけない訳じゃない…」

「気張りすぎでも、体がもたないよ…？」

「そうよ！」

「もっと私に頼っていいのよ？」

「たまには、私達を信頼して休憩しないと」

「なのです！」

スコーンを口に頬張りながら、口々に言う

いや、説得力全然ないぞ

と思つたが、第六駆や他の艦娘に包囲され運ばれる

「ちよ、待つて、押さないでつて」

そして、ソファアに座らされ、紅茶が手渡される

紅茶のいい香りと暖かさが体に伝わる

温かいし…

うわ、流石金剛！

紅茶うめえ

急に眠気が襲う

うう、駄目だ… 寝たら艦娘もいるのに…

うーん…

頭に、弾力があって暖かい枕のようなものが置いてある感触がある

「ん…

なんだ…」

俺は、目を開けると響が俺の顔を覗き込んでいた

え…!?

「うわあ!?!」

俺は、驚き転げ落ちる

そして、俺は執務室のカーペットに落ちた

「うぐ…」

「いてて」

「司令官… 大丈夫かい…？」

「ああ、大丈夫、大丈夫」

他の艦娘達はもういなくて、響と俺だけだった

俺が寝ていたソファアをみると枕らしきものはない

「司令官…これが瑞鳳達の報告書…」

那智が率いる艦隊は、もう出撃して漁船と合流したって…」

「了解だよ」

所で、枕みたいのが見当たらないのだけど…」

「ああ…」

私が膝枕していたんだ…

どうだったかな…？」

ちよつと、恥ずかしそうに訊いてくる響

「え… あ、うん」

とても、良かったよ

おかげで、ぐっすり寝られたよ」

「恥ずかしさで頭がショートしそうだったが、なんとか言葉を返す  
「そうか…」

それなら、また膝枕をしてあげようかな…

さ、食堂で夕食を食べようか…」

はにかみながら、響は執務室のドアを開ける

「あ、ありがとう」

「恥ずかしさを誤魔化すように、響の頭を撫でて執務室を後にした

## 鎮守府秋刀魚祭り3

もう、出撃と遠征は絶対しないと決めていたのに

ここの艦娘が幸せそうにしているからか、僕はいつしかここの艦娘を守りたいと思うようになった

執務室のドアをノックしようとするが、その手は止まる

手は震える

不安と恐怖：：

自分の弱い部分が止めるよう唆す

もう、僕の守るものなどないと

そんな考えを振り払うようにドアをノックする

コンコン

「どいどい」

中から声がする

俺は、また机に突っ伏して寝ていたため、吹雪に怒られることとなった

「いつも、言っていますよね？」

無茶しては駄目ですって」

「…はい」

「なのに、何故無茶しているのですか？」

「吹雪、俺は机に突っ伏して寝ることは無茶とは——」

「無茶です」

風邪をひいたら、どうするのですか？」

「大丈夫だって、人間そう簡単に風邪をひかないって」

「駄目なものは、駄目です！」

「吹雪は、真面目すぎるんだよー」

ちなみに昨日寝るのが遅くなったのは、吹雪の約束を守るため艦娘外出許可書を書いていたからだ

「司令官は、緩すぎます！」

コンコン



「どうぞ」

ドアが開き艦娘が入ってくる

「ああ、時雨かおはよう

何か用か？」

俺は努めて普通に接する

べ、別に怖い訳じゃないぞ！うん

「提督にお願いがあつて来たんだ」

「そうなの？」

「僕を出撃させて欲しいんだよ」

「え、まあ、いいけど」

「昼でも夜でもいつでもいいし、1日何回でもいいから」

「え、いや、一日一回で十分だから！」

ただ、その代わりお願いがあるんだ」

動揺を悟られないように、話す

まあ、隣の吹雪が凄く動揺してて意味あるか分からないが

「お、お願い…!？」

時雨が怯えるように聞き返す

「え、うん

神通にね、対潜攻撃について教えてあげて欲しいんだよ

時雨は、対潜の経験も多いらしいからさ」

「う、うん

分かったよ」

さつきの反応といい、素直すぎることにいい、いつもの俺を見るだけで殺気立つ時雨  
じゃないみたいだ

「あの、時雨大丈夫？」

「だ、大丈夫だよ」

そう言うと時雨は、出て行ってしまった

「どうしたんだろうなあ… 本当」

司令官は、心配そうに呟く

「私、噂何ですが聞いたことがあるんです」

私は、思い悩んでいたことを話す

「どんな噂？」

「時雨ちゃんが一番最初に着任した鎮守府の提督は暴力をする上——」

「……大体、分かった

もしかしたら、俺のこと怖いのかもな……

ちなみに、その提督は？」

「憲兵に捕まって確か、極刑に

以来、艦隊司令部は厳しく見張っているみたいですけど」

「吹雪は、そんな目にあってないよな？」

「え？」

あ、はい！

私は、横須賀第一から、トラックに転属になって、それからここに配属されたので

「そっか……良かった……」

「私は、運が良かったのかも知れないです

変なことをする司令官に出会わなかったから……」

「そうだなあ」

ニヤリと笑った司令官がいきなり私の頬をつつく  
「ふあ!？」

や、止めてください

「いや、ブツキーの頬プニプニだったなと

ちよつと、摘まませてよ」

「駄目ですよ!」

「ケチー!」

私は、司令官の気遣いがありがたかった

昼飯を食べ終わり

護衛している艦娘を見守りつつ、書類を処理する  
吹雪は、疲れているのかソファーで寝てしまった  
カキカキ

コチコチ

カキカキ

コチコチ

俺の書類を書く音と時計の音以外に何か聞こえる  
無線でもない…

原因を探すため部屋を見渡す

「吹雪?」

吹雪がソファで寝ていたのだが、魘されている

「吹雪?」

大丈夫か?」

「う…」

青葉さん… 逃げて」

「しっかりしろ、吹雪」

「もう、私は… 駄目… だから

みんなも… 逃げて…」

吹雪の頬を涙が伝う

俺は、堪えきれなくなり吹雪を抱きしめる

「大丈夫、吹雪!」

青葉も古鷹も、無事だから！

頑張ったな吹雪!!」

「うう…」

本当…ですか…？」

「本当だ！」

そう言うと、安心したのか吹雪の力が抜ける

吹雪をソファーに寝かし、隣に座る

そう言えば、吹雪が轟沈したのは、10月頃か…

サボ島沖海戦で、吹雪は敵艦の集中砲火を受けて轟沈した

艦娘には、少なからず艦の記憶が残っている

だから、人々の平和を願い日々戦う

だが、いい記憶ばかりじゃない

艦娘のほとんどの艦が戦いで轟沈している

中には、人間に強く恨みを持ってもおかしくない娘もいる

俺は、同じ艦娘でないと分からない苦しみを痛感した

「ん：： あ、司令官！」

「ごめんなさい！寝すぎてしまいました」

「大丈夫、今終わった所だ」

司令官は、悲しそうに私に微笑む

「あの、何かあったのですか？」

「なんでもないよ」

そう言う司令官の顔はいつものように明るかった

「正直に話してください！」

「何があったのですか？」

そう問いかけても、司令官は首を振るばかりだった

## 鎮守府秋刀魚祭り4

「若葉、今日はよろしくお願いするよ」

「司令官よろしく」

若葉が挨拶する

「じゃあ、執務を少ししたら、朝食を取ろう」

若葉は、ちよつとだらしなないイケメン風の少女だ

「司令官とは、少し話して見たかったからな」

秘書艦を出来て嬉しい」

「おう、じゃあ朝食の時やおやつの方に色々話すか」

「そうしよう」

若葉はてきぱき書類を整理し始める

意外だなーとか思いつつ

書類を片付けていった



「そろそろ、朝食に行こう」

「ん、あ、そうだな」

若葉が執務室のドアを開ける

「ありがとう、若葉」

「大したことじゃない」

若葉はドアを閉めながらそう言った

「俺さ、みんなの役に立ててるのかな」

うっかり、愚痴を溢す

「あ、すまん、今の忘れ——」

「立ててる」

「え？」

「司令官は、ちゃんと役に立ててる

私を保証する」

「ありがとう、なんか安心したよ」

「なら、良かった」

食堂は、いつものように騒がしかった

そして、毎度のように駆逐艦娘がおいかけてっこして間宮に怒られている

今日は新作があるとのことなので、それにした

すると、コロツケに味噌汁、ご飯、栗が出てきた

「ふーん、コロツケか…」

久しぶりにコロツケを食べる

あまり好みではなかったのですが、前の世界でもあまり食べなかったのだが、間宮の料理

はどれもとても美味しいため期待が高まる

「頂きますー！」

パクサク

中はホクホクで美味しい

こう、程よい味付けとちよつと芋の食感が残る感じが凄くいい

「うまひ…こんなコロツケ食べたことないぞ」

「そっか、良かったな司令官」

若葉も美味しそうにコロツケを食べる

美味しかったので、あつという間に食べ終わり果物を食べるだけになった

俺は栗3つで、若葉はキウイフルーツ半分だ

栗の皮を剥き実を取り出す

「若葉これやるよ」

さっきのお礼だ」

「うむ、お礼を言う」

若葉の手に栗を渡した

執務室に戻り執務を再開する

若葉が思ったより優秀で夕方頃までかかると思っていた執務は昼前に終わった

「ふう、今日はありがとうな

お陰で、早く終わったよ」

「私は24時間寝なくても大丈夫なんだが

もう、執務はしないのか？」

「ああ、残ってる書類は明日のだし

さ、昼食食べてそれから書類を置きに行こう」

昼食を食べ終わり、書類を置きに行った帰り

「若葉：

若葉は、初霜と雷をどう思っているの？」

「初霜は、大事な妹だ

雷は、親切な教官だな」

ふーん、仲良さそうで良かった

「そっか、それは良かった」

俺と若葉は、角を曲がる

「それに二人は——」

「きゃあ！」

司令官!？」

「なのですか!？」

俺は、咄嗟に電を受け止める

うぐっ

真正面からとは言え、流石に痛かった

雷は若葉とぶつかる

若葉はふらついたただけだったが、雷は転んでしまった

「大丈夫か、雷?」

若葉は、手を差し出す

「だ、大丈夫よ！」

それより、ごめんなさい」

目を逸らしながら、雷は返事をする

「はわわ！」

司令官さん、ごめんなさいなのです」

「ん…… ああ大丈夫だ、問題ない」

雷と電の頭に手を乗せて注意する

「でも、廊下を走るのは駄目だぞ

分かったな？」

「はいー！」

そう言つて二人は歩いて行つた

「はあ、全く若葉大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ」

「鎮守府で大破とか洒落にならないからな」

扉を開けて外に出る

すると、前から初霜が皿を持って現れた

う、なんか嫌な予感が…

「どうした初霜？」

「ああ、若葉

クッキー焼いてみたの

司令官と一緒に食べようと思つて」

そう言い、早歩きでこちらにくる初霜

「ゆつくり来なよ？」

「転ぶといけないしさ」

「大丈夫です！」

そんな簡単に転びは——」

初霜は、足元にあつた石に躓き前に転ぶ

その先には若葉が……

俺は、咄嗟に若葉の前に出る

そして、熱々のクツキーの雨と初霜の突進をもろに受け倒れる

「うぐ…… いった……

若葉大丈夫か？」

「なんとか大丈夫だ」

「初霜も大丈夫か？」

俺の上でフリーズしている初霜に声をかける

「あ…… 大丈夫ですよ……

それより司令官は！」

「ん？」

俺なら大丈夫」

「良かったわ！」

でも、クツキーが…… せつかく焼いたのに……」

サクサクモグモグ

「し、司令官?!」

「俺の服の上にある奴なら、食べられるだろ？」

初霜がせつかく焼いてくれたんだ

食わんわけにはいかないだろ？」

「私も頂こう

今度はお茶付きでゆつくり食べような？」

若葉が初霜に微笑んでそう言う

初霜は、顔を真っ赤にして顔を背ける

そんな様子を見て、俺は思わずクスリと笑った

若葉とお茶の用意をしていると

無線から呼び出し音が鳴る

基本、呼び出し音は戦闘終了時の報告をする時に使われる

俺は、無線に応答するため机に向かった



## 鎮守府秋刀魚祭り5

机に向かい、金剛に連絡を取る

「金剛どうした？」

「数分前」

金剛三番機は哨戒をしていると敵機を発見する

敵機は、三番機に気が付かないのかそのまま反転して飛び去っていく

三番機は、

『我敵偵察機ヲ発見ス』

と打電し、敵機を追う

暫くすると敵機は降下し始め、三番機は敵艦隊を発見する

『我敵艦隊見ユ』

大型艦三小型艦三』

そう打電すると機体が空中分解しないぎりぎりの速度まで降下して加速する

その後ろから異形の艦載機が追いかける

『ナオ、敵艦隊ハ空母ヲ伴フ』

我、戦闘機ノ迎撃ヲ受ケル』

三番機は、戦闘機を撒くため雲の中へ突入した

『司令官！』

敵主力艦隊に遭遇したネー

空母を伴っているから、捕捉されたかもしれないデース！』

『分かった』

至急機動部隊を派遣する

流石に金剛でも艦載機相手にしながら戦うのは辛いだろ？』

『そうですネー』

ちよつと遠慮したいデース』

『じゃあ、金剛、暁、響は後退しつつ撤収する漁船の援護

時雨、皐月、文月は、撤収する漁船を護衛してくれ』



暁と響も頼む』

『分かったわ!』

『了解!』

『じゃあ、臯月と文月も頑張つてな

では、健闘を祈る』

司令官からの無線は切れた

『時雨!』司令官の言ったことしつかり守つてくださいネ?』

「善処は、するよ」

そう僕は呟いた

「若葉、残念だけどおやつはお預けみたいだ

ごめんな」

「仕方ない

で、司令官どうする?」

ちよつと残念そうに若葉は言う

「翔鶴、吹雪、電、雷、神通、川内を呼んでくれ」

「了解だよ」

「俺は、大淀に用があるから行ってくる」

「分かった」

コンコン

「どうぞ」

「失礼します」

「どうしました？」

提督が書類を書く手を止め尋ねる

「大淀に用がありました」

大淀ちよつといいかな？」

「はい、どうしました？」

大淀が首を傾げる

「製油所地帯に敵艦隊が、出現した

万が一があるから、製油所地帯の住民に警告をと伝えたい

我艦隊が撃滅に向かうとも伝えておいてくれ」

「分かりました

大淀直ちに連絡します」

「頼んだ

俺は、第二執務室にいるから

何かあつたら来てくれ」

「了解です」

俺は、そう言うのと執務室に戻った

## 鎮守府秋刀魚祭り6

「集まって貰った理由は、鎮守府秋刀魚祭りに出ていた艦隊が1—3海域で敵主力艦隊に遭遇したからだ」

敵艦隊には、空母が含まれており金剛達では対処不能と判断し

直ちに援軍を送ることにした」

「「「了解（なのです）！」「」」」」

「では、装備を受け取ったらすぐ出撃だ！」

「あ、一つ質問いい？」

「なんだ、川内？」

大体、質問の予想は付いている

「今日の夜間組の出撃は——」

「勿論なしだ」

川内の表情が絶望に変わる

今日の夜間組の出撃の中に川内が含まれていたのだ

昨日、発表の時はしやぎまくって駆逐艦娘達に白い眼で見られ

挙句の果てには、神通と那珂に

「川内姉さん恥ずかしいから止めて！」

とハモられ、能気な川内も流石にシヨボーンとしていた

「そ…んな…楽しみにしていたのに…」

膝をつく川内

流石に可哀想に見えたのか吹雪や雷電姉妹も慰めている

「川内さん、元氣出してください！」

もしかしたら、敵艦隊との戦いが長引いて夜戦になるかもしれない！」

「そうよ！」

しかも、これからも戦いは続くわ

いつか出来るわよ」

「な、なのです！」

うん、きつと慰めているんだろう

「う…う…う…」

「な、なあ、川内？」

ほら、明日の夜間組に入れてやるからさ

元氣出してよ！」



「本当に!？」

ガバツと川内は起き上がり、目を輝かせる

「本当、本当」

川内の後ろではさつきまで慰めていた駆逐艦娘が呆れている

まあ……川内が喜んでるし……いいだろ

「本当に本当の本当!？」

「本当に本当の本当だから、出撃してきなさい」

「分かったー!」

川内は、執務室のドアを思いっきり開けて、廊下を駆けていく

「姉がご迷惑をおかけします……」

「いや、川内は元気なのが長所の一つだろう?」

「そうですね……ありがとうございます」

「いや、お礼を言われることじゃないよ

じゃあ、頑張つてきてくれ

勿論、全員無事でな!」

「「「「はー!」」」」

「Fire!!」

金剛は、零式通常弾を放つ

ボン

三十機程度の編隊に爆発が生じ、半数が降下を始める

『凄いわ、金剛さん』

あんなに撃墜するなんて!!』

『…いや、暁よく見てみて…』

一機か二機は煙噴きながら墜ちてるけど、他は編隊を組ながら降下してる…』  
響の言う通り墜落したのは、一機二機でほとんどが編隊を組んで突撃してくる

「Shit!!」

艦爆と艦攻に分離して数が減れば当たりにくくなる

でも、数は三十機…敵は恐らく軽空母ネ!

なら、無傷で凌ぎきれマース

「暁、響、時雨！」

対空戦闘用意！

可能な限り無傷で切り抜けマース!!」

『『了解!』』』

金剛は、覚悟を決め空を睨み付けた

テートク、私の勇姿見てくださいネ!

## 鎮守府秋刀魚祭り7

高角砲と副砲が火を噴く

敵艦攻隊に猛烈な弾幕が襲いかかる

五機程墜落し、数機が煙を噴く

『Падение!』

響が主砲を放つ

一機が墜ち、もう一機がぐらつく

『中々墜ちないな...』

そう言う響に艦爆小隊が攻撃態勢に入る

『響!』

艦爆直上よ!』

暁が主砲と機銃を放ち的確に艦爆を狙う

艦爆は態勢を崩され、攻撃を中断する

再度攻撃しようにも、高度を上げるのに時間がかかるだろう

「金剛、気をつけて...上」

時雨が主砲を放ち、雲に隠れていた艦爆に牽制する  
同時に死角にいた攻撃体勢に入る艦爆に機銃を放つ

『Oh! sorryネ!』

『電並に対空戦闘上手いわね、時雨!』

「僕は、対空電探があるからさ…」

そう、13号対空電探を装備しているため、死角にいた艦爆を捕捉出来たのだ  
…でも、なんであいつは、僕から対空電探を取らなかつたのだろう…

電探は貴重なのに

かつての指揮官を思い浮かべたが、すぐそれは爆雷連合攻撃を防ぐために意識を上空  
に向けたため掻き消された

「とりあえず、凌ぎきつたネ…」

各艦損害を報告するデース!

『暁は、ちよつと機関から変な音がするわ!』

それ以外は特にないわね』

『こちら響…』

魚雷管一門が破片を食らって使用不可…』

『時雨、特になし』

損害は、軽微で切り抜けられたのは、luckデシタ

「じゃあ、敵艦隊をdestroyしに行きまショウ！」

『…残念ながら、そうはいかないみたいだ

対空電探に感あり

南西方向に数60!』

「What!?!」

敵空母は、ヲ級!?

もしくは複数いる可能性も…

これは、少し厄介ネ

『ん…あれ?』

困惑した時雨の声が無線機からする

「どうしたのデース?」

『いや、新たな編隊が北東方向に…』

数は、20』

「ナルホド：。」

敵空母が放ったのか、それとも

『こちら暁！』

南西の敵編隊が分離したわ！

んー

恐らく戦闘機と攻撃隊に別れたみたいね』

『こちら響：』

北東の編隊は：：翔鶴隊の烈風：：！』

『こちら翔鶴隊烈風隊長機、遅れて済まない

まだ、獲物は残っているか？』

「まだまだ、たくさんありマース！」

『了解した！』

『よし、これより攻撃隊への攻撃を開始する

一番機から十番機は戦闘機の相手をする

残りは、攻撃隊を食い荒らせ！』

『了解！』

烈風隊は悠然と戦闘隊に突撃し、敵戦闘機に真正面に戦いを挑む

敵機が発砲するがその弾が烈風には当たらない

烈風は機銃をいとも簡単に回避すると、お返しに20mm機銃を放ち、それを受けた戦闘機は爆発四散する

零式戦闘機52型は、20mm機銃2に7.7mm機銃2に対し

烈風11型は、20mm機銃4と火力が大幅に上がっている

重くなった機体は、機体の空気抵抗を抑えかつ馬力の高いエンジンを搭載することで力強くかつ軽やかに空を翔る

早速、五機の敵戦闘機が撃墜される

烈風は、十機と十一機に分かれて攻撃し、敵機はもうすでに翻弄されつつあった



## 鎮守府秋刀魚祭り 8

マフラーをした少女は、人がいない道を歩く

周りには建物だったガラクタが転がり所々車だった鉄屑も転がっている

暫く進むとジェット戦闘機が墜落しているが少女は気にすることなく目的地に向かう

着いたのは飛行場

そこに、女性がいた

《無事みたいねえ》

成果はあつたのかしら？》

「上々かな…」

赤城と翔鶴は？」

女性は一つの建物を指す

周りの建物はことごとく破壊されているが、その建物だけは無事だった

「Спасибо…」

じゃあ、また後で…」

赤城と翔鶴がいる建物に向かいながら手を振る

その建物のドアを開けると黒い雨具を着た子が敬礼する

《お帰り、ヴェル！》

また、遊ぼーよー》

「んー」

後でかな…

赤城達と話しないとだし…」

《そっかー

残念…》

ヴェルと呼ばれた少女は落ち込む少女の頭を撫でながら建物の中に入った

敵戦闘機の数、十二機

烈風は、十機

数では未だに負けてはいたが、烈風の方が性能も練度も上だった

烈風の一機が果敢に敵機に攻撃を仕掛ける

敵機は逃げ回るが烈風からは逃げ切れず撃墜される

だが、二機一組で動いていたためもう一機に後方、斜め上を占位されてしまう

ここは、航空戦において必勝のポジションで烈風がどちらに逃げても対処出来る位置だ

雷撃機や爆撃機には、この位置にいる敵機の攻撃を妨害するため、後部機銃がついているが、烈風は戦闘機でそんなものは付いていない

しかも、烈風は敵機を落とすため速度を落としていた

『十番機無闇に突っ込むな！』

撃墜されるぞ』

敵機が機銃を烈風に向かって撃つ

12. 7 m m機銃6門が火を噴く

烈風は、機体を振り回避を試みるが主翼や胴体に機銃を受け主翼からチヨロチヨロと火が出る

しかし、烈風は墜ちない

火も自動防漏式防弾タンクと自動消火装置によってすぐ消された

敵機が再度攻撃しようとしたとき、横から機銃弾が襲いかかり撃墜される

『済まない三番機』

『いいって』

それより、お前は翔鶴さんの所に戻れ』

一機の烈風は、戦場を離脱し翔鶴へと戻っていく

『敵機を落とすことも大切だが、敵編隊を乱すことも心がけろ！

では、各組突撃せよ』

鷲が小鳥の群れを襲うように烈風は攻撃隊を食い荒らす

僅かに攻撃隊の直掩をしていた戦闘機が烈風を追い払おうとするものの、焼け石に水の状態だった

だが、攻撃隊も黙ってはいない

無鉄砲に突撃してきた烈風に7・62mm連装機銃を6機で集中砲火する

烈風は、防弾ガラスが粉々になり、主翼がぼろぼろに破壊され悲鳴をあげて墜落する

『よくも十六番機を喰らえ！』

だが、1機の烈風を落とした6機の艦爆も他の烈風によって落とされる

攻撃隊の一部は烈風の脅威から逃れたが、かなりの数が撃墜されていた

「翔鶴のお陰で助かったネー」

金剛は、対空戦闘で少しススがついていたが、損傷は負っていないかった  
暁達も同様に損傷は軽微だ

『烈風凄かったわね！』

鬼神のように暴れまわっていたわ』

『<sup>ダ</sup>aa』

『あんな機体見たことがないよ』

翔鶴は、凄いんだね』

『そうよ』

翔鶴さんは、凄く頼りになるんだから！』

「そうですネー！

ブツキーや白雪に次いでのお古参ですカラ

周りからの信頼も厚いデース」

『もつと自信を持つてもいいと思うけど…』

響が呟く

そこに打電が入る

『コチラ、金剛三番機

敵艦隊ヲ捕捉ス』

そして、位置を報告する

「三番機は、後で褒めてあげないといけません」

『なんとか凌ぎきったみたいだな！』

まもなく、翔鶴達が到着するから待っていてくれ』

「了解ネ」

『三番機には、感謝しないとな』

まあ、金剛がちゃんと整備していたからというのもあると思うが』

「褒めても何も出ないデース！」

顔を真っ赤にしながら、手を振る金剛

暁達はそんな金剛が面白く笑い始める

「ちよ、笑うの止めるデース!!」

『だって金剛さんが可愛いんだもの』

『確かに…可愛いな…』

『ふふふ、この鎮守府は笑いが絶えないね』

『もう、暁達のことなんて知りませーん!!』

そう言っつてパイとそっぽを向く金剛を見て四人はまた笑った

# 鎮守府秋刀魚祭り9

金剛達に翔鶴達が合流する

『烈風が間に合って良かったです』

『本当、翔鶴には thanksネ!』

艦隊は再編を行う

旗艦金剛

神通

暁

響

時雨

旗艦吹雪

川内

雷

電

翔鶴



「みんな、一緒に頑張りましょう！」

『『『はい！』』』』

私が旗艦をやるなんて、横須賀やトラックにいた時には夢にも思わなかった……けどこれからも、ずっと旗艦をやれたら……でも私は旧式艦だから無理だよね……

吹雪にしては、珍しく後ろ向きな考えをしていたが、敵艦隊のことを考えるにつれ忘れていった

敵艦隊を最初に攻撃したのは、翔鶴の放った攻撃隊だった

零式艦上戦闘機52型十五機

彗星二十機

九七艦上攻撃機二十一機が順番に編隊を組んでいる

ヲ級が叫び、攻撃隊を直掩機が襲いかかる

十機の零戦が増槽を切り離しこれを迎撃する

烈風のように戦闘機の機銃を軽やかに避ける

お返しに7・7mm機銃二挺を放ち敵機を落とす

しかし、7・7mm機銃では火力が低く烈風のように敵機を落とせない

避けるタイミングをミスした零戦が炎に包まれ、主翼のもぎ取られた敵機が墜落する  
零戦は練度も高いが、敵機は零戦の弱点を知っていて無理な格闘戦に応じないため苦戦する

『ああ！』

逃げやがって格闘戦に応じろってんだ！』

『お、い！』

三番機後ろ付かれてんぞ』

弱点を知っているからといって、性能と練度の差は中々埋まらない  
敵機の数の有利はまもなく失われ、制空権は艦娘が確保しつつあった

一方、攻撃隊は戦闘機に襲われず悠々と敵艦隊に接近していた

一機の零戦が何かを発見し、増槽を切り離して急降下してくる機体と左右から挟撃しようとしている機体を迎撃し始めた

艦爆五機、艦攻四機が攻撃機を襲う

零戦が艦爆や艦攻を撃墜するもすり抜けた機体が爆弾や魚雷を抱えて動きが鈍い彗星や97艦攻を撃墜する

彗星や97艦攻が後部機銃を乱射し必死に逃げる  
零戦が敵機を全機撃墜する間に編隊は乱され、そのまま敵艦隊の弾幕に突っ込んだ

「撃ちマース！」

Fire!!

攻撃隊も苦戦したようですが、敵艦の数を減らしてくれたのは、ありがたいデース  
四隻に減った敵艦隊を見て、そう思う

敵艦隊は

戦艦一、重巡洋艦一、空母一、軽巡洋艦一だ

対してこちらは、私に神通、暁、響、時雨

神通は重巡洋艦相手でも引けは取らないし、暁達も軽巡洋艦の相手は出来る

慢心しなければ、金剛には勝てる自信があつた

しかし、それは直ぐに打ち碎かれることになつた

私は、その建物の食堂へ向かう

壁には、英語と思われる言語で何か書かれている紙が所々にあつた  
食堂に着き扉を開ける

中には、大量のご飯を前に食べまくっている赤城と苦笑いで見守る翔鶴がいた

「あら、ヴェルお帰りなさい」

「ほはあえりなふあい」

「赤城さん、口に物を入れながら喋らないでください……」

「ふあい」

「では、ヴェル報告をお願いします」

「了解……」

呉第三鎮守府と舞鶴第三鎮守府に潜入した

呉第三鎮守府に関して色々あるため、後回しにするね……」

「分かりました

舞鶴第三鎮守府：… 貴女がもといた所の報告をしなさい」

「私がいた時より、無理した出撃、遠征は行っておらず：…

確実に戦果をあげていたね：…

彼処は練度の高い艦も多く、早めに対処をするべきと思った：…

人間を殺害し、艦娘を引き込んだよ：…」

「引き込めない艦はどうしたのです？」

「全艦撃沈：…

生き延びている艦娘はいないはず：…」

「分かりました：…

所で、貴女の親友はどうだったのです？」

「残念だけど、呉第三鎮守府に転属になってたから、会うことが出来なかったね：…」

「確か：… 呉第三鎮守府の次に舞鶴第三鎮守府に向かったので、行き違いになってしまったのですね

仕方がないです」

「次は、呉第三鎮守府の報告だけ——」

## 鎮守府秋刀魚祭り10

「次は、呉第三鎮守府の報告だけ…ここは凄く特殊だった

まず、提督と司令官で指揮官が二人いたよ…」

「なるほど？」

「そして、司令官はこの世界の人間じゃない

私達が元いた世界の人間だった…」

「な…!？」

「それは本当ですか？」

ヴェールヌイ  
Верныйさん

赤城が食べるのを中断して話す

「本当だよ…」

直接会ってみただけど、不思議と殺意は起こらなかった…」

「……………」

二人は、黙って聞いている

「私はおかしくなってしまったのだろうか…」

あんなに、ニンゲンが憎いのにな……」  
「……推測でしかないですが……」

もしかしたら、私達は……いや、元艦娘の私達は、艦の記憶のいい思い出も悪い記憶も残っているからかもしれない」

赤城がどこか遠い所を見ながら言う

「……そんな記憶いらないけどね」

苦虫を噛みつぶしたような顔で翔鶴が呟く

本当その通りだ

ニンゲンを殺すにあたり邪魔な記憶でしかない

「報告を続けてもいいかい……？」

ちよつと不機嫌そうに私は言う

「いいですよ」

「しかも、その司令官はまだニンゲンに認知されていないはずの深海棲艦の名前の一部を言い当てたよ……」

私達が轟沈した場合、深海棲艦になるという話を前の世界で聞いたらしいんだ……」

「つまり、前の世界では深海棲艦がいる……ということ？」

首を傾げる翔鶴

「でも、問題はそこではないわね

私達の情報を知っているということは、私達の弱点も知っているかもしれないという  
ことよ」

赤城は、危機感のある声で言う

「それは、ないと思う…」

「18才で学生と書類に書かれていたから…」

「信用出来るか分かりませんが、放置するにしても対策するにしても、調査が必要ね

それで、その鎮守府の運用は？」

「艦娘第一の運用で戦果を無理にあげようとしないうだね…」

轟沈艦も今の所零」

「ふーん…」

もう、報告はない？」

「ないね…」

本当は、言うべきことがあったが伏せておく

確認が取れてからでも、遅くはないだろう

「なら、ご飯にしましょう♪」

雷さんや雪風さん、レ級さんもヴェルさんが帰ってくるのを首を長くして待っていた



のですよ?」

「多分: : そろそろ鍋を抱えて来る頃かな」

暫く経つと廊下からドタバタと走る音がした

Shit!!

まさか、敵戦艦がタ級flagshipだったトハ: :

ドーン!!

何度目かの斉射を放つ

敵戦艦に煌めきが生じるも依然小破: : 火力も全然落ちていない

金剛は、至近弾で切り抜けたためまだ小破程度の損害しかうけていないが、16inch三連装砲: : およそ41cm砲と同様の砲弾をもろに受ければ一発大破もあり得る

それにしてもおかしいデス

水偵も飛ばしてないのに、こんなに正確に撃つてくるなんて……このままじゃ不味い  
ネ

神通達も苦戦している

神通はり級flagshipとの交戦で大破後退して、代わりに時雨が相手にしてい  
る

暁と響は、へ級flagshipに果敢に攻撃するも、今一決定的な打撃を与えられ  
ない

一進一退する戦況を打破したのは、艦載機の少ないヲ級だった

金剛は、左舷から接近する十数機の艦載機を発見する

ヲ級まだ艦載機を残していたのデスカ!?

クツ……無視するシカ……

しかし、金剛の一瞬の迷いをタ級は見逃さなかった

金剛に副砲を命中させ、視界を奪う

そして、彼女の癖を見抜いていたタ級は右に回避することを想定して斉射する

金剛は、タ級の予想通り右に回避し三発命中してしまう

「ガア……ぐう……」

テートクから貰った大切な装備が……」

そこに敵機が雷撃と爆撃を行い金剛は吹き飛ばされる

『金剛さん!』

『く、私が金剛さんの援護に行く…』

暁は、軽巡洋艦の足止めを…!』

『響金剛さんを頼んだよ』

しかし、響と金剛は離れていて援護に駆け付けるまで時間が掛かる

夕級が勝利を確信したように砲を金剛に向けいたぶるように一門ずつ砲撃し、命中するたび金剛は吹き飛ばされる

『くそ!』

金剛、もう少し耐えてくれ!』

司令官の叫びが聞こえるが、もう私の体は動かない

ゆっくりと沈んでいくのが分かる

もう…駄目力モ…

『提督…どうか武運長久を…私…ヴェルハラから見ているネ…』

『金剛!』

何処から見ているって?』

夕級が水柱に飲まれる

『川内参上！』

夜戦なら、任せておいて!!』

夕級の後ろから、分離した艦隊の面々が登場する

『ちよつと、川内さん突出し過ぎないでください!』

川内の後ろから、吹雪がプンスカしながらついてくる

『いいじゃん、特型駆逐艦改!』

『ちよつと、川内さん、私達も特型駆逐艦よ!!』

『なのです!』

雷と電が川内につっこみ

『大丈夫かい...?』

金剛』

響は、私を支えてくれる

「さ、サンキュー、ネ... 響...」

『私には、吹雪って名前がちやんとあります!』

吹雪が川内に涙目になりながら、訴えている

『まーま、細かいことは気にしない、気にしない』

「この子達なら、大丈夫そうネ...」

私は響に曳航され、神通や翔鶴のいる所まで後退した

『まず、あの夕級を倒します！』

二発の魚雷が命中したにも関わらず中破したのみの夕級を睨む

金剛さんと神通さんを大破させ、響ちゃんや暁ちゃん、時雨ちゃんに怪我を負わせた  
こいつらをどうしてやろうか…

負の感情が電の心を支配しようとする

しかし、理性がそれを押し留める

雷が心配そうに見ている… 電の感情を悟られないようにしないと  
冷静にならないと… なのです

電は、自分自身にそう言い聞かせる

『特型駆逐艦！』

私が先頭になるよ』

川内が自信満々に言う

『え、でも、私が旗艦：。』

『いいから、軽巡洋艦は駆逐艦のお姉ちゃんみたいなんだからさ

さ、行くよ！』

『もー

無理しないでくださいよ』

『分かったわ！』

「了解なのです」

川内を先頭に突撃する

『之字運動！

ちやんとついて来なさいよ！』

乱立する水柱の中をすり抜けて雷撃する

『統制雷撃：。撃てー!!』

二十本以上の魚雷が夕級に迫る

夕級は、必死に魚雷を破壊しようとするも、数が多すぎる

そして、複数の爆発が生じる

『やったあ!!』

『司令官、私やりました!』

『早く、暁達助け——』

その瞬間、雷と川内に爆発が生じ吹き飛ばされる

「い、雷ちゃん!!川内さん!!」

電は、周りを見渡す

夕級の方は炎上していて、煙がもくもく出ている

そして、暁と時雨は満身創痍で倒れていた

相手をしていた、リ級とへ級はいない

まさか——

ギャーオオン!!

夕級の方から化け物の叫び声が聞こえる

そして、炎の中から夕級が姿を表す

『うそて...』

「電が足止めするのです

吹雪は、みんなの曳航を!なのです」

夕級が電達に砲を向ける——こともなく、夕級は空を睨む

夕級は、砲を空に向けた

『遅れてごめんなさい』

第二攻撃隊、攻撃開始!!』

烈風と零戦がヲ級の艦載機を撃墜しつつ、攻撃隊が夕級に攻撃を開始した

「司令官、お疲れ」

若葉が俺に話し掛ける

「ありがと、でも頑張ったのは俺じゃない」

「そんなことない」

だって待っているだけというのは…とても辛いだろ?」

俺の顔を覗きこんで言う

「……」

俺は、黙って冷めた紅茶を飲んだ



金剛達を出迎え入渠させたり、食堂で若葉とその姉妹艦達で夕食を堪能した後

若葉に秘書艦の仕事が終わったから、自室に帰るように言つて、俺は執務室で黙々と書類仕事をす

正直、鎮守府秋刀魚祭りの書類仕事は昼の処理くらいじゃ、とてもじゃないけど間に合わない

だから、夜な夜な処理している

コンコン

誰かが執務室のドアを叩く

誰だ？

と思ひながら処理している書類を隠す

「どつどつで」

「やっぱりか…」

入ってきたのは、別れたばかりの若葉だった

「どうした？」

「何か用か？」

「誤魔化さないでくれ

書類仕事、終わってないのだろう？」

若葉が冷めた目で俺を睨み付ける

「そんなことは…」

「じゃあ、机の下にある書類は何のためだ？」

「…… ああ、そうだよ

確かに、書類仕事は終わってない

吹雪達には言わないでくれ

滅茶苦茶怒られるから…… お願いだ！」

俺は、観念して若葉に頼む

「その代わりに私が書類仕事を手伝う」

「分かったそれで手を打とう」

こうして、俺と若葉で書類仕事を片付けることとなった

## 鎮守府秋刀魚祭り 11

ん…

若葉と書類仕事して…

あ！

俺寝落ちしちやっただった

「ううん」

伸びをすると毛布が落ちる

「若葉…」

なんて、気が利いた艦娘なんだ

今度なんか、お礼しないとな

と思いつつ執務室を出ようとドアを開ける

ゴン！

あれ？

「ふわあぁっ！

前髪が崩れちゃう」

阿武隈が髪を必死に直す

「あ、ごめん、阿武隈！」

「もう、気をつけてくださいよお」

かなり無茶言ってる気がしないでもないが、悪いのは確かに俺だよな

「まだ、朝食は早いかな..」

「ちよつと早いかも？」

司令官は、どうするの？」

「うーん..」

とりあえず、着替えてくるよ

阿武隈は、執務室で待っていてくれないかな」

「分かりました！」

あたし的にはOKです！」

「お待ちせ、じゃ食堂行こっか？」

小説を読む阿武隈に話し掛ける

「あ、はい！」

「そう言えば、阿武隈今は第二十一駆逐隊の指導をしているんだったかな」

「そうですね…」

ちよつと、阿武隈が落ち込む

「ん？」

なんかあつたのか？」

「いや、なんと言うか

子曰ちゃんが…」

「あ… ああ」

子曰が自由奔放に動き

阿武隈が「指示に従ってください」と涙目で叫んでいるのが思い浮かぶ

「まあ、頑張れ！」

「なんか、投げ遣りじゃないですか!？」

なんやかんやで食堂に着き

朝食を選ぶ

「うーん…」

じゃあ、おすすめ和朝食セツトで」

「私はいつもののでお願いします！」

俺の所には、焼き魚、納豆、ご飯、味噌汁、和梨二切れ

阿武隈は、フレンチトーストとコーヒ、洋梨二切れ

「ふーん、毎日フレンチトーストなのか……」

「二日に一度程度ですが」

阿武隈がフレンチトースト好きだったのは初めて知った

フランス料理が好きなのかなと考えていると

「別にフランス料理が好きなのはいいですけど……」

と言われ見透かされたようで恥ずかしくなる

俺の隣を争奪する駆逐艦娘達が間宮に叱られ俺に助けを求めたりしているが、俺は見ないふりをして阿武隈と話をしたり果物を交換したりした

帰り際に間宮を宥めて食堂から執務室に向かった

叱られていた駆逐艦娘が

なんでもっと早く助けなかったんだ

と言わんばかりに睨み付けてきたが、

いつもは、助けてるだろ！

少しは反省しろ  
と睨み返した

執務室に戻るとドアの前に駆逐艦娘の時雨がいた  
トラウマが・・・うう

大丈夫、俺が艦娘を怖がってどうするんだ！

「提督」

「は、はひ」

思わず声の上擦る

時雨が不思議そうに首を傾げるが気にせず続ける  
「何で、僕は今日出撃予定に入っていないんだい？」

「まず、俺は司令官なんだ——」

「どうでもいい」

「・・・」 ショボーン

「早く理由を言つてよ」

時雨の機嫌が悪くなる

「時雨の機嫌は直っているし、疲労も抜けてる

けど、時雨は昨日軽巡洋艦と重巡洋艦 f l a g s h i p にぼこぼこにされたんだ  
少し休んだつてばちは当たらないよ」

諭すように時雨に言うが

「嫌だ

休まなくていい」

頑なに拒否する

俺は、呆れるように言う

「なんで、そんなに出撃したがるんだ？」

目の前の青年は呆れたように質問する



… そんなのここの艦娘を守りたいから… だ

「ここの艦娘達を守りたいから… ただそれだけだよ」

「本当にそう思っているなら、夕立や響達と遊んだらどうなんだ？」

ちなみに、時雨の艦装の妖精は全員板チョコで買収しといたから勝手に出撃しようなんて思ったら駄目だからな？」

な、いつの間に！

妖精さんを見るとそっぽを向いているが口にチョコの破片がくっついていて

青年は、阿武隈と執務室に入ってしまった

時雨は自室に戻りながら、さっきの言葉を反芻する

僕は、ここの艦娘達を守りたい

この気持ちに嘘はないはず

本当にそれだけなんだろうか…

「阿武隈には、ファイリングと一部の書類仕事して貰うけど大丈夫？」

「あたし的にはOKです！」

「終わったら、あそこの本読んでいいからな」

阿武隈は本が読みたいのか、張り切って仕事をこなしていく

昼前には阿武隈の仕事は終わって

昼飯を食べた後、阿武隈は漫画や小説を読む

「あゝ」

「終わったんじゃ〜」

机に被さりグタアとする

阿武隈がクスクスと笑う

「司令官って以外と子供っぽい所たまにありますよね

「軍人じゃないみたいですよ」

「司令官とは言っても、18才の元学生だしねー」

グダグダしながら返事をする

「え!?!」

「司令官って18才だったんですか？」

阿武隈が読んでいた小説を閉じ質問する

「あれ？」

「知らなかったの？」

「私達と同じ世界から来たというのは、ほぼみんな知ってますけど…」

「作戦説明の時とかキリツとしているし、二十歳以上だと思ってきました！」

「そっか…」

「そう言いながら、紅茶の準備をする」

金剛直伝の淹れ方をする

ああ… いい匂いだなあ

「こうやって、紅茶を嗜むのも悪くないな…」

「バーン!!」

執務室のドアが思いつきり開く

「わあー」

「いい匂いっばい！」

執務室に飛び込んできた夕立と

「白露が一番艦なのにく」

夕立とほぼ同時に飛び込んできた白露

「ちよつと、夕立

ドアは、優しく開けるものだよ…。」

「この紅茶いい感じね」

呆れたように言う時雨と紅茶飲む村雨… ってそれ俺の紅茶!!

「司令官さん、どうしたっばい?」

「あ、うん…」

なんでもないよ」

紅茶を全員分淹れて席に着く

白露達は仲良く話をしたり、漫画を見合ったりしている

時雨も夕立から見せられた漫画を読んで笑っている

「—司令官?」

「…ん

なんだ、阿武隈?」

「なんか、司令官が寂しそうな顔していたから…。」

「気のせいだろ

それで、何の話してたっけ?」

「そうそう、翔鶴さんが毎日訓練してて

流石にし過ぎだと思つたのです！」

阿武隈が訴えかけるように俺を見る

「そうなのか？」

確かに、そう言われると翔鶴は毎日夜遅くまでしているような…

「司令官は、翔鶴さんを酷使し過ぎです！」

「え？」

「そうかな…」

訓練は、週三くらいに言つてあるんだけどなあ」

それ以外の日は、座学や遠征、演習、出撃等が入ったりするので、丸1日休みになるのは1日か2日程度だ

「え？」

あの訓練つて司令官の指示じゃないのですか？」

「違うよ」

とにかく、翔鶴に注意しよう

無理は禁物だからな」

その時、執務室のドアがまたしても思いっきり開く

「深雪様の到着だぜ」

胸を張る深雪と

「こんにちは、司令官！」

クツキーを焼いてみました♪

良かったら、食べてみてください」

クツキーの皿を片手で持ちながら、敬礼する吹雪

「もう、深雪ちゃん

ドアを乱暴に開けてはいけませんよ」

深雪を叱る白雪に

「司令官… 紅茶欲しい…」

目を擦りながら、欠伸をする初雪

「ブツキー、クツキーはそこにおいといってくれ

紅茶は、ちよつと待ってろ」

「ブツキーじゃないですよ!!」

なんか、悲鳴が聞こえたような… 気のせいかな

「ほう、司令官の紅茶か… 私も頂こう」

「日向が飲むなら、私も飲もつと！」

「あの… 私にも紅茶を頂けると…」

「様子を見に来たら、お茶しているじゃない！」

五十鈴にもちゃんと用意しなさい！」

今度から、食堂でお茶するか…

執務室に入りきらないだろ…

まあ、でも悪くはないかな

阿武隈と一緒に食堂に行く

んー

翔鶴は… あ、いた！

「翔鶴、ちよつといいかな？」

「あ、はい、何ですか？司令官」

「訓練毎日しているみたいだけど… 無理してない？」

大丈夫？」

「大丈夫ですよ」

微笑む翔鶴からは疲れを感じない

「そうっ？」

ならいいんだけど…

無茶しては駄目だからね？」

「司令官も無茶をしては駄目ですよ？」

「してないって」

翔鶴と別れ俺は、夕食を堪能した

流石に眠いな…

寝落ちしているとは言ってもほとんど布団で寝てないからなあ…

ふあー

思わず欠伸をする

コンコン



「ん、若葉か？」

入っ方がいいぞ」

「失礼します、司令官

夜遅くまで書類仕事をしていると聞いたので、来ちゃいました」

吹雪が俺に微笑みながら執務室に入ってきた

「あ… ああ

吹雪さんこんばんはです

でも、後、もう少しで終わるので——」

「嘘は良くないですよ、司令官

少しで終わる量ではないし、私に黙ってずっと徹夜していたんですよ？」

「……」

「司令官、少し休んだっ方がいいんです

私達を頼ってもいいんです

司令官に万が一のことがあったら、どうするのですか…。」

吹雪は、涙目で訴える

とは言っても、俺無理してないんだよね…

「分かった…

今日はもう寝るよ

お休み吹雪」

「ま、待っててください！

司令官!!」

俺は執務室のドアを開け、自室に戻った

## 鎮守府秋刀魚祭り12

ツン… ツン

「はあ… 私どうすればいいのかな…」

儀装妖精さんをつつきながら私は呟く

「どうしたの吹雪ちゃん？」

「コトツと暖かい緑茶の入った湯飲みを置きながら、白雪ちゃんが質問する  
司令官がね」

最近無茶ばかりして… 悩みを自分だけで抱え込んでるのに… 私何もできなくて」

プクツと頬を膨らめる

カチャと後でドアの開ける音がする

「なるほど…」

でも、吹雪ちゃんは頑張っているよ？」

「そうだけど…」

司令官はもつと頑張ってるし、頑張らないと

でも、どう頑張れば司令官のためになるんだろうって」

お茶を飲む

緑茶のいい香りと暖かさが心を癒す

「吹雪ちゃんは本当に司令官のことが好きなんだね！」

「そんなことないよ…」

「つて、睦月ちゃん!？」

睦月ちゃんは、私に満天の笑みを浮かべて言う

「そろそろ昼食だから、呼びに来たんだよ！」

「あ！」

もう、そんな時間!？」

ヒトフタマルマルを指す時計を見て私はお茶を飲み干す

「でも、吹雪ちゃん

司令官は疲れている感じとかしないよ？」

頬に手を当てて考える睦月ちゃん

「みんなの前では出来るだけ疲れているのを隠しているみたいで

昨日もマルヒトマルマルまで書類仕事していたし、きつとわたしが来なかつたら、徹

夜していたに違いはないよ！」

思わず手を振り力説する

「確かに司令官は私達が心配するようなことは隠したがる人ですね  
吹雪ちゃんも同じタイプですけど」

白雪ちゃんがドアを開けながら呆れたように話す

「え！

そんなことないよ！

今も白雪ちゃんや睦月ちゃんに相談してるもん」

「睦月、吹雪ちゃんも絶対私達に話してない悩み事あると思うな」

睦月ちゃんも疑うような目で見てくる

「私が大切な姉妹や親友に相談しないなんて、あり得ないよ！」

笑顔で返すが、少し罪悪感を感じる

「何の話をしているっぼい〜？」

いきなり後ろから夕立ちちゃんが抱きついてくる

「わ!?

ビックリした..

司令官が無茶をしてて、どうすればいいかなって話だよ」

背中から夕立ちちゃんの暖かさを感じる

「司令官っぼい？」

夕立は、あまり話したことなかったけど、いい人っぽい！」

ぴよんぴよん跳ねながら、夕立ちちゃんが言う

「いい人っぽいは、いいけど吹雪に抱きついて跳び跳ねるのを止めなさい」

夕立ちちゃんの首を掴んで時雨ちゃんが私から夕立ちちゃんを引き剥がす

「ぽい〜！」

悲鳴をあげる夕立ちちゃん

「時雨ちゃん、私は大丈夫だから…。」

「駄目だよ

甘やかすと夕立は、駄目な子になっちゃうからね

「この艦娘達はすぐ甘やかすから、僕が厳しくない！」

どや顔で時雨ちゃんは夕立ちちゃんを優しく撫でる

時雨ちゃんも最近は、元気そうで何よりです…。

ほんわかした気分で時雨ちゃんと夕立ちちゃんを見ていると

「あ、睦月ちゃん達、これから昼食かしら？」

如月ちゃんも食堂に向かっていたみたい

「如月ちゃんも一緒に食べましょう！」

如月ちゃんの手を持って振る睦月ちゃん

「そうね… うふふふ♪」

誘ってくれて、ありがとう」

頬に手を当てて嬉しそうに微笑む

「吹雪達か」

相変わらず、仲良さそうでなりよりだよ」

司令官もちょうど昼食を取るのか、秘書艦伊勢さんと挨拶してきた

「こんにちは、司令官！」

伊勢さんもこんにちは！」

「こんにちは」

吹雪ちゃんから無茶していると聞きました

特に夜更かしは体に障りますよ？」

「そうなの、司令官？」

ならたまには、如月を秘書艦にしてくださいね？」

「そうにやし」

たまには、睦月達に頼るがいいぞ！」

「ほい!!」フンス

「全く頼りないね」

「……」シヨボーン

時雨ちゃんの言葉で落ち込む司令官と

「時雨ちゃんは、辛辣ね

これでも、司令官は頑張ってる方だと思っただけど」

複雑な表情を浮かべる伊勢さん

伊勢さんの反応から、きっと今日も膨大な量の書類があるに違いないです！

「あ、そうだ、ブツキー」

「ブツキーじゃないです！」

私はそっぽを向く

「じゃあ、吹雪！

ちよつとお願いがあるんだよ」

「じゃあつて何ですか！もう！

で、お願いって何ですか？」

膨れっ面で返事を返すが、内心はガッツポーズをしそうだった

「ちよつと、伊勢が書類仕事慣れてなくてさ

手伝って欲しいんだ

いいかな？」



司令官は、私の内心に気が付いてないようだった  
「分かりました！」

吹雪、もつともつと頑張ります！」

私は司令官に敬礼する

「別に、そこまで頑張らなくていいよ！」

と苦笑いしながら、私の頭を撫でる

伊勢さんに書類仕事を教えながら、私も書類を処理する  
少しでも、司令官の負担を減らさないと……！  
処理していると、一枚の書類の内容に愕然とした

「し、司令官!!」

この書類！」

司令官に書類を見せる

「ん…？」

ああ、横鎮第一が大和と武蔵を他の鎮守府に転属させるから希望する鎮守府は立候補しろってやつか

それがどうかした？」

司令官が興味なさそうに書類の概要を話す

呉鎮第三  
「うちも立候補するんですか？」

私は期待するように質問する

伊勢さんも興味ありげにこつちを見ている

「え？」

しないに決まっているじゃないか

各種資源二万程度の我鎮守府に大和や武蔵が来たら大変なことになるじゃん」

当然のようにそう言う

「え…」

でも、戦力の増強には…」

なんとか説得したい私は食い下がる

「今の戦力に不満はないし、まだ正規空母も戦艦も着任する

それを考えるとうちに大和や武蔵は必要ないよ

まあ、吹雪を頼りにしているからっていうのもあるけどね？」

真面目な顔でそう言う司令官

「分かりました。」

ちよつと恥ずかしくて小走りで秘書艦補佐の席に戻った

ヒトヒトマルマル

消灯時間はヒトマルマルマルなので、ほとんどの艦娘は眠っている

私は艦娘寮から第二執務室に向かう

時たま、妖精さんにすれ違う以外は誰も会わなかった

第二執務室に着く

ドアをノックして、ドアを開ける

中では司令官が執務をしていた

「やっぱり、まだしてました！」

寝ないと明日に響いちゃいますよ?」

「だって、終わらないだもん

仕方ないじゃん?」

眠そうに目を擦りながら、司令官はそう言う

「とにかく、執務は終わりです!

今日は、寝てください」

「昨日も寝たし大丈夫だって…」

嫌々ながらも、私に引つ張られる司令官

「もし、自室から抜け出して執務してたら、罰で私と一緒に寝てもらいますから!」

司令官はこういうのが弱いのを知っているから、恥ずかしいけど…司令官のためで

す!

「え!?

いやいや、恥ずかしくて寝れないからマジで勘弁してくれ

というか、男の人にそう言うのを言っちゃ駄目だよ?」

司令官は諭すように言う

「男の人は、ここに提督と司令官しかいませんよ?」

「あ、そっか…」

提督はそういうことしない人だと思おうし大丈夫だね

まあ、俺もそんなことしないけどな〜」

そんなことってどんなことなのでしょう？

俺は吹雪と自室の前で別れた後、自室にこっそり持ってきた書類を処理する

マルマルマルマル

昼間の喧騒が嘘のように静かな鎮守府はちよつと怖かったりするが、まだあまり眠くない

そろそろ執務室に戻って大丈夫と判断した俺は秘密で妖精さんに頼んで作って貰った自室から執務室に直接行ける引き戸を開け執務室に入ろうとした

執務室に顔を出すと執務机に吹雪がいて書類を片付けていた

そして、俺に気がつく

「……や、やあ、吹雪さん

こんばんは、おやすみなさい」

引き戸を閉め布団に潜る

何で、吹雪が書類仕事してるんだ…

布団で困惑していると、自室のドアが開く音がする

「で、なんでこうなるんだよ…」

俺は、吹雪と同じ布団に今入っている

「約束を破ったからです！」

どや顔で言う吹雪

「でも、吹雪だって書類仕事してたじゃん

一緒にやればいいと思うんだ、俺は」

「駄目です、司令官は寝てない！」

それに…司令官はこうもしないと私に…私達に頼ってくれませんから」

出来るだけ離れてはいるのだが、これだけ近いと吹雪の暖かさを感じる  
やっぱり艦娘も人間も変わらんのだな…：

「いつも、頼ってると思うんだけどな…：

そんな無理しているように見えるかな？」

司令官が申し訳なさそうにする

… 暖かい

優しく暖かくて…：

いつかの夢を見た時

暖かい何かが私に抱きついた

あ那时的暖かさ

冷たく暗い深海に沈み逝く私を包み込んだあの…：

「吹雪！

大丈夫？」

司令官が心配そうに声をかける  
いつの間にか泣いていたみたい

「ごめんなさい、司令官

大丈夫です

それと……あの時、抱きついてくれたのは司令官だったのですね」

「……ああ、そうだ

吹雪が辛そうだったから」

「ありがとうございます！

お陰であの夢も少し怖くなくなりました」

「そっか……

良かった」

司令官は、私に微笑む

「俺、吹雪の辛さは艦娘でしか分からないし、癒せないと思ってた

でも、そんなことないんだな……

俺でも、吹雪の助けになれるんだね」

「司令官……いつも、司令官は私達の助けになってますよ？」

私は、司令官に精一杯の笑顔を見せた



## 箱入り娘の転属先

私は、目を開ける

広く綺麗な部屋

どの艦娘も共通の個室は、質素なのに上品だった

ここは、横須賀第一鎮守府

精銳の艦隊が最新の装備を持って

帝都東京を守備する活躍を望む艦娘の憧れの地

私は、個室を出て妹を待つ

「おはようございます、武蔵」

「おはようございます…だ、大和」

朝食を食べるために食堂に向かうと、艦娘に囲まれて困っている提督に遭遇した

「あ、大和さん、武蔵さん

おはようございます」

「提督、おはようございます」

「ああ、おはよう

相変わらずだな」

「あはは…」

助けてくれませんか？」

「それは、無理な相談だな

流石の私でも幾つ命があっても足りそうにない」

提督は、作戦指揮も艦娘の体調管理もなんでもこなす

私は、提督がいつ寝たり休憩しているのか気になって仕方がない

「大和は、助けてくれるよね？」

半泣き状態の提督が助けを求めてきた

「私もご遠慮したいのですが…」

それにきくと、助けがそろそろきますよ？」

「みんな何をしているのです？」

提督の周りにいた艦娘達がギクツとする

声の主は駆逐艦電

提督の初期艦の一人でかなり古参の艦娘でflagship戦艦と戦う方が数倍ましと言われる程の訓練を課す鬼教官だが、彼女の訓練では怪我人が出たことがないという

「い、いや、なんでもないぜ」

「ちよつと、司令官に用事があつただけで……」  
と言つて、周りにいた艦娘はいなくなつた  
「なんだつたのです？」

あ、司令官さん

今日は、電が秘書艦をやらせて頂くのです  
よろしくお願いするのです」

提督にペコペコとお辞儀をする電さん

こうして見ると普通の可愛い女の子ですね

「武蔵、私達もそろそろ食堂に行きましよう」

「そうだな！」

演習で、練度も上げないといけないからな」

今日の演習相手は…

旗艦大和

武蔵

飛龍

蒼龍

雪風

綾波

旗艦長門

陸奥

赤城

加賀

電

暁

長門達ですか…

とても手強そうですね

「横須賀最強の戦艦が相手か

腕が鳴るな！」

「そうですね、最強の戦艦の矜持にかけて負けられませんね」

演習場に向かうとすでに全員集まっていた

「すみません、遅れてしまいました」

「大丈夫よ！大和さん

暁達も今来たばかりよ！」

暁さんが胸を張る

「あら、そうでしたか」

その様子が可愛いくて、笑ってしまう

「もー

なんで、大和さん笑っているのよ！」

「ごめんなさい、暁さん」

これでも、電さんと同じく初期艦で古参なのでですけど

ギャップが…

艦隊が二つ分かれて演習開始の合図が鳴る

飛龍と蒼龍が攻撃隊を発艦する

最近、横須賀第一鎮守府の全空母艦娘に配備が行き渡ったばかりの新鋭機零式艦上戦

闘機五十二型と天山、彗星を発艦する

これ以上強い艦載機はないみたいで、赤城さん達も練度を高めて来る戦いに備えてい  
るようです

制空権は…こちらが劣勢

これでは、水偵は飛ばせそうにないですね

私と武蔵は、主砲の仰角を最大にする

「仰角最大!!」

全主砲! 薙ぎ払え!!」

三基九門から放たれる46cm砲弾は敵編隊で炸裂する

「む、やったか?」

確かに、半数近くの艦載機が墜ちているように見える…が

「駄目です!」

信管の調節ミスにより、敵編隊より前で炸裂しました!」

蒼龍が報告する

「く、再装填完了次第攻撃します

今度は信管調節をミスしないようお願いします!」

艦装妖精さんが敬礼して準備する

結果は：：D敗北だった

私と武蔵、蒼龍、綾波が轟沈判定

飛龍が大破

雪風が小破だった

対して、向こうは

赤城大破判定

陸奥、暁が中破判定

長門が小破判定

電と加賀は損害軽微だった

赤城と加賀の攻撃隊で蒼龍大破、武蔵中破となり

砲撃戦で、陸奥をなんとか中破させるものの私も武蔵も大破で、飛龍が一矢報いるため攻撃隊を放つこともごとく赤城と加賀の制空権隊により撃ち落とされた

赤城が大破しているのは、雪風が放った魚雷に命中したからである、慢心、ダメ絶対「むう、練度が足りないとはいえ、この結果は悔しいな」

悔しそうに呟く武蔵

「そうですね…」

私は、考え事があつたためおぎなりに返事する

「お疲れ、大和、武蔵」

長門さんが話しかけてくる

「お疲れ様です、長門さん」

「長門は、やはり強いな」

横須賀の守護神の一人と言われているだけはある」

「私など、戦うことしか出来ないからな」

大和、やはり不安なのか？」

「ええ…」

まあ、初めて横須賀第一鎮守府以外の鎮守府に行きますから

ちやんと活躍出来るのかと…」

「他の鎮守府がどんな鎮守府だろうと大和は強い

ちやんと運用してくれるような鎮守府なら、活躍出来る

ビックセブンの私が保証しよう」

何故か、長門さんに言われると安心出来る



「ありがとうございます」

安心出来ました！

大和どんな鎮守府でも推して参ります!!」

「その心意気だ」

長門さんは、そう言つて武蔵と話し始めた

「はあ..」

なんで、こうなるかな」

私は、目の前の書類に目を通す

内容は、先日告知した大和と武蔵の転属先の報告だ

「司令官さん

やっぱり、止めた方がいいと思うのです」

電は、おどおどしながらもしつかりとした口調で言う

「トラックのじいさんは気を利かせて立候補してくれたが、他のマトモな鎮守府は全部断ってきた」

苦笑を隠しきれない

まあ、秘書艦は電だし問題ないだろう

「あの…前に司令官さんが話していた呉第三鎮守府？はどうだったのです？」

私の役に立とうと必死に考えている電…正直とても可愛い

「あそこも、遠慮するだど

案外、あそこの鎮守府指揮している司令官知識があるのかもね」

電達がいいた世界から来た学生らしいが、最近出来た鎮守府とは思えない程の戦果をあげている

しかも、秋刀魚漁を手伝う等面白い作戦を立案したりと色々気になる鎮守府だ  
きつと、あの真面目な駆逐艦娘が頑張っているんだろうな

「電も久しぶりに吹雪ちゃんに会いたいです！」

電も昔を懐かしむように言う

「じゃあ、今度あそこに行ってみようか

秘密にして行ったら、面白いかも」

正直、ブラック鎮守府の可能性も否定は出来ない

あの娘がいるから大丈夫とは思うのだが……

「サプライズなのです！」

ぴよんぴよん跳び跳ねる電を横目に私は、考えを巡らせた

## 鎮守府秋刀魚祭り 13

日が当たり目を開けると… 吹雪の寝顔があつた  
うわあ!?

そうだ、昨日一緒に寝たんだつた…

可愛いな…

俺は、これから守っていかないといけないんだよな…

吹雪を… 俺を信頼してくれてるみんなを

とりあえず布団から出ようと体を起こすが、吹雪が腕を掴んでいて離れない

… こういう時つてどうすればいいんだ!

妹の時は引き剥がしていたけど…

吹雪の寝顔を見てみると引き剥がすのは、ちよつと気が引ける

でも、このままという訳にはいかないの、吹雪を揺すつて起こすことにした

「今日の秘書艦を務めます！」

吹雪です、よろしくお願いいたします、司令官！」

ピシツと敬礼して、私は言う

「そんな改まらなくてもいいよ

しよつちゆう秘書艦して貰っているし

まあ、吹雪は真面目なのがいいんだけどね！」

微笑みながら、司令官は言った

「じゃあ、朝食まで時間あるから書類仕事する？」

「はい！」

吹雪頑張ります！」

司令官は、一割に満たない程度の量の書類を私の机に置いた

「はい、これが今日の吹雪の分ね」

私は知っている

本当に司令官が、こなさなくてはいけない書類は多くない

鎮守府によっては、ほとんど秘書艦に丸投げしている所もあると聞いたことがある

なのに、司令官は…

じつと司令官を見ていたら

「？」

どうした吹雪？

ジト目で見てきて…量多かった？」

疑問符を浮かべている司令官に私は呆れた

「逆です！

これじゃあ、秘書艦の意味がないですよ」

「え？」

いや、ほらお茶淹れたりあるじゃん」

「お茶は、いつも司令官が淹れていると思います」

「う…： そう言えばそうだった」

私は執務机に山積みになってる書類の半分近くを自分の机に運ぶ

「え、そんなにやんなくていいって」

「昨日も言いましたが、司令官はこうでもしないと私達に頼ってくれませんから

他の娘達にも伝えて置きます」

「でも、俺が見ないといけない書類もあるし」

「大丈夫です

私達は、ちゃんとその区別くらいつきます

司令官は、私達を信頼してないのですか？」

「そんなことないよ！

でも、吹雪達は毎日戦っているんだから、書類仕事くらい俺がやらないと！」

「そのせいで、司令官が体調を崩しては元も子もないです！」

結局、司令官は私に押し切られる形で私に書類を渡した

「祥鳳さん、千歳さん偵察機から報告はない？」

『「こちら、祥鳳

偵察機から敵艦隊発見の報告はありません』

『「こちら、千歳

水偵から敵艦隊の報告はないわ』

「分かったわ！」

そう言つて、私は船団を指揮する漁船に近づく

「漁師さん！」

後どれくらいで終わるかしら？」

「後二十分くらいで終わる

そしたら、港に帰るよ」

船長が返事する

「えっと、確か安浦漁港よね？」

「そうだ、嬢ちゃん

方位や距離は分かるかい？」

からかうように、船長は言う

「もちろん、分かるわ！」

後、嬢ちゃんじゃないわ、陽炎よ

か、げ、ろ、う!!

ちゃんと覚えてよね」

「ははは、済まないな」

でも、司令官や提督以外の人とこんな会話が出来るのはちよつと嬉しい



もしかしたら、司令官はこういうことを経験させて私達の守るものを再確認させているのかもしれない

でも、そこまで深く考えてないかもね

陽炎は、普段はキリツとしているのに時々子供っぽい司令官を思い浮かべながらそう思った

鎮守府に帰投すると、司令と秘書艦の吹雪がいた

「みんなお疲れ様！

怪我とかない？」

「大丈夫よ！

ト級とイ級しかいなかったし」

「骨のある敵はいませんでした」

ちよつと物足りなさそうに不知火が報告する

「今日もつまらなかつたわ

全く、漁船の護衛なんて」

はあ、とため息をつく霞

「その割に：：漁船のこと心配していた：：ような：：」

霞は霞の発言に疑問を述べ霞からギャーギャー言われていた

そんな二人を苦笑しながら一瞥して司令は祥鳳さんと千歳さんに質問する

「祥鳳、彩雲はどうだった？」

千歳は、瑞雲の調子は良かったか？」

「はい！」

彩雲は、やはり九七艦攻や天山よりも索敵に秀でていて使いやすかつたです

また、私達に強くリンクするためより遠方からの攻撃が行いやすいと思えますが：：」

「が？」

「やはり、偵察機を積むなら攻撃機を積みたいですよ

攻撃機でも偵察は出来ますから」

真面目に話す祥鳳さんの肩に乗っていた彩雲妖精さんがえっへんという表情から

シヨボンという表情に変わってしまった

ちよつと可愛い：：」

私は肩に乗っている妖精さんをじっと見てちよつとついでみた  
「なるほど…」

ま、でも彩雲を積んでいてくれ

偵察機で、攻撃出来ないけど、凄く頼れる艦載機なんだからさ」

にぱあと満天の笑みを浮かべる彩雲妖精さんに思わず私は嘖いてしまった

吹雪もクスクスと笑っている

「は、はい！」

「瑞雲ですが、零式水上偵察機よりも重武装で速く翔べるので、偵察能力も上がってます

今後の水上機母艦や航空戦艦、航空巡洋艦の主力水偵になるに違いないです！」

「そうか、喜んで貰えて良かった！」

それで、これから食堂で菓子でも食べようと思うのだけど、どうする？」

『勿論食べます（食べるわ）！』

「じゃあ、食堂行こっか」

あ、睦月、如月、文月、皐月、長月も！

菓子食べるんだけど、食堂行く？」

勿論、その後大人数でワイワイお茶を飲んだりお菓子を食べたりしたわ！

陰で司令が

「俺のお菓子が… (涙)」

とか言っていたけど気にしない方がいいわよね

お腹一杯で話し疲れたし、私は食堂を抜け出し  
埠頭に出た

海を赤く染める真っ赤な夕陽

水平線には、島の影や漁船の影も見える

海に出て大丈夫かな？

でも、夕陽が綺麗だし、深海棲艦も夕陽に見とれたりするのかも？

深海棲艦がどんな思考をしているか、分からないけど

艦娘の成れの果てなら、きっと綺麗な夕陽に何も思わないはずはないんじゃないかしら？

「夕陽綺麗だな…」

「し、司令!？」

突然の声に驚き振り向くと司令が立っていた

「邪魔だったかな？」

司令は申し訳なさそうに頭を掻く

「そんなことないわよ！」

・・・  
ねえ、司令

前々から聞きたかったことを聞いてみることにした

「何？ 陽炎」

「司令は、私達がいた世界から来たのよね？」

「そうだよ」

「私達は、守れたかな・・・」

命を懸けて乗組員のみんなと戦ったけど

負けて多くの人が死んじゃって・・・」

「確かに負けて、多くの人が亡くなってしまった

でも、その後日本は復興して戦争とは無縁になったんだ

当時の乗組員とお前達はその名の通り命を懸けて戦ったからね

だから、ちゃんと守れたよ」

「そっか…」

「そうよね！」

「私らしくないよね、暗い話なんて！」

「そんなことないよ」

「誰だつて暗い話の一つや二つくらいあるつて」

「そうだ、近々南西諸島防衛戦を攻略することになつてね  
陽炎には、水上打撃部隊の護衛を頼みたいと思うんだ」

「本当？」

「陽炎の出番なのね！」

「腕が鳴るわ」

「手をブンブン振つて待ちきれない気持ちを表す」

「あんまりはしやぎすぎるなよ…」

「苦笑いで窘める司令に私は元気一杯に返事する」

「大丈夫よ！」

「私は陽炎型ネームシップの陽炎よ？」

「司令にピースする」

「いつの間にか、夕陽は隠れてしまい」

辺りは暗くなってきた  
くしゅん

寒くて手を擦っている、司令が上着をかけてくれた  
「これで、寒くない？」

「… 寒くないわ

ありがとうっ」

頬が熱くなるのを感じながら、食堂の方へと歩く  
司令も隣を歩く

食堂に着くと、みんな大慌てで片付けをしていた  
「あ、司令官！」

何処に行っていたのですか？

陽炎ちゃんも…」

「ちよつと夕陽を見てただけだよ

吹雪にも見せてやりたいくらい綺麗だったな」

「あ！」

ズルいです！」

顔を膨らませて、プンスカ怒る様子は訓練の時の鬼教官ぶりとは似ても似つかない  
本当に同一人物なのかな？

もしかしたら、二重人格かも…

「ごめん、ごめん

えっと、今日は土曜日だからカレーだよな

誰が当番？」

「確か… 金剛さんだったかと

『テートクに英国式カレーを堪能して貰いマース！』って張り切ってましたよ？」

「こ、金剛か… へえ…」

複雑そうな表情の司令

一体どうしたのだろう？

ちなみに、カレーは具材が溶け込んでいるとちよつと変わってはいたけれど、とても  
おいしかったわ！



## 鎮守府秋刀魚祭り14

私、古鷹は困惑してます

だって…

「あの… 司令官？」

なんで、そんなクダツとしてるんですか？」

「ん… ちょっと眠いっほい…」

司令官は、執務机に突っ伏しながら眠そうにそう答えているから…

今日は、鎮守府秋刀魚祭り最終日

古鷹は、この日に秘書艦を務めることになった

司令官とは話す機会があまりなかったが、艦娘を大切にしているキリツとして格好いいと思っていた

もっと、司令官に重巡洋艦の良いところたくさん知って貰わないと！

そう張り切って執務室に入ったのだが…

現実、これである

「あの… 夕立ちちゃんのような語尾使ってないで執務してください」

「了解… だよ…」

古鷹の中で司令官の評価は急降下しているのだが、そんなことを知ってか知らずか気だるそうに返事をする

「はい、これ古鷹の分ね」

全体の2割程の書類をおくと司令官は執務を始める

「はあ…」

ため息をついて書類をもう3割程度取って、緑茶を入れてから執務を始める

「そんな気を遣わなくてもいいのに」

司令官がお茶を飲みながらそう言う

「いえ、秘書艦の仕事ですから」

冷たくそう言い放つ

朝食を食べるため食堂に向かう

途中、第六駆に出会った

「司令官、おはようなのです」

「Доброе утро (おはよう)」

「おはようです！」

「おはよう！」

司令官、帽子がズレてるわ！

直してあげる」

「いや、自分で直せるから大丈夫だって

それより、雷襟がくしゃくしゃじゃないか、直してやるよ」

と言って雷の襟を直す司令官

「も、もう、雷は大丈夫なんだから！」

顔を真っ赤にして司令官をポコポコ叩く雷ちゃん

「だったら、襟をきちんとしなよ……」

呆れたように呟く響ちゃん

第六駆の子達は私より秘書艦経験があるはずだけど、司令官が子供っぽい所があることを知っているのだろうか

「ん？」

古鷹どうかした？」

「いえ、なんでもありません」

「ならいいけど」

そう言って司令官は第六駆の子達と話し始めた

「はあ…」

食堂に着くと司令官とは離れた席に座った

「どうしたのですか？」

古鷹さん」

「あ、翔鶴さん

おはようございます

実は——」

今日の朝のことを話す

クスツと翔鶴さんは笑うと

「それは、司令官が信頼している…ということではないでしょうか？」

「そうですね…」

正直、司令官があんな人だとは思ってなくて」

「失望しました？」

「ええ、まあ…」

「そうですね…」

司令官は、私に砕けた所を見せないで羨ましいですけど」

寂しそうに笑う翔鶴さん

「見ても呆れるだけですよ？」

翔鶴さんのことが気になったが、私はそう返すだけにした

執務を開始して暫くたった時

いきなり司令官が立ち上がり私の所に来る

「どうしたのですか？」

「ん？」

ああ、もう俺終わりそうだから、古鷹の分の書類取りに来たんだよ

これ俺が処理しないといけない書類？」

「あ、はい、そうです」

確かに執務机には、ほとんど書類が残っていない

「了解」

そう言つて私がやる分の書類も取つていく

「司令官！」

それは、私がいります」

今日は、最終日で夜の出撃分はないから少し楽とはいえそこそこ数がある

「いいって、古鷹はソファーで本でも読んでれば？」

司令官は手慣れているのか、瞬く間に処理していく  
少なくとも、私にはそう見えた

自分の中で司令官の評価が分からなくなっていく

午前で執務が終わったので、午後は訓練をすることにした  
埠頭から海に出る

「えっと、全員集まりましたか？」

今回の教官の吹雪ちゃんが点呼を取る

今いるのは、駆逐隊は

第十一駆

第六駆

第二十二駆（皐月ちゃん、長月ちゃん、文月ちゃん）

第三十駆（睦月ちゃん、如月ちゃん、弥生ちゃん、望月ちゃん）

軽巡洋艦は、那珂ちゃんと阿武隈ちゃんと北上ちゃん

重巡洋艦は、私と青葉

空母は、鳳翔さんと祥鳳さん

戦艦は、扶桑さんと金剛さん

「今回の訓練は対空戦闘と砲撃、雷撃訓練を行います

対空戦闘は、鳳翔さんと祥鳳さんの放つ艦載機を演習用の砲弾で迎撃しながら、回避運動するいつものです

砲撃、雷撃訓練もいつものなので、説明はいらないと思います

対空戦闘は二セット、砲撃、雷撃訓練は三セットを目標に頑張りましょう！」

吹雪ちゃんはチラッと訓練を眺めている司令官を見た後にグツと拳を握る

ちなみに、対空戦闘もかなり疲れるが砲撃、雷撃訓練もかなり疲れる

目標にただ砲弾を放てばいいという訳ではなく

敵役の娘が演習用の砲弾を放ちそれを回避しながら行うというかなり実戦に近い訓練だ

今日も、ハードですね…

吹雪ちゃんは、こんなのだこの鎮守府も当たり前です！ってこの前言っていたけど、



本当なんでしょうか…

訓練が終わって埠頭に戻ると、司令官が紅茶を淹れていたお菓子はもうすぐ晩飯だからなしだったけど

紅茶は、おいしかった

「流石、司令官ネー！」

私が教えた甲斐がありマシター」

司令官の淹れた紅茶で一息いれている金剛が呟く

「司令官…」

司令官の淹れた紅茶本当に美味しいです！

いつもありがとうございます♪」

紅茶を飲んでクタアとなっている吹雪ちゃん

「たまには屋外で飲むのもいいよね」

なんか、心が落ち着くというか……」

「司令官、寝ないでくださいよ……」

そんなに司令官は寝たいのでしょうか…… 呆れちやいます

ぽおーとする司令官を見てそう思った

「一週間本当お疲れ様

漁師さんは、本当に感謝しているそうだ！

お礼で新鮮な魚介類をたくさん貰ったから、鳳翔と間宮に調理して貰った

ありがとう、鳳翔、間宮」

「いえ、感謝して貰わなくても……」

「こちらこそ、こんないい食材を用意して貰えて嬉しいです」

テーブルには、秋刀魚の刺身だけでなく色々な魚の刺身があり

他にも魚料理がある

艦娘達は目を輝かせている……が、まだ早い!!

「問宮に無理を言ってこんなものも作って貰ったぞ」

妖精さん達が色々なケーキを持ってくる

凄く美味しそう……ヤバい絶対今俺の目輝いてるよ

いかんいかん……つい見とれちゃった

「一人一個までしかないが、そこは我慢してくれ

じゃあ、乾杯しようか

乾杯!!」

『乾杯!!』

俺も早速夕食に手をつける

刺身もいいが……この煮付け……絶対おいしいよな……

旨い!

魚の旨味とたれ?の甘味がマッチングしてなんとも……

これは、南蛮漬け?

ちよつとピリ辛なのが尚いい!ご飯がすすむな……

艦娘のみんなも幸せそうに食べていて

妖精さんも妖精さん用のケーキを食べてぼわあーとしてる

一通り腹が膨れた所で、ケーキを一つ取る

俺はシヨートケーキを選んだ

席に戻ると隣に吹雪が座る

手にはシユークリームがあつた

「吹雪は、シユークリームか：：シユークリームもいいよな！」

「司令官：：あの：：良かったら半分こにしませんか？」

シヨートケーキも食べてみたいので：：」

「分かつたよ、ありがとな、吹雪

俺のこと気を使わせちやつたかな？」

「いえー」

そんなことないです！」

吹雪が首をブンブン振る

その仕草がかわいくて顔が綻びる

シヨートケーキを半分程食べて吹雪に渡す

初めて作ったとか言っていたけど、本当に初めてなのか疑う程おいしかった：： 間宮

凄

吹雪がはふつとシュークリームを食べて半分程食べると俺に手渡してきた  
「吹雪、頬にクリーム付いてるよ？」

吹雪の頬に付いたクリームを布巾で拭いてあげる

「す、すいません、司令官!!」

顔を真っ赤にしてそっぽを向く吹雪

あ…吹雪嫌だったのかな

ごめんね

と心の中で謝ってシュークリームを頬張る

口の中に甘さがパァーと広がる

痺れる程甘いのに変な後味がしない

きつと百人食べたら百人おいしいと言うに違いない

隣では、吹雪が俺のショートケーキを美味しそうに食べていた

赤城は、高らかに作戦開始を宣言した

「これより、ドーリットル作戦を決行します

決行は明後日、目標は大日本共和国の各都市

配置についている全部隊に準備を命じてください！」

私は人間に真珠湾と呼ばれていた場所に置かれた深海棲艦の鎮守府にいるレ級です  
 どうやら、人間に攻撃を敢行するらしいのです

私はこのことを新しく仲良くなった友達に話しに向かうことにした

何処かな… あ、いた！

《電ちゃん、こんばんは》

「あ、レ級ちゃんこんばんは… なのです！」

彼女は、電

舞鶴第三鎮守府という所にいたのだけれど、深海棲艦側に付くか否かでの艦娘との争  
 いが怖くて震えていたら、いつの間にか深海棲艦に付く側が勝ちやっけて付いて来たら  
 しい

本人は人間も深海棲艦も仲良くなればいいと思っついて私と同じだった

「どうかしたのです？」

《さつき赤城さんが人間を攻撃する作戦を発令したみたいなんだ》

「はわわ！」

それは大変なのです

でも、私達にはどうしようもないのです…」

《そうだね…》

「なんで…みんな仲良く出来ないのだろう…」

《…》

私達は、その答えを出すことが出来なかった

## 呉の町と艦娘 前編

朝か…

まだ、外は暗いがいつも時間に起きてしまう…

昨日は、艦娘達全員が休みで前回の作戦の疲れを取って貰った  
そして、今日は俺の休み！

よし、二度寝を――

コンコン… ガチャ

「司令官？」

朝ですから起きてください」

笑顔で吹雪が俺を揺する

「吹雪… 俺二度寝したいんだが…」

「駄目です♪」

有無を言わせない顔で吹雪が言う

「…」 ショボーン

現在、マルゴーマルマル頃… 眠いよ



いいじゃん、まだ約束の時間までたくさん時間あるんだしさ…

「約束した時間って7時半じゃかったっけ？」

「司令官

何か忘れてませんか？」

そういえば…

妖精さんに、工場に来てねーって言われてような？

「工場か…」

「そうです！

早く行きましょう」

「所で吹雪、今日の準備は出来たの？」

「準備って何するのですか？」

「え…もしかして、制服のまま町に行くつもりだったの？」

政府は、一生懸命艦娘のことを隠しているが、ネットにはすでに艦娘の写真がリークされていたりする

だから、制服のまま町に出るのは非常に危険だ…色んな意味で

「制服じゃ駄目なんですか？」

「ヤバいから明石の所で買ってこい

「お金は俺が持つから」

「分かりました！」

「私急いで準備してきます！」

「そう言うと、吹雪は駆けていった」

ふう

「なんとか誤魔化せたし、工廠行くか」

「工廠に行く準備をし、工廠へ向かった」

「俺は、工廠のドアを開ける」

「妖精さんいる？」

「いつでもいますよ、司令官」

「ふぁー眠い…」

「徹夜したから、お菓子欲しいー」

とりあえず、お菓子を渡す

「徹夜なんてして大丈夫か？」

あんまり、無理しちゃだめだよ？」

「一応妖精さんは人間より丈夫だから大丈夫」

「24時間、寝なくても大丈夫」キリッ

「モグモグ」

若葉がいたような気がするが気のせいだな… うん

「この前彩雲作ったばかりなのに疲れてないのか？」

「この前のケーキで疲れは吹き飛んだから」

「お、おう」

そのことを話していたら、妖精さんが立ち止まる

どうやら目的地についたみたいだ

装備らしきものが二つおいてある

「これは… 紫電？」

「そうですー」

でも、これは艦載機なので、紫電改二って感じですねー」

「で、もう一つのこれは？」

「あー」

これは、司令官に頼まれていた——」

現在マルナナフタマル

「みんなまだかな…」

「司令官！

吹雪、只今到着しました！」

アニメで着ていたようなフード付きの上着を着ている

チャックが閉めていて、寒さ対策のため何枚か着込んでいるようだ

どう見ても、普通の可愛い娘だ

「あの… 私と一緒にいってもいいのでしょうか…？」

そう言う翔鶴は茶色の上着を着てジーンズを穿いている

翔鶴って凛々しいイメージだったけど、私服を着るとこんなにイメージ変わるの

か：

吹雪が可愛いなら、翔鶴は美しいと言うべきか

「何処かおかしかったでしょうか？」

「い、いや

似合ってるよ！」

その様子を見て吹雪が膨れっ面をする

「吹雪も似合ってる、可愛いよ」

「は、はい！司令官」

そこに第六駆と時雨が合流する

「待たせちゃったかしら？」

「大丈夫だ、大して待ってないから」

第六駆は全員真っ白の毛系のセーターを着ている

スカートはいつもの制服のスカートのようだが、多分大丈夫だろう

そして何故か全員暁と響が被っている帽子をしている

雷や電は被りづらそうになっているが、ちよつと新鮮だな

一方時雨は：

「あれ？」

時雨いつもの制服のままじゃ…。」

「駄目なの?」

「ああ…だが、今から服選ぶとなるとちよつと時間かかるかもだし

俺の上着上から着て、マフラーするので我慢してくれ」

俺は、時雨に手渡す

「そもそも、なんで僕まで行かなくちゃいけないんだい?」

「んー?」

何となくだよ」

「何となくで、僕は付いていかなくちやいけないのか…。」

「別に強制はしてないけど」

ただ、第六駆のみんなが悲しむだけで」

ちよつと離れた所で第六駆の面々と吹雪と翔鶴が時雨にどんな服を着せるか嬉々と話している(翔鶴と吹雪は戸惑い気味だったが)

「提督、そういうのは脅しって言うんだよ?」

「だから俺は、司令——」

「どうでもいい」

「……」 ショボーン

「さ、司令官

早く町に行こうか？」

「あ、ああ…。」

ん？

あれ、さつき司令官って

「あれ、時雨さつき…。」

「何、提督？」

いつも様に呆れた感じで時雨が返事をする

「いや、何でもない」

気のせいか

俺は、鎮守府の外を目指した

呉の町までバスで行くことにした  
ちよつと歩くには遠いからな…

バス停でみんな待っている時、何やら艦娘達が気合いを入れてじゃんけんしていた。一喜一憂していたけど、そんなに勝負に勝ちたいのかな？  
ちなみに俺は、鎮守府近くで工事しているのが気になっていた。  
こんな辺鄙な所に新興住宅地？軍事施設？なんだろう…

バスに乗り込むと隣に座ったのは、翔鶴だった。  
てつきり吹雪かと思っていたんだが…  
当の吹雪は、時雨の隣に座っていて落ち込んでいた。  
何があつたんだろ…

「あの…司令官」

その手に持っているものは何ですか？」

翔鶴が俺の持っているものに気がつき質問する



「あ、これ？」

なんか、妖精さんが作ってくたタブレットだよ

この前貰ったんだけど、外出する時なかったからさ

中々使う機会がなくて、今日使ってみようよと」

「どんな機能が有るんですか？」

「分かんない

あ、電源入った

…… 出撃中の艦隊の様子と訓練中の艦隊の様子が見れるのか？」

とりあえず、出撃中の様子を見てみる

『——でさ』

今日、司令官達呉に行ってるんだって

いいなー』

『ふふ、敷波ちゃんは司令官のことが好きなんですね？』

『な!?!』

そ、そんな訳ないじゃん!!

そういう綾波だったて!』

『そんなことは……ないですよ?』

「何の話をしているんだ？」

『『え？司令官?!』』

『司令官、どうかしましたか？』

警備任務をしている第二艦隊旗艦の朝潮が質問する

「いや、ちゃんと任務こなしているか気になっただけだよ

ちゃんとこなしているようで、良かった

気をつけて帰って来てね」

『『はい!』』

タブレットをホーム画面に戻す

「使いやすいなこれ」

「あの司令官？」

「ん？」

何、翔鶴」

「さっきの子達話していましたが、注意しなくていいんですか？」

「大丈夫だと思うよ

話してはいたけど、敷波も綾波もちゃんと警戒してたし、朝潮も真面目な娘だけど、注意しなかったのは心のゆとりを持って任務にあたって欲しかったからじゃないかな？」

「すみません、そこまで気が回りませんでした。」

申し訳なさそうにする翔鶴

「いや、謝る必要なんてないよ！

ん？

なんだろこの機能……」

「使ってみたら、どうですか？」

押すと、艦娘寮の地図が出てきた

適当に一つの部屋を押す

確かここは第十八駆の部屋だったような――

艦娘寮の部屋が映し出され……ちょうど陽炎が服を着替え始める所だった

幸い、まだ服は脱いでない手袋を取っただけだった

ふわあ!?

慌ててホーム画面に戻る

「司令官……」

「ああ……」

この機能を入れた妖精さんには反省して貰おう……」

後日艦娘達に土下座する妖精さん達がいたとかいなかったとか

## 呉の町と艦娘 後編

「到着〜」

ピョンとバスから降りる

「ここが… 呉… 町なんですね…」

吹雪が目を輝かせて眩く

「す、凄い…」

私もレディに近づけそうな気がするわ…」

それって今までレディじゃないって告白してるじゃん…

あ、今さらか

「は、x o p p o s s o」

流石の響も姉をからかう余裕はないようだ

目を輝かせている艦娘達を目的地まで先導する途中…

「あれ何ですか？」

吹雪が目を輝かせて指差すのは、コンビニ… ファ○マだった

「あれは、コンビニだよ

いつでも、色んな物を売っているんだ」

「x o p o 3 0 . . .」

さつきから、響がハラショーしか言っていないんだが、大丈夫か？

日本語忘れていたら大問題だぞ

「先に言っておくが、はしやぐなよ？」

俺は、コンビニの自動ドアの前に来る

勿論、自動ドアだからドアが自動で開く

ファミ○独特の癖になるあの音楽が流れる

俺が通った後、艦娘達はタイミングを見計らうかのように跳んでコンビニに入る

取り残された電が、助けを求め

「い、電渡れないのです（涙目）」

「大丈夫、これは電のことを探知して開いてるから

いきなり閉まったりしないから！

ほらー！」

「い、電の本気を見るのですー！」

ピョンと跳んでコンビニに入る電

勿論ドアはまだ閉まらない

電が安心して離れるとドアは閉まった

「お利口さんなドアだったのです…」

『いらつしやいませー』

店員さんが挨拶をする

本当、深海棲艦と艦娘がいることを除けばほとんど一緒だな

店員さんは、きつとこんな子供っぽい子達がコンビニの商品を輸送する輸送船を護衛しているとは夢にも思わないだろう

店内の商品を触ろうとしている艦娘達に注意する

「あんまり、商品をペタペタ触るなよ

売り物なんだから」

「そっか…」

吹雪がちよつと残念そうに呟く

ちなみに、艦娘達にもちゃんとお給料はある（らしい）

暁や響がおやつを買ったり、雷が飲み物を買っている

「みんな買い物済ませた？」

『大丈夫（なのです）！』

「じゃあ、コンビニ出て再出発だ！」

また、出るときも艦娘達はおっかなびつくり自動ドアから出ていった  
『ありがとうございますー！』

暫く歩くと目的地に着いた

目的地は、大型商業施設：： ショッピングモールだ

どうでもいいが、さつきからすれ違う男性が凄腕み付けてくるんだけど  
殺意すら感じる、マジで怖い

とりあえず、一緒に回って、その後昼休憩して、自由行動にした

俺は、店の外で待つてようとしたのだが、付いてきて来ないと駄目です！とのことなので、店内に入った

ちょうど時雨が試着室で着替えている所だったらしく第六駆の面々がそわそわとしながら待つていた

試着室のカーテンが開き時雨が出てくる

丸く潰れたような形の帽子に茶色のワンピースに袖の長いワイシャツを着ている首には、白いスカーフのようなものを結んでいる

「どう…かな…?」

恥じらいながら、似合っているか訊く時雨

「似合ってるわ!」

「これは、いいな…」

「なのです!」

「これで、時雨もレディの一員ね!」

ベンチに座つて本でも読んでそうだなと思いつつ、第六駆と時雨が新しい服を選んでいるのを眺める



なんか、響がゴスロリの服を持ってこれにしよう…とか言ってるけど、何処で着るつもりなんだ…

俺は、時雨の制服が入った袋を持って外に出る

「さて、一通り回ったし、昼にするか」

艦娘達は、新しく買った服を着ていた

「暁はエレガントなお店で食べたいわ！」

茶色の服の上から白い上着を羽織り、白いスカートを穿いている、靴は茶色のブーツ…

上品な感じだ、決してエレファントな感じではない

「じゃあ、あそこの店はどうかかな…?」

響は、探偵が被つていそうなチエツク柄の帽子に

白いフード付きの服上から青い上着を羽織り、緑のショートパンツと今どきの女の子って感じだ

というか寒くないのか…

「他の階には、色んな店の料理が食べられる所があるみたいよ?

そこにしたら?」

「電、ぱんけーきが食べたいのです!」

雷は、ひし形が縦に二個分並ぶ赤いセーターに茶色のショートパンツ

電は、ボンボンの付いた茶色のセーターに水玉模様のスカート

そして、何処で買ってきたのかと訊きたくなる程長いマフラーを二人で仲良く首に巻いている

「三階にあるみたいですね

エスカレーターを使いましょう」

翔鶴は、黒いライダーズジャケットと白いミニワンピース、靴は茶色のエンジニアリングブーツというブーツらしい

ブーツにも色んな種類があるんだな

「あの動く階段ですね！」

えっと… あ、あそこにあります！」

吹雪は、黄緑っぽいセーターの上に青いもふもふとフードの付いている上着を着て薄花色のマフラーをしている

室内だからか、さつき買っていた耳当てはしていない

その耳当ての耳を当てる部分が開発失敗した時に出てくるペンギンともふもふを模したものだっような気がするがきつと気のせい

俺が疲れているんだ…

ちなみに、制服のスカートみたいな青いスカートを穿いている

時雨は最初の店で着させられていた服を着ている

恥ずかしがっていたが、気に入ったらしい

他にも翔鶴がボマージャケットを買っていたり、吹雪達がゴスロリの服を買ったよう  
だ

何処で着るのか、本当に気になるよ…

動く階段… エスカレーターを不思議そうに見ている艦娘達

どう動いているのか、気になるのかな？

「みんなは何食べたい？」

「え、えっと… 何にしよう…」

「暁は豪華なディナーがいいわ！」

「マ〇クというのが、気になるね…」

ポテトが美味しいと読んだことがある…」

「私も読んだことがあるわ！」

でも、私はミ〇ドの方が気になるわね」

「電は、ぱんけーき… なのです」

「私は、ハンバーガーという物を食べてみたいです」

「うどんにしようかな」

「なるほど、了解だよ」

とりあえず、丸いテーブル二つ確保して、俺はテーブルで艦娘達が食べ物を買ってく

るのを待つ

… みんな連れて来たかったな…

今日も出撃や訓練をしている艦娘達を思い浮かべる

きつと、他の艦娘達もいつか鎮守府の外を見るときのために色々勉強したり、読んだ

りしているんだろう

本当は、自由に町を見せてあげたい

でも、彼女達は人類の希望で機密の塊だから鎮守府の外へ出すのは無理というのは良く分かる

「考え事かい？」

「時雨か……」

時雨は、うどんをテーブルに置き質問する

「他の艦娘に打ち明けにくいなら、僕が相談に乗ろうか？」

「時雨……頭打ったのか？」

「入渠する？」

「君には失望したよ」

ジト目で睨み付けてくる

「ごめん、ごめん」

俺は大丈夫だから

時雨、俺も昼買ってきていいかな？」

「い、い、よ

僕はここにいるから」

「よろしく〜」

時雨の心境の変化に嬉しく思いながら昼食を買いに行つた

## 落日の日 前編

学校がちよつと早く終わって家に帰る

「ただいまー」

「お帰り、ちよつと洗濯物干すの手伝ってくれる？」

「はいー！」

ランドセルを置いて、洗濯物を干す

自分より洗濯棹が高いから背伸びして服をかける

真つ青な空：：に見慣れない黒い粒がある

「ねえ、お母さん

あれ何？」

「どれ？」

ああ、あれ？鳥じゃないの？」

その時、空襲警報がけたたましく鳴り響いた

俺が昼飯買って戻ってくるよ

みんな食べ始めていた

「俺を待とうという心優しい娘はいないのか……」

「みんな、食べ物誘惑に勝てなかったよ……」キリッ

響がマツ〇のポテトを食べながらどや顔で言う

「すみません……」

吹雪は、大きいハンバーガーを持ちながら謝りハンバーガーにかぶり付く

ハム…… モグモグ……

なんか…… 平和だな……

一生懸命ハンバーガーを食べている吹雪を見るとふとそう思った

隣に座る翔鶴も吹雪のハンバーガーと似ているハンバーガーを食べているきつと同

じ店で買ったのだろうか

吹雪と同じくかぶり付いているけどちよつと恥ずかしそう

「二人ともハンバーガー美味しい?」

「あ、はい♪」

「はい、とても美味しいです」

「それは良かった」

電は、パンケーキ美味しい?」

「はい、美味しいのです!」

ナイフを左手で持ちパンケーキを切りながら、右手のフォークでパンケーキをさして食べる

「あれ?」

電って左利きだっけ?」

「電は、右利きなのです」

「電: : ナイフは利き手で持つんだよ?」

「はわわ!」

間違えちやったのです!!」

恥ずかしそうにナイフを右手に持ちかえる

そんな電に雷がドーナツを口元に差し出す

「はい、あーん」



はふ…： モグモグ

「なんだか、モチモチなのです！」

「ポン・〇・リングって言うらしいわ！」

モチモチして美味しいでしょ？

司令官も一口どう？」

「俺は、いいよ」

マツ〇のハンバーガーを食べながら言う

久しぶりだな、ジャンクフード…

雷は、まだ四個ぐらいドーナツが乗っている皿と俺を交互に見る

「本当に要らないの…？」

目をうるうるさせて訊いてくる

「あ…」

久しぶりだから、ドーナツ食べたいかも」

ドーナツ買いすぎたのかな？

「仕方ないわね！」

「はい、あーん」

「い、いや、自分で食べれ——」

分かった、食べるから」

雷の持っているドーナツをかじりつく

食べたことのある味が……口に広がったような気がするんだけど、恥ずかしくて味が分からん……

羨ましそうに吹雪が見てくる

暁や響、時雨まで凝視してくるのは何でなんですかね……

ちなみに、暁はオムライスを食べていた

オムライスは、エレガントな料理だから仕方ないね

「司令官、何かしら？」

ジト目で睨み付けてくる

「いや、なんでもないよ」

あ、そうだ、クレープ食べる？

美味しいんだよ」

『食べる！』

「了解」

八個のクレープを買って戻る

「はい、味とか好み分からないから適当に買ってきたよ」

ちなみに、俺のはイチゴとチョコのクレープだ

「あの… 司令官！」

私のクレープ一口食べますか？」

確か、吹雪のはカスタードとバナナのクレープだったかな

「ん、ありがと

俺のも食べるか？」

「あ、食べます

ありがとございます、司令官！」

俺のクレープは吹雪に渡り、響に渡りと結局全員に渡った

イチゴとチョコ人気だったのか… 今度から気をつけておこうかな

その後、四時間の自由時間を取った

電化製品を売っているエリアでテレビを買って、本屋で本を買ったり、ぶらぶらしているとネットワークス売っている店を見つけた

折角だし、なんかプレゼントしよう

喜んでくれればいいけど…

なんだかんだで、そろそろ時間だし待ち合わせ場所に戻るか

「すみません」

「あ、はい、何ですか？」

「あの…ここは何処でしょうか…」

目の前の少女は何故か俺がいつも着ている海軍の白い制服を着ている

「えっと…ここは呉のショッピングモールですよ」

「く、呉…!？」

少女が驚く

「どうしたのですか？」

少女が言うには、彼女は横須賀の近くに住んでいたらしい

自宅で母の洗濯の手伝いをしていたら、いつの間にかここにいたという

「…分かりました

もし良ければ、私と一緒に行きませんか？

宛が無いわけではないのですが……」

「え、でも……」

「やっぱり、知らない人に付いていくのは、不安ですか？」

「そういう訳ではないのですが」

「迷惑じゃないですか？」

「私は迷惑じゃないから大丈夫です」

後、敬語慣れないなら使わなくてもいいですよ？

そろそろ、待ち合わせ場所なのですが……」

辺りを見渡すと翔鶴達を見つけた

「や、止めてくださいー！」

知らない男が翔鶴さんの手を掴む

「いいじゃねえかよ」

少し、カラオケに行くだけだからよお」

「翔鶴さんに何するんですか!!」

手を離してください!」

私は必死に翔鶴さんと知らない男の手を引き剥がそうとするが、全然離れない別の男が私と時雨ちゃんの手を掴む

「離せ!」

翔鶴と吹雪から離れる!このクズ!」

「う、うう…」

「威勢のいい嬢ちゃんだ

さあ、お兄さん達と一緒に行くこうねえ」

艀装を使えば…でも、司令官に…

「何しているんですか?」

「ああん?」

誰だお前?」

見ると、司令官が助けに来てくれていた

「良かった…怖かったよ…(涙)」

男の手を振り払い司令官に抱きつく

「そうだな、よしよしいい子だから泣くなよ

さて、そこ二人、うちの姉と妹達が何かしたのですか？」

司令官の声色が変わる思わず私までビクツとする

「え、いや何も」

「じゃあ、付きまとうのは止めて貰えませんか？」

さ、翔姉、雪、時あの子達と合流したら帰ろう」

「え、あ、はい」

「分かったよ」

「了解です・・・」

私は第六駆の子達と白い制服を着た謎の少女の元に向かった

「大丈夫か？吹雪、翔鶴、時雨」

「大丈夫です・・・」

「ちよつと怖かったですけど」

「僕は大丈夫」

油断してた・・・日本とは言え危険はあったのに

「で、この子はどうしたんだい？」

遂に誘拐に手を出したの？」

時雨が質問する

第六駆の子達とあの少女はもう仲良くなっている

「な訳ないでしょ」

あの子俺と同じであつちの世界から来たみたいなんだ」

「なるほど」

だから、ちよつと変な感じがするんだね

ちなみに、助けてくれたのはいいけどさ

なんで、姉妹設定にしたんだい？」

「なんか、知り合いつて言うことややこしそうだったし

やばい今思うとめっちゃくちや恥ずかしい」

「お兄ちゃん♪」



「マジで勘弁してくれ… 恥ずかしくて死んじやうから…  
ってあれ？」

妖精さんから貰ったタブレットが震えている

見ると大淀から電話がかかってきていた

これ、電話機能付きとか凄いいんだけど…

「大淀、どうかした？」

『大変です！』

横須賀や東京が空襲を受けました！

呉も空襲される可能性があるのです、急いで戻って来てください!!』

「え、了解した

急いで戻る」

「どうしたの？」

「呉が空襲を受けるかもしれないんだ

だから、急いで戻らないと」

その事を翔鶴達に伝えようとしたとき、ちょうどけたたましいサイレンが鳴った

「空母瑞鶴抜錨する！」

「加賀続く」

埠頭から出撃しながら、数刻前の出来事を思い出す

バン!!

私は思いつきり机を叩く

「呉を防衛しないって一体どういうことですか!?

民間人は、どうなってもいいということですか!!」

「だから、空母の第二次攻撃を防ぐため空母を攻撃すると言っているんだ」

真面目そうに奴は言うだが、絶対見せかけだ

「本当は、戦果が欲しいだけなんですよ！」

「本当の事を言いなさいよ!!」

「まあ、戦果は出来れば欲しいよな」

にやにやと笑いながらさういう

「私達は、あんたの出世の道具じゃないのよ!!」

そもそも、あんたも軍人なら民間人を守る気概を見せなさいよ!!」

「いや、別に不服ならお前だけ横須賀第一鎮守府に転属してやつてもいいんだぞ？」

あそこは艦娘の対応も装備もいいらしいからな」

奴は余裕の笑みで言い放つ

「くっ

もういいわ、やればいいんでしょ、やれば」

執務室を飛び出す

「瑞鶴：：」

「加賀先輩どうしました？」

「貴女だけでも、横須賀第一鎮守府に行きなさい

貴女なら、十分に活躍が——」

「嫌です！

私は、加賀先輩を置いて何処かに行くなんて嫌です！

あの日、赤城先輩の代わりに加賀先輩を守るって誓ったんです

加賀先輩にどう言われようともこの誓いを破る気はありません」

「…分かったわ

好きにしなさい」

呆れたようにでも何処か安心したようにそう言う

「はい！」

いつか、加賀先輩や赤城先輩を抜かせるように頑張ります！」

「それなりに期待はしているわ」

優しく微笑みながら加賀先輩は言ってくれた

「加賀先輩、直掩機を出しましょう

呉を防衛します」

『それでは、空母を攻撃するのは難しくなるわ

それでもいいの?』

「加賀先輩は、呉が蹂躪されるのを見て見ぬ振りできます?」

『答えは分かっているでしょう?』

随伴艦のみんなも頷く

「直掩隊発艦始め!!」

呉を…みんなを守って！」

後は、呉第一鎮守府と第三鎮守府の健闘を祈ることしか出来なかつた

## 落日の日 後編

タイヤを損傷した軍用トラックを路肩に止め、荷物を持つ

周りでは、避難する民間人がわんさかいた

さつき、通り過ぎた新宿のビル郡は地獄と化していた

大量の硝子が民間人を容赦なく襲い、追い討ちをかけるかのようにビルが倒壊し多くの人を巻き沿いにする

俺は、必死に弾薬の入った箱を手に対空陣地へ走る

ポーン!!

敵機から、爆弾が投下され爆発が発生する

周りの放置されている乗用車が誘爆し、悲鳴と怒号を増幅される

くそ!くそ!!

今日もいつも通り見回りして終わりと思ったのに

平和な一日だと思っただのに

あちこちの建物から火の手が上がり、特徴的だった都庁は倒壊した

対空陣地にたどり着く

「これ、弾薬です!!」

「分かった!!」

「ここは、足りるから他の機銃に運んでやってくれ!!」

「了解です!!」

その時、戦闘機小隊が降下して機銃掃射を行う

人々が機銃の凶弾により倒れ、乗用車が爆発し、悲鳴が飛び交う

「喰らいやがれ!!」

対空陣地の機銃が一齐に戦闘機に対して発砲するが、戦闘機は小さく当たらない

三機の戦闘機が対空陣地に対して機銃掃射を加える

さつきまでいたところに機銃弾が炸裂する

「だ、大丈夫ですか!」

煙が晴れると対空陣地は血の海と化していた

さつきまで話していた人の胴体は引き裂かれ目は虚ろに虚空を見る

弾薬の補充をした機銃を担当していた人は、頭を吹き飛ばされ土囊に体を委ねている

「う、うわあああ!!」

こんな光景は前線の島を守備する部隊では日常茶飯事だったが、数週間前に訓練生から軍人になったばかりの新米兵には衝撃的過ぎた

俺の中の何かが崩れ、本能と狂気が体を支配する

「ふふふ、あははははは！」

笑いながら、機銃を乱射する

幸いなのか、俺は機銃の扱いを訓練生の時みっちり教えられていたので、機銃の扱いは慣れていた

目に入るものすべてに撃ちまくる

突然ヒューーンという音が聞こえると、俺は衝撃を受け意識を失った

「艦隊出撃しますね！」

「航空母艦瑞鳳！抜錨しちゃいます！」

「実戦ですか…致し方ありませんね」



「水上機母艦千歳、出撃します！」

旗艦、瑞鳳

鳳翔

朝潮

荒潮

大潮

満潮

旗艦、祥鳳

千歳

陽炎

不知火

霞

霞

の二つの艦隊が鎮守府から抜錨する

「朝潮ちゃん達、陽炎ちゃん達護衛よろしくお願いね？」

『はい！お任せください』

『陽炎に任せなさい！』

鎮守府の防衛は着任したばかりの龍驤が担当することになった

ちよつと、心配だけどきつと大丈夫

金剛さんや伊勢さんもいるからね！

暫く航行し、呉近海に到着する

既に索敵機は放っているから、待つだけだ

ちなみに、装備は私が烈風18機、零式艦上戦闘機52型24機、彗星6機

烈風は、鎮守府二部隊目で訓練は積んでいる

彗星は、戦闘機が足りなかつたから対攻撃機用で運用する

鳳翔さんは、零式艦上戦闘機21型19機

祥鳳は、紫電改二18機、零式艦上戦闘機62型12機、零式艦上戦闘機32型12機、彩雲6機

紫電改二は、まだ訓練が足りないが新鋭機は一部隊でも多い方がいい

千歳さんは、瑞雲18機、零式水上偵察機6機

計127機（偵察用の彩雲6機、水偵6機を除く）で迎撃する

絶対呉を守ります

司令官のためにも絶対！

『準備は出来ていますか？』

いつもの司令官の声ではない、提督が代わりに指揮を取っているのだ

「はい！」

準備は万全です♪」

『分かりました

誰かが大損害を受けたり、これ以上は危険と判断したら直ちに撤退してください

一応、近くに重巡洋艦を基幹とした艦隊が遊撃しているので、水上艦を発見したら対処してくれると思います

健闘を祈ります』

「我機動部隊、出撃します！」

「よしっ！二航戦出撃します！」

「いっくぜー！準鷹、出撃する！」

他にも護衛の子達が抜錨する

久しぶりの本格的な実戦……頑張らないと！

提督のためにも……

「飛龍、頑張ろうね♪」

「そうだね！じゃないと多聞丸に怒られちゃうもん」

護衛のみんなも士気は高い

臆病者の集まりと揶揄される呉第一鎮守府が甘くないことを他の鎮守府に示してやる！

私は、零式艦上戦闘機21型27機、九六式艦上戦闘機46機

飛龍は、零式艦上戦闘機32型27機、零式艦上戦闘機21型18機、九六式艦上戦

闘機28機

準鷹は、零式艦上戦闘機21型18機、九六式艦上戦闘機36機、九七式艦上攻撃機

(偵察用) 12機

計200機

旧式の機体ばかりだが、妖精さんの練度は横須賀第一鎮守府の一航戦に勝るとも劣らない程高く、士気も十分だ

『( ) ちから呉第二鎮守府の瑞鶴です』

蒼龍先輩聞こえますか?』

「こちら呉第一鎮守府の蒼龍です

ちゃんと聞こえてるよ

瑞鶴久しぶりだね」

『蒼龍先輩久しぶりです!』

加賀先輩も元気ですよ!』

「それは、良かった…」

私達も元気だよ

それで、何か用?」

『呉の防空用に戦闘機を放ったのですが、私達は指揮できないので、蒼龍先輩や飛龍先輩に頼もうと思って』

「了解、ありがとうね」

『私は呉の防衛戦に参加できず申し訳ないわ

いつも、蒼龍と飛龍には迷惑をかけるわね』

『そんな!迷惑だなんて思っていないですよ』

『うちの子を… 呉をよろしくお願いします』

「はい!」

加賀先輩も瑞鶴も御武運を！」

ちようどその時、直上に瑞鶴と加賀先輩の戦闘機が通る

新鋭機……零式艦上戦闘機52型44機だ

その時通信が入る

『我、祥鳳隊彩雲五番機

敵編隊発見、数400』

その後、場所が報告された

「よし、直ちに、戦闘機の発艦を始めます！」

直掩機、発艦はじめっ！」

私は弓を引き矢を放つ

艦載機に変化し、空を翔ていく

『直掩機、発艦っ！』

飛龍も同じように艦載機を放つ

『パーツといこうぜ』

パーツとな！」

準鷹は紙を艦載機に変化させ、次々と発艦させる

私達と違うんだよね

そう言えば、さつき彩雲って言うんですけど、彩雲なんて名前の艦載機あったけ？  
私も勉強不足かな・・・

## 呉の空は艦娘と共にあり 前編

九六艦戦と零戦の群れが深海棲艦側の艦載機の群れに向かっていく

高度の優位を得るため高度を上げる艦娘側は遂に深海棲艦側の群れを発見した  
全機が小隊に分かれ攻撃準備をする

『いよいよだよ！』

我ら九六艦戦の力、深海棲艦にたっぷり教えてやるぞ！』

《おー!!》

『えっと… 私達零戦も頑張りましたよー』

《了解!》

深海棲艦側も二つに分かれる

一つは呉に向かい、もう一つは艦娘側に向かう

呉に向かうのは、約250機

艦娘側の艦載機を迎撃するのは約150機、対して零戦は134機

『九六艦戦は攻撃機を』

私達は直掩機を迎え撃ちます



乱戦は出来る限り、避けるように小隊で纏まってください  
突撃開始！』

《了解！》

深海棲艦の戦闘機の機銃の射程は長く零戦より先に撃ってくるが、それを熟練の零戦はヒラリと躲し、お返しに機銃を放つ

深海棲艦の戦闘機は主翼がもがれクルクル回転しながら墜落する機体や爆発四散する機体も多くある

だが、同じくらい零戦も火を噴いて墜ちる機体やコックピットを撃ち抜かれそのまま墜ちる機体もある

だが、完全に零戦は敵機を釘付けにしていた

『くそ…』

小隊の十五番機がやられた』

一機の零戦が敵機の後ろを取る

『けつは頂いた！』

落としてやるぜ』

7. 7 m 機銃で弾の軌道を確認し、20 m 機銃を放つ

敵機は火を噴き墜ちていく

『やったぜ！撃墜一！！』

別の零戦が敵機を追い詰める

『私はあまり20mmが好きじゃないから…』

7. 7mm弾を燃料タンクに当てて、曳光弾で引火させようとする  
だが、なかなか引火しない

『あれ…？もしかして防弾性能が上がっている？』

つて、あわわ、背後に敵機！』

敵機が12.7mm機銃6門を放つ

零戦は機体を振り回避しようとするも、主翼に命中して燃え始める

『21型は脆いからね…』

ここまでかな…ごめん、蒼龍…』

一方、九六艦戦は…

六機の九六艦戦が敵艦爆に一撃離脱戦法で攻撃する

『よしー！』

一機撃墜！』

『こちら、一機撃破』

『了解…む、あれは戦闘機か!？』

拡散して回避しろ！』

『『『『『了解！』』』』』』

他の小隊も果敢に攻撃するが、7.7mm2門は火力不足で攻撃機の数の中々減らな  
い

他の隊は、攻撃機の背後に着き執拗に攻撃するも後部機銃で落とされる機体が続出す  
る

『次はあそこの無傷の編隊を狙うぞ！』

六機の九六艦戦は、六機の編隊に狙いを定める

降下して、速度を上げる

徐々に敵機が大きく細部まで見えるようになると、九六艦戦は異変に気がつく

『…まさか…中型爆撃機!？』

本土近くに飛行場姫がいるのか!？

とにかく、攻撃だ！

飛龍に恥をかかせる訳にはいかない』

『『『『了解！』』』』

突然、敵機が機体を振り機銃を乱射する

12門付いている機銃すべてが火を噴いている訳ではないが、九六艦戦からは無数の機銃が襲いかかっているように見えた

『く、喰らえ！』

7・7mm弾をエンジン部分に撃ち込み、離脱する

攻撃した敵機を睨む

敵機は、何事もなかったかのように飛び続けている

『くそ！』

他はどうだ？』

『駄目です…。撃破すら出来ません』

見るといつの間にか4機に減っている

他の2機は撃墜されたのだろう

『二番機と三番機が被弾しました…』

飛龍のもとへ帰艦します』

『了解だ、五番機は私に付いてこい』

他の隊と合流して再度攻撃を仕掛ける』

『了解！』

耳に突き刺すような警報が鳴る

「し、司令官一体何が…」

「呉が空襲を受けるらしい」

だから、警報が鳴ったんだ」

くうしゆう？くうしゆうってあの戦争の時に行われるもの？

周りの一部の人々が警報の意味に気がついたのかざわめきだす

「どうするのですか？」

落ち着いている銀髪の女性が私が助けを求めたお兄さんに質問する

「とりあえず……第六駆、お前達はその子とシエルターに逃げてくれ

彼女を危険に晒すわけにはいかない

吹雪と翔鶴、時雨は、俺と一緒に外に行く

艦載機を発艦するにしても、外に出なくちゃならない」

「待つて……司令官はシエルターに逃げないと……」

司令官に万が一のことがあれば、大変だ……」

「そうよ！」

せめて、私達が付いてないと！」

クールな響お姉ちゃんやんと世話好きの雷お姉ちゃんが反論する

しれいかんつてどういう意味何だろう？

お兄さんのことを指しているみたいだけど……」

「あ、あの……」

「ん……？どうしました？」

「私も外へ行きたい！」

本当に、知らない町に来たのか確認したいもん」

「でも、空襲を受けるので危険何ですよ？」

正直、空襲があるなんて信じられない

戦争中じゃないのだし…

「本人も外に出たいらしいし、一緒に行きましょう！」

お姉ちゃん… つばい？ 暁お姉ちゃんが言う

「私達が、全力で司令官とこの子を守るから心配ないのです」

優しく気遣ってくれた電お姉ちゃんもそう言ってくれた

「…分かった

絶対に私の近くから離れないでください」

そう言い、店員の指示に従ってシヨツピングモールのシェルターに避難する人々の進行方向とは、逆の方向に行く

外に出てみるとやはり知らない場所

そして、道路には厳つい車や戦車らしきものも通っている

呆然とする私を物静かな時雨お姉ちゃんが優しく後ろから押してくる

「さ、行こう

提督の近くにいないといけないんでしょ？」

優しく微笑みながら、語りかける

コクリと首を縦に振って、しれいかんに近づくと

しれいかんは、軍人の偉いつばい人と話している

真面目そうな吹雪お姉ちゃんも一緒に話をしている

吹雪お姉ちゃんがしれいかんに頷いた後、数歩下がる

吹雪お姉ちゃんが一瞬光り、光がなくなると服はそのまま煙突と棒のようなもの、手には丸まった四角い砲のようなものが現れていて、足には三本の管のついた良く分からないものが現れる

：… え!? どういうこと…? ?

物が突然… つてあれ鉄?

軍人の人も驚いているようだ

「僕達のここと怖くなった?」

時雨お姉ちゃんがちよつと悲しげに訊く

首をブンブン振り否定する

「さつき、暁お姉ちゃんや響お姉ちゃん達と話したけどいい人だったもん」

「そっか…」

君は優しい子なんだね

司令官と同じだ」

しれいかんと軍人の人の話は終わったみたいで、しれいかんが私達の方に来た

「ここ」の場所で発艦作業を行えだつて



時雨、確か対空電探持っていたよな

起動して、敵編隊が大体何処にいるか分かるか？」

「多分出来るはずだよ

ちよつと、離れてて……」

時雨お姉ちゃんも鉄で出来たような何かを出す

翔鶴お姉ちゃんもいつの間にか、手に弓を持っていて、右腕に大きな盾のようなものが付いてる

「合成風力がないが大丈夫？」

「大丈夫です……」

直掩機、発艦始め！」

翔鶴お姉ちゃんは、弓を引き矢を放った

その姿はかっこ良く、思わず見とれてしまう程だった

## 呉の空は艦娘と共にあり 後編

零戦と敵戦闘機の戦いは艦娘側の制空権喪失で終わりそうだった

『大丈夫ですか？三番機』

『大丈夫です』

中隊長』

周りに飛んでいるのは、敵機ばかり

零戦は30機程、対して敵機は70機程いる

敵機の数と質に最初は善戦していたものの、徐々に押された結果だ

敵の練度もカムラン半島に居座っている空母の艦載機よりも高い、まさしく精鋭の中から選りすぐった精鋭だったのだろう

24機いた、我瑞鶴隊も今や10機…

『加賀隊は、大丈夫ですか？』

『未だ、14機残存だ』

『まだまだ、練度が足らないようだな』

『瑞鶴に会わせる顔がないです…』

でも、このままだと不味いですよ』

『中隊長！』

友軍機です

恐らく、呉第三鎮守府かと！』

『遅れてすみません』

瑞鳳隊烈風これより、戦闘を開始します』

『祥鳳隊紫電改二推参…』

大柄の戦闘機とそれより小柄の戦闘機が向かってくる

小柄な機体はかつての仇敵F6Fヘルキャットのようだ

『な、何故米軍機が!?!』

『似てるけど、違うぜ！』

俺らは紫電改二… 歴とした日本軍機だ！』

『はっ』

紫電改二ごときが何言ってる』

『なんだと!?!』

幻の後継機に言われたくないわ！』

『なんだと…』

『ほらほら、みんな仲良くだよ！』

零戦62型の中隊長付いてきてください

他は、攻撃隊の攻撃を！』

《了解！》

『……』

紫電改二は上昇を始め、烈風はそのまま敵機に突入する

敵機も練度に自信があるのか烈風と真正面から戦いを挑む

お互い撃ち合い、すれ違う

烈風は一機撃破されたが、代わりに敵機は10機以上撃墜破され、烈風と零戦62型の連携で動揺から立ち直れない

さらにそこに紫電改二が急降下して速度を上げながら突っ込む

その速さは時速800km近く、時速500km程度の敵機に成す術はない

敵機は、格闘戦に活路を見出だそうとしたが、烈風と紫電改二の本懐は格闘戦であり、敵機は蹂躪された

『あの人達何なんですか……』

強すぎですよ』

『ああ……』

だが、烈風と紫電改二…聞いたことがない  
零戦62型というのもだが…

一体、呉第三はどんな所なんだ』

『悩むのは後にして、96艦戦の援護に向かいましょう！』

敵攻撃隊にも、呉第三鎮守府の艦載機と生き残りの零戦が襲いかかる

斜め上後方から、真正面から、次々と攻撃を仕掛け敵機を海の藻屑にする

一部の攻撃機は爆弾を投棄して遁走し始めた

『次はあの編隊だ！』

あれは… 中型爆撃機か

面倒な相手だ、一体何処から飛んできたんだ』

敵機が一齐に発砲し、濃厚な弾幕を作る

零戦は弾幕を諸ともせず、敵機に機銃弾を浴びせる

一機がエンジンから煙を出し編隊から、落伍する

『一機撃破！』

他はどうだ？』

『こちら四番機、エンジンから煙を出すも撃破ならず

強行突破を試みる模様』

『さっきの攻撃で二機やられた…』

他の隊と合流しよう』

この中型爆撃機は、双発で最悪片方が壊れても飛び続ける

零戦も機銃弾を浴びせるが20mm弾でないと致命傷を与えるのは難しく

弾が尽き離脱する機体も増えてきた

50機程から35機程に減ったが、呉の町を火の海と化するには十分だ

突然、6機の機体が急降下して敵爆撃機を機銃弾を浴びせる

2機の敵爆撃機がエンジンが爆発して墜落し、2機が落伍する

他の2機も胴体に命中したようで、機銃が沈黙する

他の編隊にも次々と急降下する機体…紫電改二が20mm4門、13mm2門の火

力で撃墜破していく

そこに烈風と62型も負けじと落伍させていく

62型も烈風や紫電改二に劣るものの、20mm2門、13mm2門と他の零戦に比べ強化されている

艦娘と深海棲艦との戦いは終わりつつあった

一方では…

時雨は電探を読み取る

Aスコープ方式でギザギザの線がモニターに表示されている

周りの建物が邪魔だけど…

反応が二つ…

恐らく南西の反応は瑞鳳達の隊が対応したみたいで大きく乱れてる

つまり南東の反応は…

「翔鶴、南東に敵編隊らしきものがある

そこに、烈風を急行させてくれないかな？」

「分かったわ」

翔鶴が指示を出し烈風は南東に向かう

『頑張って護りましょー!』

《おー!》

敵機は、50機程……だが、烈風は気が付いた

あれは、艦載機でも中型爆撃機でもない

大型爆撃機だ

かつての戦いで日本を苦しめたB29も大型爆撃機の一つでより長距離をよりたく

さんの爆弾を載せ、高高度を飛ぶために作られた

幸い高高度ではないが、24機の烈風には荷が重い

敵大型爆撃機と烈風がすれ違う

敵大型爆撃機の何機かは落伍し、撃墜破されるものの



烈風も火器管制装置により精度の増した機銃の餌食になる

1機の烈風は主翼を損傷し悲鳴をあげながら墜落する、また他の1機は胴体を引き裂かれ帰艦を余儀なくされる

翔鶴隊烈風は練度が高いが今まで大型爆撃機に戦いを挑んだ事がなかったため苦戦する

『なんで、エンジン壊れたのにまだ動けるの!？』

機銃も銃撃を受け沈黙し、エンジンも壊れたり煙を噴いているにも関わらず敵機は引き返さず呉の町を目指す

深海棲艦が如何に人間を憎み殺意を抱いているのかひしひしと伝わる

15機まで数を減らすに遂に呉の町までに到達する

『やらせるか!』

1機の烈風が敵機に右から銃撃する

敵機は左に回避しようとするが、エンジンに命中し操縦不能になったのかもう1機に突っ込み2機が火に包まれる

爆弾を投下される前にもう3機落とすが、10機が爆弾を投下する

一つ、二つ、三つ…… 無数の爆弾が落ちていく

暫くすると町のあちこちから火の手が上がった

# 決戦!南西諸島防衛線! 1

物々しい雰囲気の中ドアがノックされる

「入れ」

「失礼します」

そう言い男性が入ってくる

敬礼し、名前と階級を述べる

「――です

現在分かっている被害状況を報告します

敵は我々の行政施設：・皇居や国会議事堂、首相官邸、都庁、大本営、海軍本部等、各

施設に空襲を行いました

また、各都市に対する無差別爆撃も行われ

民間人の死者数は3万人以上になると思われます

鎮守府に対する攻撃も激しく

横須賀第一第二第三鎮守府

呉第一第二鎮守府

舞鶴第一第二鎮守府

佐世保第一第二第三鎮守府

大湊警備府

が攻撃を受けたと報告がありました

攻撃を受けていないのは、稼働していない舞鶴第三鎮守府と内地にないトラック泊地、そして呉第三鎮守府のみです」

『……』

話を聞いていた男性の一人が口を開く

「やはり、呉第三の彼奴は深海棲艦と繋がっているのではないか？

じゃなければ、我々の知らない深海棲艦の情報を知っていたり呉第三鎮守府が空襲を受けなかった理由もつく」

「……流石にそれはないだろう

人間を見ればすぐ攻撃してくる深海棲艦に人間と手を組むという選択肢はないはずだ

それに奴が来た世界に深海棲艦はいない

何らかの方法で深海棲艦を知っていたにしろ、事前に手を組んでいたという可能性はないはず

まあ、我々にとって邪魔な存在というのは変わらないが」

「明日のマルナナマルマルより、南西諸島防衛線に居座っている本土空襲した敵空母を撃滅する

だが、作戦を説明する前に今回の空襲の犠牲者に黙祷を捧げる

黙祷!」

艦娘は呉の町を護るため全力を尽くした

しかし、65人の犠牲を出してしまった

他の都市に比べれば少ないが、65人分の悲しみが生まれたことには変わらない

中にはまだ立ち直れず泣いている子もいる

だから、気持ちの整理をさせるためにも、黙祷を捧げることにした

黙祷を捧げた後、俺は努めて粛々と作戦を説明する

「機動部隊と水上打撃部隊を編成する

機動部隊旗艦翔鶴

瑞鳳

暁

響

雷

電

水上打撃部隊旗艦金剛

伊勢

祥鳳

古鷹

陽炎

不知火

以上だ

装備は、時雨の配った紙を参照するように

それと、祥鳳は艦隊の防空を意識したため攻撃機が零戦62型しかないが我慢してくれ

何か質問はあるか？」

艦娘達は誰も手を挙げない

「じゃあ、ちゃんと明日に向けて装備の整備をしておくように

よし、朝飯にしようか!」

そう言いながら、俺は朝食を撰んだ

私はワイワイと賑わう食堂のドアを静かに開けて廊下に出る

そのまま走って外に出る

息が切れるけど、立ち止まらない

止まったら、もう走れそうにないから…

鎮守府の正門… 司令官と初めて会った所まで駆けてきた

そうだよね…

旧式の私なんか… 攻略作戦に参加させて貰えるわけないよね…

「ははは：：

私何勘違いしてたんだろ：：

ずっと、司令官のために前線で戦えろと思ってた

でも、私の名前は攻略作戦のメンバーには入ってなかった

つまり、そういうことなんだろ

もうちょっと一緒に居れると思っただのに：：

止めようと思っても涙が止まらない

「う：：うう：：

私は正門の壁の近くで踞った

俺は吹雪を探し見渡すがいない

ちよつと話があつたんだが…

「あ、白雪

白雪知らない?

ちよつと話があるんだけど」

「白雪ちゃんですか?」

さつきまで、一緒にいたのですけど…」

「待つてれば、会えるかな?」

朝飯食べて待つているが、いつまで経つても白雪が来ない

もしかしたら、もう朝食食べ終わってるのかもな

食器を片付けながら、そう思い

時雨に白雪を探してくると伝え食堂を出た

怪我したのかなと思いでックに行ったり、あのことがバレたのかと工廠に行ったりと  
あちこち行つたが白雪が見付からない

一体何処行つたんだ…



仕方ないので、妖精さんに訊いてみると正門に向かって走るのを見たらしいので正門に、向かってみた

「どれだけ泣いていただろう…」

唐突に、上から声が掛かる

「こんな所で何やってるんだ？」

「風邪引くよ？」

優しいいつもの声…。いつもなら返事をするだろうけど、今は顔すら上げない私の背中に暖かい司令官の匂いがする上着が掛けられ、司令官が隣に座る

「全く…」

確か、正門の近くで初めて会ったんだよな

吹雪が転けてさ

まだ、2ヶ月くらいなんだよな……」

懐かしむように司令官は呟く

「……」

そう、それで私が自己紹介したら、呆然としてました……

それで、私が鎮守府の中を旅行して……

開発して……

建造して……

からかって……

また、嗚咽が漏れる

駄目、司令官を心配させちゃうから止めないと

そい思えば思うほど胸が締め付けられる

気が付くと私は司令官に泣き付いていた

「なんで……なんで、私を作戦に参加……させてくれなかったんですか……」

「ごめん……先に言っておけば良かったな……」

実はな——」

コンコン

「どうぞ」

「失礼します．．」

「翔鶴さんですか

珍しいですね、私の所に来るなんて

何か用があるのですか？」

覚悟を決めたように翔鶴は話す

「横須賀第一鎮守府に私を転属させて欲しいと頼むためここに来ました」

## 決戦!南西諸島防衛線! 2

マルナナマルマルになった

「よし、金剛、翔鶴頼んだぞ

吹雪もしっかり… な!」

「了解デース!」

「精一杯頑張ります!」

「はい!もつともつと頑張ります!!」

計18人の艦娘が埠頭から出航する

駆逐艦娘達が堤防を走って追いかけてたりしている

おい、あんまりいきおいよく走ったら… ザバアーン

… 浮き輪何処にあったっけ…

ちよつとしたアクシデントがあつたりしたが無事翔鶴達は出撃した

「今日は、よろしくお願いしますね

瑞鳳、暁ちゃん、響ちゃん、雷ちゃん、電ちゃん」

『こちらこそ、よろしくお願いいたします！』

『よろしくお願いするわ』

『Очень приятно (よろしく)』

『よろしくね!』

『な、なのです』

この作戦でこのことも最後…せめて戦果を…

「そろそろ、南西諸島防衛線ね

索敵機を出しましょう

まず私が6機出します

その後、瑞鳳が6機出してください

二段索敵をします

その間、第六駆は対潜警戒を厳としてください」

『『『『了解(なのです)』』』』』

97艦攻が発艦していく

この子達も相当鍛練してきた

きつと、転属する前に間に合うはず

暫くすると敵艦隊発見の報せが届く

『重巡洋艦一軽巡洋艦一駆逐艦三』

思ったより、戦力が少ない…

偵察艦隊でしょうか?

「攻撃隊を発艦します!」

『分かりました!』

『攻撃隊、発艦始めっ!』

烈風21機、彗星21機、97艦攻27機を発艦する

瑞鳳は、彗星12機、天山12機を発艦する

翔鶴隊彗星は敵の弾幕をヒラリと回避しながら爆弾を投下し軽巡洋艦と駆逐艦一隻を撃破

瑞鳳隊も負けじと駆逐艦二隻を撃沈し、翔鶴隊97艦攻が重巡洋艦を雷撃し撃沈した  
『私の出番無しじゃない!』

「暁ちゃん達はもう少し後に活躍して貰いますから…」

それまで、待つててください」

苦笑いしながら、そう宥める

金剛と翔鶴から戦闘の報告があがる

両者損害零で敵艦隊を撃滅した

「司令官、画面を凝視しても結果は変わらないよね？」

だから、この山積みの書類を片付けてよ」

今日の秘書艦の時雨がそう言う

まず、艦娘の艦装を民間人の多く居る中展開することを許可したことの始末書、今作戦の作戦要項や艦隊の編成を纏めたもの等々…それに普段処理する書類もプラスされる

ちなみに今処理しているのは、この鎮守府にある烈風、紫電改二、彩雲、瑞雲の性能や他の鎮守府に対しての技術提供の要請だ

確かにこの装備があれば、深海棲艦との戦いは楽になるだろう

艦娘の生還率も上がるかもしれない

だが…

「…今度は僕を見つめて…どうしたの？」

ちよつと、心配そうに時雨が訊ねる

「いや、何でもないんだ…」

吹雪の話と時雨の初めて会った時の状態を考えるとまだ、ブラック鎮守府はあるはずもしかしたら、今ある鎮守府のほとんどがそうかもしれない

もし、そんな鎮守府にこんな高性能な機体が入る可能性があるかと分かれば何をす



るか分からない

資源を獲得するために、四六時中艦娘が働かされることになるかもしれない

俺の推測だから、そんなことにはならないかもしれない、けど俺の決定のせいで艦娘達が苦しめられるなら直接手を下していなくても、同罪な気がした

とりあえず性能だけは書いて、技術提供の部分は何も書かなかった

「ちなみにさ、時雨」

「何、司令官」

「なんで、誰かいる時は提督って呼ぶのに今は司令官なの？」

「別にいいじゃないか……」

「逆なら、分かるんだけど……」

提督と混ざっちゃうし

提督に話し掛ける時はどうするんだよ」

「話しかけないから大丈夫だよ」

「んー」

まだ、人間を信じられないのかもしれないけど……

出来れば、話をした方がいいよ？」

「分かったよ、司令官」

「みんなちゃんと付いてきてますか?」

『こちら白雪、ちゃんと着いてきてます』

『ん… 初雪は大丈夫…』

『深雪様は、大丈夫だぜ!』

『睦月も大丈夫!』

『大丈夫っばい!』

そろそろ敵艦隊に遭遇するかも…

でも、大丈夫!

昨日の司令官の話を思い出す

「実はな、吹雪には新しい装備を使って攻略に参加して貰うつもりだったんだ  
だけど、その装備の性能がどれ程か分からなくて編成を決められなかったんだ  
ちよつと、付いてきてくれないか？」

そう言つて、司令官は立ち上がる

私も司令官に付いていく

その間にある程度泣き止んだ、なんかスッキリしたような気がする

司令官は、工廠のドアを開け妖精さんと呼ぶ

「いまーすー！」

「呼ばれて飛び出てジャジャジャーン」

「お菓子ー！」

司令官は、一人一人にお菓子を渡す

暫くすると妖精さん達が装備を持ってきた

円柱に棒が突き出たような… なんの装備でしょう？

「これは、94式高射装置だよ」

「これが、高射装置ですか…!?

実物は、初めて見ました！」

94式高射装置妖精さんがキリツと敬礼する

私も返礼すると高射装置を手取る

資料室のと同じ：：あれ？資料室に載っていたのは、91式だったような：：

「それは、手首に付けるのです！」

工廠妖精さんがどや顔で説明する

言われた通り手首に付ける

「吹雪、それで対空戦闘を試してみてくれ

鳳翔と龍驤に訓練相手は、頼んどいたから」

「ありがとうございます、司令官！」

早速、訓練したいので、司令官見ていてください」

「ああ、分かった」

訓練してみた所、飛躍的に対空戦闘が上手くなっていた

砲撃補助までしてくれるので万能だ

「司令官！」

「これ凄いです！」

「これなら、あの編成でも大丈夫そうだな！」

白雪達に作戦に参加するように伝えてくるか」

暫く進んでいると夕立ちちゃんから無線がきた

『三時の方向になんかいるっぽい!』

確かに三時の方向になにかいる…

見張り妖精さんに確認すると単艦の艦娘らしいと報告してきた

ドロップの艦娘?と訊くと損傷を受けてるから違うかも?と返事がきた

「艦娘らしいので、近づきましよう

一応、司令官に報告をします」

航行速度を落としながら、単艦の艦娘に近づいた

## 決戦!南西諸島防衛線!3

私達は、単艦の艦娘に近づくと

単艦の艦娘は、翔鶴さんのように飛行甲板を付けていた

だが、その飛行甲板には穴が空き発着艦は、出来そうにない

赤い袴、サラツとした長い黒髪……この艦娘は……

「赤城さん？」

大丈夫ですか？」

その言葉で赤城は此方を向く

しかし、その目は虚ろで虚空に焦点を結んでいる

「ふ……ぶきさん？」

何故……貴女が……」

赤城の異様な雰囲気呑まれそうになりながらも吹雪は質問する

「私達は、呉第三鎮守府の艦隊なのですが……」

赤城さんは、何処所属ですか？」

「……佐世保第一鎮守府です」

「分かりました！」

えっと… もうちよつと待つてください」

『どうした吹雪？』

「あ、司令官！」

実は、佐世保第一鎮守府の赤城さんが損傷を負って単艦でいるのですが…」

『単艦！』

分かった、佐世保第一に確認してみる

赤城は、そうだな…

初雪と深雪に護衛を任せれば大丈夫だよな？』

司令官は、一瞬驚く

「あ、はい

大丈夫だと思います」

『じゃあ、それでお願ひ

気を付けてな』

「もう、司令官は心配しすぎです！」

『そんなことないって』

司令官との無線が切れる

「みんな聞いていたと思うけど初雪ちゃんと深雪ちゃんて赤城さんを鎮守府まで護衛して

赤城さん、航行は出来ますか？」

「出来ません」

「分かりました

じゃあ、深雪ちゃん曳航をお願い」

『分かったぜ！』

戦闘に、参加できないのは残念だけど護衛は任せろ！』

「その必要はありません」

唐突に赤城さんがそういう

「え．．．何がですか？」

「私を護衛する必要がないってことです」

赤城さんは、私をまっすぐ見つめて言う

目が据わっているのに、私に焦点が合っていないのが不気味で後退る

「でも、そしたら赤城さんが．．．」

「雷撃処分でもいいのですが、これから戦闘なら魚雷は無駄に出来ませんよね？」

「だ、駄目です．．．」



赤城さんが轟沈するなんて…

佐世保第一には、赤城さんを待っている人が居るんじゃないんですか？」

「… いません

私は… いえ私達艦娘は兵器ですから…

兵器を待つような人はいませんよね？」

「……」

私は絶句してしまふ

赤城さんの雰囲気、発言から相当な心のダメージを負っていることが嫌でも伝わってくる

私じゃどうしたらいいか分からない

とにかく、連れて帰ることが大切に思えた

「赤城さんが言うように私達が兵器なら、私達は赤城さんを護衛しなければなりません  
私達は赤城さんを護衛しろと司令官から命令されたのですから」

そう言い返し、深雪ちゃんと初雪ちゃんに護衛を任せた

俺は、佐世保第一鎮守府に電話する

『こちら、佐世保第一鎮守府秘書艦の長門だ』

「私は、呉第三鎮守府の司令官です」

『呉第三鎮守府...?』

新設のあそこか

何の用だ? 演習か?』

「いえ、演習じゃなくて、確認したいことがあります」

他の鎮守府と演習出来ないのかと思ったら、直接申し込むのか...

『確認したいこと?』

私に分かる範囲なら、直ぐに答えよう』

「南西諸島防衛線で呉第三所属の艦娘達から佐世保第一鎮守府の赤城が単艦で発見したと報告があつて

どういうことか気になったのです」

『な…』

ちよつと待つてくれ』

誰かと話すような音が聞こえる

暫くすると、男性が電話に出た

『電話を代わった

私は佐世保第一鎮守府の提督の劔崎けんざきだ

君のことは知っているよ』

「そうですか…」

『赤城の件だな？』

あいつは使えないからな

練度の低い弾除駆逐艦と一緒に南西諸島防衛線に送り出したんだ

結局、空母一隻も撃沈出来ない役立たずということが証明されただけだったが』

「……」

こいつ艦娘をなんだと思つてやがるんだ

怒り… いや殺意を押し殺す

『役立たずは、要らないからお前の鎮守府に転属させてやろう

確か、呉第三には赤城が居なかつたよな？』

「はい…… いません」

『まあ、二線級の鎮守府だったら、十分活躍は出来るだろうがな

用事は、それだけか?』

「はい、ありがとうございます」

電話を切ると受話器を叩き付ける

ガチャン!!

その音で、小説を読んでいた時雨がビクツとする

「あ…… 濟まない時雨……」

「司令官…… 大丈夫?」

心配そうに俺の方に駆け寄る

「大丈夫…… 大丈夫だから…… さ……」

時雨を押し止める

やはりだ……

ブラック鎮守府は存在する

俺の危惧は的中してしまったのだ

処理した書類から烈風や紫電改二等の紙を取りだし思いっきり破り捨てる

「司令官!」

時雨は俺を椅子に座らせ頭を撫でる

「俺は子どもじゃないんだから… 止めてくれ…」

「止めないよ？」

司令官：… 辛いときは泣いていいんだ」

「司令官が泣いていたら示しがつかないだろう…」

「大丈夫、今は僕しかないから…」

大丈夫だよ？」

何故かその優しい声音に俺は安心する

時雨だって、辛い経験をしただろうに… なんてこんなに優しく出来るのだろう…

「なんで… なんで艦娘を… 酷い目に…」

俺なんか指揮を取つていいのかという不安と艦娘が虐げられている事実、救える命を救えなかつた罪悪感色々なものがごちゃ混ぜになつて涙となつて溢れだす

俺は、暫く時雨に泣きついた

「朝潮達の報告によると大日本共和国では、各地で暴動やデモが発生したらしいね…

今回の空襲で政府や軍の面子は丸潰れだし、何かしてくるんじゃないかな…?」

私は赤城と翔鶴に報告する

「おおよそ、今回の空襲を行ったマリアナにある沖ノ島の飛行場姫に強襲でもするの  
しょう

面子のために」

赤城は、軽蔑の声音で言う

「通常個体2000隻、鬼、姫級3隻いる南西諸島に無策で艦娘を突入させるのでし  
ょう  
ね

あのときのように」

翔鶴も赤城と同じ声音で言う

「そう言えば、ヴェルさん

呉で新型の艦載機が登場したと聞きましたが…」

「そうらしいね…」

急降下性能がよく推定時速800km出せる機体と頑丈で武装も速力も零戦より上

回る機体…

幸い呉でしか確認されていないけど…」

「厄介ですね…」

詳しい性能については？」

私は首を振る

「何故か、大本営にも海軍本部にも艦隊司令部にも性能所かその機体の名前すら知られていないみたいなんだ…」

最悪、呉の各鎮守府に潜入して来るしかないかもしれない…」

「そうですか…」

赤城は、目の前の紙に視線を戻した

## 決戦!南西諸島防衛線! 4

赤城さんと深雪ちゃんと初雪ちゃんから別れた後、主力艦隊の援護をするために東に向かっていた

『吹雪ちゃん!』

11時の方向敵機です!』

白雪ちゃんから無線が入り、11時の方向を見る

距離があるが、見間違いのような異形の艦載機が飛んでいる、確かに敵機だ

単機だから、偵察機と推測できる

向こうもこちらに気が付いたようで、徐々に接近してくる

「輪形陣を組んでください」

偵察機を追い払います!

対空戦闘よーい!!」

私達は、輪形陣を組み対空戦闘を始める

ただ、輪形陣は本来五隻以上で組む物なので、上から見ると白雪ちゃん、睦月ちゃん、夕立ちちゃん、で三角形を作って私が真ん中にいる感じになっているだろう



敵機の周りに疎らに爆発が生じる

いつもなら、これで追い払えるのだが…

…敵機が接近してきてます…

私達の位置を報告するような電波を捉えたから情報は向こうに知られたはずですが…

接近する理由が…

十分接近した敵機は、急降下を始める

急降下!?

もしかして!

「ぜ、全艦回避運動!」

『『了解!』』』

その瞬間敵機から爆弾が投下される

その先には夕立ちちゃんが…

「夕立ちちゃん!」

『ぼい〜!?!』

夕立ちちゃんの姿が生じた水柱によって見なくなつた

瑞鳳隊 97 艦攻二番機が二つの輪形陣を発見する

手前の輪形陣は、空母二、重巡洋艦一、軽巡洋艦一、駆逐艦二

それを瑞鳳に報告し、97 艦攻は降下して速度を稼ぐ

追隨する戦闘機を振り切ろうとしながら、奥の輪形陣を偵察しようと強行突破する

『新たな機動部隊発見

空母：：』

ここで、戦闘機が遂に97 艦攻を捉え火の塊となって97 艦攻は海に散った

ちようどその時、深海棲艦の偵察機も翔鶴達を捉えていて97 艦攻と同じ運命を辿つ

た

その時、発生した煙は戦いの始まりを知らせる狼煙のようだった

翔鶴と瑞鳳は、次々と攻撃機を発艦させる

烈風20機、彗星31機、天山9機、97艦攻26機の計86機

翔鶴には、敵がヲ級三隻でも勝算があつた

決して慢心ではないが、烈風の性能は桁違いで練度も高い

倍の戦闘機と対等に渡り合える自信があつた

また、攻撃機の練度も限界まで上がっている

編隊を組んだ艦載機が、東の空に消える

艦娘の艦載機は、一直線に敵機動部隊に向かって進んでいく

中間地点で上を警戒していた烈風が何かを発見する

『敵編隊を発見!』

数230機程!』

『こちらからは手を出さないでください!』

翔鶴さんに報告して、無視しますよー』

だが、敵は無視せず20機程がこちらへ向かってくる

『仕方ないですね』

一番機から十五番機で迎撃しますから付いてきてください!』

15機の烈風が迎撃するため上昇する

敵機と烈風は、機銃は放ちすれ違う

烈風は1機も墜ちず、敵機が10機程墜落し慌てて敵機は上昇して逃げる

その様子を見て15機の烈風も編隊に戻る

『鎧袖一触だ!』

やってやったぜ』

『そういうが十番機、敵の機銃弾当たってただろ

零戦だったたら、撃墜されていたかもしれないんだから気を付けろよ』

『わ、分かつてるよ』

翔鶴は烈風の報告を聞いて、敵機動部隊の空母の数を推測していた

ヲ級の艦載機量は、80〜90機程とされている

又級は、40〜50機

直掩機や偵察機を考えると、ヲ級三隻で直掩機が20機程と考えるのが妥当だろう

敵の第一次攻撃隊さえ凌げれば勝てる

「そろそろ、敵の第一次攻撃隊が到着します

敵の艦載機は多いですが、これを凌げれば勝機があります

頑張りましょう！」

『『『『『まごー』』』』』』

「仰角最大!!」

B u r n i n g   L o v e !!」

戦艦二隻の一斉射が20機程度の敵編隊を襲う

編隊がバラバラになっている為か、数機しか墜ちない

「S h i t !!」

中々上手くないネー!」

『まあ、対空戦闘は難しいからね

でも、これくらい落とせば十分じゃない?』

「駄目デース!

テートクのハートを掴むには対空戦闘でも活躍するのデース!!」

『金剛さん、相変わらず燃えてるわね、不知火!』

『そうですね』

所で陽炎、ちゃんと照準合わせていますか？』

敵編隊に照準を合わせながら私を面白そうに見ている陽炎と念入りに照準が合っているか確認する不知火

そんな様子を苦笑いで見ながら対空砲を準備をする古鷹と祥鳳

みんな relax しているようで、何よりネー

「さっさと敵機を落として、enemyをdestroyしまショウ！

Follow me!

皆さん付いてきてくださいネー!!」

## 決戦!南西諸島防衛線! 5

右舷から接近する雷撃機を高角砲と機銃で落とそうとする

1機は高度を下げようとして海面に突っ込むが、もう1機が魚雷を投下する

「二時の方向魚雷ネ!」

『『『『了解!』』』』』

私は少し速度を上げる

そして、魚雷は私と祥鳳の間を通り抜けた

十一時の方向を担当する陽炎から警告があがる

『艦爆3機が突破よ!』

十二時の方向にいる艦爆を牽制しながら、十一時の艦爆が急降下を始めたのを確認して十一時の方向に転舵する

「さあ、かかってくるネ!」

機銃が盛んに弾幕を張るなか、艦爆は爆弾を投下し水柱を作る

『金剛さん!?!』

「大丈夫ネ!」



全部、至近弾だったヨ」

ちよつと、破片が機銃を破壊しました方…:

問題 nothing!!

航空戦を切り抜け敵艦隊を発見する

又級 elite、又級、リ級 elite 二隻、イ級、ロ級だ

「伊勢、古鷹、水偵の準備は出来てますか?」

『準備万端よ』

『準備は、出来てます』

ガッツポーズをして伊勢は応答して、古鷹も戸惑いながら伊勢の真似をする

「では、早速発艦しましょウ!

祥鳳! 敵機は任せたネ」

『分かりました!』

準備の完了している艦載機を随時発艦します』

弓を引き絞り矢を次々と放つ

私も水偵整備員妖精さんから水偵の準備完了の報告を聞き水偵を発艦する

カタパルトが勢いよく水偵を射出していく

計3機の水偵が空を翔る

伊勢と古鷹の分も合わせると9機敵艦隊上空で観測する

紫電改二と零戦62型が完全に制空権を掌握しているため対空射撃さえ注意すれば、落とされることはない

水偵が接触したことを確認し、封殺されている又級ではなくり級に狙いを定める

「撃ちます! fire~!」

二隻のり級の周辺に水柱があがる

『金剛初弾夾叉』

『伊勢弾着修正右0.8』

り級は慌てて回避運動をする

旗艦の又級は、駆逐艦二隻に指示を出したのか駆逐艦が突撃してくる

「陽炎と不知火は、駆逐艦の足止めよろしくお願いしマースー!」

『了解よ!』

『了解』

中距離になったので、敵艦も斉射する

『主砲狙って、そう…』

撃てえー!』

三隻の一斉射によってり級二隻に複数の煌めきが生じる

『金剛命中弾二』

『伊勢命中弾一』

『古鷹初弾夾叉』

私が狙ったり級は沈黙し、伊勢の狙ったり級は砲塔が一基爆砕された

水柱に隠された夕立ちちゃんが姿を現す

『驚いたっばい』

服がちよつと破れてはいるが、中破にはなっていない

「大丈夫、夕立ちちゃん？」

『夕立は、大丈夫！』

小破だし』

偵察機は、私達の対空砲の射程ギリギリを周回する

「偵察機は、無視します！」

早く敵艦隊を見つけないと一方的に叩かれませんか」

『『了解!』』

偵察機の来た方向に進むと20機程の敵編隊が現れる

方向は合ってるみたいですよ!

20機ですから... 又級一隻でしょうか?

「対空戦闘よーい!

てーっ!!」

6機の艦爆に弾幕を張る

2機が爆散し、2機がふらつき爆弾を投棄する

よし!

いい感じですよ、やっぱり高射装置のお陰でしょうか

白雪ちゃんが対応している戦闘機に狙いを変える

低空で接近する戦闘機の周りに爆発が生じ、水柱が立つ

戦闘機は弾幕に怖じ気付いたのか、囿の役割だったのか回避し始める

『吹雪ちゃん!』

4機艦爆が突破したよ!』

睦月ちゃんから警告され、見ると4機の艦爆が急降下を開始していて私に機銃を乱射していた

「くっ…： 当たって…： ください!!」

機銃に耐えながら、主砲を放つ

2機艦爆が火を噴き、同時に残りの2機が爆弾を投下する

身を低くし、海面に手を付くほど体を傾けて転舵する

ボン!!ボン!!

爆弾は的外れな所に落ちた

「各艦損害を報告してください!」

『機銃が一部破損しました』

『損害なしです!』

『問題ないっばい』

「分かりました!

陣形を変更、単縦陣になってください

敵艦隊に突撃します!」

## 決戦!南西諸島防衛線! 6

深海棲艦の編隊は北西に向かっていた

暫くすると数機の戦闘機が慌てて太陽に向かって上昇し始める

その戦闘機は突然現れた機体……烈風の機銃によって撃墜される

烈風はそのまま時速830kmという紫電改二を上回る速度で急降下し、攻撃隊を攻撃する

直掩機は烈風を攻撃しようと追いかけるが、時速830kmで一撃離脱戦法を取る烈風に追い付けない

鬼神のように敵機を烈風は落とすが、如何せん数が多すぎる

50機程落とした頃、艦娘の美しい輪形陣を組んだ艦隊が見えてきた

『くそ、ヤバイぞ

編隊は崩れているが、数が多すぎる!』

一部の烈風が一撃離脱戦法を止め、攻撃隊の背後に回り食らい付くが直掩機や攻撃隊の後部機銃の餌食になる

18機から10機に数を減らした烈風は、約60機の敵機を撃墜破したが未だ150

機以上の敵機が残っていた

『敵編隊見ゆ：』

これより瑞鳳隊烈風は迎撃を行う』

瑞鳳隊烈風隊長機から報告があがる

私は指示を出す

「このまま輪形陣で迎え撃ちますが：：」

電ちゃん、貴女は防空指揮をお願いします」

『はわわ!?!』

防空指揮なのです!?!』

さつきまで、ギラギラと目を輝かせていた電ちゃんが慌てふためく

「そう、きつと敵機は私達空母を狙って攻撃をしてくるはず

その間、出来れば誰かが適切な防空指揮を執れば被害を最小に出来るわ  
そしてこの中で一番適任なのが、電ちゃんだと思おうの」

『あ、暁ちゃんの方が指揮が上手いと思うのです…』

自信がないのか俯いてしまう電ちゃん

「大丈夫、電ちゃんも上手ですよ

それに対空戦闘は電ちゃんの十八番ですよね?」

『で、でも…』

『大丈夫よ、電!』

電ならきつと出来るわ!』

『そうよ!』

この暁が保証してあげるわ!』

『Все в порядке… (大丈夫…)』

きつと出来るよ… 電なら…』

第六駆の子達が電ちゃんを励ます

やっぱり仲が良いですね…

「どうしますか? 電ちゃん」



『電やってみるのです！』

電の本気を見るのです!!』

俺はこれから対空戦闘の準備を行う翔鶴達を見守っていた

ちなみに時雨はソファで足をブラブラさせながら小説を読んでいる

「ねえ、司令官

気張ると倒れちゃうよ？」

「気張ってないから大丈夫… ふあゝ」

眠くて欠伸が出る

夜中までやっても終わらない書類仕事や現実を突きつけられて疲れてしまったのだ  
ろう

時雨に泣きついたのもあるかな… うわ思い出すと凄く恥ずかしい…

「少し仮眠を取ったら?」

仮眠を取っている間に僕が書類仕事しておくよ」

「いや、もう時雨にはたくさん手伝って貰ったからいいよ」

コンコン

ん…? 誰だろう?

「どうぞで!」

ドアがゆつくり開く

入って来たのはあの呉のショッピングモールで出会った少女だ

「どうかしました?」

「あの… 時雨お姉ちゃんと一緒に居たくて…」

「ごめんね、奈々ちゃん

今日、僕秘書艦なんだ

だから、遊べそうにないかな…」

「へえ、奈々って名前なのか…」

「あれ?」

提督に自己紹介してなかったの?

奈々ちゃん自己紹介しないと」

「狩川 奈々です

えっと、好きなものは間宮さんのパフエです！」

「そうですか

俺はこの司令官を務めている… えっと…」

俺は今日届いた書類の中から一枚の紙を出す

「犬村 護… です、よろしくお願いします

後、好きなものは甘いものと鳳翔のラーメンです」

「なんで、自分の名前を書類見ないと分からないの？」

時雨が呆れたように突っ込む

「いや、艦隊司令部が前の世界の名前は使えないから新しい名前を付けてやるとのこと  
でね

別に名前に拘りないし、司令部に任せたらこうなった

まあ、本当は元の名前を使いたいけどね」

「じゃあ、今は護お兄ちゃんなんだね」

「ま、まあ… そうなりますね…」

時雨と一緒に居たいなら、ここで一緒に本とか読んでいてください」

お兄ちゃんなんて言われんの久しぶりだな… と思ったらこの前時雨に言われたか

やっぱり、ちょっと恥ずかしいな

「わかったら」

「提督……邪魔じゃない?」

「大丈夫だよ

騒がしいのには慣れてるしな」

苦笑いしつつ、俺は再び画面に視線を戻した

『敵編隊発見……』

数、160……』

響ちゃんから、報告があがる

『対空戦闘よーい!なのです!!』

『『『『『了解!』『』』』』』

敵編隊は上昇する機体：：約70機と降下する機体：：約60機に別れた  
それ以外の機体は烈風の相手をするようだ

『雷ちゃんと翔鶴さんは、十一時の方向の艦爆を迎撃』

響ちゃんと瑞鳳さんは、三時の方向の艦攻を』

電は十二時の方向から急降下する6機の艦爆を主砲で迎撃しつつ、同じ方向から私を狙う艦攻を機銃で牽制する

『暁ちゃんは、六時の方向から来る爆雷連合を迎撃！』

響ちゃんと雷ちゃんは、一時の方向から来る爆雷連合を

翔鶴さんと瑞鳳さんは突破してきた敵機の攻撃の回避を!!』

目まぐるしく変わる戦況に電ちゃんは時雨ちゃんから借りた電探を駆使しながら、捌いていく

電探の補佐があるとはいえ、とても初めてとは思えない

しかしそれでも

一時の方向から艦爆10機、艦攻6機

六時の方向から艦爆5機、艦攻4機が突破する

10機の艦爆が瑞鳳に残りは私に襲いかかる

一時の方向の艦攻6機に高角砲と機銃を放つ

瞬く間に3機が撃墜破されるが、3機が魚雷を投下六時の方向の艦攻も2機が魚雷を投下する

左2個右3個計5個の航空魚雷が接近する

同時に六時の方向の艦爆が急降下を始める

ここで被弾すれば改造を受けてない私は一発中破もありえる…

絶対全弾回避します!

右に転舵し、左から接近する2個の航空魚雷を機銃で破壊する

艦爆が私に照準を合わせ爆弾を投下する直前、私は左手を海面に接触させ無理矢理左に転舵する

6個の爆弾は、水柱を作り出すだけで終わった

ボンーン!バキバキ!!

その直後瑞鳳の方から爆発音と何かが破壊されるような音が響いた

『やら…れた…あ…!』

でも、エンガノ岬のようには…いかない…だから…!』

瑞鳳は、1200ポンド爆弾を喰らっていた

「瑞鳳大丈夫!?!」

『中破です…』

発着艦不能に……』

良かった……

まだ、私の中破しなければ戦える

「分かりました

後は第一次攻撃隊の戦果を待つしかありませんね……」

さっきの爆雷連合でほぼ全機の敵機が爆弾や魚雷を投下したようで、たまに攻撃しようとする敵機を電ちゃん達が追い払っていた

その時、第一攻撃隊から報告が来た

『こちら翔鶴隊97艦攻隊長機

敵空母一隻大破、駆逐艦一隻を撃沈するも我攻撃隊の損害は甚大なり』

## 決戦!南西諸島防衛線! 7

艦娘の編隊は敵艦隊に向かってしていると烈風が敵直掩機……60機を発見し、突撃する

15機の烈風と60機の敵戦闘機が戦闘を行う

圧倒的な数の差を性能と練度で補う

背後を付かれた烈風は急降下して敵機を振り切り、烈風に撃墜されそうになった敵機は烈風を引き付け連携を取るもう2機に烈風を攻撃させる

敵機が次々と黒々とした煙を噴いたり、火を纏って墜落するが烈風も主翼をものがれ墜落したり、エンジンや燃料タンクを損傷し退避する機体も多い

また、烈風の迎撃をすり抜けた敵機や別方向から来た10機の敵戦闘機によつて攻撃隊が攻撃される

97艦攻や彗星、天山は後部機銃を乱射し、残っていた5機の烈風が追い払おうとするものの

1機、また1機も落伍する機体が出てくる

20機程が落伍した時、敵機動部隊が見えてきた

艦攻は緩降下し、艦爆は高度をあげる



その間も敵戦闘機は執拗な攻撃を行いもう5機が墜落する

彗星14機、天山2機、97艦攻24機まで減ったが、攻撃隊は突撃を止めない  
彗星は駆逐艦に狙いを定める

だが、重巡洋艦と軽巡洋艦の猛烈な弾幕で、6機が撃墜破され駆逐艦一隻に3発当て  
て撃沈するのが精一杯だった

一方、艦攻は弾幕を受けない代わりに敵戦闘機がバタバタと艦攻を落とし海の藻屑に  
変えていた

天山は全滅し、97艦攻も20機に減少した

そこに弾幕が襲いかかる

97艦攻は速度を上げたり下げたり、機体を振って回避しようとするものの

重巡洋艦は対空電探による高い対空能力で97艦攻を撃墜破する

魚雷を投下出来たのは僅か8機……だが肉薄した雷撃は4発ヲ級に命中し大破した  
艦娘の編隊が撤退する

97艦攻隊長機から他の艦娘の機体が見える

彗星は撃破された機体を除けば、8機

天山は、全滅……我97艦攻隊も13機まで減った……

烈風も大分数が減ってしまったようだ  
隊長機は翔鶴に戦果を報告した

翔鶴さんは着艦作業を行う

だが、その表情はとても険しく沈痛な表情だった

帰還したのは、50機ほど

なかにはフラフラしている機体も多く、翔鶴さんを目前に力尽きて墜落する機体も一  
つや二つじゃないのです…

『…翔鶴さん、撤退するのかい…?』

『いえ…一矢報います』

翔鶴さんは、偵察に出していた97艦攻や天山の着艦を終えると第二次攻撃の準備を  
し始めました

やっぱり、翔鶴さんは疲れているみたいなのです…

せめて、電が瑞鳳さんも護れていれば…

口に鉄のような味が広がり、口を噛み締めていることに気がついた  
悔しがるだけじゃ駄目なのです！

反省する点は…

徐々に敵艦隊が見えてくる

見張り妖精さんによると又級二、リ級一、ト級一、二級一の五隻だと言う

五隻というのも疑問に思いますけど… 又級二隻で攻撃隊20機は少ないような…

それに黒々とした煙が上がっているのも気になる

その疑問は敵艦隊と砲雷撃戦を始めたら直ぐに分かった

リ級から煌めきと煙があがる

リ級が砲撃を開始したのだ  
だが、明らかに火力が弱い

既に中破しているのだ

ト級に至っては、大破しており砲撃すらしてこない

又級の攻撃隊が少ないのも、リ級やト級が損害を負っているのもきつと赤城さんが  
放った攻撃隊が行った戦果だろう

赤城さん……やっぱり凄いです…

なのに、何故死轟沈にたいなんて…

# 決戦！南西諸島防衛線！8

私達は、単縦陣で敵艦隊に突撃する

重巡洋艦は中破しているとはいえ砲弾が命中すれば、私達の装甲はいとも簡単に破られてしまう

之字運動をしながら接近し、砲撃を開始する

『睦月、砲雷撃戦始めるよ♪』

無鉄砲に突撃してくる二級を撃破し、大破している卜級の周りに水柱を作る

『夕立が当てたっばい！』

どうやら、二級を狙ったのは夕立ちちゃんだったみたい

又級二隻が口のような部分から次々と戦闘機を発艦する

けれど、このような時のための之字運動でもあるし、私達は普段からもっと苛烈な訓練をしています

20機程度なら問題ありません！

右舷から来た戦闘機を機銃で追い払い

又級二隻に統制雷撃を行う

「統制雷撃を行います！」

雷撃よーい！てえーっ!!」

30本程の魚雷が又級に一直線に進み水柱に又級は呑み込まれた

一隻は沈み、もう一隻は大破した

これで発着艦は出来ません！

『吹雪ちゃん！』

敵機が！』

白雪ちゃんから警告される

2機の戦闘機が旗艦と判断した吹雪私に突撃する

私は機銃で追い払いおうとするが、戦闘機は機銃を省みず突撃を止めない

よく、母艦を失った艦載機程怖いものはないと言われる

何故なら、母艦を失った艦載機は生きて帰れる可能性が格段に低くなるため捨て身の

攻撃をしてくるからだ

私は咄嗟に屈む

敵機が頭上を通りすぎ海面に墜落した

あ、危なかつたです…

やつぱり、訓練と実戦じゃ色々違います

慢心は禁物ですね

『吹雪ちゃん大丈夫!?!』

「大丈夫!」

機銃を少し受けたけどね

油断しないで、リ級とヌ級を倒しましょう!」

『『はいっ(ぽいっ)!!』』

整備妖精さんから使用可能な機体の報告があがった

第二次攻撃に使用できる機体は彗星6機、天山6機、97艦攻17機、烈風18機…

計47機

さつきと同じことをすれば、今度はダメージを与えることすら出来ない…：：なら

「全航空隊、発艦始め!」

私は風上に向かって弓矢を引き絞り放つ

例えこの身を賭してでも…

勝てる作戦を採る

俺は初雪と深雪から間もなく鎮守府に到着するとの連絡を受けたので、埠頭で待つことにした

暫く待つと初雪と深雪と赤城が到着した

「お疲れ、初雪、深雪

赤城は、初めまして

俺がここ呉第三鎮守府の司令官… 犬村 護だ

よろしく」



「少佐……？」

赤城は虚ろな目で俺を見る

「え？」

確かに階級は少佐ですけど……

なんで知っているのですか？」

「…………… 何でもないです

所で私はいつ帰れるのですか？」

「赤城は、佐世保第一から……呉第三に転属になりました

ここにちゃんと書類もあるよ」

赤城は、書類を受けとると無表情で何度も書類を読む

「…… 私は佐世保に戻りたいのですが…… 駄目なのですか？」

「…… 駄目です」

まさか戻りたいと言われるとは思わなかった

ここの方がブラックと思われるのかも？」

「すいません

兵器の私が烏滸がましいことを発言をしました」

そうやって土下座しようとする赤城を慌てて止める

「全然気にしてないから!」

「とりあえず、入渠して来てよ」

赤城は一瞬目を見開き、納得出来ない様子だったが初雪と深雪にドックへと案内される

「提督! : 大丈夫?」

時雨が心配そうに訊く

「ああ! : 大丈夫だよ」

「ありがとう! : 時雨」

優しく時雨の頭を撫でる

「僕も! : 最初はあんな感じだったんだね」

「でも、今は提督のおかげで! : 」

時雨が俺の手の下から言う

「俺は何もやってないよ」

時雨を立ち直らせてくれたのは、ここの艦娘達が時雨に優しく接してくれたからだ

「よ」

「! : : じゃあ、優しい艦娘が着任するような鎮守府を作ってくれてありがとう! : : 司令

官」

時雨が俺の方を振り向き、弾ける笑顔で言った

1ヶ月以上前、初めて会った時雨からは想像出来なくて言葉が詰まる

「そう…： だな

どういたしましたでだ」

帽子を深く被り顔を隠すがあまり効果はなかったようで時雨にクスツと笑われてし

まった

「司令官

お茶でも準備しよう

勿論、赤城さんの分もね」

「ああ！

よし、今日は秘蔵の茶葉使っちゃおう」

「司令官、すっかり紅茶の虜だね…：」

時雨が呆れたように呟く

「否定はしないな…：」

俺は苦笑いで時雨に返事をした

## 決戦!南西諸島防衛線!9

彗星6機、天山6機、烈風15機の攻撃隊は敵直掩機に捕捉された

烈風は敵直掩機40機を迎え撃つ

『準備は出来たー?』

敵機を迎え撃つよ!』

《了解!》

『瑞鳳隊も遅れずに付いてこいよ?』

翔鶴隊は厳しいからな!』

『何偉そーなこと言っているんだ、二十番機!』

たまたま、激戦を生き延びたからって奢るんじゃないやねえ!!』

『す、すみません!!』

そんな呑気な話をながらも、烈風は迎撃する準備を整え敵直掩機に突撃する

多くの敵機が火を噴き主翼をもがれ海に散るが、1機の烈風がガラスを散らしながら海面へと落ちていく

2機1組で対応する敵戦闘機に、果敢に烈風は攻撃を仕掛け、彗星と天山の元に近づ

けさせない

そして、彗星と天山は攻撃を開始した

深海棲艦の編隊も烈風3機に捕捉された

『さあ！』

準備は出来てる？』

『出来てるぜ！』

俺らの活躍を紫電改二の奴等が聞いたら驚くだろうな！

なあ、十六番機！』

『ふ、ふあー！』

わ、私、足引つ張らないよう頑張りましゅ!?』

十六番機は緊張でカミカミで応答する

心無しか、機体もフラフラしているように見える

『そんなに緊張しなくてもいいよー?』

なんかあつたら、私達がフオーするからさ!』

『わ、分かりました!』

3機の烈風は態勢を整え、攻撃隊に急降下した

『響ちゃんど雷ちゃんは、八時の方向の爆雷連合を迎撃なのです!』

暁ちゃんは、一時の方向の爆雷連合を!』

翔鶴さんと瑞鳳さんは回避運動に専念してくださいなのです!!』

『『『『了解!』』』』

120機以上の敵機の前に電ちゃんの健闘虚しく、防空システムは破綻した

第一次攻撃隊は二波に攻撃隊を分けるといふ愚を犯したが、第二次攻撃隊は同じ過ちを繰り返さなかった

八時の方向から艦爆14機、艦攻13機

一時の方向から艦爆15機、艦攻12機が突破する

『な、なんで私を無視して翔鶴さんばかりに!?!』

瑞鳳が叫ぶが、攻撃隊は瑞鳳のことを無視して私に殺到する

やっぱり私に攻撃が…

でも、都合がいいです

瑞鳳も第六駆の子達も轟沈することはありませんから…

艦攻がタイミングをずれながらも魚雷を右左合わせて20本投下する

一本… 二本…

三本… 四本…

翔鶴型の回避性能で次々と回避するが、次第に今までの疲労が蓄積からか、切れがなくなってくる

『翔鶴さん!』

そつちに回避したらダメ!!』

暁ちゃんの叫びで周囲を見ると

「え…?」

両舷合わせて四本の魚雷が向かって来ていて、10機の艦爆が急降下しようとしていた

回避しているうちに誘い込まれたのだ

ここまで…ね…

電が何かを叫び

翔鶴は水柱に包まれた

ヲ級は、こちらに向かってくるJudy<sup>慧星</sup>6機とJill<sup>天山</sup>6機を睨み付ける

たつた、これだけの戦力で反撃するとは…艦娘らしいとも言える

直掩機は、新型戦闘機Sam<sup>烈風</sup>に翻弄されているが攻撃隊がこれだけなら問題ない



JudyとJillは、上昇を始める

Jillは、艦攻のはず…

何故上昇するのか

ヲ級はリ級に電探に感がないか確認するが、リ級はSamとJudy、Jill以外に感はないと返ってくる

不審に思いながらも随伴艦に対空戦闘を命じる

Judyは急降下爆撃を開始し、2機犠牲にしながらも駆逐艦を撃沈する

Jillは水平爆撃を行う

対空砲弾に煽られながらも、隊長機に合わせて一斉に爆弾を投下する

リ級の周りに水柱が作られるがリ級に損害はない

その時、第二次攻撃隊から報告があがる

『翔鶴型航空母艦二魚雷四本、爆弾二発命中

大破炎上…轟沈ハ確実』

ヲ級はニヤリと笑う

改装されていない翔鶴型ならばこれだけの攻撃を食らえば撃沈は確実…駆逐艦二隻、空母一隻大破と引き換えに翔鶴型を轟沈させたとなれば圧勝と言っても過言ではないだろう

突然、ホ級から報告があがる

《一時の方向よりKa<sup>9</sup>te<sup>7</sup>艦攻. . . 数17》

ヲ級は、その方向を見る

その時には、海面を這うように飛行していた97艦攻は魚雷を投下していたホ級やリ級も肉薄され投下された複数の魚雷を受け、轟沈していく  
指揮を取っていたヲ級も例外でなく魚雷を複数受け沈んでいく  
だが、ヲ級が笑みを崩すことはなかった

もう1つの輪形陣ではヲ級とヌ級が第二次攻撃隊を收容して第三次攻撃隊を準備していた

入りきらない機体を投棄し、爆弾や魚雷を取り付ける

そこにル級から、報告があがる

『対空リーダーに感あり

数40』

又級は慌てて戦闘機の発艦準備をして発艦する

その頃には、艦娘の編隊が見える程近づいていた

20機の直掩機は、Ge<sup>機</sup>or<sup>電</sup>ge<sup>改</sup>により迎撃され、撃墜されていく

ZEEKE<sup>零</sup>は、それを無視して艦隊に突撃する

最初は意図が分からず、追い払う程度に対空砲を撃っていたが、ZEEKEが爆装していることに気が付き弾幕を張る

5機を撃墜するも10機が投下し、ヲ級と又級に命中

内部にあった、爆弾や魚雷に誘爆した

『やりました！

ヲ級、又級中破です!」

「Wow! Congratulations!

流石、祥鳳ネ!」

これで、機動部隊が攻撃を受ける可能性はなくなりマシタ…  
後は、戦艦をdestroyするだけネ!

敵艦隊が見えてくる

編成は戦艦一、重巡洋艦一、軽巡洋艦一、駆逐艦一

「伊勢と古鷹は、重巡洋艦を

陽炎と不知火は軽巡洋艦と駆逐艦を相手してください!

戦艦は、私が相手するネ!」

「わかったわ!」

「了解です

金剛さん気を付けて!」

「りょーかい!

陽炎に任せなさい!」

「了解です」

戦艦の射程に入り攻撃を開始する

「Fire!!」

敵もほぼ同時に発砲する

水偵から報告を聞き弾着修正をする

三斉射目で敵艦に煌めきが生じる

敵艦も狙いがいいのだが、金剛の速さに中々命中弾を出せないでいた

六斉射目で遂に金剛に命中弾が出て砲塔が一基爆砕されるも敵戦艦は大破し、炎上を始めていた

「これで、finishねー」

金剛は、三基六門を敵戦艦に向け放つ

金剛の砲塔から放たれた徹甲弾は、ル級の装甲を貫き弾薬庫の弾薬に誘爆した

大爆発を起こし沈んでいくル級は恨めしそうに金剛を睨みつけた

金剛は一瞥すると仲間の元に戻った

「し、翔鶴さん大丈夫ですか!？」

私は電ちゃんに訊く

『だ、大丈夫なのです!』

ぐったりした翔鶴さんを電ちゃんと雷ちゃんが曳航している

「良かった…。」

私達は、機動部隊と合流していた

『吹雪ちゃん連絡を受けた時、顔が真っ青だったっぼい!』

夕立ちちゃんがおどけた感じに言う

「だ、だって… 心配だったんだもん!

あ、電ちゃん、雷ちゃん曳航手伝う?」

『大丈夫よ!』

そろそろ響と暁に交代するから!』

響ちゃんによると

「電の本気を見るのです!」

と叫んだ時放った砲弾によって、魚雷が砲弾の着弾時に発生する水圧で誤作動を起こし二本自爆したため、ギリギリ轟沈せずに済んだとのこと

『翔鶴さんには、もう無茶をさせないようにしないとね…』

さて、鎮守府に急ごうか…

きつと司令官が心配そうに埠頭で待っているだろうし…』

「そうですね！」

敵艦に気を付けながら、私達は鎮守府に帰港した

## 登場人物 1

〈呉第三鎮守府〉

【司令官】

現代日本から艦娘の世界に迷いこんだ受験生

艦娘から切望され、司令官となる

この世界での名前は犬村 護

性格は優しく艦娘を大事にするが、自分の事は疎かにしがち

おどけたような言動もあるが根は真面目

【提督】

紀伊型航空母艦二番艦尾張の元艦長

尾張は後にソロモンの悪夢と呼ばれる海戦で深海棲艦に攻撃され成すすべなく轟沈した

名前は奥田 吉成

提督代理として、呉第三鎮守府に着任したが司令官が着任したため基本的に艦隊指揮は採らない



事務仕事等を行う

【吹雪】

特型駆逐艦一番艦で、完成当時は世界を驚愕させた

艦娘としては、性能面だけで言えば旧式なものの、努力家で砲撃、雷撃、対空戦闘、艦隊指揮なんでも出来る優等生

ただ、対潜はちよつと苦手

初めて登場した艦娘の一人

また、艦娘の教官を務めていて鬼教官として呉第三鎮守府のみんなから信頼されている

【第十一駆逐隊】

吹雪、白雪、深雪、初雪が所属する駆逐隊

白雪：… 吹雪をずっと支えてきたパートナーで優秀、吹雪もとても信頼している

深雪：… 南西諸島の民間人を守っていた、好戦的で第十一駆のムードメーカー

初雪：… やる気のない感じに振る舞っているがやるときはやる子

【翔鶴】

五航戦の正規空母

輝かしい戦果をあげた空母だが、不幸艦と揶揄されたことから自信がない

呉第三鎮守府の初建造艦

呉第三鎮守府の主力艦で吹雪や金剛と並んで艦娘と妖精さんから信頼されている  
また、まだ改装を受けていない

【第六駆逐隊】

暁、響、雷、電が所属する駆逐隊

暁……子供っぽい言動が目立つが実はしっかりしていてなんでも卒なくこなす優等生

第六駆の嚮導艦

響……クールで冷静に見えるが仲間を守りたいという気持ちは人一倍持っている

砲撃が得意

第六駆の嚮導艦と間違われることが多い

雷……世話好きで司令官に頼ってほしいのだが、司令官は自分でやろうとするので、あまり頼って貰えない

対潜と雷撃が得意

電……優しい心の持ち主

仲間を守りたいという気持ちと深海棲艦も出来れば助けたいという気持ちがあり葛藤する

対空戦闘が得意

【時雨】

舞鶴第三鎮守府から転属してきた駆逐艦娘

心に傷を負っていたが優しいいい子

吹雪や白雪と同じく初めて登場した艦娘の一人で、響と雪風と仲が良かった

響と雪風を犠牲にして生き延びてしまったことを後悔している

第二十七駆逐隊の嚮導艦

【第十八駆逐隊】

陽炎、不知火、霞、霰が所属する駆逐隊

陽炎：… 明るく元気で笑顔が絶えないムードメーカー

第十八駆の嚮導艦

不知火：… 武人然とした冷静な艦娘

陽炎をととも信頼していて、どんな任務でも落ち度がない

霞：… 舞鶴第三鎮守府が壊滅したため呉第三鎮守府に転属になった

気が強いが、凄く仲間思い

霰：… 霞と同じく舞鶴第三が壊滅したため呉第三に来た

あまり口数は多くないが、霞ととても仲がよい

【第三航空戦隊】

瑞鳳と祥鳳の所属する航空戦隊

瑞鳳：… 翔鶴を慕っている、優しく気遣いの出来る子

一撃離脱戦法を得意とする

祥鳳：… 舞鶴第三鎮守府から転属してきた軽空母

明るくしつかりしている

【金剛】

提督ラブ勢で帰国子女

明るくがんばり屋で持ち前の砲撃能力と速さは駆逐艦娘の憧れ

艦娘達からの信頼も厚い

【赤城】

佐世保第一鎮守府から転属してきた正規空母

高い艦載機運用能力と実力を持つ

ただ、基本無表情で艦娘は兵器だと言っている

【狩川 奈々】

幼いがどこかしつかりしている少女

司令官と同じく艦娘の世界に迷いこんだ

【現在所属する艦娘】

〔駆逐艦娘〕

第四駆（舞風、黒潮）

第六駆（暁、響、雷、電）

第七駆（朧、曙、漣、潮）

第八駆（朝潮、大潮、満潮、荒潮）

第十一駆（吹雪、白雪、初雪、深雪）

第十八駆（陽炎、不知火、霞、霰）

第十九駆（綾波、敷波、五月雨）

第二十一駆（初春、子日、初霜、若葉）

第二十二駆（皐月、文月、長月）

第二十七駆（時雨、白露、村雨、夕立）

第三十駆（睦月、如月、菊月）

〔軽巡洋艦娘〕

川内、神通、那珂、五十鈴、由良、名取、阿武隈、北上、球磨、多摩、天龍、龍田

〔重巡洋艦娘〕

古鷹、青葉、那智、妙高、羽黒、高雄

〔航空母艦娘、水上機母艦娘〕

翔鶴、赤城、瑞鳳、祥鳳、龍驤、鳳翔、千歳

〔戦艦娘〕

金剛、伊勢、日向、扶桑

〔潜水艦娘〕

伊19

〔非武装の艦娘〕

大淀、明石、間宮

〈横須賀第一鎮守府〉

〔提督（司令官）〕

横須賀第一鎮守府の提督で、艦娘から信頼されている

海軍内での発言力も大きい

〔電〕

初めて登場した艦娘の一人

呉第三の電と同じく優しい艦娘だが、深海棲艦を助けたいという考えは捨ててしまっ

た

〔長門〕

初めて登場した艦娘の一人

ビックセブンで、大和型にも打ち勝てる力を持つ

〈呉第二鎮守府〉

【瑞鶴】

加賀を守ると誓った正規空母

正義感が強く、明るく振る舞うことが多い

呉第二鎮守府の秘書艦

昔は加賀がつんけんな態度を取っていたこともあつて喧嘩をよくしていたが、ある作戦で考えを改める

【加賀】

クールで口数が少ない

無表情なことが多いため怖がられることも多いが、表情を表現するのが苦手なだけ

ある作戦で最愛のパートナーを失うが、新たなパートナーの瑞鶴のおかげもあり、立ち直りつつある

〈真珠湾鎮守府（深海棲艦side）〉

【赤城】

真珠湾鎮守府の提督的存在

艦娘だった時の記憶はかなり失われているが、かつての仲間のごことは覚えている

【翔鶴】

真珠湾鎮守府の秘書艦的存在

赤城と同じ鎮守府に所属していた

【Верный<sup>ヴェールヌイ</sup>】

舞鶴第三鎮守府に所属していた元駆逐艦娘

親友の時雨を庇って轟沈した



## 第二章 敵の敵は敵…… 南西諸島海域 宴

私は目を開けると白い天井……

あの後、曳航されて鎮守府に帰投出来たみたいですね  
夜が明けたばかりなのか、薄暗い部屋を見渡す

左のベットには黒髪の女性…… 赤城さんが寝ている

右を見ると司令官が椅子で居眠りしていた

スースー

司令官はいつも私に壁を作っている

私に対して滅多に子供っぽい所を見せてくれない

子供っぽい所を見たいわけではない

けれど、他の子達からそのような話を聞くと壁を感じてしまう

私は司令官に手を伸ばす

躊躇しながらも司令官の髪を指で解かす

艶はあるが、ボサボサであまり手入れのされていない髪

私は明明後日には横須賀第一鎮守府に転属になる

転属すれば、もう司令官と会う機会すらほとんどなくなるだろう

無論、こうやって髪を解かすことも…

ん…

私は髪から手を離す

「翔鶴… 起きたのか… !

本当に心配したんだぞ」

眠くて焦点の合っていないが、私を視認すると瞬く間に覚醒する

「すみません…」

「いや、別に謝る程じゃないよ！

俺は翔鶴に死んでほしくないだけなんだ

もう無茶はしないでくれよ？」

「はい

つg… 無茶しないよう気を付けます…」

次はという言葉を飲み込む

もうこの鎮守府で次の攻略作戦に参加することはないだろう

コンコンとドアがノックされ、ドアが開く

「おはよう…：…ごぎいます…：…」

吹雪ちゃんが目を擦りながら、入って来た

「おはよ、吹雪」

「おはよう…：…ごぎいます、吹雪ちゃん」

「で、吹雪大丈夫なのか？」

「え…：…何がですか？」

首を傾げる吹雪

「覚えてないのか…：…」

俺は昨日の宴会を思い出した

絶品の間宮と鳳翔の料理を堪能し、一息ついていると

「司令、お酒どうですか？」

「司令官よ

一度貴様とは一杯やりたかったんだ

いい酒もあるし、どうだ？」

千歳と那智に晩酌に誘われたのだ

「済まない……」

俺はまだ酒が飲める年齢じゃないんだよ」

苦笑いしながら返事をする

「む……？」

司令官は「18と聞いたが……？」

「確かに18だけど、俺のいた世界では——」

「司令官のいた世界など関係ない

郷に入ったら郷に従えというだろうか？」

自信満々にそう返事をする

困っていると思わぬ助け船が来た

「那智さん

司令官も嫌がっていますし、また今度しましょう  
代わりに私が一緒に一杯呑みますから…。」

「仕方がない、そうしよう」

「古鷹さん、焼酎にしますか？日本酒にしますか？」

千歳が早速二本の一升瓶を持ち上げる

「ありがとう、古鷹」

「本当に助かった！」

「大したことではありませんよ！」

ただ、那智さん、出撃を楽しみにしていたので、今度の攻略作戦には参加させてあげ  
てくださいね？」

微笑みながらそう言うと、古鷹は盃を持って那智と乾杯する

出来た子だな…

見習わないと…

そう思いつつ俺は駆逐艦娘達の所まで退避してきた

「何して遊んでいるんだ？」

「あ、司令官！」

これから人狼ゲームやるんです

一緒にやりますか？」

吹雪が人狼ゲームのカードを取り出す

「おう、やるぜ」

人狼ゲーム…腕がなるよ!!」

〜二時間後〜

「し、司令きやん！」

顔が真っ赤で呂律の回らない吹雪が俺に話しかける

「はいはい、どうした吹雪」

酔っぱらって寝てしまった暁を介抱しながら返事をする

「私、司令官が大好きでしゅ」

えっと、白雪ちゃんも深雪ちゃんも初雪ちゃんも翔鶴さんも——」

「お、おう、そうか…」

どうしてこうなったのかというと、人狼ゲームで負けた陣営は罰でお酒を呑もうとなつたのだ

結果、俺、電、荒潮以外の駆逐艦娘が一度はお酒を呑むことになり、寝てしまう駆逐

艦娘が続出した

妖孤陣営があつたら、俺も吞まされる所だった…

「司令」

後ろから陽炎が抱きついてくる

「ちよ、陽炎止め…」

陽炎の暖かさといい匂いを感じ、顔が火照る

「何か問題あるかしら…？」

眠そうにそう返事をするそのまま眠ってしまう

「…全く…」

吹雪、ちゃんと歩けるか？」

陽炎を背負い立ち上がる

「ふあい…大丈夫れす」

フラフラしながら吹雪も立ち上がる

「川内、暁のことを頼むよ

神通は睦月達をよろしく」

軽巡洋艦娘のみんなや間宮や鳳翔にも協力して貰って駆逐艦娘を寮まで連れていく

外に出るためドアを開ける

冷たい外気が侵入してくる

「うう… さみい…」

吹雪も寒いのか震えている

俺は陽炎を落とさないように気を付けながら、ポケットから未開封の使い捨てカイロを取り出す

開けて軽く叩き、吹雪に手渡す

「これは… なんですか…？」

寒さで酔いが醒めたみたいで呂律が回り始めた

顔も頬が赤いくらいになった

「これはカイロだよ

もうちよつとすれば、暖かくなるはず」

それにしても、意外と陽炎重いな…

そういうえば、妹が遊園地で寝ちまった時も背負って重いつたな… あいつ元気にしてるかな

「司令官？」

吹雪が俺の顔を覗きこむ

「ん… どうした吹雪？」



「司令官が悲しそうな顔をしていたから……」

心配そうに訊く吹雪……

「やっぱり、酒は止めておいた方が良かったって後悔してただけだよ」

艦娘寮に着き、ドアを開ける

誰もいないため勿論真つ暗だ

俺は手探りでボタンを探し電気をつける

他の艦娘達は、駆逐艦娘達を部屋に運び始めた

「あ、霞……」

「何のよう?」

睨み付けるように霞は俺を見た

「陽炎が寝ちやつてき、部屋まで入るのは不味いかなって」

それにしても、霞って酒に強いんだな

頬は紅くなっているけど、フラフラしてないし

「わ、分かったわ」

「ん、じゃあよろしくね

おやすみ、霞」

「おやすみ」

霞は陽炎に肩を貸して部屋に入っていった

じやあ、食堂に戻って片付けの手伝いしようかな

って吹雪、そこで寝たら駄目だって！

吹雪はキツチン付きのリビングの椅子に座って寝ていた

スースー

気持ち良さそうに寝ていて起きそうにない

はあ…

俺は溜め息をつくると吹雪を部屋まで運んだ

うん、まあ色々あったな

「覚えてないならいいんだよ

で、どうしたんだ？」

「赤城さんと翔鶴さんが気になったので…」

「司令官もですか？」

「あ、ああ」

うつかりここで寝ちまったなんて知ったら怒るだろうな…

艦娘は兵器か、人間か？

マルナナサンマル

「うん．．．」

赤城がもぞもぞと動く

「ん？」

赤城？起きたか？」

「．．．ッ!？」

すみません、司令官!!

定時に起きることが出来ず．．．」

直ぐに謝ろうと赤城はベッドから出ようとする

「謝る程じゃないって!」

赤城もお腹空いただろ？

食堂に行くから、着替えなよ」

そう言い俺は医務室から出て吹雪達を待った

暫く待つっていると、二人とも患者の着るような白い服から、いつもの服に着替えていた

「ん、じゃあ、行こっか」

俺は食堂に向かつて歩く

後ろでは、吹雪が赤城に話しかけているのだが、赤城はあまり返事をしない  
そんなこんなで食堂に着いた

「おはよ、高雄、羽黒」

「おはようございます」

「お、おはようございます… 司令官と吹雪ちゃん…」

あの翔鶴さんもう怪我は大丈夫ですか？」

オドオドしながらも、翔鶴を気遣う羽黒

優しい子だなあ

「大丈夫です、羽黒さん

心配をかけてすみません…」

申し訳なさそうに翔鶴が返事をする

「それは良かったです…！」

所で、赤城さんはいっつ着任したのでしょうか？」

「ん？」

ああ、羽黒はちやうど遠征に出ているから知らなかったのか

昨日だよ、佐世保第一から転属になったんだ」

「よろしくお願いいたします。… 赤城さん」

「航空母艦赤城です」

よろしくお願いいたします

所で司令官、一つ質問が」

羽黒に挨拶した後、俺に無表情で向き直る

うわ、凄く嫌な予感がするぞ

「何故、艦娘を——」

「ちよい待った、赤城

吹雪、ちよつと先に朝飯食ってて」

吹雪に目配せすると、吹雪は顔をしかめて翔鶴はそのやり取りを見て察する

「さ、羽黒さん、高雄さん、先に朝飯食べましょう！」

笑顔で吹雪は羽黒と高雄と一緒に食堂に入った

翔鶴も心配そうに一瞥すると、食堂に入っていた

俺は他の艦娘が食堂から出てきても聞こえないように、少し来た道に戻る

「で、質問ってなんだ」

「何故、艦娘をニンゲンと同じように扱っているのですか？

私達は、兵器です

ニンゲンではないのですよ？」

濁った目で俺を見つめる赤城

「俺は赤城がどんな辛い経験をしてそんな考えをするようになったのかは知らないし、多分理解するのも難しいと思う

でも、俺は艦娘を人間と同じように接する、勿論赤城も

赤城はエゴや偽善だと思いかもしれないけどね」

はあ…

溜め息が零れる

今日は念願の秘書艦だったのに、司令官の自室に起こしに行ったら司令官はいなかったのだ

吹雪ちゃんに訊いたら、

「朝、司令官を起こすのは秘書艦の仕事ですよ！」

って言われていたから楽しみにしていたのに

二階から一階に階段で降りて行く

「で、質問ってなんだ」

一階から司令官の声が聞こえ、走ろうとするが赤城さんの声で立ち止まった

「何故、艦娘がニンゲンと同じように扱っているのですか？」

私達は、兵器です

ニンゲンではないのですよ？」

え…艦娘は兵器…？

人間じゃ…ない…？

「俺は赤城がどんな辛い経験をしてそんな考えをするようになったのかは知らないし、多分理解するのも難しいと思う

でも、俺は艦娘を人間と同じように接する、勿論赤城も

赤城はエゴや偽善だと思いかもしれないけどね」

私は、司令官の声で我に返る

でも、赤城さんの発言が頭に残る

「ええ…」

貴方のやっていることは偽善に過ぎません

この鎮守府の子達しか守れてないのですから

ただの自己満足でしょう」

赤城さんの冷たい声が廊下に響く

「好きに言って構わないが…」

他の艦娘には言わないでくれ

頼む」

「分かりました」

「そうか、ありがとう

さ、朝飯を食いに食堂に行こうか？」

そのまま、司令官と赤城さんは食堂に行ってしまったようです

艦娘は、兵器…

人間じゃない…



もしかしたら、本当は司令官もこう思ってた…

「ふう…」

これで、執務も終わりだな…」

司令官が背伸びをする

「そうですね、執務お疲れ様です！」

「よし…」

お茶の用意を…」

「私は準備万端ですよ？」

私はクツキーの入った紙袋を持ち上げ、司令官に手渡す

「おお！」

この前は紅茶と一緒に食べられなかったからね、  
楽しみだなあ……」

執務している時のキリツとした顔ではなく、ふにやけた顔に私も嬉しくなりますが、  
朝のことを思い出しました

艦娘は兵器——

「？」

どうした、初霜？」

「いえ!？」

何でも、ありません」

「なら、いいんだけど……」

なんかあつたら、直ぐに相談してよ？」

心配そうに尋ねる司令官

でも、そんな司令官も

「私は大丈夫です！」

そういう、司令官は大丈夫ですか？

いつもより、元気がないような気がします……」

「そーかな？」

寝不足かもね〜」

司令官はおどけたように返事をします…：朝のことは話してくれないみたいです…：  
バン！

「（・▽・）キタコレ!!」

「朧も紅茶が飲みたいです!」

漣ちゃんがドアを開け、朧ちゃんも入ってきました

コンコン

「ノックくらいして、入ろうよお…：」

潮ちゃんがオドオドしながら、朧ちゃんと漣ちゃんに注意する

「くそ司令官、私にも紅茶を超越しなさいよ!」

「了解〜」

そう言いながら手際よくコップに紅茶を注ぐ…：慣れてますね

「はい、召し上がれ!」

司令官は全員に紅茶を手渡す

紅茶は暖かく、仄かにいい香りがする

紅茶もとても美味しい

「紅茶ウマー!!」

このクッキーも美味しいですよ！」

「そのクッキーは初霜が焼いたんだ

な、初霜？

：： 初霜？」

司令官が訝しげに私の顔を覗きこむ

「え？

は、はい

お口に合って良かったですよ！」

私は顔を背け慌てて返事をする

「くそ司令官にしては紅茶美味しいじゃない」

「そう言うけど、ぼのたんご主人様の紅茶楽しみにしていたくせに」

「ぼのたん言うな！」

というか、楽しみになんかしてないし！」

曙ちゃんは、顔を真っ赤にして必死に否定しますが、司令官も他の子達もコロコロ

笑ってます

私は笑う気になれない疎外感を感じながら、紅茶を口にしました

## すれ違い

攻略作戦から三日後

相変わらずの書類の量に絶望しながらも、ちよつとばかり今日を楽しみにしていた  
今日の秘書艦は翔鶴だからだ

翔鶴が秘書艦をするのは久々で、どんなお菓子を出そうかとか考えてしまう  
それもやっぱり、憧れだったからなのだろうか…

俺は工廠のドアを開ける

朝飯を食べる前に、翔鶴に工廠に来るように言われていたのだ  
もしかしたら、改造を遂に受けてくれるのかな？

何故か翔鶴改造するの嫌がったし…

「翔鶴、おはよう」

「おはようございます、司令官」

翔鶴が振り向き微笑む

だが、その微笑みは僂げだった

俺はその僂げな様子が気になるがまず用件を訊くことにした

「で、翔鶴用事って何？」

「あ、はい」

これを見てください」

そこには、97艦攻が置いてある

その前には銀髪の妖精さんが堂々と胸を張っている

「97艦攻？」

「そうですが、普通の97艦攻ではありません

この妖精さん達は、村田隊に所属しています」

村田隊：… 確か艦これの艦攻最強の呼び名も高いあの隊：…

俺は翔鶴を手に入れたばかりだったから、村田隊は持ってなかったけど、友人が強  
いって言ってたな

「もしかして、今まで97艦攻を使い続けた理由は：：：」

「練度を高め、97艦攻の二部隊を村田隊にするためでした

村田隊は雷撃に秀でた隊です

きつと今後の航空戦では目を見張る活躍をしてくれると思います」

銀髪の妖精さんの合図の元他の妖精さんも敬礼をする

俺も不恰好ながら返礼する

「ありがとう、翔鶴

大変だったんだらう？」

「いえ、そんなことはありません」

翔鶴は照れたように頬を掻く

心なしか翔鶴が輝いて見える

思わず見とれていると

「司令官？どうかしましたか？」

「あ、うん、何でもないよ！（汗）

これからもよろしくね？翔鶴！」

俺の言葉で翔鶴の表情が曇る

あれ？

俺なんか不味いこと言ったかな？

「実は、私明日横須賀第一鎮守府に転属するのです」

「……え？」

転属……？

転属ってあの転属だよな？

「先日の攻略作戦の少し前に、提督に相談して横須賀第一鎮守府に転属することにしま

した

提督は、私が司令官に教えないようにと念を押したので、司令官に教えなかったのですが」

翔鶴が何か言っているが、それ所じやない

翔鶴が転属：： やっぱり俺の指揮が悪かったんだ

俺がモットしつかりしてれば：： オレガ：：

「司令官？」

「ああ：： うん：： 分かった：：

翔鶴が積んでる、烈風と97艦攻村田隊二部隊と彩雲で横須賀第一でも活躍してね：：

きつと向こうの提督は素晴らしい指揮をしてくれるだろうし：：

それとこれ：：」

翔鶴にネックレスを手渡す

翔鶴のイニシャルSの形をした細工品のついたシンプルなネックレス

正直、女性に贈り物なんてしたことないし、ファッションなんかは無縁だったから、喜んでくれるか分からないが

俺は翔鶴の反応を見ずに俺は立ち去る



頑張らないと… もっと… モット…

ヒトリハ——

パシッ!

翔鶴が俺の手を掴む

「離してくれ」

「嫌です」

「離せ——」

「離しません!!」

翔鶴は大声を滅多に出さないから、俺は驚く

「……」

「司令官、貴方のためなんです」

「俺のため…?」

虚ろな声で呟く

そんな俺に翔鶴は言い聞かせるように話す

「そうです

大した戦果も上げられず、大破して司令官を心配させてしまう私は足手まといです」

「そんなことない!

戦果なんか要らないし、生きて帰投してくれさえすれば俺は！」

「それに、司令官は私を疎んでいますから……」

え？俺が翔鶴を嫌ってる？

「俺は翔鶴を嫌ってなんかないよ？」

「でも、司令官はいつも私と話すときは口調や表情が硬いですよね……？」

翔鶴は困惑の表情を浮かべる

「え？」

そう言われれば、硬い……かも？

でも、俺が翔鶴のことが嫌いではないのは確かなんだ

これからも、うちに居たいなら居てもいいんだよ

それに戦果を上げられないのは俺の指揮が悪いからだ

翔鶴は悪くない」

「そんなことはありません！」

「いや、吹雪や翔鶴が居なかつたら、今頃どうなっていたか……」

だから……居てもいいじゃなくて、これからもずっとこの鎮守府に居てくれないか？

俺を支えて欲しいんだ……誰も失わないために」

俺は翔鶴に頭を下げる

「頭を上げてください、司令官

司令官が望むなら、私はこの鎮守府にいますから」

顔を上げると、何故か顔が紅くなっている翔鶴が微笑む

「ありがとう、翔鶴」

改めて、これからもよろ——」

翔鶴が俺に抱きつく

え、え？

「良かったです、司令官に嫌われていたわけではなくて……」

「このネットワークス大切にしますね？」

「ああ、うん」

こんな時どんな言葉をかければいいのか分からない自分を呪いながら、咽び泣く翔鶴の背中を優しく摩った

## 号外

俺は自室を出て、食堂に向かう

最近、寒いから起きるの辛いなあ……

今日の秘書艦は、文月だったっけ

そんなこと思いながら、食堂のドアを開ける

「おはよう」

食堂がシンと静かになる

ふえ……？俺なんかしたのか？

吹雪が呆けている俺に駆け寄ってくる

吹雪の手には数枚の新聞紙が

「し、司令官……」

これに書かれていること本当ですか……？」

青葉新聞と書かれた紙……

とてつもなく嫌な予感がする

ちなみに、青葉新聞とは青葉が出している新聞で、娯楽の少ない鎮守府の楽しみの一

つだ

俺も毎日読んでいて日常の何気ないことを記事にしていることが多い

また、この前青葉が二日間秘書艦を務めた時に出した新聞は艦娘にとても好評だったらしい

要約すると

俺が昨日翔鶴を工廠に呼び出して、翔鶴に何かを渡し愛の告白をした……という内容だ

何かとは多分ネックレスのことだと思うが、愛の告白って……

うーん……そんなこと言ったかな？

「司令官、答えてください！」

吹雪が詰め寄ってくる

周りの艦娘も興味津々な様で朝飯も食わずに耳を傾けている

「と、とりあえず落ち着けて」

その時、食堂のドアが開き翔鶴と赤城が入ってきた

「司令官、おはようございます」

「おはようございます」

「翔鶴、赤城、おはよ！」

ちよつとこれ読んでくれ」

俺は翔鶴に新聞を手渡す

「これは、青葉さんの書いてある新聞？」

「そうなんだけどさ…」

昨日のこと話していいか？」

「昨日のことですか？」

いいですよ、今日話すつもりでしたから」

ちよつと申し訳なさそうに翔鶴は了承したので、昨日のことをみんなに話した  
「そんなことが…」

翔鶴さんは転属しちゃうんですか…？」

吹雪の言葉を皮切りに艦娘達が俺に頼み込む

「なんとかならないでしょうか、司令官？」

「翔鶴さんにはお世話になったので、居なくなつて欲しくないのです…」

「そっだクマー！」

「出来る限り私もお手伝いします

だから、翔鶴さんを転属しないようにしてください！」

「俺もみんなと同じで翔鶴に居なくなつて欲しくない

だから、出来る限りのことはするつもりだ

・・・所で青葉

「は、はい！」

「何故こんな新聞を書いたんだ？」

いつもなら、きちんと取材して裏取りとかするのに」

それと、青葉新聞はいつも夕食の時に配られる

号外って書いてあったし、だから朝に配ったのだろうか？

「そ、それは・・・」

言いにくそうに青葉は俯く

「昨日のテレビが原因なんです・・・」

「テレビ？」

妖精さんによつて食堂に二台、執務室に一台ずつテレビが設置されたのだ

昨日の夜御披露目され、凄い人気だった

「テレビで、もしかしたら私の新聞を読んでもくれる人が居なくなってしまうと思つたんです」

なるほど、だからこんな記事を・・・

やっぱり、艦娘も恋ばなとかは興味あるのかな？

「大丈夫だよ、青葉

青葉の新聞は面白いし

まあ、ちよつと恥ずかしいこともあつたけど……」

二日間秘書艦した時にこつそり撮影された（盗撮とも言うが……）寝顔の写真が一面でデカデカと載っていた時は本当恥ずかしくて死ぬかと思つた

でも、初めて青葉の新聞を読んだ時は一瞬で虜になつたからな

「本当ですか！

恐縮です！」

青葉は、弾けるような笑顔で敬礼した

「よし、これで執務はひとまず終了にしよう



今、紅茶淹れるからな〜」

「司令官、あたしも手伝う〜」

文月は。パタ。パタと食器棚に駆けていく

紅茶を淹れて、布団を敷く

「司令官、なんで布団を敷いたの〜?」

「直ぐ分かるよ」

お、文月手伝いありがとな」

文月の頭を撫でる

サラサラした髪だな…

「えへへ」

司令官の役に立てて嬉しいよお〜」

コンコン

吹雪達来たか

「どうぞ〜」

「失礼します!」

「お邪魔します」

「深雪様参上!」

「司令官……緑茶ほしい……」

とりあえず、四人に紅茶を用意する

「今日は金剛さんに教えて貰いながら、スコーンを作って見ました!」

「一ついただき〜」

吹雪の持つ皿からスコーンを一つ掠め取り頬張る

サクサク……だけど、甘くない?

「司令官……スコーンはジャムをつけて食べるんですよ?」

吹雪は苦笑いする

「なん……だと……?」

「司令官……これ緑茶じゃないんだけど……」

不満そうに初雪は呟く

「マンガ読みながら布団で寝てていいから我慢しなさい」

「分かった……!」

初雪は本棚からマンガを何冊か取り出すと布団に寝転びながら読み始める

俺はスプーンでジャムを掬ってスコーンにつける

ハム……

ん……甘くてサクサクしててうまい……

「司令官……どうでしょう？」

「美味しいよ……ありがとな、ブツキー！」

「ぶ、ブツキーじゃないですう！」

吹雪は手を振り回して抗議する

「ん？」

美味しそうだな

オレにもくれよ」

天龍と龍田、第十九駆逐隊の子達と時雨が入ってくる

「タンカー護衛お疲れ」

ちよつと待って……おっと」

立ち上がろうとするが、ふらついて立ち上がれない

「大丈夫か？」

疲れているんだったら、休めよ」

「提督、少し寝なよ

もし、提督に何かあつたら、僕ら……」

時雨の心配そうな目にたじろぐ

そ、そんな目で見えるなよ……

「わ、分かった、今日はきちんと寝るよ」

「駄目です（だよ…）」

今すぐ寝てください（寝てね…）」

吹雪と時雨が同時に有無も言わせない口調で言う

「りよ、了解

でも、熟睡したら横須賀第一から連絡来たとき対応出来ないからここで仮眠するでいいかな？」

横須賀第一に連絡したら、提督がいないから追って連絡することだった

「それでいいと思います！」

「仕方ないかな…」

吹雪と時雨が納得してくれて良かった

「済まない天龍

紅茶は自分で淹れるか、吹雪に淹れてもらってくれ…

俺は少し寝るよ… おやすみ…」

俺はソファーに凭れ掛かり、目を閉じる

「呉に着いたよ、電」

「はわわ！」

司令官さん、ちょっと待ってなのです！」

たくさんの荷物を抱え、フラフラと電は歩く

「だから、荷物多すぎるとあれほど…。」

「これくらい大丈夫なのです！」

電の… 本気を… はにやー!？」

何かに躓き、荷物をばらまく

「ほら、これは私が持ちますから

これなら、大丈夫でしょう？」

「うう… ごめんなさい、なのです…。」

顔を紅くして電は俯く

「元氣だして、電

第三では吹雪さんと白雪さん、時雨さんがいるんですよ」

電はハツと顔を上げると、一瞬で散らばった荷物をまとめる

「じゃあ、行きましようか電さん」

私は電に手を差し出す

「電って呼んでっていつも言っているのです！」

そう言つて電は手を取った

## 視察

「大丈夫、電？」

「大丈夫なのです」

タラップで輸送船から降りる

降りた先には、輸送船の船員と呉第三の大淀がいた

大淀が私と電に気が付く

「貴方は……横須賀第一の提督ですか？」

「はい、今日は奥田 吉成大佐と犬村 護少佐と直接話し合いをしたいと思ひ、参りました」

「……分かりました

すぐ、案内させます

暁ちゃん達ちよつといいかしら？」

「何かしら、大淀さん！」

「X O P P O III O」  
ハラシヨ

「あら、この人は？」

「なのです！」

「私は横須賀第一鎮守府で提督をしている、山口 宗夫です

よろしくお願いします」

「横須賀第一鎮守府所属の電なのです！」

よろしくお願いするのです！」

横須賀第一鎮守府と言った途端、響さん、雷さん、電さんの目からハイライトが消えたような…

「呉第三鎮守府所属の暁よ

さ、響、雷、電自己紹介しなさい！」

暁さんは他の三人に自己紹介しよう促す

「で、でもー！」

「自己紹介するのは、レディでなくともすることよ？」

「くっ… 雷よ」

「響だよ…」

「電なのです…」

何故三人に嫌われているのだろう…

横須賀第一に何か恨みが？



「第六駆のみんなでこの人達を執務室まで案内してください」  
「分かったわ(なのです)！」

暁さんが付いて来てと目配せしてきたので、付いて行く

「それにしても、他の鎮守府には同じ名前と同じ容姿の艦娘がいると聞いていたけど、本当だったのね！」

暁さんが唐突に話題を振る

「本当によく似ているけど、横須賀の電の方が身長もちよつと高いし目付きも鋭い…かも?」

「それに、ほら…」

横須賀の電の方がバルジが…」

(横須賀の)電「は、恥ずかしいよお…」

(呉の)電さん「そ、そうなのです…。(涙)」

二人とも顔を真っ赤にしている

…施設も綺麗ですね

第六駆の子達も何かされているような様子は見られないですし

他の艦娘達の様子を伺うが

綾波さんや敷波さん、五月雨さん、名取さんは和気あいあいと花を植えていたり、訓

練を終えた艦娘達は駄弁りながら寮のような所に入つていった  
「ここが本棟よ！」

食堂や医務室、資料室、執務室があるわ」

中に入ると食堂から話し声や笑い声が聞こえる

暁達は二階にあがる

そして、一つの部屋で止まる

第二執務室……書類上は提督補佐だから第二なのだろうか

暁さんがノックをする

「入つて大丈夫です！」

中から懐かしい声がする

「失礼するわ！」

第六駆の子達が先に入る

「暁ちゃん達お菓子食べに来たのですか？」

「それもあるけど、この人を連れてきたの」

私は執務室に入る

「吹雪さん、白雪さんお久し振りですね

「元気にしてましたか？」

「や、山口大将と電ちゃん!」

は、はい、私は元気ですよ!」

執務机の椅子から降りピシッと敬礼をする吹雪さん、相変わらず真面目ですね

「お久しぶりです、山口大将、電ちゃん

私も元気です」

白雪さんも私に敬礼をしますが、二人とも昔みたいにフレンドリーにしてくれてもいいと思うのですが…

「時雨さんも元気そうでしたです

心配でしたので」

今は亡き岩本が後悔していましたから…

でも、元気そうで本当に良かったです

「… 久しぶり、あの日以来かな

電も元気だったかい?」

「元気なのです!」

吹雪さんと白雪さんに抱き付きながら、電は返事をする

「所で犬村少佐はどこにいますのでしょう?」

「そこだよ…」

時雨が指差す方を見ると青年がスースーと気持ち良さそうな寝息をたてながら、文月に膝枕して貰っていた

文月は顔を真つ赤にしながら、青年を揺すって起こそうとしている

「し、司令官、お客さんが来てますよ

起きて〜」

うーん…

青年が目を覚まし、暫くボーとした後状況を把握したのか、顔が真つ赤になる

「ごめん、ごめん、文月!!」

青年は文月に頭を下げる

「大丈夫ですよ、司令官〜」

「そう?」

なら、いいんだけど…

「つてあれ、貴方は誰ですか?」

青年がやっと私に気が付く

「私は横須賀第一鎮守府の提督の山口 宗夫です、隣にいるのは秘書艦の電です

本日は話し合いをするため参りました」

「あ、えっと、よろしくお願いたします」

青年はペコリと御辞儀する

「し、司令官

こういうときは敬礼するんですよ！」

吹雪さんが、青年に耳打ちする

「あ、そうか……」

慌てて敬礼し直す

私も答礼する

「よろしくお願いいたします」

## クリスマススイブ

輸送船の手摺を掴み海を眺める

もうすぐで、懐かしの呉第三鎮守府に着く

まあ、懐かしのとは言っても一週間空けたただけだが…

「司令官、横須賀第一鎮守府どうでした？」

吹雪が尋ねてくる

「ん」

最悪だったな…

だって、すぐあの二人が吹雪や雷や翔鶴を引き抜こうとするし」

向こうでは、山口大将と電の勧誘が凄かった…まあ、他の艦娘も凄かったけど

しかも、俺まで勧誘されたんだから驚きだ

「あはは…

確かに凄かったですね

でも、みんな笑顔で私達の鎮守府みたいでしたね」

「確かに、みんな笑顔でいい鎮守府だったな」

違うことは、放任主義でないことや施設が充実していて娯楽が多いことだろうか  
「司令官、吹雪ちゃん、準備は出来ましたか？」

翔鶴が俺と吹雪に声をかける

「出来てるから大丈夫〜」

「私も大丈夫です！」

鎮守府の埠頭では、艦娘達が集まり手を振っている

「司令官、おかえりー！」

「っぼい〜」

「炬燵ありがとにや〜」

俺を含め19人が輸送船から降りる

行きは18人だったから一人増えたことになる

「吹雪おかえり！」

「時雨、おかえりっぼい〜」

吹雪と時雨に深雪と夕立が抱きつく

「ただいま（.:.）！」

「提督、ただいま戻りました！」

提督に敬礼をする

「どうでしたか、横須賀第一鎮守府は」

「はい、学ぶ所も多かったです」

提督も一週間艦隊指揮と書類仕事ありがとうございました」

「いつも、休みも取らず書類仕事や艦隊指揮をしているのですから、少し休んでもばちは当たりませんよ」

それで、そちらの艦娘は？」

提督は俺の後ろに目を向ける

「大和型戦艦、一番艦、大和」

推して参ります！」

「こんにちは！伊五十八です」

「ゴージャって呼んでもいいよ！」

「苦くなんかないよお！」

大和とゴージャは挨拶する

「よろしくお願いたします」

大和さん、ゴージャさん」

「よろしくネー！」

「ゴージャ！」



久しぶりなの！」

ゴーヤにイクが抱きつく

元舞鶴第三鎮守府所属の艦娘達が集まってくる

あまり素直じゃない霞も仲間との再開に喜んでる

執務室に入り書類を確認する

ふむ、書類が格段に少なくなっているな…:

提督が言っていたのだが、回される書類が減ったらしい

減ることはいいことだし、別にいいか

いつもに比べれば少ない書類をささつと片付ける

ちなみに今日の秘書艦はいない

それには理由がある

暫く書類仕事をしていると

コンコン

「どうぞ〜」

「失礼します〜」

「久しぶり、司令官〜」

「お菓子〜」

「はいはい」

とりあえず、チョコを渡す

「司令官に言われていたものはほとんど用意出来ました〜」

これがリストです!」

リストを見ると四連装酸素魚雷や10cm連装高角砲それだけでなく、本やお酒の名前や茶葉その他諸々が書いてある

「ありがと、ちゃんと見つからない所に隠したか?」

「はい!」

地下倉庫や地下牢に隠しました〜」

えっへんと妖精さんは胸を張る

「よし、後は夜中運ぶだけだな」

「後、ツリーも準備できてますよー」

今、艦娘達が飾り付けしています！」

ちなみに艦娘達は普通にクリスマスを知っていて、みんな楽しみにしていた  
「ちように書類仕事も一段落したし、手伝いにいきますか」

もうすぐお楽しみダイナーの時間ね！

一人前のレディは食事の手伝いをするわ

「鳳翔さん、何か運ぶものあるかしら？」

「暁ちゃん、手伝ってくれるの？」

なら、そこにある刺身の入った大皿を並べてください」

白い透き通るような切り身の入った大皿と赤身や白身の両方が乗った大皿の二種類が何皿かある

私は白く透き通った切り身の乗る皿を取る

ずっしり重いけど：一人前のレディはこれくらい大丈夫なんだから！

雷と電と響が私を手伝いをしているのに気が付く

「暁、手伝うわ！」

「私一人で持てるわよ！」

それより、他の皿を運びなさい」プルプル

手が震えるけど暁はお姉ちゃんとして妹になさけない所は見せられないわ

「暁：

無理はよくない：

それに、一人前のレディは人の親切を受けるものだよ：

私は思案し、結論を出す

「それもそうね：

響、反対側持つてくれる？」

「了解：

他の艦娘達も手伝い始める

そこへ、クリスマスツリーの飾りが入っていた箱を片付けに行つた司令官と吹雪と翔鶴さんが帰つてきた

「お、暁手伝いしているのか？」

「お疲れ！」

司令官は私の頭を撫でる

ふえ…

つて！

「暁は、子供じゃなーい!!」

雷や電の頭を撫でる司令官に言い放つ

「ははは、ごめんごめん、レディ」

全然反省していない司令官はからかったように返事する

「もう、司令官反省しているの？」

「してるよ〜」

鳳翔さんや間宮さん、伊良湖さん、大和さんを労いながらおざなりに返事する

「ごめんって、暁！」

俺は暁に頭を下げる

「ふんだ

バカな司令官なんてもう知らない！」

暁はパイッと顔を背ける

「本当に反省してるから！」

吹雪や大和も苦笑いしながら、傍観している

「いつも、いつも暁をバカにして！」

今回はもう許さないんだから！」プンスカ

どうしたら、許してくれるだろうか……

そうだ！

「じゃあ……

はい！」

暁の口にケーキを掬ったスプーンを入れる

暁は反射的にケーキを食べる

徐々に顔が紅くなる

「え、え？」

未だに事態を理解できないのか、呆然とする暁に俺は言う

「俺のケーキ、あげるから許してくれ……」

本当に反省しているんだ」

「わ、分かったわ！」

もう、しようがないだから！」

ふう…… なんとか、許してくれたみたい

でも、暁をからかうの面白いから、つついからかっちゃうんだよね

消灯時間になり、俺は自室に戻る

河豚刺し美味しかったな…

他の刺身も美味しかったけど

一つ増えた写真たてを眺めながら思いを致す

3ヶ月前に十一人で撮った写真がかなり昔のように感じる

コンコン

ん…来たか

じゃあ、そろそろ作戦開始かな！



## 二人の博愛主義者

「……レ級ちゃん、必ず帰って来てくださいなのです」

電は、電特製の白旗をレ級に渡す

《大丈夫、電ちゃん

必ず帰るから

天津風も元気だね》

「ふん、あんたなんか

横須賀の長門や電にボコボコにされて逃げ帰って来ればいいのよ

そうすれば、人類と深海棲艦が共存出来るなんて馬鹿みたいな考えを捨てるだろうし」

そう天津風というのがちゃんと見送りに来るあたり、レ級のことを心配なのが分かる

《横須賀の長門と電には気を付けるよ

いってきます！》

「いってらっしゃい（なのです）！」

そう言つて電はレ級が見えなくなるまで手を振つた

レ級が見えなくなると二人を監視していた姫級みたいな深海棲艦が二人に指示する  
「見送りは終わったね…」

さ、早く艦娘寮に戻って…」

二人は渋々深海棲艦の指示に従って艦娘寮に戻る

数日後…

「それにしても、時津風と初風はいつ戻ってくるのよ」  
天津風ちゃんは不満そうに呟く

一方電は数日前の深海棲艦について気になっていた  
あの深海棲艦… 何処が会った気がするのです…

「ちよつと、電聞いてる？」

「ふえ？」

何がです？」

「はあ……だから——」

コンコン

ドアがノックされる

そして、そのままドアが開く

そこには、人型でル級でもタ級でもない深海棲艦が……

《貴女達が最後ね！》

さ、付いてきて》

「ち、ちよつと待ちなさいよ！

時津風や初風はいつ戻ってくるの!？」

《大丈夫、二人とも元気にしてるから

直ぐ会えるようになるわ、直ぐにね》

そう言つて、その深海棲艦はニコリと笑うと廊下を進む

艦娘寮はシンとしていた

なぜなら、私達以外の全艦娘は何処かに連れていかれてしまったからだ

暫く歩き艦娘寮の玄関まで来たとき、その深海棲艦はハツと何かに気が付いたように

立ち止まる

「どうしたのです?」

《そう言えば、貴女達が最後だからこんな格好しなくて良かったわね》

そう言うのと深海棲艦は光に包まれ、収まった時には駆逐艦雷の姿になった

「え…!?!」

電と天津風は絶句する

雷はその様子を見て、コロコロと笑うと

「毎回同じ反応するのね」

何回見ても飽きないわ!」

と言う

「あ、あんた、何者よ!?!」

電よりも早く我を思い出した天津風が雷に怒鳴る

「何者って…」

貴女達がニンゲンに唆されて戦ってる深海棲艦よ?」

そう言うのと雷は先へ進んでいく

電は雷に艦娘になってから会ったことなかったが、確かに雷お姉ちゃんだと確信した

電と天津風は雷に付いていきながら、小声で話をする

「あれ、駆逐艦雷よね?」

「確かにそうなのです…」

「どういふことなのです？」

「数日前の深海棲艦と言い…」

「暫く進むと真新しい舞鶴第三の本棟のような建物にたどり着く  
周りには工廠や寮のような建物もある」

「ここが、私達の鎮守府…」

「真珠湾鎮守府よ！」

「ここでは、深海棲艦と艦娘？が仲良くしているという異様…：少なくとも電と天津風  
にはそう感じただろう光景が広がっていた」

「啞然とする二人を無視して雷は本棟に入っていく」

「慌てて二人は付いていき、電が雷に質問する」

「あ…：一つ質問があるのです…：」

「何？私が知っているなら何でも答えてあげるわ！」

「この鎮守府に司令官さんはいるのです？」

「電はおっかなびつくり尋ねる」

「質問されて嬉しいのか無邪気な笑顔で答える」

「今はいないわ！」

代わりに赤城さんが司令官の代わりをしているわね」

それを聞いて少し電は安心する

同時に少しがっかりする

もし、人間が司令官なら和解が可能かもしれないと思ったからだ

そんな電の複雑そうな表情を見て、雷が苦笑いする

「やっぱり、電がレッちゃんと言っていた艦娘みたいね

きつと、こんな時も深海棲艦と人間が和解できると考えているんでしょ」

本棟の地下のドアで雷は立ち止まる

「さて、どっかが先にこの部屋に入って貰うわ

電か天津風どっちが先に入る？」

「私が入るわ」

天津風が即答する

「え．．

天津風ちゃん大丈夫なのですか？」

「どうせ、中に入らないという選択肢はないわよ」

そう言つてドアを開け、天津風は中に入っていく

天津風が暗闇に吸い込まれるように消え、電と雷だけが取り残される

そわそわしながら待つこと一時間

天津風が部屋から出てきた

電は天津風に駆け寄り、手をとる

「大丈夫、天津風ちゃん！」

「…… 大丈夫よ

次は電の番よね

私は上で待っているわ」

素っ気なくそう言うのと階段を上って行ってしまふ

電がドアを開けるのを躊躇っていると

「大丈夫よ、電？」

私がいるじゃない！」

雷はドアを開ける

電の前に真っ暗な空間が現れる

この先に何が待っているのか

言いださない恐怖と不安でへたり込む

「もう、しょうがないわね」

ほら、しつかりしなさい、ほらっ！」

雷に無理矢理立たされ、後ろから押される  
嫌、嫌なのです!!

あの暗闇に行きたくないのです!!  
やだ、レ級ちゃん助けて!!

一方、レ級は：：

人間の輸送船団を見つけていた

レ級の周りには五隻の深海棲艦がいた

イ級、ハ級、ロ級、チ級、タ級一隻ずつで、レ級が心配だからと付いてきた  
勿論、レ級は全艦に艦娘と輸送船を攻撃しないように伝えている



《レ級、本当にいいのか？》

艦娘や人間の中には我々に深い怨みを抱いている奴もいる和解など出来るはずもないと思うが》

今まで二回艦娘と交戦した事のある夕級が質問する

《やってみないと分からないし》

今回失敗したとしても、私は諦めませんよ！》

夕級は呆れたように溜め息をつくと言った場所に戻った

『コレヨリ我ハ深海棲艦ノ艦隊ヲ迎撃ス』

ヒ71船団ハ護衛ノ天龍、睦月、如月ト共ニソノママ航海ヲ続ケヨ』

電は極東丸に信号を送る

『了解、武運ヲ祈ル』

電、暁、海風は船団から別れると深海棲艦の艦隊に向かう

深海棲艦の艦隊が見えてくる

見張り妖精さんから報告が上がる

未確認一、戦艦一、軽巡一、駆逐三

なお、未確認は白い旗のような物を振っている模様

『あの… 電教官どうしますか？』

恐らく白旗を振っているから攻撃しないかと聞きたいのだろう

「私達の相手は人間ではなく、化物なのです

人間の常識、ルールの通用しない化物、情けは無用なのです」

電は自らに言い聞かせるように海風に返事する

『… 了解です』

そう言うのと敵艦に照準を合わせる

駆逐艦射程に入るまで両艦隊は一切射撃をしない

先手を打ったのは艦娘の艦隊だった

暁型駆逐艦と白露型駆逐艦が発砲してくる

チカ：．　チカ

《《回避！》》

レ級は咄嗟に指示を出す

駆逐艦三隻のすぐ近くに水柱が生じる

回避を命じていなければ、命中していただろう

ふう：．　とレ級が安心した瞬間、二隻の駆逐艦に爆発が生じる

イ級はそのまま轟沈し、ハ級は大破した

レ級は知らなかったが、電達は主砲を斉射せず、若干ずらして発砲、後から発砲した砲弾は回避した時に命中するようにしていたのだ

暁型の二隻は突貫、白露型は援護に回る

《このままじゃ不味い》

私が一隻の相手をする!》

夕級が千級と一緒に一隻の足止めをする

茶色い髪の駆逐艦…… あれは電!?

電は、未確認の深海棲艦に突貫する

目の前に口級が現れる…… 電には障害にすらならない

電は腰に差している刀を抜く

そのまま口級を一太刀で轟沈させる

だがそのタイミングで大破したハ級が電に噛み付こうとするが、海風の放った正確無比の援護射撃がハ級を撃沈する

電は撃沈された駆逐艦に見向きもせず

未確認に切りかかる

咄嗟に未確認は三連装砲でガードする

戦艦と駆逐艦では艤装を着けるとパワーの差が顕著になる

押し返された電は主砲を未確認の頭に向けて発砲

未確認視界を奪われ身構えるが、電は襲ってこない

横からシャシャと音がした瞬間、海風の放った魚雷が複数命中し、未確認は小破する

魚雷が命中しても小破で済むなんて大和型…いやそれ以上の装甲なのです!?

でも勝てない敵ではないのです

何故か敵の戦意は低いし

この攻撃で決めるのです!!

痛い…… イタイヨ……

止めて電……

電は再びレ級に突貫する

レ級は副砲を向けるが海風の砲撃で視界が遮られ、電が砲撃の煙を切り裂くようにレ級の脳天に斬撃を加える

実はレ級は電の戦い方を一度経験していた

レ級が教官と慕う深海棲艦が非常に似た戦いを得意としていたからだ

レ級は三連装砲の砲身と砲身の隙間に電の刀を挟む

そして力任せに刀ごと主砲を動かす

電は突然の出来事の態勢を崩す

空中で態勢を崩してしまった電はレ級に副砲を向けられても出来ることは殆どない  
放たれた砲弾は電の装甲をいとも簡単に貫き電に甚大なダメージを与える

「あ……く……」

電は立ち上がるものの被弾した所からは血が流れ、刀を持つ左手は変な方向にねじ曲がっているだがその目からは戦意が衰えているようには見えない  
やっってしまった……

身の危険があつたとはいえ、反撃してしまった

そして、レ級は電から強い負の感情を感じた

やっぱり、和解なんて……

『暁教官！』

私が足止めします

そのうちに電教官を曳航してください！』

海風は気を失った電を支える暁に進言する

「駄目よ

貴女一人で足止めなんて！」

『ですが、このままでは全滅してしまいます！』

未確認は、攻撃していないがこっちは行動不能になってしまった電がいる  
夕級の攻撃だけでも十分すぎる程驚異だ

「…分かったわ

でも、一つ約束して」

『なんですか…？』

「必ず救援艦隊が来るまで沈まないって」

『分かりました、必ず沈みません…』

電教官が心配ですから』

暁は電を曳航し、鎮守府へと向かう

夕級は追撃しようとするが、海風がそれを阻止する

暁は鎮守府に向けて主機を吹かした



暁はベッドに眠る電を優しく撫でる

「……………」

電の怪我は甚大で、左腕を複数骨折、内臓破裂に出血多量と人間だと即死レベルで艦娘でも危篤と判断される程だったが、幸い艦娘の核と言える脳と心臓は無事だったためドックで入渠すると怪我は直った

だが、大怪我を負うと入渠に体力をかなり使うため電は三日間、目を覚まさなかった  
勿論、暁は寝ずに看病している

電の臉がピクリと動き目を覚ます

「暁……？」

「おはよう、電」

電は周りを見ると質問する

「海風ちゃんは……？」

「……行方不明よ」

海風はあの後帰って来なかった

赤城率いる第一航空戦隊と金剛率いる第三戦隊が到着した頃には海風も未確認（戦艦

レ級と呼称することになった)の二隻ともいなかった

今も長門率いる第一戦隊と川内率いる第三水雷戦隊が搜索しているが発見の報告はないらしい

「わか… つたのです…」

俯く電、その表情は窺えないが暁には手とるように分かる

憎い… 深海棲艦が、そして何より自分自身が

「暁… お姉ちゃん…」

電、間違っているのです…？」

「… 私には分からないわ

でも、一つ約束は出来る…

何があっても、私は電の側にいる

絶対離れないから」

そう、彼女が戦いに明け暮れようとも、堕ちようとも、沈もうとも

絶対に付いていく

それが暁の長女としての務めで、償いだから…

「さて、そろそろ( )飯の時間だから食堂から電の分持ってくるわ」

暁が席を立つ

「大丈夫、食堂に行つて食べるのです」

慌てて電は引き留めようとする

「まだ、起きたばかりなんだからあまり無茶したら駄目よ」

ちょうどその時ノックされる

「誰かしら？」

入つていいわよ」

「暁……そろそろご飯の……」

あ、電起きたんだね……」

ちょうど良かった……」

銀髪で、透き通るような目……」

「響だよ……」

昨日着任したんだ……」

電はいい教官らしいから、訓練が楽しみだね……」

「いい、電なのです……」

響は一旦廊下に出るとカートを押して入ってくる

「電が怪我をしたと聞いたから、野菜たっぷりボルシチだ……」

「これですぐ元気になる……」

響は手際よく三つの皿を用意し、ボルシチをよそっていく

一つを暁の前に置き、もう2つは響の席の前に置きスプーンで一杯掬い吹いて冷ましてから電の口元に差し出す

「自分で食べれるから大丈夫なのです！」

「怪我しているんだから…」

「はい…」

電は顔を赤らめながらボルシチを食べさせて貰う

暁はその光景を微笑ましく思いながら見守っていた…

# クリスマス

今日はクリスマスだ

俺は食堂のドアを開ける

中では、鳳翔、間宮、伊良湖、大和が朝飯の準備をしていた

「おはよう」

「「「おはようございます」」」

一言二言言葉を交わすと、俺は食堂を見渡せる席につく

ふと、クリスマスツリーを見る、クリスマスツリーには飾り以外に短冊もかかっている

実は艦娘達は12月24日の夜に祝うことは知っていたのだが、その後の一大イベントを誰も知らなかったのである

そもそも、クリスマスの具体的な内容も知らなかった

妖精さんからお茶を貰い、お礼を言って一息つく

緑茶の香りと温かさが冷えた身に染みる

「.....」

ガラガラ

ドアが開き、菊月が入ってくる

菊月は鳳翔達に挨拶すると俺に気がつく

「司令官か…」

「こんな朝早く…珍しいな…」

「目が覚めちゃってな…」

「菊月は？」

「ジヨギングだ…」

「やはり、基礎体力は大切だからな…」

「なるほど…」

「菊月は偉いな！」

「なに… 皆もやっているから、当たり前のことだ…」

「それに、姉妹や皆を守るためには、強くならねばならぬしな…」

「ちよつと顔を赤らめながらも当然という顔で菊月は言う

「菊月と話をしていると、ドアが開き吹雪が入ってくる

「おはようございます！」

「あの、間宮さん、アレお願いします！」

「おはよう、吹雪ちゃん、アレね？  
分かりました」

吹雪が俺と菊月に気がつく

「おはようございませす、司令官！

菊月ちゃんもおはよう！」

「おはよ、吹雪」

「おはよう、吹雪：」

ところで司令官、あれはなんだ？」

菊月はクリスマスツリーの方を指差す

クリスマスツリーの下には、大量のラッピングされた箱が置いてある

「ん： ああ

あれはメインイベントだよ

みんなが集まるまで楽しみにしていてくれ」

首を傾げる二人に俺はニヤリと笑う

そこに間宮がやってきて吹雪にマグカップを渡す

「吹雪、それなに？」

「これは甘酒ですよ！」

「ああ、甘酒か、甘酒いいよな…。」

「司令官、甘酒飲んだことあるのですか？」

不思議そうな顔で吹雪が尋ねる

「昔よく祖母が作ってくれてね…。」

家族で一緒に田舎の祖母の家に行つたのを思い出す

「そうだったのですか…。」

「良かったら、一口飲みますか？」

「いいの？」

「ありがとう、吹雪」

吹雪からマグカップを受け取り、一口飲む

ちよつと癖があるけど、甘くて美味しい

「……。」

「はい、吹雪」

「美味しかったな、今度から間宮に頼も」

「……。」

吹雪はマグカップをずっと見ている

「吹雪？」



「あ、いえ、何でもないです！」

その頃には艦娘達が次々と食堂に集まってくる

俺は早めに朝食を取り、食べ終わるとみんなから見える位置に立って話す  
「食べながらでもいいから、聞いてほしい」

クリスマスツリーの下に箱があるが、あれはみんなのためのプレゼントだ」  
みんながざわめく

「食べ終わった子から自分の名前の書いてある箱を取ってくれ  
無くなるもんじゃないんだから、慌てるなよ？」

『はーい!!』

と言った後、駆逐艦娘達が一齐にクリスマスプレゼントへ駆け寄る  
だから、慌てるなって…

苦笑いしながらも、微笑ましい光景を見守る

「司令官、幸せそうですね」

「みんなが幸せそうにしているのを見るのが一番の幸せだからね  
高雄もプレゼント取りに行ったらどうだ？」

「では、お言葉に甘えて

失礼します」

入れ替わりで、第二十二駆逐隊の子達が来る

「司令官ありがとう！」

これで僕もつと強くなれたみたいだ！」

「えへへ…」

司令官、嬉しいよ、ありがとう！」

「喜んでくれるのは嬉しいが、一つ勘違いしているよ？」

みんなのプレゼントを用意したのは俺じゃない

な、金剛？」

「Yes！」

プレゼントを用意したのは、Santa Clausデース！」

『さんたくろーす？』

駆逐艦娘達が首を傾げる

「そう、金剛の言う通り」

サンタクローズがみんなにプレゼントを届けに来たんだよ」

なんか、どや顔で教えたはいいが恥ずかしいな…」

駆逐艦娘達が目を輝かせながら金剛と俺に質問する

質問の嵐がある程度収まった時、綾波が俺に質問する

「あの… 司令官のプレゼントは何だったのですか？」

あ、ヤバイ

俺の分用意してなかった！

戦艦娘や空母艦娘も貰っているし、俺だけ貰えないと言うのも可笑しい

「あ、えつと…」

答えに窮していると、大和が箱を持ってきた

「司令官のプレゼント、これではないでしょうか？」

大和から箱を受け取り、開ける

中には一刀の日本刀と紙が入っていた

とりあえず、紙を開けて読んでみる

『護くんへ』

この刀が君に相応しいと考え、贈ることにした

きつと、君の身を護ってくれるだろう

サンタクローズより

P. S

この刀の名は『秋月』だ

大切にやってくれ』

山口大将からの贈り物か！

深海棲艦に会うことなんて滅多にないと思うが、ありがたく頂いておこう  
(既に一回会ってるけど)

「大和ありがとう！」

「お礼なら、大和が言うべきですよ」

「ねえ、しれーかん！」

「帯刀してみてよ」

「おう、どうだ！」

「格好いいだろ？」

『おおー！』

艦娘達がどよめく

「司令官が軍人に見える！」

「軍人なんだけど!？」

「普段のだらけようを見てると…ねえ…？」

皐月の言葉で数人の艦娘達がうんうんと頷く

「良からう、ならば明日から月月火水木金金で訓練をするか！」

「冗談だよ！司令官！」

にひひつと笑う皐月

「ああ、勿論分かつてるよ」

「さて…」

執務を始めるか」

「はい、司令官！」

今日は重要な要件があるため吹雪が秘書艦だ

俺は一枚の書類に目を落とす

そこには、『カムラン半島攻略作戦』と書かれていた

## 話し合い

〔横須賀第一鎮守府視察前〕

俺は山口大將を会議室に案内する

提督と大淀、翔鶴が集まった所で話し合いを始める

「やはり、話し合いとは翔鶴のことでしょうか…？」

「その事についても話す予定ですが、本題は違います

電？」

「これを読んでほしいのです」

『カムラン半島攻略作戦』

呉第三鎮守府は単独で、カムラン半島に居座る強力な機動部隊を撃破せよ

なお、敵機動部隊には装甲空母鬼と命名された未知の深海棲艦が含まれている

この艦を確実に撃沈せよ』

「…装甲空母鬼ですか」

ゲームならもつと後の海域に登場するが…

まだ、装備も練度も完璧とは言えない状況だが、大丈夫だろうか

提督の表情も険しい

「今までの他の鎮守府の情報によると、圧倒的な艦載機運用能力に加え戦艦並の砲撃能力と雷撃能力を備えている

だが、問題はその能力ではない」

俺は首を傾げる

それ以外の問題ってなんだろう？

「装甲空母鬼には常に八隻の空母と戦艦五隻、重巡洋艦十隻、小型艦多数の護衛が付いている

その他にも小規模の機動部隊と水雷戦隊が周辺海域を遊撃している」

「そ、そんな..」

うちの子に死ねというのですか!？」

俺は立ち上がって怒鳴る

吹雪と提督が俺をたしなめる

「司令官、落ち着いてください!」

「君の気持ちはよく分かる

けど、今は落ち着きなさい」

「すみません、山口大将」

「君がどれだけ、艦娘の子達を大切にしているかよく分かったよ

試すような事をして、悪かった

話の続きをするがいいか？」

俺は頷く

「他の鎮守府も攻略をしようと精鋭の部隊で攻勢をしたものの惨敗を喫し、数多の艦娘が大損害を受け行動不能となった

喪われた艦娘も少なくない

攻略作戦に参加できる状況にあるのは横須賀第一、呉第二、呉第三、大湊、トラックのみとなつてしまった」

「……」

「よつて、横須賀第一と呉第三で共同して攻略する事を提案しに来たんだ

散発的に攻略し、失敗すればもう我々に後はないからね」

山口大將は真剣な表情で話す

俺はその態度に信頼できる人かなと判断した

「分かりました。」

「一つ質問してもいいですか？」

「構わないよ」



「何故他の鎮守府や泊地は参加しないのですか？」

「連携を取りづらくなる…」というのも一つの理由だが、他の理由もある

まず、トラック泊地と大湊警備府には、別任務がある

トラック泊地には南方海域や西方海域にある資源地帯から資源を運ぶという重要でかつ危険な任務が課せられており、敵もその重要性に気が付いているためそれおいと主力部隊を動かせない

大湊警備府は北方海域からの反撃を阻止する役割だ

北方海域は敵の活動が低調になってはいえ、いつ反撃されるか分からない

また、大湊警備府は出来てから日が経ってないため練度も低いからな」

「なるほど…」

所で、呉第二は何故参加しないのでしょうか？」

「… 呉第三と連携を取れるか心配なので辞退すると」

「……？」

俺は意味が分からず首を傾げる

提督が俺の様子を見て耳打ちする

「つまり、格上の横須賀第一となら未だしも格下の呉第三なんかと何故共闘しないといけないんだという意味だ… 恐らくね」

「……こんな時でも人間同士は争うんですね……」

「残念ながらな……」

提督も呆れたように溜め息をつく

「カムラン半島共同攻略作戦については後日詳しく話し合うとして、まだまだ話すことがある

山ほどな

次はこの写真を見てくれ」

複数の深海棲艦が写されている

一隻の深海棲艦は白い旗のような物をもっているが、遠目なため深海棲艦の種類は判別がつかない

二枚目があったので、そちらも見る

そちらには白い旗を持った深海棲艦が拡大されている

黒い胸がはだけたようなレインコートを着ていて、尻尾のような艀装を持つ  
深海<sup>悪魔</sup>棲艦……

新米の俺は5―5までたどり着いてないから戦ったことはないが

友人は悪魔の化身とか僕が考えた最強の戦艦とか戦艦レ級じゃなくて艦隊レ級とか  
言っていた

「この深海棲艦と戦ったのですか？」

「ああ…」

ヒ71船団を護衛中接近する深海棲艦を迎撃するため

電と暁、海風が戦った」

「結果は…？」

「電が大破、暁は損害軽微、殿を務めた海風は今も行方不明だ」

山口大将の隣に座る電が悔しそうに俯く

「艦隊司令部は戦艦レ級と命名したのだが、この深海棲艦について知っていることはあるか？」

「私のいた世界と同じなら…」

大和型と同等、若しくはそれ以上の砲撃能力と装甲を持ち、かつ空母数隻分に相当する艦載機量と群を抜いた艦載機性能、そして高い雷撃能力です

甲標的のような小型潜水艇も持っていた筈です

正に艦隊級…と呼べるようなスペックです」

山口大将も電も驚いている

「そう…か…」

ありがたい参考になった

次はな……」

その後、様々な事を話し、いくつか重要な要件を片付けた  
「ありがとう、久しぶりだよ

こんなに初対面で腹を割って話し合ったのは」

「山口大将も優しい人で良かったです

吹雪から聞いてはいたのですが、やはり不安だったのです！」  
「では、護くんは先に執務室に戻っていてくれ

私は提督と話をすることがあるから」

「分かりました！

失礼します」

俺はドアを閉める

無事翔鶴もうちに居られるようになったし、山口大将も気さくな人で良かった…  
「さ、執務室に戻ろうか！」

所で、金剛、比叡何やっているの？」

壁に耳をあてて中の様子を聞こうとしているのか金剛が口に指を当て、*Be quiet please*と言う

「金剛お姉様がどうしても、会議の話が聞きたいというので、仕方なく…。」

比叡が若干呆れ気味に説明する

「なるほど…。」

話し合いの内容をどれだけ聞いたのか分からないが、他言無用だからね？」

「OKネ」

「はい！勿論分かっています」

「にしても、大将って年を取っているイメージあったけど、山口大将本当に若かったね」

提督が20代後半くらいなのだが、山口大将は20代前半くらいに見えた

「そうでしたね」

翔鶴が頷く

書類を持った吹雪が執務室のドアを開ける

「そうですよね！」

私も初めて会った時驚きました！

その時はまだ大佐でしたけど」

「あ、そうだ、吹雪

明日電と訓練する約束したけど、吹雪が教官でいいかな？」

「私でいいなら是非！

電教官だから、多少厳しくても大丈夫だよね！」

吹雪は目を輝かせながらそう言った

## 訓練、そして休憩

電はある方向を睨み付ける

その表情には焦りと驚愕が読み取れる

電が見る方向には旧式の97艦攻が電の見たことない程の低空飛行をしながら、雷撃しようと接近してきていた

『電ちゃん！』

六時の雷撃機、迎撃してください!!』

『な、なのです!』

吹雪達が訓練している様子を俺と山口大将で見守る

「… 護くん」

「なんですか?」

「あれは訓練なのか?」

「私には、演習に見えるんだが…」

「訓練ですよ」

「いつもと同じですし」

山口大将は驚く

「うちでもあれほどの訓練はあまりしないな…」

「… 本当ですか? (困惑)」

吹雪張り切っていたからなあ…」

「そういう問題じゃないと思うが…」

山口大将は次の輸送船が来るまでうちの鎮守府を視察するから、本棟の部屋に泊まることになった(尚、横須賀の電も同じ部屋で寝泊まりすることになった)

昨日の山口大将と電の歓迎会で既に艦娘達も打ち解けていて蟠りはなくなつたようだ

「そういうえば、昨日艦娘達に渡していたネックレスみんな喜んでいたよ」

「だといいのですけど…」



「元気がないですが、どうかしたのですか？」

——あ、済まない……」

山口大將は俺が見つめていたものに気が付き、謝る

「謝らなくていいですよ

俺が勝手に悲しんでいるだけですから

……艦娘達には言わないで下さい

余計なことで気を使わせたくないのです」

「……」

「そうだ

頑張っているみんなにお菓子の差し入れしないと！」

俺は立ち上がり、本棟へと駆け出す

「私も手伝おうか？」

「俺一人で大丈夫ですよ！」

山口大將はそこで訓練を見ていてください」

「ありがとうございます、司令官！」

「護さん、ありがとうございます…。…なのです」

俺はみんなに紅茶を手渡す

「どういたしまして！」

訓練疲れただろうから休憩しないとな」

紅茶のお供は本日の秘書艦の比叡が作ったお菓子だ

俺のいた世界では比叡の作るカレーは不味い所か生物兵器扱いされている事もしばしばだが、少なくともお菓子は美味しかった

その美味しさは間宮の作るお菓子に匹敵するほど…。…やっぱり、御召艦の名は伊達ではなかった

ちなみに今出されているのは、スコーン、マカロン、ショートケーキ…。…流石に気分が高揚します

「さあ、みんな遠慮せずどんどん食べて！」

『頂きまーす!』

早速、俺も頂こう

まずはこのスコーンから!

サクサクとした食感と程よい甘さ

最高だ…

「比叡さん、とても美味しいです!」

「おいひいのです!」

「ありがとうございます!」

頑張ったかいがありました!」

山口大将も美味しそうに食べている

そこに提督や他の艦娘達も合流し、喧騒はますます大きくなる

ふと、俺は騒がしい一角を見る

そこには赤城や第二十二駆逐隊の面々や古鷹が話をしている

相変わらず赤城は無表情… そんな赤城のケーキを隣にいた皐月がフォークで少し

食べてしまう

慌てて文月が皐月を注意する仕草を見せ、自分のケーキをフォークですくい赤城の口

元まで運ぶ

赤城は拒絶の意思を示したが、結局は文月の意思の強さに屈してケーキを食べる表情は終始無表情だったが、微かに微笑んだように俺には見えた

今度、第二十二駆逐隊のみんなと交流出来るように休日と一緒にするか

そんなことを考えていると突然体が揺すられる

「司令、司令!?!」

「どうした、比叡?」

「さつきから感想聞いているのにポーとしてるんですもん!」

「ごめん、ごめん

そうだな…

サクサクしていて、上品な甘さ

紅茶によく合うスコーンで美味しかったよ!

流石、金剛の妹だ」

「喜んでもらえて嬉しいです!」

「気合い! 入れて! 作りましたから!!」

ガッツポーズする比叡に思わず笑ってしまう

皆が訓練しているとき、解決しないことで落ち込んでいた俺が馬鹿みたいで

「ちよ、ちよつとなんで笑うんですか?!」

「だって可笑しかったんだもん

ほら、比叡

早くしないと、お菓子無くなっちゃうよ？」

あんなにたくさんあったケーキやスコーンは早くも枯渇しようとしていた  
「ひえ」

私も食べるからちよつと待って！」

艦娘達からどつと笑いがおこった

## 仲良しな二人

俺はいつものように執務をしている

ちなみに、秘書艦は五十鈴だ

コンコンコン

「入っても大丈夫ですよー」

「失礼するよ」

入って来たのは山口大将だった

今日は工廠で烈風や紫電改二を見せる約束をしたいたからだ

そのため、横須賀の工廠妖精さんも一緒にいる

礼儀正しくて、うちの妖精さんとは全然違う……けど、やっぱり甘いもの好きだった

「すみません

今片付けている書類終わったら、すぐ行くのでいいですか？」

「うん、それでいいよ」

山口大将はそう言いながら、一枚の書類を手取る

だんだん、山口大将の表情が険しくなる

「どうしました？」

「なんでもない、大丈夫だ」

「？」

「そうですか？」

「ならいいのですが…」

「ちやちやつと終わらせて五十鈴と一緒に工廠に行く」

「これは烈風です」

「詳しい説明は工廠妖精さんがしてくれます」

「はいー」

「私が説明させて頂きます！」

「妖精さんが、烈風や紫電改二の武装や速力、装甲を説明する」

「零戦をほとんど上回る驚異的な性能に横須賀の妖精さんは驚く」

「これがあれば、深海棲艦との戦いもかなり楽になるな…」

「…そうとは限りません」

「深海棲艦の危険さは数だけではなくその質もです」

「電探では確実に私達の方が負けています」

「基地航空隊もまだ実現出来ていません」

きつと、敵も烈風や紫電改二に勝るような強力な艦載機を作ってくると思います」  
「護くんの言う通りだな…」

実際すでに、上位の艦載機の存在は確認されている

それより上位の艦載機を開発している可能性は十分あるな」

通称タコヤキと呼ばれる奴や赤い艦載機に対抗するには烈風や紫電改二では心もとない

烈風改や震電改も開発しないと…するのは妖精さんだけどね

「横須賀では基地航空隊の試験運用を行っているんですよね？」

「ああ、零戦と雷電を試験運用している

うまくいけば、艦娘達の負担が軽減出来るようになるな」

横須賀第一もうちと同じく研究をされていて、照明弾や噴進砲等を作っていた

うちと横須賀第一で技術交換することになった

うちからは烈風や紫電改二、彩雲を

横須賀第一からは照明弾や噴進砲、基地航空隊を

提供することになっている

「そうだ

呉第三の妖精さんがこちらに来ることになっているが、その時護くんも一緒に来ない



か？

一緒に演習や交流が出来ればいいと思うんだが」

「いいですね！

希望を取ってみます」

五十鈴はすかさずメモを取る

「……………なに？

気が散るんだけど

何がしたいの？」

「なんでもないよ

では、山口大將、明日までに決めておきますね」

「なあ、司令官……」

夕食後、のんびりしていると気まずそうに深雪が俺に話しかける

「どうしたの？」

誰かと喧嘩したのか？」

「あの…さ」

なんで、横須賀の電は刀持っているの？」

「え？」

ああ…確かに

何でだろうね？」

電さんは訓練の時は必ず帯刀しているし、それ以外の時も持っている時が多い

「吹雪に聞いてみたんだけど、分からないって言われたし」

「なるほど」

じゃあ、本人に直接聞けばいいじゃん」

「いや、そうなだけでさ…」

なんと無く言いたいことが分かった

つまり、どう聞けばいいのか分からないのだろう

深雪と電は史実で深い因縁がある

艦娘の姿になったとはいえ気にしない方が難しいだろう

うちの深雪と電はとても仲がいいけど、まだ会って数日だからね  
「分かった、俺が聞いてくるよ」

俺は席を立ち、電の近くに行く

「電、なんで刀をいつも持っているんだ？」

「あ、護さん…それはですね…」

この刀は電の大切な人の刀の影打で…

電の大切な…大切な物なのです

だから、肌身離さず持っていたいのです…」

電は微笑みながら、刀を大事そうに抱き抱える

「そうなんだ…」

いや、深雪が気になるって言うからさ！」

「ちよ！」

司令官言うなって!!」

「深雪さんが？」

「うんうん

いい機会だし、二人で話したら？」

「お話したいのです！」

「しよ、しよがないな…

ま、いい機会だし

「そういうえば…前から吹雪の訓練があんなに厳しい理由が気になっていたんだよなだから、吹雪や白雪の横須賀時代の話が聞きたいぜ！」

「実は、吹雪ちゃんは——」

電が深雪に嬉々として話をする

仲良くなるの早いな…

まあ、いいことだけどね！

「どうかしました、元帥

普通、携帯にかけてこないと思いますが…」

『親が子に連絡を取ってはいけないのか？』

「…… 駆逐艦の子に餌付けされている元帥を親に持った記憶がありません」

『だから、あれは事故だと』

「はあ、事故…… ねえ？」

『まあ、その話はまた今度にしよう

…… 本題だ、りらんか丸が襲撃された

この意味が分かるな？』

すぐさま意味を理解し、私は冷や汗をかく

まさか……

『配下の憲兵隊には既に命令を下した

そちらはどうだった』

「提督に許可を貰いました

元より彼もその事について相談しようと思っていたそうなので」

『ふむ……

呉第三は出来たばかりだが、期待以上の戦果をあげている

この鎮守府を失うわけにはいかないからな』

## 横須賀第一鎮守府

横須賀に行くメンバーは

吹雪、白雪、時雨、第六駆逐隊、阿武隈、由良、古鷹、青葉、翔鶴、瑞鳳、祥鳳、伊勢、日向

そして、俺と奈々さんの18人

一週間、横須賀第一鎮守府にお世話になる

吹雪や白雪、時雨は横須賀にいたことがあるので、さほど緊張していないが、他の艦娘達はちよつと緊張している

「全員、荷物持ったか？」

「準備完了です、司令官!!」

「はわわ、電のカバンが一つないのです!」

「彼処にあるのじゃないかな...?」

「そこに見えるのが、横須賀第一鎮守府ですか!

立派ですね」カシャ

「懐かしいね...」

みんな元気かな？」

輸送船から全員降りる

俺達は輸送船団を護衛していた艦娘達に手を振る

振り終わった時、何人かの艦娘達がこちらに来た

「貴方が、呉第三鎮守府の提督だな？」

「はい！」

一週間お世話になります」

「私は戦艦長門だ

よろしく頼むぞ

それと提督、連絡も寄越さず鎮守府を空けるのは止めて頂きたい

少しは私達の身になってくれ」

長門さんの隣にいた艦娘達もうんうんと同意するように頷く

「ちゃんと連絡しましたよ」

「曆さんに……ですよね？」

曆さんは忘れっぽいですから、頼み事をするのは止めてください」

赤城さんがジト目で山口大将を責める

「すみません……」

「もう、提督はしつかりしているようでどこか抜けているんですから！」

「電も電よ！」

秘書艦としてしつかりしなさいよ！」

「ごめんなさい…なのです」

暁さんに怒られ電さんはしゅんとする

響さんがそんな様子を眺め、微笑んでいる

「おお？」

吹雪、白雪、時雨

お前から元気だったか？」

「あ、天龍さん！」

はい！吹雪、バツチリ元気です！」

「お久しぶりです、天龍さん

私は元気です」

「久しぶり

えつと… 僕が大湊に配属される前だから…」

「9ヶ月前だな、最後にあっただのは

色々あつたんだろ？」



天龍さんは心配そうに尋ねる

「うん、だけど大丈夫」

今は幸せだからさ」

時雨は迷わず断言する

「そうか」

ならいい」

「天龍、護くん達を案内してくれ」

「ああ、分かった」

おら、お前らオレに付いてきな！」

「ここは、憲兵の詰め所だ」

何か困った事があつたら、ここに来るといいぜ」

「私は犬村 護と言います

一週間よろしくお願いいたします」

俺は憲兵隊の皆さんに挨拶する

「ん、貴方は何処の鎮守府の提督ですか？」

隊長らしき男性が俺に尋ねる

「あ、はい

呉第三鎮守府の司令官です！」

ビシツと敬礼をする

「元氣なこつた！」

「司令官だからって艦娘にセクハラしたら、俺達が捕まえに行くから注意しろよ！」

俺のイメージでは『ドーモ、提督Ⅱサン。憲兵です』の怖そうなイメージがあったのだが、ここの憲兵の人達はそんなことはないようだ

「セクハラ…」

司令官はよく私の頬をぶにぶにしますよね」

「私も司令官に膝枕したね…」

あれはセクハラじゃないかな…？」

「え、ちよつと二人とも…」

って響は自らしてきたんじゃないか!？」

「司令官が私の隣に寝るのがいけない」

響、俺が隣に寝たからと言って膝枕するのはやめてくれ…… 割りと真面目に

「ハツハツハ

その様子だと大丈夫そうだな！」

「しれーかん、吹雪、響、次の場所行くわよ！」

他の艦娘達は憲兵達との話は終わったようで次の場所に向かうようだ

「ああ、今行く！」

憲兵さん、今度お茶でも飲んでお話ししましょう！」

「ここは食堂兼甘味処兼居酒屋だ

鳳翔さんの酒の肴は上手いんだぜ」

やっぱり、鳳翔は料理上手なんだね

調理場の近くまで行く

「券をその機械で取つたら、ここで料理を受け取りな」

ほむほむ、口頭じゃないんだね

気を付けないと

ちらほらと甘味を食べている艦娘達が手を振ってくる

うちに比べて食堂は大きかったのだが、艦娘が多いだけでなく、憲兵達や他の職員もよく利用するらしい

「次は艦娘寮だな」

「ちなみに、俺の部屋は？」

「吹雪と白雪と時雨の同室だぜ」

天龍はペラペラと書類を捲り答える

「あはは、冗談ですよね？」

「冗談言うように見えるか？」

「見えます！」

「諦めろ」

マジか…

添い寝や膝枕よりかはましかな…

ましかな？

荷物を部屋に置くと、四時間後に夕食だからそれまで暇を潰した

「私は一航戦赤城です！」

「私は一航戦加賀… よろしくお願いするわ」

「よろしくお願いいたします」

二人の前にはそれはどうなのだろうかと思う程の大量の料理が並んでいる

今日は宴会ということバイキングなのだが、こんなに取って大丈夫なのだろうか？

赤城さんは表情豊かで、加賀さんは寡黙な感じだ

「烈風や紫電改二の試験飛行はしたのですか？」

「残念ながら、組み立て終わらなくて…」

明日になりそうですね」

「私達も楽しみにしていたのだけれど」

「まあ、仕方がないですよ

ん、このメンチカツおいしい」

肉と玉ねぎの割合がちょうどよい……ご飯が進むな

「護さん、そのメンチカツ何処にあったのですか!？」

目を輝かせながら、赤城さんが尋ねる

「えっと……確か、コロッケや天ぷらの近くにありましたよ」

「分かりました!」

一航戦赤城、出ます!」

と言うとメンチカツを取りに行ってしまった

「……?」

加賀さんどうしましたか?」

何故か俺のことを観察するように見つめてくる加賀に質問する

「……何でもないわ」

「そう?」

あ、加賀さんそのたらコスパゲッティ何処にあったのですか?」

俺はたらこスパゲッティのある場所を聞き出すと取りに行くために立ち上がった

## 交流

「……では、探索者達は中央の部屋に戻ってきました  
どうしますか？」

俺はシナリオを読みながら、三人の艦娘に尋ねる

「私は……毒入りスープを飲みます」

飲むしかないという結論になりましたから」

「わ、私も飲みます」

「オレは飲まねえ」

代わりに柚子に飲ませる」

「いいのですか？」

毒入りスープを飲まなくて」

「ああ、構わないぜ」

「でも、天龍さん……」

「化け物が襲いかかってくるだけだろ？」

「問題ないぜ」



「分かりました

では、毒入りスープを飲むのは、奏川 吹雪、照月 茜、古西 柚子の三人でいいです  
すね?」

「「はい! (ああ)」」

三人の艦娘は首を縦に振る

「奏川 吹雪、照月 茜はグツと赤く鉄臭い液体を飲む

まだ、その液体は生暖かい

POW25の対抗ロールです」

コロコロ

奏川 吹雪 74失敗

照月 茜 自動失敗

「では、二人は幻覚を見て、呼吸と心拍が激しくなっていき、一分以内に心臓は疲れ果て、  
即死します」

「あが… はあはあ… お母… さん…」

「… 死にたく… ないよお…」

二人とも本当に苦しんでいるように聞こえる

俺はRP下手だから、結構羨ましい

「スープを全て飲み干し、毒の効果が発生し終わると、吹雪と茜の視界は真っ白に染まり上がります」

そして吠えるような声で『勇敢なる者よ！現へと還るがいい！』と言う声が響いてきます

次に目を覚ました時、探索者達は昨夜眠っていた場所で目を覚まし、無事朝を迎えます

あの妙な部屋は何処にもなく、探索者達が夢の中で負った怪我は全て消えています  
それどころか、夢の中で死んだ探索者までもが無事に目を覚めますのです」

「あれ……さっきのは……夢？」

「凄く怖い夢でした……」

「GM、部屋に異常はありますか？」

吹雪さんが俺に質問する

「ないね」

強いて言うなら、ベッドは汗でビチャビチャだよ」

「ビチャビチャになっちゃった……」

後で、洗わないと」

「私が洗いに行きます！」

「いや、茜は吹雪の住所知らんだろ…」

んじゃ、次は天路 龍太だね」

「おう！」

「吹雪と茜の二人がスープを飲むと倒れ、苦しみ出す」

「おい、吹雪、茜！」

「そして、すぐ息絶える

SANチェック成功1失敗1D10」

コロコロ

天路 龍太 76失敗

コロコロ

3 残りSAN値49

「…くそが…」

でも、二人は助かったんだよね？」

「うん、だけど、探索者は知らないけどね」

「吹雪の言うことを信じて柚子に飲ませるぜ」

「了解

では、柚子は明らかに怯え震えながらも毒入りスープを飲みます

そして、苦しんで死んでしまいます

SAN チェック

・・・ そうだな

龍太は結構柚子と関わっているし、成功1失敗1D6かな」

コロコロ

59 失敗

コロコロ

3 残り46

「うわ・・・ 大丈夫か、これ」

「大丈夫、大丈夫、SAN値は40切ってから本番だから

さて、天路は何か行動する？」

「うーん

一応、22口径ショート・オートマチックを持っておく」

「初期値だっけ？」

「いや、40%あるぜ」

天龍はキャラシを見ながら答える

「おけ

んじや、チャウグナー・フォーンが活性化し、最初の部屋…つまり天路 龍太がい  
る部屋に入ってます」

「来いよ」

龍太様が相手してやるぜ」

「象に良く似た長い鼻、水かきみたい大きな耳、そして透き通る牙を持つ見たこともな  
い化け物が部屋に入ってくる

SANチエック

成功1D4失敗2D6+1

『え!?!』

吹雪さんや照月さんだけでなく、TRPGを観戦していた艦娘も驚く

「でかいな…」

「そりや、邪神ですから」

コロコロ

84失敗

コロコロ

2、2…5 残り41

「SAN値が5以上減ったので一時的の狂気になるかどうかのアイデアロール」

コロコロ

11 成功

「こういう時に限って成功するんだよな」

「激しく同意だよ」

「GMさん、これ短時間にSAN値1/5減少してませんか？」

照月さんが指摘する

確かに、天路は1/5減っている

「確かに：：：というところで不定の狂気も追加されたよ、やったね！」

「全然嬉しくねえ：：：」

コロコロ

一時的狂気6 殺人癖、自殺癖

コロコロ

不定の狂気10 強迫観念に取り付かれた行動

コロコロ

5 5ヶ月程不定の狂気は続く

「一時的狂気は殺人癖でいいとして、不定の狂気はどんな感じにする？」

「そうだな：：：」

吹雪と茜と柚子を守るといふのはどうだ？」

「お、それでいいよ！」

「俺は……吹雪や茜、柚子を守る!!」

「食らえっ！」

「天龍さん格好いいです！」

「本当はDEXは相手の方が早いんだけど、待ち伏せしていたから先でもいいよ」

まあ、こんなハンデが無意味な程強いからね

「マーシャルアーツキックをするぜ」

マーシャルアーツ、キック

31 成功、37 成功

ダメージ

6、3、1 10ダメージ

「これは効くんじやないか？」

「化け物は、蹴りを気にする素振りも見せません」

「天龍さん……」

このままだとキャラロストしてしまう、照月さんはそう言いたいのだろう

「では、化け物の攻撃だ」

心臓への攻撃」

コロコロ

5 クリティカル

「ダメージ二倍で」

「じゃあ、回避だな」

「いや、回避不能だよ

CON×5をロールして」

コロコロ

27 成功

「天路は胸が締め付けられる感覚を感じる」

「う、うあ……」

「また、CON×5です」

コロコロ

55 失敗

コロコロ

4、1 5ダメージ 残り8

「耐えたぜ！」



「天龍さん！」

「では、天路 龍太はあまりの胸の痛さで意識を手放してしまう…気がつくのと、昨夜眠っていた場所で目を覚まします」

「あ、あれ…？」

「それと同時に胸に変な痛みを感じる」

「何故か、胸が…」

「あれは夢ではなかったのか？」

「という所でシナリオは終わりです！

「お疲れ〜」

「「お疲れ様です！（だぜ）」」

後日談等々を終わらせ、解散した

見ていてやりたいと思った子達と明日TRPGをやることを約束したりすると俺は夕食まで部屋でのんびりしようと思えば食堂兼甘味処兼居酒屋兼待機室から出る

疲れたし、少し寝ようかな

艦娘寮のリビングで、時雨と奈々さんと二人の男性がいた

「あ、司令官」

そう言つて、手招きするのでそのテーブルの近くまで近づく

「どうしたの、時雨？」

「命の恩人に、司令官を紹介したかったんだ

こちらは今の司令官

とても優しく、がんばり屋でみんなによく心配されているんだ」

「呉第三鎮守府の司令官をしています

犬村 護です、よろしくお願いします」

「俺は、憲兵隊特殊部署所属、奏川 暦だ

よろしく」

「同じく憲兵隊特殊部署所属、平山 信一

よろしくな」

「時雨は、任務遂行する上で助けたんだ

命の恩人と言われる程じゃないけどな

ああ、俺らの仕事がそもそも分からないか

普段は普通の憲兵と同じだが、提督の命令により艦娘が憲兵もしくは民間人に被害を及ぼすと判断されたり、艦娘達が反乱や民間人に危害を加えた時、艦娘を鎮圧するのが仕事だ」

「鎮圧……？」

鎮圧と聞くと嫌な想像をしてしまう

「鎮圧と言っても、捕縛するだけだ

その後、場合によっては軍法会議にかけられる事になっている

ま、俺らが出動したのは一回だけだし、軍法会議は行われたことないけどな」

平山さんもうんうんと頷いている

「そうなんですか！

でも、大変ではないですか？」

艦装を展開した艦娘と人間の間には力の差がある

捕縛するのは凄く大変だろう

「コツさえ知っていれば余程強い艦娘じゃなきゃ勝てるよ」

「対深海棲艦用の武器は艦娘にも効くしな

それより、変な奴に好かれる方がな…。」

「へ・ん・な人って私の事ですか、お兄ちゃん？」

さつきまで、TRPGをしていた吹雪さんが奏川さんに詰め寄る

「げ、お前いたのかよ

来ないから用事あると思ってたのに」

「さつきまで、犬村さんとTRPGをしていたので」

「てか、直ぐ俺を見つけるけど、なんでなんだよ」

「それはですね…」

対お兄ちゃん用電探を持っているからです」ドヤツ

「駄目だ、こいつ…早くなんとかしないと…。」

うちの吹雪と同じく真面目な印象だったけど、結構フリーダムらしい

でも、二人とも仲が良さそう

「あれ？」

「この子は？」

吹雪さんが奈々さんに気が付く

「この子はね

僕の鎮守府が保護したんだ

奈々ちゃん、自己紹介して？」

「えっと、狩川 奈々です」

吹雪？お姉ちゃんよろしくお願ひします」

奈々さんちよつと恥ずかしがりながら挨拶する

「俺と同じで、こつちの世界に迷い込んだらしくて

元々横須賀に住んでいたそうで、一緒に連れてきたんです」

「そうなのですか・・・」

ですが・・・」

吹雪さんは少し言い辛そうに言葉を濁す

「・・・？」

吹雪さんの反応が気になったが、話題が分かってしまったため、尋ねることが出来なかった

## 第六駆護衛任務

「暁、響、雷、電、任務を受けてくれない?」

俺は、ちよつと眠そうに目を擦っている暁達に話しかける

「任務…?」

暁はまだ眠いのか、ボーとしたながら聞き返す

「うん、横須賀第二鎮守府に配属されている大和と伊58の二人の艦娘を護衛してここに戻ってきて欲しいんだよね」

本当は俺が直接行きかけたのだが、今は正門が使えないということなので、仕方なく第六駆のみんなに頼むことにした

「ふーん…」

ちなみに、横須賀第二は往復どれくらいなのかな…?」

「艦装の整備含め一時間半くらいだと思う」

「なるほど、分かった…」

「他はない…?」

「ないよ!」

ああ、後、第二までは近いけどもしかしたらはぐれや潜水艦はいるかもしれないから  
気を付けてね」

「この雷にドーンと任せなさい！」

「なのです！」

雷と電が胸を張る、だがまだ暁は眠そうだ

「そうだ… 司令官…」

少しお願いがあるんだけど…」

ちよつと帽子を目深に被ると響はそう言う

「お願い？」

何か欲しいの？」

「… 一緒に朝食を食べたいんだ

いいかな…？」

「別にいいけど？」

んじや、食堂に行こつか」

響が手を差し出す

その表情は窺えない

「？」

「司令官、せっかくだから食堂まで手を繋ごうよ

ちよっと、暁もフラフラしてるし」

理由になつてないけど、ま、いいや

俺は響の手を取る

「あー、響だけズルい！」

私も！」

「はいはい」

「これで仲良しなのです」

初日は周りから結構避けられていたりしていたのだが、TRPGやお互いの艦娘達の

交流で今ではすっかり仲良くなった

「おはよう、照月さん、摩耶さん！」

「おはようございます、護さん」

「おはよう、護！」

「つか、本当仲いいのな」

「勿論、な響、雷、電？」

「勿論よ（なのです）！」

「Конечно（勿論）…。」



「何の話をしているの？」

欠伸を噛み殺しながら、暁が尋ねる

やっと起きたらしい

「あれだよ

暁は可愛いよな？って話！」

「も、もう、からかわないでよ！」

顔を真っ赤にする暁を見て、他の艦娘達も笑いだす

「一人前のレディに対する対応じゃないわ！」プンスカ

「ごめん……今日のおやつプリンあげるから許して！」

「し、仕方ないわね

一人前のレディとして頂くわ」

暁はプリンが好物なんだよな

まあ、どこその吸血鬼もプリンはレディの嗜好なスイーツと言っていたし、仕方ない  
ね

「えっと..」

後、もう少しで横須賀第二鎮守府よ

準備は出来ているかしら？」

『大丈夫...』

『問題ないわ！』

『なのです！』

横須賀第二鎮守府が見えてくる

横須賀第一とまでではないけど、呉<sup>う</sup>第三<sup>ち</sup>よりも大きく綺麗だった

「到着ね

少し遅れちゃったけど、一人前のレディは少し遅れて来るものよね！」

勿論、道草していた訳ではなく

道中で潜水艦に遭遇したからだった

「それにしても、世界最強の戦艦、大和ってどんな艦娘かしら、凄く楽しみね！」

「優しい艦娘だといいいのです..」

「じゃあ、みんなはちよつと待ってて

私はここの提督に報告してくるから」

私は執務室前まで案内なしで辿り着く

道中艦娘にはすれ違わず、妖精さんもあまり出会わなかった

豪華な執務室のドアをノックする

「入れ」

「失礼するわ」

中は豪華で戦艦娘が二人と横須賀第二の提督がいた

「私は呉第三鎮守府、第六駆逐隊、嚮導艦暁よ

横須賀第二鎮守府に一時的に転属になっている戦艦大和、潜水艦伊58を横須賀第一

鎮守府に護送することになっているわ

この書類の処理と艦娘達の引き渡しをお願いするわね！」

私はピシッと敬礼する

ここの提督はいかにもエリートという雰囲気で、近寄りがない

無言で書類を処理すると私に手渡す

私は執務室を出ようとするが止められる

「駆逐艦暁……だったな」

呉第三なんかよりうち横須賀第二に転属しないか」

「はいはい……？」

「何故かしら？」

「そこそこ練度と戦果持っているんだ」

呉第三など辺鄙で三流の鎮守府ではなく、我鎮守府のような一流の鎮守府の方がいいに決まっている」

「申し訳ないけど、辞退させて頂くわ」

三流程度の鎮守府に所属している駆逐隊が一流の鎮守府に転属になっても足を引つ張るだけなもの」

「だ、だがな……」

「学生なんかの指揮より私の方がな」

「諦めが悪いのか、そんなに私達が欲しいのか、提督はまだ説得を続けようとする  
「それに……」

私達の第六駆逐隊は曲者ばかりだから、エリート様には扱いきれないかもしれないわ」

「やっとな皮肉を言っていることに気が付いたのか、顔を真っ赤にする」

「き、貴様…！」

「確かに書類は頂いたわ

私達は大和と伊58の護衛任務を遂行するわね」

私はお辞儀して部屋を退室する

ふう…緊張した

つい、鎮守府と司令官が馬鹿にされたからあんなこと言っちゃった…

俺は憲兵さんに軽く挨拶して裏口から横須賀第一鎮守府を出る

どうやら、正門はマスコミが凄いらしく

追い払おうにも、世論のことを考えると実行できなくて困っているらしい

暫く歩いていると声を掛けられる

「すみません」

「何ですか？」

振り向くといかにも記者ですという感じの男性が近づいてくる

「あの…… 貴方あの施設から出てきましたよね」

少しお話を聞かせていただければと」

「…… すみません」

急ぎの用があるので」

俺は足早に記者から離れようとする

話すことなんてないし、マスコミは大嫌いだし

「ち、ちよつと」

「国民には知る権利が！」

「私にも守秘義務あります」

訴えるなら大本営や政府にしたらどうですか？」

俺は記者を振り切った

「…彼なら若いし話をしてくれると思っただけだな…」

「帰りも狙つてみよう、なんとしてもネタを手に入れたいな」

「あの…」

「マフラーをした銀髪の少女が記者に話しかける」

「どうかしました？」

「道に迷ってしまったんだ…」

「私もあまり土地勘はないのですが、分かりました」

「出来る限り案内します」

「帰りは記者に捕まる事もなく無事に鎮守府に帰還できた」

… 比較的被害を免れた呉と違って横須賀は場所によつては焼け野原になっていた俺がもし烈風や紫電改二を技術提供していればこんなことにはならなかったかもしれない…

それとデモ隊も結構大勢で行っていて、初めてみたからかなり驚いた

政府は事実を公開しろ！とかの意見は理解できるが

戦争を今すぐ止めろ！というのもあつて理解に苦しんだ

決して戦争したくてしている訳ではないのに

「護くん、ちよつといいかな？」

「山口大将、どうかしましたか？」

「ちよつと、執務室まで来てくれないかな…」

山口大将は苦笑いする

「？」

分かりました！」

執務室に行くくと、暁と電さん、そして大和とゴージャがいる

「あ、初めまして、俺は犬村 護です

呉第三鎮守府の司令官やってます

よろしくお願いいたします」



「戦艦大和です」

「伊58だよ」

「ゴーヤって呼んでもいいよ!」

大和はちよつとぶつきらぼうに返事する

対してゴーヤは元気良く答える

「ねえ」

確か、呉第三つて時雨が着任した鎮守府でち?」

「うん、時雨はここにも来てるよ」

「やった!とはしゃぐゴーヤ」

その時、暁が近くにやってきてペコリと頭を下げる

「司令官: : ごめんなさい: :」

いきなり謝られたので、なんのことが分からず首をかしげる

「俺、暁になんかされたっけ?」

「実は——」

暁から事情を聴く

「なるほど: :」

でもさ、暁が俺に謝ることないよ」

暁の頭を撫でる

大体事情は分かっていたし、呼ばれた理由も察しがついた

「山口大将、横須賀第二鎮守府の提督はなんと云っているのでしょうか？」

「演習を申し込むと言っていた

引き受けるのか？」

「勿論、呉第三が甘くないことを示してみせます！」

# 横須賀との演習 1

横須賀第一鎮守府との機動部隊の演習の様子を俺と山口大將は眺める

「そろそろですね」

「そうですね、うちが勝つか、呉が勝つか楽しみですね」

編成は

横須賀第一

旗艦 赤城

加賀

浜風

浦風

谷風

磯風

呉第三

旗艦 翔鶴

瑞鳳

電 雷 響 暁

機動部隊同士で航空戦二回行う予定になっている

「それにしても、面倒な事に巻き込んでしまつてすみません」

「気にしないでいいよ」

うちの電じゃなくて良かったよ

相手を半殺ししかねないからね…」

「まさか！

…冗談ですよね？」

秘書艦の長門さんが俺に返事をする

「電は敵と判断した相手には容赦ないからな」

山口大将と長門さんが苦笑いする

山口大将も苦労してるんだな…

タブレットに戦況が表示される

両者の編隊が攻撃を開始したようだ

数と練度は横須賀が優勢だが、質では呉第三が圧倒している

呉第三の航空優勢：制空権確保まではいかなかったが、まずはこちらが有利  
攻撃機が突撃する

呉第三は既に食い荒らされている編隊に電の適切な指示で次々と撃墜判定を出して  
いく

横須賀第一は今までの経験で損害を抑えつつ撃墜判定を出していたが、村田隊の驚異  
的な練度によつて損害を被る

第一次攻撃隊が去ると両者の損害が報告される

横須賀第一

赤城 小破

加賀 大破

浜風 損害軽微

浦風 小破

谷風 中破

磯風 損害軽微

呉第三

翔鶴 小破

瑞鳳 損害軽微

暁 損害軽微

響 小破

電 小破

雷 中破

「話には聞いていたが、村田隊は強いな」

「はい、何て言っても翔鶴が育てた航空隊ですから！」

第二次攻撃が開始される

今度は横須賀第一は直掩機をすべて攻撃隊の援護に回す作戦に出る

その為、呉第三の直掩機は満足に編隊を崩すことが出来ず、呉第三の対空能力が飽和する

だが、その代償は大きく、横須賀第一も大損害を被る

結果

横須賀第一

赤城 大破

加賀 撃沈

浜風 中破

浦風 小破

谷風 撃沈

磯風 損害軽微

呉第三

翔鶴 大破

瑞鳳 小破

暁 損害軽微

響 小破

電 中破

雷 撃沈

「横須賀第一が撃沈二 大破一 中破一 小破一

呉第三が撃沈一 大破一 中破一 小破二

よって、呉第三の勝利」

「ふう…」

接戦でしたね

みんなお疲れ様！」

みんなが埠頭に集まる

演習用の弾には塗料が入っているのです、赤城達は真つ赤に、翔鶴達は真つ青になつて  
いる

「すみません、提督

もつと、精進していれば……」

「赤城さんも加賀さんも第十七駆逐隊のみんなもとても頑張っていました

それに勝つために演習をするものではありません

経験を積んで実戦で生き残るためです

だから、しっかりと反省する所は反省して実戦で生かしてください」

「は、はい！」

翔鶴が近くに来て、報告する

「司令官、このような場を設けてくださりありがとうございます

まだまだ、未熟だと思ひしられました」

「そうなんだ

でもさ、艦載機が優秀だとしても横須賀第一の一航戦に勝てただから、凄いなと思う  
んだけどな……」

あ、次の演習まで結構時間あるからシャワー浴びて昼飯にしていよいよ

「分かりました



その次の演習の編成は

旗艦は吹雪ちゃんで

私

祥鳳

古鷹

白雪ちゃん

時雨ちゃん

ですよね？」

「翔鶴が連続になっちゃうけど大丈夫？」

「大丈夫です！」

翔鶴に疲れは見られない

俺はうなずき、雷のもとに行く

「雷、大丈夫？」

なんか、演習中動きがぎこちなかった気がしたんだよね

「大丈夫よ、司令官！」

ちよつと今回は結果が良くなかったけど、次は上手く出来るわ！」

雷が元気良く返事する

思い違いだったか

昼過ぎ、横須賀第二鎮守府の提督と艦娘達がやってきた

「… 私は呉第三鎮守府の提督補佐の犬村 護です

よろしくお願いいたします、湖上中将」

一応、書類上俺は提督補佐なのでそう言つとく

「へえ…」

貴方が噂の… 演習楽しみにしてます」

嘲笑するような笑みをすると、艦娘達に指示を出す

編成は

横須賀第二

旗艦 霧島

榛名

山城

飛龍

蒼龍

時津風

呉第三

旗艦 吹雪

翔鶴

祥鳳

古鷹

白雪

時雨

となっている

だ  
そして、演習で勝った鎮守府が指名した艦娘自分の鎮守府に転属させるというルール

艦娘は賭け物か!!と彼奴をぶん殴りたいくらいだが、所謂ブラック鎮守府では平然と  
行われているらしい

他にも何処かに艦娘を売買したり、と提督だからやりたい放題している奴もいるらしい

憲兵隊も決定的証拠を掴もうと躍起になっているらしいのだが、艦隊司令部や大本営の一部も関わっているらしくなかなか難しいとか

全く……深海棲艦という敵だけでも、厄介なのに身内に敵がいるとか止めてほしい  
「し、司令官……」

大丈夫かしら？」

暁が心配そうに訊いてくる

「大丈夫だよ

寧ろ、これから吹雪と翔鶴相手に演習する横須賀第二の艦娘達が可哀想だね」

昨日は、あまり怒ることのない吹雪と翔鶴が激怒して収めるのが大変だったから  
な……

時津風以外は機械のように言われた事を淡々とこなし、時津風は過度に緊張しているのか、しょっちゅうミスをして怒鳴られている

俺は吹雪達に話し掛ける

「準備は出来た？」

「はい！」

準備万端です！」

「分かった、落ち着いていつも通りにな！」

「「「「了解!!」」」」」

## 横須賀との演習 2

両者の艦隊が配置につき、開始のブザーが鳴り響く

空母が偵察機の発艦を開始する

横須賀第二

蒼龍隊 天山18機 彗星35機 零式艦上戦闘機52型26機

飛龍隊 彗星18機 天山36機 零式艦上戦闘機52型25機

総計158機

呉第三

翔鶴隊 97式艦上攻撃機48機 烈風36機

祥鳳隊 彗星18機 天山12機 紫電改二12機 彩雲6機

総計132機

艦載機量では負けているものの質では凌駕している

大丈夫だな……

そう確信して戦況を見守る

先手を打ったのは、呉第三の艦隊だった

私は上空を睨む

見たことのない機体が直掩機を障害とせず偵察し打電している

「蒼龍、早く追い払いなさい！」

「わ、分かっているわよ！」

でも、速度が速くて…」

「使えないわね…」

ただでさえ、先手を取られたのに…

やっと、放っていた偵察機から報告があがったが、撃墜されたのか、通信が途絶えてしまう

直ちに攻撃隊を発艦させ、輪形陣で敵の攻撃隊に備える

暫くすると水平線に敵編隊が見えてくる

ざっと100機、敵の全力攻撃だろう

そこに、太陽を背にして零戦が突撃する

敵編隊から撃墜判定を喰らった敵機が離脱する……はずなのだが、一向にその気配がない

「飛龍、直掩機はどうしたのかしら?」

「それが、敵戦闘機が強くて攻撃機を攻撃出来ない」と

「……もういいわ

山城、榛名!」

「はい」

「三式弾で編隊を攻撃する!」

三式弾装填!」

カチャンと音がして装填完了の合図が出る

「全門斉射!」

編隊の丁度斜め上に爆発が生じ、編隊に散弾が降り注ぐ

だが、編隊は10機も満たない数が離脱しただけで、その勢いが劣ることはない  
一体なぜ!?



ちゃんと、編隊に命中したはず！

実は編隊は三式弾が放たれた瞬間、拡散し密度を下げ被害を軽減したのだ。その後も三式弾を放つも、対して撃墜判定を出すことは出来ず

高角砲、機銃の間合いに達する

今までの経験で高角砲も機銃もかなりの敵機を撃墜判定出せるはずだった

だが、彗星も天山も旧式の97艦攻もなかなか撃墜出来ない

彗星10機、天山6機、97艦攻45機が高角砲の間合いを突破する

機銃で絡め取ろうとするも彗星が山城に爆弾を投下し、3発命中させる

「痛い！：： やっぱり、不幸だわ：：」

続いて、祥鳳艦攻隊と翔鶴第二艦攻隊が霧島、榛名を雷撃する

霧島は1発命中で小破、榛名は4発命中し大破する

だが、本命である翔鶴第一艦攻隊は戦艦を無視し輪形陣の中心にいる空母に狙いを定める

12機ずつに別れ、蒼龍に向かって両側から雷撃し、8発命中蒼龍に轟沈判定がでる。確実に空母を一隻ずつ潰していくらしい

だが、まだこちらの方が戦力では上と霧島は判断し、敵機動部隊に突撃すると判断し

た

『敵編隊見ゆ』

我これより迎撃す』

吹雪は直ちに輪形陣を指示し、対空戦闘の準備を命令する

私の装備は、10cm連装高角砲、94式高射装置、13号対空電探の対空、対艦重視

他にも、翔鶴さんが機銃を増設していたり、古鷹さんが大型電探を装備してしたりする

「みんな、準備はいい？」

『『『大丈夫です（だよ…）』』』』

そこに緊急の打電が入る

『我、敵艦見ゆ』

尚、敵艦は駆逐艦一隻のみ』

位置から考えると、丁度敵編隊が攻撃を開始するとき敵駆逐艦と遭遇しそうだ  
対空戦闘しながら、敵駆逐艦の攻撃を避けるのは結構難しいがやるしかない  
『十時の方向に感あり

数130!』

古鷹さんから報告が上がる

これを持ち切れば、制空権を確実に確保して戦艦を叩けます  
頑張らないと!

60機程が直掩機から逃れ、突撃してくる

「白雪ちゃんは十時の艦爆

時雨ちゃんと古鷹さんは六時の艦攻

翔鶴さんと祥鳳さんは十二時の爆雷連合を!」

私は十二時の爆雷連合を攻撃しながら、指示を出す

頭の中で敵機の位置を把握しながら指示を出し、敵機を攻撃する

電ちゃんはこれをぶつつけ本番でこなしたらしいので、凄いです…:

敵機の位置は常に変化するので、把握するだけでもかなり疲れる

「白雪ちゃんと時雨ちゃんは十二時の雷撃隊を

古鷹さんは突破してきた艦爆を

翔鶴さんと祥鳳さんは回避運動を」

『敵駆逐艦発砲：：！』

時雨ちゃんから警告が上がる

狙いは：：翔鶴さんのようです

『吹雪さん、私が駆逐艦の足止めをします！』

『いや、それより僕がした方がいい：：』

古鷹さんと時雨ちゃんが意見具申する

ハハハは：：

「時雨ちゃん、足止めお願い！」

『了解：：』

時雨ちゃんは輪形陣からは抜けず、主砲だけ動かし駆逐艦に発砲する

慌てて駆逐艦は回避を始める

暫く主砲を発砲した後、時雨ちゃんは魚雷を一本ずつ発射し、対空戦闘に戻る

駆逐艦は攻撃が終わって安心したのかまた翔鶴さんに対して攻撃を開始したが、すぐ

また回避運動を始める

時雨ちゃんは魚雷を調整し、駆逐艦を挟み込んで進むように発射したんだろう

資料室でそのような話をしたのを思い出す

最後の1機が撃墜判定を食らって離脱し、対空戦闘は終了する

「みんな被害の報告をしてください！」

『こちら翔鶴、機銃二基破損』

『祥鳳、異常なしです！』

『重巡古鷹、主砲一門旋回不能』

『白雪、機銃一基破損』

『こちら時雨・・・問題なし・・・』

「了解です！」

では、駆逐艦を撃破したのち、本隊を撃滅します！」

## 横須賀との演習3

はあ……はあ……

わたしは、必死に逃げ回る

ひゅん

すぐそばに砲弾が飛んでくる

必死に必死に逃げ回る

いつもと違って、砲弾に当たっても轟沈することはない

けど、当たるとしれーに殴られる

ざばーん、ざばーん

水柱が辺りに乱立する

少しでも動くを止めれば瞬間に轟沈判定が出されてしまうだろう

かちかちかちかち

しれーに怒られることを想像してしまい、恐怖のあまり歯の当たる音がする

いやだ、こわい

せめて、一隻でもみちぎれにしないと

わたしは全速力で敵艦隊に突貫する

時津風は逃げ回っていたが、方向を変え、私達の方に向かってくる

砲撃もせず、一心不乱に突貫する時津風に嫌な予感がし命令する

「三時の方向に転舵！」

『『『『『了解！』』』』』』

転舵してT字有利にするが、時津風はほとんど進路を変えず突っ込んでくる  
「当たってください！」

私が放った砲弾は時津風に命中したと思ったのだが、時津風は乱立する水柱を突っ切って、私に向かって突撃する

『吹雪ちゃん、危ない！』

「白雪ちゃん!？」

私と時津風の間白雪ちゃんが割り込む

時津風は目標を変えたのか、間違えたのか分からないが白雪ちゃんに抱きつき…

自爆した

「な…」

時津風が自爆し、白雪が巻き込まれる

幸い、自爆させたのは魚雷で中は演習弾だから両者中破程度怪我で済んでいる

時津風は轟沈判定

白雪は大破判定が下る

「これは…どういこと…ですか？」



怒りで声が震えるが、努めて敬語で尋ねる  
せせら笑うように湖上中將は答える

「どういふことって見れば分かるだろう？」

駆逐艦に自爆させたんだよ

そうすれば、役に立たない奴も少しは役に立つだろう

貴様の言った艦娘の装備を更新したり、役割を考えるのが作戦というのなら、これも作戦のうちだよ

そうではないか？」

「そんなの作戦でもなんでもない！」

提督の役目は皆が死なずに帰って来れるように、犠牲を出さないためにいるんだろ  
!!」

犠牲が前提の作戦などあつていい筈がない

艦娘達は死を誉れとするような軍人ではない

美味しい物を食べたり、駄弁ったり、遊んだり

そんな事が好きな女の子であり、だけど人間を護りたいと強く思うから戦いに身を投じているだけなんだ

「いふふ…」

兵器が壊れることは良くあることだ  
犠牲のうちにも入らないな」

「いっつ…!?!」

「護さん、落ち着いて!」

一緒に演習をみていた暁さんがたしなめる

「…ごめん、少し熱くなりすぎた…」

俺は、再びタブレットに目を向けた

横須賀第二

霧島 小破

榛名 大破

山城 小破

飛龍 損害軽微

蒼龍 轟沈

時津風 轟沈

呉第三

吹雪 損害軽微

翔鶴 小破

祥鳳 損害軽微

古鷹 小破

白雪 大破

時雨 損害軽微

霧島、榛名、山城と吹雪、古鷹、時雨との戦闘が始まり

ほぼ同時に飛龍と翔鶴、祥鳳が第二次攻撃隊を発艦する

第二次攻撃隊が到着する頃には、呉第三は吹雪と時雨が小破

古鷹が霧島の副砲を受け中破していた

しかし、横須賀第二も榛名が吹雪と時雨の猛攻を受け主砲以外の攻撃手段を失い

主砲さえも第一第二主砲は破壊され、第三第四主砲も旋回不能になっていた

山城も古鷹の攻撃を受け大破、運が悪く測距儀を破損し各主砲で距離を測らなくてはならなくなり、命中が大幅に下がる

そこに呉第三の第二次攻撃隊が襲い掛かる

榛名と山城は機関部損傷で速度制限がかかっているためいとも容易く撃沈判定を出されてしまう

霧島も複数の雷撃機や爆撃機に狙われたものの、大破判定で持ちこたえ、逆に古鷹に攻撃し大破させる

古鷹は後退し、吹雪と時雨が霧島に突撃する

霧島は副砲や高角砲で足止めをするが、主砲の装填が終わる前に吹雪と時雨は魚雷を発射する

間も無く霧島に轟沈判定が下った

その後第三次攻撃隊により飛龍に轟沈判定が下り、演習は終了した

「横須賀第二、撃沈六

呉第三、大破二、中破一、小破三

よって呉第三の勝利」

両者の艦隊が埠頭に帰ってくる

みんな多かれ少なかれ塗料が体に付いてしまっている  
「お疲れ！」

大丈夫、白雪？」

「大丈夫です、司令官

大した怪我ではありません」

「良かった

ドックに行つて、塗料を落としたり、怪我を治して来なよ

食堂で、お茶でも淹れておくから

時津風も怪我は――

あれ？」

時津風がいない、他の艦娘もいない

ついでに彼奴もいない

「横須賀第二の子達は？」

「どっかに行つちやいましたけど……」

「彼奴……！」

すまん、吹雪、入渠終わったら食堂で待つててくれ

俺は、横須賀第二の提督を追う」

「え、どういうことですか!？」

ちょうど、湖上中将は迎えの車に乗る所だった

「湖上中将……」

何処行くつもりですか」

「ああ、そういえば、『約束』をしていたんだったね

どれが欲しい」

「……そうですね

湖上中将が連れてきた7人の艦娘をうちに転属させてください

いいですよね？」

「何を言っているんだ

私は6体しか連れていない

君も7体目を見てないだろう？」

「惚けないでください」

提督は基本他の鎮守府を訪問する際必ず、秘書艦を連れていかないといけません  
業務が行いやすいため、万が一の時の提督の護衛として

そうだよ、天津風？」

草むらに隠れている駆逐艦娘に問いかける

「なんで分かったのかしら？」

敵意丸出しの声で天津風は尋ねる

「連装砲くんが見えてれば、そりゃ気がつくでしょ

湖上中将、いいですよね？」

「… ああ

天津風、早く乗れ」

天津風は車に乗り込もうとするが、俺が立ち塞がり通さない  
「あ、言い忘れていました」

霧島、榛名、山城、蒼龍、飛龍、時津風、天津風は一時的に横須賀第一に転属させま  
すから、わざわざ横須賀第二に連れていかなくてもいいですよ

ちゃんと、山口大将にも許可を取りました」

書類を湖上中將に見せると、明らかに中將が顔をしかめる

その様子を見て俺は深々とお辞儀する

「本日はありがとうございます」

うちの子達も格上の鎮守府との演習を楽しみにしていましたから」

それでは、そう言い俺は敬礼して中將の乗る車を見送った

とりあえず、演習に参加した艦娘達を入渠させ

天津風が持っていたものを返してもらう

天津風は烈風や紫電改二の設計図のコピーや噴進砲、照明弾そのものを隠し持っていた

この事を山口大將に相談する

結論、上には報告しないことにした



今報告すれば、中将は逮捕されるだろうが、事が大きくなるだけでなく、根本的な解決にはならないだろうと考えたからだ

「では、山口大将

俺はちよつとお茶してくるので」

そう言つて、執務室から出ようとしたが、山口大将に呼び止められる

「ちよつと待っていてくれ

実はな

私からも相談というか、提案があるんだ」

「そうなのですか？

俺で良ければ」

「狩川 奈々さんを提督にしたいんだ」

「……え？」

俺は耳を疑った

## 電さんの気持ち

まだ暗いが目を覚ます

俺は吹雪達を着替えていないか確認してから、起き上がる

一回吹雪達を着替えている時に起きてしまい、大惨事になりかける事があったからだ  
「あ、司令官、おはようございますー！」

「おはよ、吹雪」

その声で気がついたのか、時雨と白雪も挨拶する

「おはようございます」

「おはよ、司令官」

「おはよー」

まだ、食堂に行くのは早いかな？

「そうですねー」

マルロクサンマルですから」

暗い中ベッドを抜け出すが、上のベッドに頭をぶつけてしまう

「痛っ」

「あ、今、電気付けるね…」

時雨が電気をつけ、明るくなる

「ありがとう、時雨」

あ、ウノやってたんだね」

「ウノとトランプやってみました」

司令官もやりますか？」

「やるよ！」

その後トランプやウノを楽しみ、朝食を食べに行つた

俺は気分転換に散歩に出かける

寒いが逆にそれが気分転換の助けになる

昨日の事…正直俺は反対だ

でも、やるかやらないかは本人次第なんだよな

気がつくくと工廠裏の方まで来ていた

そろそろ戻るか、そう思った時電さんを見つけた

帯刀していたから確かに電さんだった

花束を持って小高い崖のある方へ向かっていく

そういうえば崖の方には行ったことなかったな、そんな事を思いつつ電さんのあとを追いかけた

小高い崖に着くと複数の石碑があった

ざっと、20：．．いやそれ以上あるかもしれない

一基の石碑に近づくと

慰霊碑

そう大きく書かれている

石沢 高次 大佐

加神 涼 少尉

：

十人程の名前が書かれその後艦娘の名前も書かれていた

最後に

リング泊地の英霊ここに眠る

と書かれている

慰霊碑に手を合わせ、奥に進むと電さんが手を合わせじつとしていた

俺は話しかけることを躊躇い、立ち尽くしていると電さんがこちらを振り向き挨拶す

る

「おはようございます、護さん」

「お、おはようございます..」

石碑には艦娘の名前しか書かれていなかった

駆逐艦 雷

駆逐艦 初雪

駆逐艦 深雪

軽空母 祥鳳

駆逐艦 海風

「……………」

俺は無言で手を合わせる

「……………」

「……………」

俺も電さんも黙り込む

どれくらいたっただろうか

突然電さんが切り出す

「雷お姉ちゃんは…電のせいで轟沈しちゃったのです」

「そうなんですか…」

「……………」

「……………」

な、何を話せばいいのかわからない…

こういう時に気の利いたことを話せない自分が嫌になる

その時、後ろから声を掛けられ思わず振り返る

「司令官？電ちゃん？」

「吹雪!?!」

「吹雪ちゃん、おはようなのです」

吹雪は花束を持つている

その花束を電の置いた花束に重ねて置き、手を合わせる

「あの吹雪ちゃん

ごめんなさい……なのです」

吹雪が電さんの方に振り向く

すると深々と電さんは頭を下げる

「電ちゃん、頭を上げてよ

あの状況だと仕方ないことでもあったし……

それにね

私、初雪ちゃんや深雪ちゃんの間まで頑張らないとって思うんだ

だから、あんまりくよくよしてたら、初雪ちゃんや深雪ちゃんに合わせる顔がないよ」

だから、気にしないで!

そう吹雪は笑いかける

俺はその笑顔から哀しさを感じた

電さんもそれを感じ取ったのか、半泣きしながら吹雪に抱きつく

吹雪を優しく受け止め、電さんの背中を擦り宥める

暫くすると電さんも落ち着いたようで、そろそろ本棟に戻るようになった

電さんと吹雪の少し後を付いて行く

ふと、一基の慰霊碑が目に入る

呉第三鎮守府の…慰霊碑？

おかしいな…

うちの鎮守府ではまだ轟沈した艦娘はいないはず…

前任はいないと聞いていたし、どういうことだろう

名簿の所を見てみると、1人の艦娘の名前が書いてある

駆逐艦 秋月

秋月…確かこの前TRPGで遊んだ照月の姉だったかな

俺は慰霊碑に手を合わせ、電さんと吹雪に付いて行く

訊いてみたい気持ちはあるが、睦まじく話している二人の雰囲気壊したくなくて話しかけることが出来なかった



本棟に戻つてくると陸奥さんに執務室に来て欲しいと言われ、俺は執務室に入る

「失礼します！」

「済まないね

度々、呼んでしまつて」

「暇ですから大丈夫ですよ

用件は…… 奈々さんのことですよね」

執務室には、吹雪さんと春雨さん、本人の奈々さんがいた

ああ、そう山口大將は領き、吹雪さんと春雨さんの紹介をする

「こちら、横須賀第零鎮守府所属の駆逐艦吹雪と春雨だ」

「よろしくお願ひいたします…」

「といつても、既に会つてますけどね」

「ああ、TRPGした仲だもんな」

吹雪さんの隣にいた春雨さんが恐る恐る自己紹介する

「あの… 春雨です

よろしくお願いいたします… はい」

「春雨もよろしく！」

笑顔で返事をする と緊張していた春雨さんも笑顔になる  
ソファーに戻った二人は奈々さんと話を始める

既に三人は仲良しのように

ちなみに、横須賀第零鎮守府は俺や奈々さんのように別世界から来た人が提督になる  
と決意した時、提督のノウハウを教えるために作られたらしい

存在は秘匿されており、一部の提督や大本営の将校しか知らないとか

俺の場合は、提督もいるし吹雪は秘書艦経験を積んでいたためここに来なくても大丈夫  
夫だろうと判断されたようだ

「山口大将…」

やっぱり、俺は奈々さんを提督にするのは反対です

でも、俺は奈々さんの親でも保護者でもない

だから、こんな重大なことを俺が決めるべきではないと思いました」

「それが結論でいいのか？」

「はい、心配ではありませんが」

真面目な表情で返事をする

鎮守府にいる方が安全かもしれない

けど…

「…大丈夫、どっちを選ぼうが私が責任を持つて彼女を護る

それに彼女が正式な提督になるには時間がかかるだろう

少なくとも、彼女がもつと大きくならないとな」

「はい…」

あ、あの…

一つ質問が」

「質問？」

「はい、呉第三鎮守府に所属していた秋月という駆逐艦のことです」

山口大将の表情が曇る

「…済まない

護くんでも教えることが出来ないんだ」

「そうなんですか…」

分かりました！」

気になるけど、教えられないなら仕方ない

なら、自分で調べるまで！  
といっても、人に訊くのは気が引けるしどうしようかな…

## 別れ

「山口大将、一週間お世話になりました！」

「私もお世話になったからね

護くんも気をつけて」

「はい！」

な n: : . . . じゃなかった、明未さんのことよろしくお願いいたします」

奈々さんもこの世界の名前が必要だそうなので、犬村 明未という名前が付けられ

たそう

ちなみに今、明未さんは時雨と話している

ちよつと、時雨は泣きそうだった

明未さんは鎮守府に残ることになった

彼女に両親がいることは分かったが、先日の空襲で行方不明となっているのだ

残念ながら、親族も亡くなっているようなので、孤児院に入るか鎮守府に残るかの選

択で鎮守府に残ると決めた

奈々さんの両親がいるということは俺の家族もいるのかと思ひ、山口大将の訊くと会

いに行くか?と尋ねられたので断った

家族がいるか、元気にしているのかは気になるが、会いに行くことは出来なかった

俺はあくまでも別世界の人間だし、それにもし家族が俺を受け入れてくれたら、呉第

三に戻れなくなりそうだったから…

とりあえず、家族は元気に暮らしているらしいので俺は満足した

ちなみに、明未さんは戸籍上小学生で義務教育が発生するので、憲兵さんが他の艦娘達（主に駆逐艦娘）と一緒に教えるとか

駆逐艦娘でも小学生卒業程度の知識は最低限備えているのだが、やっぱり教育は大切だよ

中学までならなんとかなるけど、高校になるとな…

主に英語と数三が… 社会系も無理だけど

「そろそろ時間だな

みんな準備出来た?」

「はい!」

準備完了です!」

「うん…」

準備出来てるよ…」

時雨はちよつと名残惜しそうに返事をする

「それでは、行きます

山口大将、赤城さん、長門さん、電さん

カムランではよろしくお願いいたしますね！」

「こちらこそ、頼りにしているからね

あの子や艦娘達の未来のためにな」

俺と山口大将は握手をする

その後、見送りに来ていた霧島達に予定を伝える

「向こうに着いたら、直ぐ転属願ひ出しておくから命令が下ったら呉第三に来てくれ」

「分かりました」

時津風と天津風を除く霧島達は機械のように俺に言われることをきつちりこなす

逆に言えばそれ以外はしない

ここ数日、戸惑うことばかりだった

時雨と赤城でブラ鎮の艦娘と接するのは慣れたつもりだったんだけどな…

他の子は全員輸送船に乗ったので、俺はタラップをのぼり輸送船に乗る

「また来いよ——！」

「元気で！」

「カムランで会いましょう!!」

「また、行きます!」

「そっちこそ元気で!」

「約束忘れないでねー!」

とにかく、今はカムランだな

他のことは終わってから考えよう

手を振り合う駆逐艦娘を眺めながらそう思った



# カムラン半島攻略作戦、敵空母を撃沈せよ！

僕は食堂で他の子達と一緒に司令官を待っている

今日はきつと、カムラン半島攻略作戦のことだろう

ヴェルや仲間を殺した<sup>撃</sup>した機動部隊と戦うのだから、必然と怨みの気持ちちが湧く

けど、ここは舞鶴第三じゃない、私怨は抑えないと

司令官と吹雪、そして七人の艦娘が入ってくる

「みんなおはよう！」

今日は作戦を伝えるのと新しい仲間の紹介だ

まず、紹介から…横須賀第二鎮守府から転属してきた、霧島、榛名、山城、蒼龍、飛

龍、時津風、天津風だよ」

『……』

七人は黙りこくっている

時津風は緊張しているだけに見えるが、他の子は違うみたいだ

司令官も頭を悩ませそう…僕が言えたことではないのだけど…

「え、えつと…」

みんな仲良くしてくれ

あ、空いてる席にテキトーに座ってくれ」

霧島達は黙って席に着く

周りの艦娘達も雰囲気飲まれて話しかけることが出来なかったのだが…

「ハイ！」

榛名!霧島!

「え!?!」

「金剛お姉様!?!」

金剛がいきなり二人に抱き付く

無表情だった二人も驚きと戸惑いの表情を見せる

周りにいた艦娘達も突然のことに呆然とする

「?」

みんな元気ないですが、どうしたのデース?

新しい仲間が七人も増えたんですから、歓迎しないト!

ネ?と首を傾げる金剛、一呼吸空いた後どつと笑いが起きる

「なんで、みんな笑っているデース!!」

「気にするな、金剛」

私は、日向

隣にいるのが、姉の伊勢だ

主に姉が迷惑かけるが改めてよろしく、榛名、霧島」

ちよつと、酷くない!?という姉の発言をスルーしつつ日向は榛名に手を差し出す

榛名は戸惑ったように司令官と日向に視線が行き来し、暫く考えると握手に応じる

「よろしく… お願いいたします」

「今作戦の説明をする

まず、この地図を見てくれ」

その地図には日本列島に中国大陸、台湾、P諸島、トラック泊地が含まれている  
「我鎮守府と横須賀第一鎮守府が攻撃するのはここ」

司令官さんはカムラン半島の一点を指す

「ここには敵の大規模な棲地があり、強力な機動部隊が居座っている

カムラン半島に本来戦術的価値は薄いのだが……」

カムラン半島からスーとM諸島私達の世界ではマリアナ諸島と呼ばれていた所に指示棒を動かす

「M諸島にある沖ノ島にいる飛行場姫を威力偵察した艦隊が帰路カムラン半島に居座る機動部隊の艦載機らしき編隊に襲われ、壊滅した

M諸島は戦術的にも重要でかつ同飛行場姫は本土空襲時、重爆撃機を送り込んで来た」と推測されている」

司令官さんはM諸島から日本へ指示棒を動かし軽く呉辺りを叩く

「そのため、M諸島攻略の前段作戦としてカムラン半島を攻略する

ここまで質問は？」

数人の艦娘が手を挙げる

司令官さんは電の隣にいた響ちゃんを指名する

「本土を攻撃した飛行場姫がM諸島にいるんだよね……？」

もし、私達がカムラン半島を攻撃している時、飛行場姫が呉を空襲したらどうするんだい……？」

確かに……それは大変なのです



他には？と司令官さんが尋ねたが誰も手を挙げなかったので、司令官さんは話を続ける

「次に敵情と編成だ

敵主力部隊は、鬼級を旗艦とする機動部隊だ」

一部の艦娘を除き、艦娘達は首を傾げる

「鬼級、姫級は飛行場姫を含む特殊な深海棲艦だ

flagshipより上回る実力を持っている

今の所、飛行場姫、防空駆逐棲鬼、そして今回の目標の装甲空母鬼が確認されている」

司令官さんは吹雪、白雪、翔鶴に目配せして資料を配る

「具体的には装甲空母鬼は驚異的な艦載機運用能力に加え、戦艦並の砲撃能力、雷撃能力、耐久力を有している」

地図が写し出されていた画面が切り替わり、一隻の深海棲艦を写し出す

それを見ると電は思わず息を飲む

今まで何回か艦娘と深海棲艦は似ていると思った事があったが、今回は本能的に艦娘と同じだと電は思った

見た目はこんなに違うのに…

「こいつの厄介な所はさらに取り巻きが多い事だ

八隻の空母に五隻の戦艦、十隻の重巡洋艦と多数の小型艦が装甲空母鬼を守っている」

また別の画面に切り替わる

複数の艦娘の艦隊を模した物が敵主力艦隊に向かっていくが、道中敵水雷戦隊や機動部隊に攻撃されている

「いつものような編成で戦えば道中の敵との戦いと主力艦隊の戦いで大損害を被るだろう

そこで今回は特別な編成で攻撃をする」

今度は二つの艦隊が現れる

片方の艦隊は主力艦隊のかなり前で艦載機を発艦

道中の機動部隊と主力艦隊を叩く

主力艦隊が機動部隊を攻撃している間に、もう一つの艦隊が水雷戦隊を撃破し、主力艦隊に突入する

という動画だった

「このように、機動部隊が敵を漸滅し、水上打撃部隊がその後、敵を殲滅する

実際の戦いでは、横須賀第一鎮守府と合わせて機動部隊三水上打撃部隊三を考えている

次に編成だ」

「まずは機動部隊

機動部隊は六人編成を止め、打撃力と防御力を重視する

旗艦 翔鶴

赤城

瑞鳳

祥鳳

千歳

鳳翔

阿武隈

由良



第十一駆逐隊

第六駆逐隊

第二十七駆逐隊

第八駆逐隊

次に水上打撃部隊

通常と同じように六人編成だ

旗艦 伊勢

日向

青葉

五十鈴

陽炎

不知火

旗艦 扶桑

羽黒

北上

名取

霞

霰

以上

ここまでで質問は？」

呼ばれた娘はやった！と喜んだり、不安そうに隣の娘に話しかけたりしている  
逆に呼ばれなかった娘は悔しがったり、ホッと胸を撫で下ろしている

そんな中、

「はい」

霧島が手を挙げる

司令官は予想していなかったのか虚を衝かれたような表情をしていたが、我に返り質問を促す

「私達の出撃はないのですか」

「ない

まだ、連携が取れるか心配だからな」

「私の分析によると私達を負かせた艦載機をもつてしても、制空権を取るのはかなり厳しいと思います」

「……………」

「なので、私は機動部隊に蒼龍、飛龍を加えることと私、榛名、山城を水上打撃部隊に組

み込むことを具申します」

「……許可しかねる」

お前達の精神状態を俺はまだ完全に把握していない

近海で様子を見てからだ」

司令官は渋るように返事をする

「艦娘達を大切にしているのではないのですか」

「大切にしている」

勿論、お前達も含めて、だ」

「それならば、出撃を許可してください」

私達は出撃を望んでいます」

司令官は考えるように黙り溜め息をつく、翔鶴に質問する

「翔鶴、蒼龍と飛龍が加わった場合制空権を確保することは可能か？」

「敵情が不確定なので断言は出来ませんが、制空権を確保することが現実味を帯びてく  
ると思います」

ただ……」

「リスクがある……か」

ありがとう、翔鶴

霧島の意見具申は検討しておく

今日の昼までに結論を出しておくから、準備だけはしておいてくれ」

「「「分かりました」」」

「他にはあるか?」

北上が手を挙げ、質問する

「あのさ」

甲標的はまだ実戦で使ったことないけど、今回投入しちやって大丈夫?」

「ああ、問題ない

後、装備についても言っておく

大方、その紙に書いてある通りだ

新装備だけ言っておく

翔鶴が97艦攻村田隊二部隊

赤城が流星一部隊

北上が甲標的

空母艦娘や戦艦艦娘が噴進砲を計四基積んでいる

もし、まだ慣れてない装備があつたら事前に言っておいてくれ

他にはあるか?」

「はい」

私は手を挙げ、意見具申する

「私は数回装甲空母姫と戦いましたが、この深海棲艦の実力はかなりのものです

この編成でも勝てると確信を持てるか疑問です」

「ちゃんと考慮に入れている

寧ろこちらが本命かもしれない」

画面が暗くなり、水上打撃部隊と機動部隊が撤退すると新たな艦隊が出現する

水上打撃部隊と小規模な水雷戦隊が主力艦隊へ進んでいく

「高速の艦娘のみで編成した水上打撃部隊と前哨の水雷戦隊でけりをつける

夜戦なら、重巡洋艦でも…いや駆逐艦でも奴を倒すことが出来る」

「夜戦は危険が付き物ですが」

「ちきんと、照明弾、探照灯、電探の充実と夜戦演習での訓練と秋刀魚祭りでの夜戦経験

がある

十分な実力を有している…と判断した」

「なるほど、分かりました」

私は席に着く

ざわざわと駆逐艦が話し出す

軽巡も誰とは言わないが、興奮している

司令官は話している娘達を宥め、話をする

「編成を発表する

前哨の水雷戦隊

旗艦 吹雪

白雪

初雪

深雪

那珂

旗艦 神通

時雨

夕立

白露

村雨

旗艦 川内

朝潮

大潮

満潮

荒潮

水上打撃部隊

旗艦 金剛

青葉

古鷹

那智

高雄

舞風

だ

駆逐艦娘は連戦になってしまいが、大丈夫か……？」

「問題ないです」

「大丈夫っぽい？」

寧ろ、夜戦が出来て嬉しいっぽい！」

皆一様に返事をする

「装備は機銃等の一部の装備を照明弾や探照灯に替えてくれ

金剛は新装備の33号対水上電探をつんで、敵の早期発見に努めるように」

「りょーかいデース!」

「最後に：：二隻の艦娘待機船の護衛を行う艦娘を発表する

一応、座学でまだ艦娘待機船のことを習ってない娘に簡単に説明すると、工廠を兼ね備えた移動用の船のことだ

護衛するのは

球磨

多摩

由良

阿武隈

第三十駆逐隊

第二十二駆逐隊

第十九駆逐隊

第七駆逐隊

以上の艦娘でローテーションしながら、二隻の護衛を頼む

また、攻略本隊の援護を行って貰う可能性もあることを覚悟しておいてくれ

質問は：：ないな

では解散!」



その言葉を合図に、艦娘達が話を始めたり司令官や提督の所へ行き会話を始める  
一人の軽巡は夜戦だあ!!と騒ぎ姉妹に口を塞がれる

その光景は佐世保に居た頃を思い出させ、今回の作戦への想いをたぎらせる  
絶対、あの娘を沈める・・・と

カムラン半島攻略作戦、敵空母を撃沈せよ！ 〓作戦開始

〓

五人の艦娘に護衛されながら、艦娘待機船である〓石狩〓と〓四万十〓は艦娘の出撃準備を始める

「頑張つて来てください！」

「頑張るのです！」

船員が一人の艦娘にエールを送り、その艦娘は手を振り返事をする

「電」

そろそろ、私達の番よ」

「艦尾にあるウエルドックにみんな待っているって……」

「了解なのです！」

電達は急いで艦尾に行く

電達がウエルドックに到着する頃には全員揃っていた

「……これで全員揃いましたね

装備の点検は勿論しましたよね？」

旗艦の翔鶴さんが各々に確認する

「第六駆、問題なしよ！」

「第八駆逐隊、大潮の魚雷発射管に不具合がありました。妖精さんに直して貰ったため問題ありません」

「阿武隈問題ありません！」

「鳳翔、千歳問題ありません」

「霧島、問題ありません」

「分かりました・・・」

倉上さん、お願いします！」

「はいよ〜」

その声と共にサイレンが鳴ると、ハッチが開き徐々に水が入ってくる

「そろそろ出撃なのです！」

電は雷に話し掛ける

「そ、そうね」

「雷ちゃんどうしたのです？」

緊張してるっ！」

「そ、そんなことないわ！」

武者震いよ!!」

雷は袖を捲り、元気なことを主張する

「元気なのはいいけど、無茶なんてしないでよ？」

主に電!」

ビシツと電に指を指し、暁は注意する

「はう…」

気を付けますね」

「X O P O Ⅲ O . . .」

苦笑いしつつ、響は姉妹を見守る

十分な水位まで海水が満ちると翔鶴は凜とした掛け声をあげる

「第一機動部隊、出撃します!」

『了解!!』

「帽振れ!」

「生きて帰ってこいよ!」

「頑張ってね!」

船員達や護衛の艦娘達が、帽やハンカチなんかを振っている

第一機動部隊の面々は見送られながら、“四万十”から出撃し、ほぼ同時に“石狩”

から第二機動部隊が出撃する

呉第三の第一、第二機動部隊、横須賀第一の第一、第二機動部隊の旗艦から報告が上がる

俺は呉第三の機動部隊に指示を出すと深呼吸してから目の前の書類に取り掛かる  
暫くすると一緒に書類仕事していた秘書艦に意外そうに尋ねられた

「そろそろ作戦が始まりますが、見ていなくていいのですか？」

「うん

ちよくちよく見てるけどね

非常事態があれば、無線で連絡するだろうし

ま、監視されているから… っつてもあるけど」

「監視…？」

秘書艦はキョロキョロと周りを見回すが異変はない

「いや、お前のことだよ、大和

どうせ、吹雪や時雨辺りから心配し過ぎてないかとか食事はちゃんと取っているかとか確認してと頼まれているでしょ？」

「なんのことですか？」

首を傾げ大和は、しらをきる

「はあ…ま、いいけどさ」

「飛龍さん、蒼龍さん、祥鳳さん、瑞鳳さん、準備は出来ましたか？」

『問題ありません』

『準備完了です！』

『出来てます♪』

蒼龍さんと飛龍さんは冷静に、瑞鳳さんと祥鳳さんは元気よく返事をする

艦載機は

蒼龍さん 天山18機 彗星35機 零式艦上戦闘機52型26機  
 飛龍さん 彗星18機 天山36機 零式艦上戦闘機52型25機  
 祥鳳さん 烈風18機 天山12機 彗星12機 彩雲6機  
 瑞鳳さん 紫電改二24機 天山12機 彗星12機  
 彩雲は既に索敵のため発艦している

「了解です！」

では予定通りに発艦を開始しましょう

第二十七駆のみんなや阿武隈さん、榛名さんも大丈夫？」

『問題ないよ…』

みんな出番を待ちきれないみたい…』

『そうっばい！』

『あ、阿武隈も頑張ります！』

『榛名は大丈夫です』

榛名さんは淡々とした感じを受ける

出撃しちやって大丈夫だったかな…？

「準備はいいですね？」

『はい』

『問題ありません♪』

『はい、みなさん頑張ってください』

索敵に出している彩雲から主力の報告が上がる

空母と戦艦が二隻ずつ増えている… という報告だ

私 97艦攻村田隊48機 烈風36機

赤城さん 烈風20機 彗星30機 流星32機

千歳 烈風24機 彗星24機 彩雲8機

鳳翔さん 紫電改242機

制空権隊は第二機動部隊と合わせて烈風80機 零戦51機

横須賀と合わせると十分だと思っていましたけど、微妙ですね

大和さんに司令官のことを気にかけておいてくださいと頼みましたけど、きつと司令



官は今この状況を把握しているはず

でも、中止の命令が来ないということはいけると考えているはずですよ  
「作戦開始時間になりました！」

赤城さんと千歳は発艦を開始してください!!」

『了解!!』

私は弓を引き、烈風を放った

私は弓を引き、艦載機を放つ

新鋭の烈風や流星は力強く空を翔る

「.....」

今度はいける

必ずあの娘を倒す

そうすれば、過去の自分を少しは赦せそうだから

自己満足だけど、それでも

すべて私の責任だから

私はあの娘がいる方向を睨んだ

数十隻の深海棲艦の群れの真ん中に居座る、異形の深海棲艦は空を眺める

その時、1機の偵察機から機動部隊発見の報告が上がる

その報告を訊き、深海棲艦は微笑むと機動部隊のいる方向に呟く

《赤城先輩：

今度こそ、貴女を苦しみから助けて見せます》

カムラン半島攻略作戦、敵空母を撃沈せよ！  
“佐世保の  
矛”

呉第三の第一、第二機動部隊、横須賀第一の第一、第二機動部隊から放たれた艦載機の一部は小規模な機動部隊に、その他は主力の機動部隊に向かっていく

『こちら赤城隊流星、目標は姫だな？』

赤城隊流星の隣に編隊を組む翔鶴隊97艦攻が返事する

『そーです』

私達は他の空母を頂くので！』

『我ら、艦爆は随伴を潰す、可能であれば空母も狙って援護しよう』

『あまり期待しないでね…』

『まずは、私達制空権隊が頑張らなくちゃね！』

そろそろ、第二機動部隊との合流地点なんだけど…』

『こちら、千歳隊烈風、零戦を発見！』

「了解、方角は？」

『南西です！』

「南西？向きが真逆だが…」

「私からも視認できるようになる」

『南西…？』

「機動部隊は北東にいるはず…」

「まさか…？」

「やっぱりだ！」

「零戦にマークが付いていない！」

私達、呉第三は柴犬、横須賀第一は戦闘機妖精のマークが識別のため付いているはずなのだが、両方とも付いていないのだ

その零戦は編隊に向かって急降下してくる

『はわわ！』

「拡散！拡散！」

逃げ遅れた艦爆や艦攻が攻撃を受け撃墜破される

数は30機、私達が相手をすればいける！

逃げ惑う艦爆と艦攻を援護するため、無線で隊に命令を下す

「第二、第三小隊は艦爆艦攻の援護！」

第四、第五小隊は敵戦闘機の撃破

第一小隊は我に続け!!」

《了解!!》

思わぬ敵の攻撃に攻撃隊は混乱したものの、赤城隊や翔鶴隊の機転により被害は最小限に抑えられた

翔鶴はそのことを司令官に報告する

『うーん…』

作戦に影響はある?』

「特別影響はありません」

『了解、あ、ちなみに零戦の特徴みたいの分からない？』

機種とか、識別マーキングとか』

翔鶴は少し考えた後、報告する

「そうですね…」

機種は零戦21型、識別マーキングは大鳳です

識別マーキングは鎮守府によって変わる可能性があるのです、確定情報じゃないです」

『うん、分かった！』

ちよつと調べとく

何かあったら、連絡してくれ

吹雪はどうだ？』

『こちらも問題ありません！』

『おk！』

横須賀も問題ないらしいし、今の所は順調だね』

第二機動部隊の編隊に合流した第一機動部隊の編隊は、遂に大規模な敵の機動部隊を捕捉する

直掩機が敵直掩機との乱戦を開始し、攻撃機は数を減らしながらも確実に接近する  
先陣をきるのは蒼龍隊彗星だ

『貴様ら！』

蒼龍さんに恥かせないように、小物だろうと全力で叩き潰すぞ!!』

《了解!!》

蒼龍隊は各小隊に別れ一糸乱れぬ動きで駆逐艦や軽巡洋艦を爆撃する

後に続く艦爆も護衛を優先的に攻撃し、輪形陣に穴が開く

慌てて深海棲艦はその穴を塞ごうとするものの、その絶好のチャンスを艦攻は逃すこ

となく空母に突撃する

『よし！』

突破したぞ！』

先行していた艦攻が空母に次々と魚雷を放ち、空母が水柱に呑み込まれる

村田隊も flagship に狙いを定め攻撃を仕掛ける

『魚雷投下〜』

猛烈な弾幕を諸ともせず、村田隊は魚雷を投下し空母を撃破する

赤城隊は空母をスルーし、二隻の戦艦が護衛する姫級に突撃を開始、猛烈な弾幕を食らう

『3番機被弾!!』

『25番機、26番機被弾!!』

ガラスを撒き散らしながら、一機の流星がゆっくりと着水する

『31番機被弾!!』

第八小队、全滅……!』

「怯むな！

突撃！突撃！」

その時、2番機の近くで爆発が生じ、2番機はぐらつく



「2番機大丈夫か!」

『ええ、なんとか…』

あれ、操縦がきかねえ

操縦索をやられたか…』

「今すぐ離脱しろ!」

無理なら不時着するんだ!」

『ちよつと厳しいっすね

隊長、今までありがとうございました…』

2番機はそのままゆつくりと降下しつつ、戦艦に突撃し激突する

一時的にその戦艦からの対空砲火が止み、弾幕が薄くなる

「くそっ

2番機の犠牲を無駄にするな!

今のうちに、懐へ潜り込め!!」

生き残った流星20機は両舷から姫級を雷撃し、ダメージを与えるものの行動不能になるほどの打撃を与えることは出来なかつた

犠牲は大きいな…

せめて、この分の戦果を上げられているといいが

「そっちはどうだ？」

『空母6隻を撃沈破、だけど3割が損失…』

千歳隊にはまだ荷が重かったみたいね』

「…とにかく、帰還しよう」

戦いは始まったばかりだからな」

「第一次攻撃隊は無事攻撃を完了しましたね」

私は翔鶴に問いかける

『はい』

ひとまず、作戦は成功ですが…』

翔鶴は渋るように返事をする、きつと私と同じことを考えているのだろう

「戦艦が二隻しか居なかった

きつと、水上打撃部隊を迎撃しに言ったと思われま

すか？

第二次攻撃隊を戦艦撃破に振り分けますか？」

『そうすると、姫級を撃破するのが難しくなります

あくまでも私達の任務は敵空母の撃滅です』

「了解しました」

その時、電から報告があがる

『翔鶴さん、敵編隊を発見したのです！』

『機数は分かりますか？』

翔鶴は冷静に電に質問する

『えつと…』

!?

約600なのです!!』

緊迫した声で電は返事をする

『…分かりました』

対空戦闘用意！

必ず、この空襲を乗りきりましょう』

# カムラン半島攻略作戦、敵空母を撃沈せよ！ “呉の盾”

「対空戦闘よーい、なのです！」

《了解！》

それを合図にしたかのように空に黒い点が現れ、その数を増やしていく

「霧島さん、三式弾お願いなのです！」

『了解、三式弾装填……全砲門、撃て！』

ポーン!!

霧島さんの放った三式弾は綺麗に敵の斜め上で爆発し、敵機を爆散する

直掩隊はその煙が晴れぬうちに再度一撃離脱戦法で敵機を落とす

しかし、それを次々と攻撃機は突破する

「第八駆と霧島さんは二時の艦爆

第六駆と阿武隈さんは六時の爆雷連合

空母の皆さんは侵入してきたのを

“アレ”は各自の判断で使ってください……なのです」

《了解！》

六隻編成を取っ払った編成で対空能力は格段に上がっており、濃厚な弾幕は深海棲艦の艦載機を叩き落とす

『がら空きなんですけど!?!』

阿武隈の放った一撃は敵艦爆を爆砕する

その煙を突っ切り突撃する3機の艦爆は、空母ではなく第六駆に狙いを定める

「っ!?!」

第六駆、回避運動Let's danceなのです!」

『『了解（Понимание）!!』』』

第六駆は回避運動をしつつ弾幕をはり、敵機を牽制する

その隙に10機の艦爆が侵入するも、6機が撃墜されたり、進路を阻まれ再突入を余儀なくされる

残り4機の艦爆は赤城に急降下爆撃をするも、難なく避けられる

『赤城さん大丈夫ですか?』

『大丈夫です、問題ありません』

電は全体の様子を見て指示を出す

「阿武隈さんと第八駆は一時の艦攻を

第六駆は九時の艦爆

霧島さんは六時に主砲を向けて、第六駆の援護を  
各々の判断で回避運動してくださいなのです」

《了解！》

必死に敵機を食い止めるものの、所々突破され赤城さんに爆弾や魚雷を投下する  
まだ赤城さんに命中弾はないものの、執拗に赤城さんを狙う敵機の攻撃がいつ当たつ  
てもおかしくはない

『敵爆雷連合接近！』

敵機は99艦爆と97艦攻！』

「霧島さん！

六時の艦攻に三式弾を叩き込んでください！

第六駆は六時の艦爆を

第八駆と阿武隈さんは零時の爆雷連合をお願いするのです!!」

《了解！》

『距離、速度、よし！

全門斉射!!』

至近距離で発射された三式弾により97艦攻は多数爆砕されるが、後続は恐れること  
はなく突撃を続ける

99 艦爆も噴進砲や高角砲に爆散される機体や煙を吹く機体が出るもの、それを鑑みることなく、くるりと反転し急降下を始める

通常の艦載機の攻撃もあり、艦娘側は確実に損害を出していく

『っ!』

これで勝ったつもり!』

『朝潮!』

今、援護に:』

つてウザイのよッ!』

『翔鶴さん、赤城さん、敵機直上!』

敵99 艦爆は海面に突っ込む勢いで翔鶴と赤城に爆撃し、翔鶴はその攻撃をすんでのところで躲すが赤城は避けきれず機銃の台座に直撃してしまう

『きゃあつ!』

誘爆を防いで!』

そこに敵97 艦爆が突撃するも、猛烈な弾幕の中放たれた魚雷は大半が見当違いな所に投下されたため、赤城と翔鶴は難なく回避する

その攻撃を最後に対空戦闘は終了した

散発的な攻撃はあるものの、すべて直掩隊によって食い止められている



『はあ……はあ……』

各自、損害の報告を……』

『……赤城、一部高角砲と機銃を損傷……』

……飛行甲板も損傷しましたが、発着艦に支障なし』

赤城さん達が報告している間、暁ちゃんが損傷を確認する

『響、雷、電、損害の報告をして！』

『私は主砲がちよつと凹んだくらい……』

問題ないね……』

『うーん、ちよつと攻撃受けすぎちゃった』

ごめんね？』

雷ちゃんはボロボロになった主砲を持ち上げる

かなり、服も破れているのです……』

『電は？』

結構電も損害を受けているみたいだけど……』

「電は大丈夫なのです！」

問題ないのです！」

『いや、電、嘘はよくない……』

「少なくとも中破はしているよね…？」  
「はう…」

でも、まだ戦えるのです！

電はみんなを護るのです！」

「了解した

そうだな…

第八駆と第六駆を下がらせる

今、第三十駆と第七駆を向かわせているから、交代してくれ」

第一機動部隊は600機の敵艦載機に攻撃され、朝潮、満潮が大破、電、雷、大潮が中破、他の娘も軒並み小破していたり、何かしらの損害を受けている

『ちよつと待つて欲しいのです！』

「どうした、電？」

『電はまだ、戦えるのです！』

それに、防空指揮が出来るのは電か吹雪ちゃんだけのはずなのです！』

「…だが、次も護衛艦を狙われれば電も大損害を食らう

そうなれば、最悪の事態にもなりかねないんだ」

『でも…』

ここで、電に思わぬ援護が入る

『…司令官…』

私は電に賛成だよ…』

「…理由は？」

『さつき、電が私達に打ち明けてくれたんだ…』

今思っていることを、すべて…』

司令官、前に言ったよね？

電には頼れるお姉ちゃんが三人いるって…

今はその頼れるお姉ちゃんに任せてほしいんだ…!」

響は力強く主張する

最初は動揺していた暁も同意できる点があったのか、コクコクとうなずいている

「雷もそう思うのか？」

『…!』

いいと思うわ!』

「分かった…」

第六駆はそのまま護衛を続けてくれ」

『司令官…』

時には覚悟を決めないと駄目だよ…?』

「わかってる

俺との約束守ってくれよ?」

『『『勿論（なのです）!』』』

「翔鶴もすまん

いつも、無茶なことを言ってしまったって…」

『大丈夫です

必ず連れて帰りますから』

カムラン半島攻略作戦、敵空母を撃沈せよ！ 我、夜戦へ突入す”

「……」

「司令官、画面に釘付けになってますよ」

少し呆れたような声で大和に窘められる

「そんなに心配なんですか？」

少しは私達を信じて欲しいです…」

不満げに質問する大和に苦笑して返事をする

「頭の中ではわかってるんだけど…」

どうしても心配で…

どれだけ準備しても、どれだけみんなが頑張っても負ける時は負けるし、誰かが轟沈してしまうかも知れないと考えるとね…」

第1次、第2次攻撃隊で痛打を与えることには成功したが、水上打撃部隊は横須賀第1の部隊が敵の水上打撃部隊の足止めをくらい各個撃破されてしまった

今は機動部隊と水上打撃部隊を四万十と石狩に収容している

「司令官は心配性ですね

でも、先に司令官の方が倒れそうで私は心配です…」

「…確かにすこし気を張りすぎたかもしれないな

少し…：仮眠を取ろうかな…：頭が痛い」

画面の見すぎかズキズキと頭痛がする

「分かりました！

起こすのは夜戦準備が整ったときでよろしいですか？」

「うん、ありがとう大和…：お願い…」

俺は頭を押さえて執務室のドアを開けた

ウエルドツクの近くにある待機室

そこに赤城は壁を背に座っていた

所々傷はあるものの包帯が巻いてあり、きちんと処置がなされていた  
彼女はブーツと廊下を眺める

廊下では四万十の船員や艦娘達が忙しそうに歩いていく

(倒せませんでした…あの子を…)

出来れば自分の手でケリをつけたかった…

悔しそうに唇を噛む

「やあ、赤城さん

怪我は大丈夫かい…？」

いつの間にか隣にいた時雨が赤城に話しかける

「…ええ、まあ」

「そっか、よかった…」

「……」

「……」

「そうだ



赤城さん喉渴いてないかい？」

気まずい雰囲気破るように時雨がきいてくる

特段喉は渴いていないが時雨の好意を無下にするのも、申し訳なく感じる

「お水お願いしてもいいですか…？」

「うん…！」

時雨は立ち上がって待機室にあつた給水機から水を入れてくる

「はい、赤城さん…！」

「ありがとうございます…ございませす…！」

時雨からコップを受け取る

体を動かすと傷が痛む

「…っ」

「本当に大丈夫かい…？」

「大丈夫です…」

入渠すればすぐに治ります…」

「それもそうだね…」

「…」

「あの…一つ質問…いいかな？」

気まずい雰囲気の流れる前に時雨が話しかける

「ええ、いいですよ…」

「赤城さん…」

この戦いに何か思うところがあつて参加してないかな？」

「……はい」

少し考えてから赤城は返事をする

その表情から読み取れたのは、憎しみではなく…多分哀しみ

「あの深海棲艦と戦うと思いい出すんです

共に戦った戦友を…」

「……」

「戦術も、癖も…」

そして何より、あの深海棲艦は私ばかりを狙ってきている」

確かに第二機動部隊への攻撃は1回目こそ激しかったが2回目はほとんどと言っていいほど攻撃はなかった

「私を恨んでいるのか、水底へ誘っているのか、どちらかは分かりません…」

ただ、私は戦友が深海棲艦になっていいるなら…せめて、これ以上苦しめないようにしたいんです…」

赤城さんとその戦友がどれだけ仲が良かったのかは分からないが、ひしひしと戦友に對する想いが伝わる

「本当は、夜戦に参加してでも彼女を沈めたいです…」

でも、それはただの自己満足です…」

赤城は20cm単装砲を6門持っているがあくまで万が一の自衛の為、それが夜戦で活躍できるような代物でないことは誰よりも赤城が1番よく知っているだろう

ふとここで赤城は我に返る

「…すみません

少し語りすぎました…」

「むしろ、熱く語る赤城さんを見れて僕は嬉しいよ…」

時雨はそう言つて笑いかける

その様子を見て赤城は不思議そうに質問する

「時雨さんこそ、この作戦に思うことがあるのでは…？」

「……そうだね」

彼女の言う通り、あの深海棲艦は艦隊を壊滅させ、戦友を…ヴェルを轟<sup>殺</sup>沈<sup>し</sup>させたんだから

「正直、あの深海棲艦が憎いよ…」

でも、決めたんだ

私怨は抑えるって

僕は赤城さんと違って感情的になって迷惑掛けちゃいそうだから…」

「そう…だったんですか…」

そこに1本の放送が入る

『フタマルサンマルになりました』

夜戦に参加する艦娘はウエルドックに集合してください  
繰り返します…』

「…そろそろ、行かないと」

「頑張ってください時雨さん」

「うん…」

絶対、あの深海棲艦を沈めてくるから…！」

決意した表情で時雨はウエルドックに向かった

総勢21人の艦娘達が四万十と石狩の近くで艦隊毎に集合する

第1水雷戦隊（那珂隊）

旗艦 吹雪

那珂

白雪

初雪

深雪

第二水雷戦隊（神通隊）

旗艦 神通

白露

村雨

時雨

夕立

第三水雷戦隊（川内隊）

旗艦 川内

暁

響

雷

電

主力水上打撃部隊

旗艦 金剛

那智

青葉

古鷹

高雄

舞風

金剛が無線で作戦開始を伝達する

「必ず、あの深海棲艦を倒しマース！」

Follow me!!

皆さん、ついて来て下さいネ!!」

# カムラン半島攻略作戦、敵空母を撃沈せよ！ 突入

吹雪は月夜に照らされた水面を隈無く索敵する

「『『『………』』』」

夜戦は僅かな油断が死に繋がる

いつになくみんなの表情は真剣だ

『5時の方向…敵影発見…』

初雪からの報告で緊張が高まる

確かに、5時の方向に敵影らしき物が1つ見える

「全艦砲撃戦用意」

みんなが主砲を構え、白雪は付けていたヘッドフォンを外す準備もする

「『『『………』』』」

長い沈黙が艦隊に流れる

ドクンドクン

自分の心臓の鼓動さえ明確に聞こえる

敵影らしきものは暫くぶよぶよしていたが、ふと消えてしまった



どうやら、発見されなかったようだ

『ふう…』

安堵したような吐息が無線に流れる

「引き続き警戒を厳としてください」

みんながコクリと首を振る

その後は敵と遭遇することなくもうそろそろ敵の警戒区域目前まで来た

他の隊にも特に異常はない

ふと、吹雪が時計に目を落とす

その時、妖精さんから3時の方向に敵影ありと報告があがる

吹雪が3時の方向に目を向けると、確かに6つの敵影らしきものが見える

「3時の方向に敵艦見ゆ

砲撃戦用意！」

再びみんなが主砲を構える

「那珂さんは探照灯照射、お願いします」

『りよっかい！』

那珂ちゃんにおまかせ！』

程なく、那珂が装備している探照灯から眩い光が放たれ敵艦隊を捕捉する

「撃ってー!!」

5人の艦娘が一斉に砲撃をする

金剛是那珂隊が敵水雷戦隊と交戦を開始したと報告を受ける

…大方想定通りデース

恐らく、敵は沈められた深海棲艦の分警戒網は縮小してはるはず

なら、今は敵主力艦隊まで目と鼻の先…一気に突入してバーニングラブすれば勝てる

!

「全艦最大せ…」

金剛が指示を出そうとした時、金剛の電探妖精から報告があがる  
「6時の方向より感あり」

大型艦2とその他多数を認む」

「!？」

激しい光と爆音が辺りを支配する

瞬時に金剛は艦隊が攻撃を食らったことを悟った

「損害報告を！」

『こちら青葉…コホツ…機関部損傷航行不能です…!』

『こちら古鷹、主砲二門損傷！』

機関部からも異音が…』

『那智は異常なし』

『高雄、異常ありません!』

『こちら舞風、異常なしです!』

1回の攻撃でかなりの損害を食らったことに歯を食いしばる

「舞風は青葉の曳航をお願いしマース！」

古鷹は青葉の護衛を、残りは私と一緒に敵艦隊と交戦するネ！」

『『『『『了解!』』』』』』

神通は探照灯を照射する

眼前に複数の深海棲艦が照らされる

「各艦私に続けてください！」

突撃します！」

『『『』了解（っばい！）』』』』

周りに水柱が並び立つ

『やっちやうからね！』

お返しにと艦娘側も主砲を絶えず撃つ

深海棲艦側は最初は数こそいたが、大半が駆逐艦なこともあり瞬く間に数を減らすだが、艦娘側も水雷戦隊であり戦艦と重巡洋艦、装甲空母鬼を相手するには荷が重い水上打撃部隊が来ない：

苦戦しているのでしょうか：

金剛から敵水上打撃部隊と交戦するという通信以降水上打撃部隊からの応答はないこのままではジリ貧です：なら！

「統制雷撃を仕掛けます！」

『『『『了解（っばい）！！』』』』』

敵も雷撃を敢行しようとしていることを察したのかより攻撃が激しくなる

『うわーっ、しまった！』

「白露さん大丈夫ですか!？」

『だ、大丈夫です！』

発射位置に達した瞬間、全艦が一斉に魚雷を発射する

敵艦隊は慌てて回避運動をするがもう遅い

肉薄して放った魚雷は多数の水柱を作る

り級は炎上しながら水面へ消え、夕級は最早正確に射撃できないほど傾いていた

しかし、未だ装甲空母鬼は健在で射撃を止める様子はない

「次弾装填してください！」

「再突入します！」

『っぼい!?!』

悲鳴と共に夕立と白露に水柱が上がり、晴れた時には2人ともボロボロだった

『白露、航行不能です!』

『魚雷発射管から炎上、放棄するっぼい!!』

慌てて夕立が魚雷発射管を放棄する

『神通さん!』

「これ以上の交戦は不可能だよ……!』

「ここで引けばもう装甲空母鬼を倒す機会は無いかもしれません!」

村雨さんは2人の護衛を!

時雨さんは私に付いてきてください!」

『…了解だよ』

『了解しました!』

村雨がしつかり護るから!』

再編成し、神通と時雨が突入を開始した時、突然夕級と装甲空母鬼の周りに駆逐艦や軽巡洋艦の砲撃ではない大きな水柱があがる

『すみませーン

少し敵に手間取り遅れまシタ：

神通！援護するネ！』

「金剛さん！

ありがとうございます！」

今度は装甲空母鬼の取り巻きがまとめて爆散し、装甲空母鬼に探照灯が照射される

『神通！

ここまでお膳立てしたんだからちゃんと決めなさいよ！』

「姉さん！

支援ありがとうございます！」

装甲空母鬼は完全に川内に注意がされている

神通と時雨は数多の魚雷を発射した

カムラン半島攻略作戦、敵空母を撃沈せよ！ 決着、そし

て…、”

複数の魚雷が爆発し、彼女の艦装を粉碎する

ああ…

また、水底に戻るのね…

彼女は虚空に手を伸ばす

せめて、沈む前に赤城さんに謝りたい

先に逝ってごめんなさい

彼女はそこにいない人に向かって必死に手を伸ばす

後悔の念に駆られながら



装甲空母鬼に水柱が立ち、装甲空母鬼が絶叫をあげる

その光景を見て、電は自分でも不思議なほど心がざわついていた

装甲空母鬼は傾きながら、ゆっくりと沈んでいく

あと5分もすれば完全に水底へ落ちるだろう

……たい

装甲空母鬼は何を思ったか、虚空に向かって手を伸ばす

彼女の周りにいた深海棲艦は全艦退却し、残骸しかないから当然救助も来ない

彼女が小声で何か言うと、頬に涙が伝う

…助けたい！

電は無意識に主機を吹かし、装甲空母鬼へと近づく

少し遅れて暁が電の異常に気づき無線で呼びかける

『電どうしたの…？』

電…？

電!!』

電は無線に気づくことなくどんどん速力を上げていく

何故、電は深海棲艦を助けようとしているのです…？

お姉ちゃん達を…みんなを傷つけたあの憎くて憎くてたまらないはずの深海棲艦を

…

分からない…けど、今は彼女を助けなくちゃいけない…そんな気がするのです…!

周りの艦娘達も徐々に異変に気が付き、電を止めようと動き始める

『電!』

そいつは危険だよ…!

早く離れて!』

『私が連れ戻してくるわ!』

時雨はその間に司令官を呼んで!』

『わかった…!』

電が装甲空母鬼に着く時にはもう半分以上が沈んでいた

伸ばしていた手を掴み電は必死に引っばる

ガゴン、ゴガツ、ポコポコ

装甲空母鬼の艦装が剥がれ海に落ちていく

「もう少し…もう少しなのです！」

『やつと追いついた…』

何やってるのよ、電！』

「暁お姉ちゃん!?!」

「…まさか、電深海棲艦を助けようとしてるの…?」

「そ、それは…」

電は深海棲艦を引っぱるので精一杯で暁の表情を窺いしれないが、怒られると思っ  
いた

「そう言えば、電はそういう子だったわね…」

ぼん、なでなで

「っ?!」／／／

電は思わず暁の顔を見る

暁は安心したように優しく微笑む

「最近勇ましくて忘れてたわ…」

さて、暁も手伝うわ

引き上げればいいのよね！」

「は、はいなのです！」

電と暁は深海棲艦の腕を掴み引き上げる

「セーのー！」

ガゴン、ドボーン、ぷくぷく

一際大きい鉄の塊が落ちると、深海棲艦は一気に軽くなり引き上げることに成功する  
「やったのです！」

「さて、曳航して連れて帰りましょう！」

いいわよね、司令官？」

その発言で思い出す

そうだ、司令官に許可を取ってなかったのです！

電は司令官の返答をドキドキしながら待つ

『……了解だ

暁と電は深海棲艦の曳航と武器がないかの確認をしてくれ

吹雪！

確か、那珂隊には大破した子はいなかったよな？」

『はい！』

『なら、深海棲艦の監視と援護を

金剛も那珂隊と合流してくれ』



「こちらこそごめん…」

その会話を聞いて少し電は申し訳なく思った

「お疲れ様です、司令官」

ミルクと砂糖が入ったコーヒーを大和が机に置く

「ありがとう、大和…」

「コーヒー美味しいよ」

適度な熱さで甘めなコーヒーは疲れている体に染み渡り眠気を覚ましてくれる

「それはよかったです！」

それと…こちらもどうぞ」

大和が持ってきた皿にはサンドイッチが2つのついていた  
挟んであるのはハムとチーズとキャベツかな？

「おお…！」

丁度小腹が空いてたんだ！

頂きます！」

はむっ

!?

「う、美味しい！」

具材は王道とも言えるハムとチーズとキャベツそれにマヨネーズとマスタードなのだが、辛いのが苦手なことを知ってか知らずかマスタードは少なめで非常に俺好みの味付けだった

あつという間に2つのサンドイッチを平らげる

「ご馳走様でした」

「お粗末さまでした

お気に召したようで大和、嬉しいですよ！」

照れたように顔を真っ赤にする大和に思わず笑みが零れる

「もしかして、俺の好みとか訊いてたの？」

「はい！」

間宮さんや吹雪さんに訊いて辛いのは苦手と訊いていましたので抑え目にしました  
大和ホテルはフルコースも夜食もバツチリですから！」

「そうだな！」

「…ん？」

夜戦部隊から緊急無線が来ている

まさか、まだ敵艦隊が!?

モニターを立ち上がると艦隊の様子が見える

交戦してはいないが、1つ明らかな異常がある

電が助けた深海棲艦が光に包まれているのだ

「吹雪！」

「一体何が!？」

『分かりません、突然光始めて…』

その時、光が崩れるように消える

そこにいたはずの深海棲艦はいなくなっており、代わりに1人の少女がいる

「深海棲艦が…艦娘になった…?」



俺の目にはその少女はどうみても装甲空母大鳳にしか見えなかった

## 初めての大海日

「……」

俺は目を擦り眠気を覚ます

今日は大海日か

まさか、異世界で年を越すとは1年前の俺には想像出来なかつただろうな  
服を着替えて執務室に行く

さて、今日も1日頑張りますか

出来れば明日に書類を残したくない…

暫く執務をしていると

廊下から駆ける音がする

タツタツタツ、コンコンコン

「入っていいよー」

「し、失礼します！

綾波型駆逐艦2番艦敷波です！

本日の秘書艦を務めます！」

「ん、おはよ！」

予定開始時間より2時間ほど早いけどどうしたの？」

「ふえ？」

「あ、その…」

「私と呼んだんです」

敷波の後から大和が入ってくる

「敷波さんに教えることもありますし」

それに司令官もお正月くらい休みたいですよね？」

「多少、俺が頑張れば終わる量じゃないか」

「その多少がダメなんです！」

「昨日も遅かったの私知ってるんですよ？」

「うっ…」

「あんまり酷いと、翔鶴さんに言いつけちゃいますよっ。」

「そ、それだけは…」

はらはらしながら話を聞いていた敷波に、俺は改めて声を掛ける

「という訳だ…」

今日1日よろしくな、敷波！」

「は、はい！」

敷波の飲み込みが早く執務は凡そ終わり、吹雪達の乗っている四万十と石狩を待つことにした

コートを着て、マフラーを巻き付け、外に出る

厚着をしても冷気は服の隙間から入り込む

「寒っ…」

さーて見えるかなー？」

埠頭に腰掛け水平線を眺める

暫くすると、足音とともにガコンと何かを置く音がする  
振り向くと天龍と龍田がドラム缶を持って来ていた

「よ、しれー」

四万十は見えるか？」

「いや、全然

俺も手伝おうか？」

「大丈夫だ

しれーはそこで黄昏ててくれ」

後ろから薪やら新聞紙やらを持っている第二十一駆逐隊のみんながいる  
準備が終わり火をつけ始める

わあという歓声を駆逐艦の子達が漏らしたから多分火がついたのだろう

「しれー

そろそろ温まったらどうだ？」

「ん…？

ああ、そうするわ」

手を擦りながら、ドラム缶の近くに寄る

「あつたけー」

「貴様、今日は大海日じゃのう？」

「そだねー」

「執務の調子はどうかや？」

「後は一、二時間もあれば終わるから心配しなくても大丈夫だよ！」

「なら良いのじゃ

必要であれば、いつでもわらわを頼るが良いぞ？」

「わ、私も頼ってください！」

「若葉もな」

「子日も、子日も！」

「今回は気持ちだけ頂くよ

ありがとう」

駆逐艦の子達を収めつつ、船が来るのを待っていた

「作戦が完了しました！」

「ああ、お疲れ様、吹雪

翔鶴も苦しい戦いだっただと思うが全員ちゃんと連れて帰って来てくれてありがとうございます」  
敬礼する吹雪と翔鶴に答礼して労う

夜戦部隊旗艦の金剛も労いたかったのだが、同じく労いに来てた提督の方へ行つてしまつた

まあ、金剛にとっては提督に褒めてもらう方が、労いになるだろうし、ま、いつか  
タラップから水上打撃部隊の面々が降りてくる

「お疲れ様、みんな！」

「ありがとう、司令官

でも、ごめんね、大した戦果挙げられなくて…」

「すみません、司令官…」

旗艦を務めた2人が申し訳なさそうに謝る

心做しか僚艦も落ち込んで見えるように見える

「確かに戦果は挙げられなかったかもしれないけど、水上打撃部隊のみんなが駆逐艦を減らしてくれたお陰で夜戦部隊の突入も成功したんだと思う

感謝しているよ！」

2人とも少し気が晴れたのか、一言二言言葉を交わすと入渠しにドックへ向かった

「さて、俺達も執務室に行こうか

聞きたいことも幾つかあるし」

タラップを片付けた四万十と石狩に別れを告げ、ドラム缶の周りで会話に会話を花を咲かせる艦娘達に挨拶すると本棟に入る

談笑しながら歩いていると不意に後ろから声を掛けられる

「司令官！」

駆けてきたのか、息を切らしながら俺に要件を伝える

「工廠妖精さんからの言伝だよ……」

大鳳の艦装のことで相談したいんだって……」

「わかった、今すぐ行こう

吹雪も翔鶴もいいかな？」

「はい！」



「問題ありません」

「んじゃ、行こうか」

時雨はどうする？」

「僕も一緒に行くよ」

物寂しそうに時雨は返事をする

工廠に着くと妖精さんが出迎えてくれる

「こんにちはしれーかん！」

「こんにちは！」

ベッドには大鳳が眠っている

「彼女の機装はオーバーホールしないと使い物にならない程ボロボロですが、多分直せ

ます！」

ただ……」

妖精さんは一枚の紙を手渡しする

そこには資材の量が書かれていた

「これだけの資源が必要ですよ」

「了解した

追加で必要だったら、遠慮なく言ってくれ！」

「分かりました！」

俺はひとつ質問があつたので、訊いてみる

「ところで、大鳳はいつ起きそうだ？」

「んー、明日の朝には目を覚ますかも知れませんが保証は出来ませんー」

「わかった…」

明日、また来てみるよ」

「その時にはお菓子お願ひしますね！」

「ああ、分かったよ」

俺は指切りげんまんを妖精さんとするど工廠を後にした

執務が終わり、食堂に行くとき既に多くの艦娘達が席に着いてテレビを見たり、話をしている

「ほほ、全員入渠終わったみたいだな！」

「そうですね！」

あ、あそこ席空いてますよ！」

俺達4人が席に着くと、丁度年越しそばが配られる

いい匂いだ：

配り終わると青葉がマイクを渡してくる

どうやら宴会前に挨拶をしろとのことらしい

パシャパシャと青葉写真を取っている中、俺は少し緊張しながら挨拶をする

「今回の作戦は轟沈を1人も出さずに成功させたことに嬉しく思う

来年も轟沈する子がないよう、皆で力を合わせが頑張ろう！」

いただきます！」

『いただきます!!』

年越しそばを堪能したあとは、皆で年越しまでのんびり過ごしていた  
テレビでは都内の有名なお寺に人がごった返している様子を映している  
その様子を見て凄いなあとか人が多いねとか口々に艦娘達は話している  
そして、テレビがカウントダウンを始める

10...9...8...

7...6...5...4...

3...2...1

## 初めてののお正月1

ごーん

除夜の鐘の音がテレビから聞こえる

『おお……！』

艦娘達には除夜の鐘はあまり馴染みがないのか、歓声があがる

「あけましておめでどう

今年もよろしくね、吹雪、翔鶴、時雨」

「はい、あけましておめでどうございます！今年もよろしくお願ひしますね、しれーかん

！」

「あけましておめでどうございます…

本年もどうぞよろしくお願ひいたします」

「あけましておめでどう……今年も僕を…僕達をよろしくね…」

3人とも笑顔で返事をする

同時に責任も感じる…

学生には重すぎるよ…きつと、今まで通りやれば大丈夫…だよな？

「司令官？」

あけましておめでとうございます

今年もよろしくね！」

「あけましておめでとう……」

今年もよろしく……」

「あけましておめでとう、司令官！」

今年ももつともーつと私に頼ってね！」

「あけましておめでとうございます

今年もよろしくなのです！」

「あけましておめでとう、今年もよろしくな！」

第六駆の子達は俺と少し話し、また別の所に挨拶しに行ったようだ

俺の方にも挨拶しに来た艦娘達が列のようになっている

暫くは、挨拶だけで忙しそうだ……

まだ食堂に残っている艦娘達に早く寝るようにと釘を刺し、吹雪と俺は食堂を後にする

タブレットで時間を確認するともう1時半になっていた

「じゃあ、また明日

吹雪、おやすみ」

「おやすみなさい、司令官！」

艦娘寮まで吹雪を見送ると俺は自室に向かう

欠伸を噛み殺しつつ、今後のことに思いを馳せる

南西諸島海域奪還する

これが終わると次は北方海域と西方海域か：

現状、日本の北方を護るのは大湊警備府のみ：最近攻勢がないことから敵はかなりの

戦力を蓄えてる可能性もある

かと言って西方海域も攻勢しなければ、南西諸島海域に反攻される可能性もある…

…と、考えすぎた…早く自室に入ろう

ストープは…すぐ寝るから付けなくていつか…

バフツとベッド倒れ込む

あー、やばい

まだ歯磨きとかしてないのにこのまま寝たら…ZZZ

「うーん…」



ムクリと起き上がり、タブレットで時間を確認する  
マルロクマルマル：

1時間くらい寝過ごしたか：

掛け布団退かし、シャワーを浴び、歯磨きをする

洗濯物をカゴに入れるとそれを持ち、執務室に行く

「おはようございます、司令官！」

「ああ、おはよう吹雪：

朝から元気なお前が羨ましいよ…」

カゴを執務機の裏に置き、目覚ましにコーヒー牛乳を飲む

「さて、執務を開始しよう！」

「はい！」

司令官はこの書類に目を通してください！」

「おう！」

「ほかの書類はもう終わらせたので！」

「…マジか」

「司令官が私のいない時に全部やっちゃうからじゃないですか！

だから大して残ってなかったんです！」

プクツと頬を膨らませて吹雪は怒る

「ごめん、ごめん」

「反省してくださいよ？」

「いや、反省はしないけど…」

「もう！」

司令官なんて嫌いです!!」

吹雪はぷいっとそっぽをむく

ちよつとからかいすぎてしまったな…

「まあ、吹雪、俺の気持ちにもなってくれよ」

「司令官の気持ち…？」

「うむ」

俺は戦いには出れないし、執務室にいるといつも自分の無力さと責任を感じるんだ

…」

それがストレスになって精神衛生上あまり宜しくないことは自分でも分かっている…

「そ、そんなことは…!」

「……」

2人の間に気まずい雰囲気の流れる

「だからって、なんでも背負いすぎるのは良くないよ…」  
唐突に声をかけられ驚く

「し、時雨!?!」

いつの間に」

「ちゃんとノックはしたよ…」

はい、これ、今朝の哨戒の報告書…」

特に異常はなかったね」

「わかった」

「で、さっきの話だけど」

司令官は背負いすぎなんだ…」

少しは僕達を頼ってよ…」

「でも…」

「それに、頼ってもらえないもの結構堪えるんだよ…?」

「!!」

「司令官がなんで頑なに僕達をできるだけ頼らないようにするのは分からないけど  
頼ってくれないと僕達も不安になるんだよ…」

その結果が、思わぬ事になるかもしれない」

その言葉に少し思うことがない訳では無い

俺はみんなを思ってたが空回りだったかな…

「わかった…」

少し考え直してみるよ

吹雪、今日はありがとう

いつも助かる」

「どういたしまして！」

「…お正月から暗い話になっちゃったな…」

さっさと執務終わらせたら、3人で初詣にでも行こうか？」

「はい！」

「うん、いいね…！」

## 初めてののお正月2

程なくして執務が終わわり、約束通り初詣に行くことにした

途中、カゴを洗濯機の近くの目立たないところに置く

「あ、そうだ

途中でお菓子買わないと」

「あ、そうだね…」

僕も忘れてたよ…」

「私は持つてきました!」

吹雪は袋に入ったお菓子を取り出す

飴や5円チョコなんかが入っているみたいだ

「用意周到だな!

俺は何を買おうかかな?」

明石の売店に着くとお菓子のコーナーには第七駆逐隊の子達がいた

「あ、ご主人様!」

「司令官、おはようございます!」

「お、おはよう…ございます…」

「クソ司令官、おはよう」

「ああ、おはよう！」

「お前達も初詣か？」

「「「そうです！」「」」」

「ご主人様もこれからですか？」

「うん、今日は寝過ごしちやってね」

「はあ…」

クソ司令官がしつかりなくてどうするのよ」

「はは、手厳しいな」

次からは気をつけるよ」

「ふん」

分かればいいのよ分かれば！」

時雨が何か言いたげだが、まあ、曙はそういう性格だからな…

「あの…せっかくですし、一緒に初詣行きませんか…？」

「…いいの？」

「一緒に行っても」

「キタコレ！」

「え、一緒に行つてくれるの!？」

「好きにすれば！」

「2人は？」

「私は問題ないですよ？」

「…僕も大丈夫だよ」

時雨はちよつと不満げではあつたが、すぐに潮と打ち解けたようで仲良く話をしていった

お菓子を買ひ終わり鎮守府内にある妖精さんが突貫でつくり上げた神社に行く

まだ俺も完成した姿は見てなかつたから、ある程度様になつてればいいやーぐらいの軽い気持ちだったのだが――

「はえーすつこい」

そこには鳥居と石段があり、石段を登ると参道や手水舎、灯籠なんかもある  
艦娘達も疎らにおり、みんな初めて接する神社を楽しんでるみたいだ

俺は石段を登つて参道に出ると端を歩く

手水舎はあれだよな

「？」

司令官、どこ行くんですか？」

「ん？」

手水舎だよ」

吹雪達はハテナみたいな表情を浮かべる

「まず、手水舎で手や口をすすぐんだ

襦の略式としてね」

手水舎にはちゃんと手順が書かれている

「ほら、ここに書いてあるようにやるんだ」

俺は柄杓を取り、みんなの前で手本を見せる

「「「「なるほど：「「「」

吹雪達が終えたのを確認するとお賽銭箱にお菓子を入れる

「本当はお賽銭を入れるんだけど、今回は妖精さんからお菓子というご指定をされてるからお菓子をを入れるね」

そして、俺は鈴緒を掴み本坪鈴を鳴らし、二拝二拍手一拝を行う、当然祈ることは艦娘みんなの無病息災だ

「これが基本の参拝方法だ」

まあ、本当は鳥居をくぐる前に会釈しないといけないんだがな



「あ、後、参道の真ん中は神様の通り道とされててあまり歩かない方がいいんだ  
多分、これくらい知っていれば他でも恥をかくことはない…と思う」

「意外と博識なんだね司令官…」

「意外って地味に酷いな…」

「ふふ、冗談だよ…?」

時雨はいたずらっぽい笑みを浮かべると、お賽銭箱の方に向き直りお菓子を入れ、俺の仕草を見よう見まねで行う

他の子達も時雨に続いて、参拝する

微笑ましい光景を見守っていると、後ろから呼びかけられる

「司令官、お越しになっていたんですね…!」

「おはよう、翔鶴!」

あれ?

いつもの服とちよつと違う?」

「はい、妖精さんから頂きました」

「凄く似合ってるよ…!」

翔鶴の制服をもつと巫女っぽくした感じで凄く美人さんの翔鶴にはびつたしの服だ

「司令官にそう言つて貰えると、とても嬉しいです…!」

翔鶴も頬を赤らめながら返事をする

是非とも写真を撮りたいですね！

あ、そうだ丁度タブレット持つてるじゃん！

俺はコートに入れていたタブレットを取り出し、翔鶴にカメラを向けシャッターを押す

タブレットには箒を持った戸惑った表情を浮かべる翔鶴が写っている

「お、翔鶴、うまく撮れたよ！」

「…少し恥ずかしいですね」

翔鶴が俺が持ったタブレットを覗き込む

参拝が終わったのか、吹雪達が翔鶴に挨拶を済ませるとタブレットを見ようと背伸びする

「ほい、見るか？」

俺は吹雪にタブレットを手渡す

「はい！」

わあ、翔鶴さんが可愛く写ってます！

「巫女服とはそそりますな」

「司令官は、こういう服が好きなのかな…」

吹雪にタブレットを返してもらおうと一提案する

「そうだ折角だし拜殿を背景に一枚撮らないか？」

「とつてもいいと思います、はい！」

「うん、いいと思う……」

「クソ司令官にしては気がきくわね！」

「あ、曙ちゃん、そんなこと言っちゃダメだよお……」

みんな凡そ賛成してるみたいだし、撮るか

「んじゃ、みんな並んで」

よし、じゃあ撮るよー

はいチーズ！」

パシャ

うん、いい写真が撮れた

微笑んでたり、ピースしてたり、そっぽを向いていたりしているが、楽しそうな雰囲気  
気が漂ってる

「うん、撮れた！」

「次は司令官も入ってください！」

吹雪が俺の手を取り引っ張る

「お、おい

俺が撮らなかつたら誰が撮るんだよ」

「私が変わりに撮ります…」

「このボタンを押せばいいんですか？」

「あ、うん、そう

すまん、翔鶴」

翔鶴は少し離れた所でタブレットを構える

「では行きますよ…！」

3、2、1…はい！」

パシヤ

「撮れました！」

翔鶴が駆け寄りタブレットを見せる

「おお…」

2枚の写真をみんなで見比べる

「2枚とも上手く撮れてますね！」

「みんな笑顔です…」

「でも、司令官ちよつと威厳がないね…？」

「少しはシャキツと出来ないの?」

うう…2人の言葉が突き刺さる…でも事実なんだよなあ

「…曙少し言い過ぎだよ」

「何? あんただって同じようなこと言ってるじゃない!

むしろ、あんたの発言の方が不躰じゃないの?」

正直、両方とも普通にシヨックだからね!?

てか、不穏な空気を感じる!

「ま、まあ、2人とも落ち着け

俺は気にしてないんだから…」

2人の間に立ちその場を収める

「司令官がそういうなら…」

「ふん!」

はあ

俺はちよつとため息をつく

曙と時雨が仲悪いのはちよつと意外だったな…

まあ、曙は誤解されやすい子だ…今後もう少し見守る必要があるかもな…

二人の間を取り持ちながら少し物思いにふけた

## 反省会、そして…

参拝が終わると翔鶴は神社に留まり、第七駆逐隊の子達は羽子板遊びや竹馬をして遊ぶらしく広場に集まっていた駆逐艦娘達に混ざっていった

一部の駆逐艦娘達は俺も一緒に遊ぼうって誘ってくれたんだが、生憎やることがあつてな…

吹雪と時雨を連れ、工廠につく

「司令官、お待ちしてました！」

「お待たせ、明石！」

「待たせたかな？」

「いえ、丁度ひと段落した所で」

明石は飛行甲板の付いた艀装に目をやる

「そうか…」

「なら、早速報告を聞こう」

「はい」

大鳳に酷似している深海棲艦はマルロクサンマル頃目を覚ましました

話も聞きました、佐世保第一鎮守府所属の大鳳であり、南西諸島海域の戦闘で轟沈したと証言しました

確認は取っていませんが、赤城さんや私を襲わなかったことから深海棲艦としての記憶は残っていないのではないかと推測されます

ただ、人間と触れ合えば深海棲艦の記憶が戻らないとも限りません  
面会をするなら、細心の注意が必要かと」

明石の忠告に肯定の頷きを返す

「ああ、わかった

今も医務室にいるのか？」

「はい！

赤城さんが看病しているはずですよ」

「ありがとう、行ってくるよ

艦装の修理、頑張つてね」

「はい、頑張ります！」

明石に手を振って別れ、医務室に向かう

医務室に着くと時雨が質問をする

「司令官……」

僕に艤装の展開する許可をくれないかな…？」

「…わかった」

ただ、発砲は許可しない」

「わかったよ…」

時雨は艤装を展開する

「吹雪もいざと言う時は…頼む」

「わ、分かりました」

緊張しているのか、少し固い声で返事をする

俺はドアをノックする

中の会話が止まり、赤城が返事をする

「…誰でしょうか？」

「俺だ、司令官だ」

入っても大丈夫か？」

「大丈夫です」

返事を聞いて俺はドアを開け、医務室に入る

赤城はベッドの隣に置かれている椅子に座っていて、大鳳はベッドに腰掛けてこちらを見ていた



とりあえず、俺は自己紹介をすることにした

「初めてまして、大鳳

俺はここ呉第三鎮守府で司令官をしている犬村 護です

よろしく願います」

俺は握手のため大鳳の前に手を出す

大鳳は暫く惚けていたが、突然目に涙を溜めると俺に抱きついてくる

細い体が俺にギューツと抱きつく

「少佐！

ずっと、逢いたかった

あの日からずっと……！」

想定していた状況とは掛け離れた状況に思わず周りの反応を見る

赤城はしまったという顔をしており、吹雪は顔を真っ赤にしてフリーズしている、雨に至っては親の仇の見たかのような顔をしている

俺はアイコンタクトで時雨を落ち着かせ、大鳳を落ち着かせる為背中を擦る

「……落ち着きましたか？」

「は、はい

失礼しました、しよ……提督！」

「……」

少佐が誰かは知らないが間違いない俺ではないはずだ

「大鳳さん…君に伝えなくちゃならないことがあるのですが…」

大鳳はきよんとした顔で俺の顔を見つめる

「なんででしょうか？」

「まず、君が言う少佐とは誰か分かりませんが、私と君は初対面のはずです」

「……え…？」

大鳳はかなりショックを受けたようだ

その少佐が気になるな…

まあ、そこはとりあえず置いてこう

「じよ、冗談ですよね…？」

タチの悪い冗談はやめてください！」

「…冗談ではないです」

それともうひとつ…君に伝えなくてはなりません」

空気が重くなるのを感じるが、気にせず続ける

「君は数日前まで深海棲艦だったんです」

大鳳が数秒固まったかと思うと返事をする

「い、いくら、少佐でも言っていないことと悪いことがあります！訂正してください！」

大鳳は懇願するように俺に見つめる

「……」

時雨、落ち着いて…」

俺は今すぐ行動を起こしかねない時雨を引き寄せ、落ち着かせる

「で、でもっ！」

「大鳳の気持ちも汲みとってくれ…」

彼女に悪気がないのは分かるだろう？」

「……」

大鳳は俺に訊いても埒が明かないと思ったのか、赤城に問い詰める

「赤城さん、嘘ですよね」

私が深海棲艦だったなんて…そ、そんなわけないですよね！」

赤城はとてども悩むような表情を浮かべていたが、決意を決めると

「彼は嘘をついてないわ」

と一言だけ発言する

この一言がかなり効いたのか、大鳳は押し黙る

俺は1人になる時間が必要だと感じ、3人に提案する

「赤城、時雨、吹雪」

大鳳を1人にしてあげよう」

赤城は渋々と頷き、俺は今度は大鳳に話しかける

「大鳳さん、俺達は少し席を外します」

何かあつたら、その赤いボタンを押してください

すぐに明石か赤城が来るはずですから」

大鳳は力なく頷くと俺は外に出る

「…大丈夫でしょうか」

赤城が心配そうに呟く

「不安だな…」

赤城は特に用事がないなら、ドアの前で待機していてくれないか？

万が一のことも有り得る…

異常を感じたらすぐに医務室に入ってほしい」

「分かりました」

「よろしく頼む…」

俺は赤城に依頼すると次なる用事を済ませるため工廠を出た

装備や資源、食料の管理、確認のため倉庫に行ったり、洗濯物を干したりと用事を済ませ

本日最後の用事を終わらせるため、会議室に向かう

俺は吹雪にアイコンタクトを取ると吹雪は点呼を始める

「司令官、全員揃ってます！」

「点呼ありがとう吹雪」

「これより、南西諸島近海攻略作戦の反省会を始める」

パチパチパチと拍手がおこる

「まずは、第一機動艦隊の旗艦翔鶴から」

各部隊の旗艦から、よかった点と反省する点が挙げられる

新装備の評判はよかったものの、初めて使うため運用が分からなかったり、練度が足りなかったとの指摘も多かった

また、機銃や電探、魚雷はより良い物が必要との意見が多く早急に換装が必要と要望が挙がっていた

そして、何よりの要望が――

「結論としては駆逐隊の数が足りず、鎮守府の哨戒網は万全とは言えませんでした」

そう、駆逐隊の数がとてもじゃないが足りなかった

優先的に機動部隊と護衛部隊に配備していたから水上打撃部隊に水雷戦隊をつける余裕もなかったし、夜戦部隊も機動部隊の駆逐隊を続投してやっとなった

艦娘待機船で修理できるとはいえ、限界はある

現に第九駆逐隊は朝潮が深刻なダメージを受け参加出来ず、ピンチヒッターとして第六駆逐隊を投入せざるおえなかった

そしてなにより、傷は癒せても疲労は癒しきれない点だ

鎮守府防衛艦隊旗艦の大和の報告で全員の報告が終わる

「報告を踏まえて今後は開発と建造の回数を増やしたいと思う」

各10回にして開発では、機銃、魚雷、電探、艦載機を中心に開発する  
建造では駆逐艦や軽巡洋艦を中心に狙う

消費資源は多くなるが、今まで貯めてきているし赤字にはならないはずだ  
具体的な開発日程や建造日程はおつて決めたいと思う」

多くの艦娘から賛同の頷きを得て次の質問に映る

「報告以外に何か言っておきたいことはあるか？」

翔鶴と大和が手を挙げる

とりあえず、翔鶴から報告を聞く

「はい！」

まず、朝潮ちゃんが作戦で大破していることを気にしているみたいで…

司令官から慰めてあげてくださいい！」

「ふむ…」

わかった」

朝潮は真面目だからな…確かに気にするよな…

「もうひとつは、雷ちゃんのことです」

「雷…？」

「はい、何処と無く動きがぎこちないというか…」

「あ、それ少しわかるわー」

夜戦だから緊張してると思ってたよー」

翔鶴と川内の2人が言うならなんかあるかもしれない

「雷にさりげなく聞いてみるよ」

他にはある？」

「いえ」

次は大和の話を聞く

「私からは、大鳳の事です」

「……」

大和の口から大鳳の話が出るのは意外だった

会議室の空気がずっしりと重くなった気がする

「彼女は記憶を失っているようですが、そのまま医務室から出して艦装を持たせる…と  
いうことは危険です

かと言って、いつまでも医務室に閉じ込めるのはよくありません

早急に対策をするべきかと…」

「…大和の言う通りだ



一つの案として、彼女の部屋は翔鶴と赤城の部屋にしたいと思う  
瑞鳳と祥鳳には部屋を移動してもらうことになるが…

「プラスして昼間の間も駆逐隊が一つは一緒に行動するようにするのはどうだろうか」  
「んー」

それじゃ足りないんじゃないかなー

軽巡洋艦も1人つけるべきだと思う」

川内が手を挙げ意見を述べる

「…わかった

人選は川内に一任するよ」

「りょーかいー」

続いて、扶桑が意見述べる

「私は大鳳が艀装を付けるならば追加の監視が必要かと思えます

具体的には艀装をつけてから2週間前後を目安に重巡洋艦以上の艦娘が監視をする  
ことを提案します」

艀装を付けければ危険性は上がる

特に大鳳は装甲空母だ…用心に用心を重ねるべきかもしれない

「それぐらい慎重すぎるくらいが丁度良いかもしれない…」

何せ、初めての事例ではあるし…

川内と同じく人選は任せる…

2人とも一応作戦計画書に参加する子だけ書いて提出して欲しい  
期限は…明日の昼までに出来れば提出してくれ」

「了解！」

「他には…なさそうかな？」

では、解散！」

俺は書類を纏め、吹雪と翔鶴に声をかけて会議室を出て、執務室に行く  
執務室に着くとソファアの背もたれに寄りかかり、溜息をつく

微かな苛立ちと強い眠気…

俺はうつかり寝てしまわないようにミルクと砂糖が少なめのコーヒーを煎れ、一口飲  
む

コーヒーの苦味が眠気を無くしてくれた頃にドアをノックする音が聞こえる  
「入れ」

「失礼します、司令官

…お疲れみたいですネ？」

吹雪と翔鶴が執務室に入る

俺は気だるそうに返事をする

「ああ、真面目な会議なんて俺の性にあわないよ……」

「すこし、宴会まで休んではどうでしょうか？」

「私もそう思います！」

心配そうにする2人に俺は首を横に振る

「いや、今決めないと行けない事がある

さっきの会議でも挙がった大鳳のことだ

早急に対応する駆逐隊を決めないと

明日にも大鳳が行動を起こすかも知れないのだから」

俺は手元の紙を2人に渡す

紙には第六駆逐隊と第九駆逐隊の面々の名前が書かれている

「残りの2つの駆逐隊を誰にするか、相談したくてね」

「なるほど……」

「だったら、第十一駆逐隊と第十八駆逐隊がいいと思います！」

「……いや、第十一駆逐隊と第十八駆逐隊はダメだ」

吹雪がショボンとした表情をする

「第十一駆逐隊には、他の駆逐隊の育成の任務がある

こちらの任務も重要度が高い

第十八駆逐隊は陽炎と不知火は性格面も練度も問題ないが霞と霰がな…

時雨と同じ鎮守府に所属してたんだ

恨み辛みがあることが否定できない」

「なるほど…」

「では第七駆逐隊はどうでしょう」

吹雪に代わって翔鶴が提案する

「確かに、性格面は問題ないだろうが…

練度面ではまだまだじゃないか？」

「練度面は大丈夫だと思いますよ？」

まだ次の作戦まで期間はありますし、第七駆のみんなは素直で仲がいいですから！」

吹雪が自信満々に答える

「わかった第七駆逐隊も入れよう

あと一つだが…」

「「……………」」

「あー！」

沈黙を破るように吹雪が声を出す

「練度が高くて性格面も大丈夫な駆逐隊あるじゃないですか！

睦月ちゃんが率いる第三十駆ですよ！」

「うむ…」

確かに練度も性格面も大丈夫で恨み辛みはないと思うが…

第三十駆逐隊は睦月、如月、菊月の3人しかいないが大丈夫かな」

「対象が駆逐艦や戦艦だと厳しいかもしれないですけど」

空母だったら、大丈夫だと思います！」

翔鶴も同意するように頷く

「わかった、第三十駆逐隊にしよう

翔鶴、漣、暁、朝潮、睦月を執務室に呼び出してくれ」

「了解しました」

翔鶴は壁に付いている放送装置で招集した

4人の駆逐艦の子達は快く俺の依頼を受けてくれた

受けてくれなかつたら、どうしようかとハラハラしたがよかつたよかつた

十数枚の書類を事務室に運び、本日の業務を完了させると俺は医務室に向かつた

ドアをノックしてから医務室に入る

本を読んでいたようで、大鳳は閉じた本をしまっていた

「調子はどうですか？」

「良いとは言えませんが、特段悪い訳ではありません

…なんの御用でしょうか」

少し警戒している雰囲気を感じる

「君にいくつか確認したいことがありますして

まず、1つめですが、先日、佐世保第1鎮守府に大鳳の所属確認しましたが、既に除

隊されていました」

「……」

「よつて、今貴女は無所属の艦娘です

貴女が望みその所属先の提督が許可すれば、何処の鎮守府、泊地、警備府でも編入できるでしょう」

大鳳が悩むように口元に手を当てる

正直、うち以外の鎮守府を指名されるとかなり困る

艦娘達には言つてないが、大鳳の引渡しが上から要請されている

監視と観察を名目になんとか命令にはなつていないが大鳳がここではない他の鎮守府に行きたいとなれば、ここに縛り付ける理由の1つが無くなつてしまうからだ

「私は……」、呉第三鎮守府に所属したいです

私はかなり異質な存在で、多分この鎮守府の艦娘達には受け入れられないですが、赤城さんがいます

ですが、他の鎮守府に行ったら味方は1人もいません…

だから…ここに居させてくれませんか、司令官…?」

すこし怯えたような目で俺を大鳳は見つめる

そんな大鳳に右手を差し出し答える

「呉第三鎮守府の司令官として歓迎するよ

改めてよろしく大鳳」

「え…？」

「いいのですか…？」

「当たり前じゃないか」

「寧ろなんでダメだと思ったんだ？」

「なんでって」

「私は深海棲艦だったって司令官が言ったんじゃないですか！」

「普通だったら、怖いかスパイかもと思いますよ！」

「うーん、確かに」

「でも、少なくとも今は大鳳は艦娘でしょ？」

「なら、君がもし深海棲艦のスパイだったとしても俺は受け入れるよ」

「信じられないという顔で俺を見つめる大鳳に微笑みながら改めて右手を差し出す」

「大鳳は呆れたふうに溜息をすると握手に答えて自己紹介する」

「自己紹介がまだでしたね」

「装甲空母、大鳳です」

「矛と盾として、提督…貴方と機動部隊に勝利を！」

「期待してるよ、大鳳！」

「さて、次の用事なんだが、今日がお正月なことは大鳳も知っていると思う」



大鳳がコクリと頷く

「そこで新年会が行われるのだが、丁度全員が集まる席だ

大鳳がよければそこで自己紹介をして欲しいんだ」

「なるほど…了解しました！」

「いつ頃向かえばよろしいですか？」

「申し訳ないがあまり時間はないんだ…」

「…後10分程度だな」

「なら、今すぐ行きましょう！」

「特に準備することはありませんし」

「おけ

「ついでに通りすぎる施設を紹介するよ」

「俺は医務室のドアを開け、大鳳を案内する

普段、司令官が作戦計画を話す所に一人の艦娘が立っている  
大半が友好的だったり、好奇心な眼差しで彼女を見ていたが、一部からは殺気のような  
ものも感じられる

「私が装甲空母、大鳳です

これからこの鎮守府でお世話になります、よろしくお願いします！」

彼女はペコリとお辞儀をする

他の艦娘達は歓迎するように拍手をする

思っていたよりも元氣そうでよかったです…！

「大鳳自己紹介ありがとう

席は…そうだな、電の隣が空いてるからそこに座るといい」

「了解です」

大鳳は周りから見られつつ私の隣に来る

「隣、失礼します」

「はい、なのです！」

大鳳さんは飲み物どれにしますか？」

「では

緑茶を……」

「了解なのです！」

私は緑茶の入ったペットボトルをとり、グラスに注ぐ

前に出ていた司令官がざわめきを諫めつつ話をする

「忘年会の翌日に新年会と忙しないが、リラックスして宴会を楽しもう

みんな、コップを持って……乾杯！」

『乾杯!!』

一斉にグラスを合わせる音が響く

私は、少し遠慮したようにグラスを浮かせたままの大鳳にグラスを合わせる

「乾杯！なのです！」

「か、乾杯！」

オレンジジュースを少し飲んで、大皿に盛られた様々な料理を取り皿に持っていく

「大鳳さん、このハンバーグおすすめなのです！」

電達が頑張って作ったのです！」

「この肉じやがもいいわよ！」

「この豚の角煮…ウオツカが入ってるんだ…

美味しいよ…」

瞬く間に大鳳の取り皿に沢山の料理が盛られていく

少し、本人も困惑しているみたいだが、満更でもなさそう

「もー、3人とも大鳳さん困ってるからやめなさい！」

「ごめんなさい、大鳳さん！」

3人とも悪気があつたわけじゃないの！」

「わかつてますよ、暁さん

むしろ嬉しいくらいです！」

その後、電達は大鳳と鎮守府での話をして談笑したり、伊勢と瑞鳳がやってきて大鳳の所屬を四航戦にするか三航戦にするかで争ったり、那智が絡み酒をしたりとワイワイガヤガヤと宴会を楽しんでいた

一方、司令官は…

俺は3杯目の日本酒をグラスに注ぐ

そして、ちよつと飲んで肴を食べる、ちよつと飲んで肴を食べるを繰り返す

呑みすぎだとは思うのだが、今日ぐらい忘れたいことだつてある

「司令官！」

さすがに飲みすぎです！」

「ふえ？」

吹雪、どうしたのお？」

「どうしたもこうしたもないです！」

ビールに焼酎、そして日本酒ですよ!？」

どう考えても飲みすぎです！」

「じゃあこれ最後お……」

「もう、司令官……」

しようがないですね……」

最後の一杯を飲み干す

フラフラするが何だか気持ちがいいような気がしなくもない不思議な感じだ

「しれ——ん

お——くだ——」

何だか吹雪が呼んでるきがする……

ねむいなあ……スヤア